京都府遺跡調査報告書

第８冊

石　本　遺　跡

１９８７

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

石本遺跡周辺（南西から）

石本遺跡Ａ地区全景（北から）

木製漆塗り鞍（部分　裏表—保存処理後）

鹿 角 製 品（保存処理後）

土　師　器

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが設立され，京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施し，その保存・活用及び研究を行うようになってから，早くも6年が過ぎようとしています。私達は，常に先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及・育成に努めるとともに，これらを後世に伝えるべく，日夜努力しているつもりであります。その手段の一つとして，本書のような報告書を刊行しており，この『京都府埋蔵文化財報告書』のほかに，『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』もあわせて刊行しています。

本書に収めました「石本遺跡」は，昭和58年度から59年度にかけて調査した遺跡で，数多くの遺構・遺物が見つかるなど，多くの成果をおさめました。本書が関係各位の参考に供され，斯学向上の一助となるだけでなく，地域の文化の発展にいささかでも寄与すれば幸いです。

本書に掲載した遺跡の調査を実施するにあたりましては，日本鉄道建設公団大阪支社の方がたをはじめ，京都府教育委員会・福知山市教育委員会等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく，酷暑・厳寒の中でも多くの方がたが熱心に作業等に従事していただきましたことを明記して，これらの人びとに厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1. 本報告書は，京都府福知山市大字牧小字段ほかに所在する石本遺跡の発掘調査報告書である。
2. 石本遺跡の調査は，(仮称)宮福線鉄道関係遺跡として日本鉄道建設公団大阪支社の依頼を受けて昭和59年3月10日から同年9月30日まで，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査主体となって実施した。
3. 発掘調査にあたっては，当調査研究センター調査課主任調査員辻本和美，同調査員竹原一彦が担当して行った。なお，現地調査及び本書作成にかかる経費は，すべて日本鉄道建設公団が負担した。
4. 本書に掲載した写真については，現地調査分に関しては辻本・竹原が撮影し，遺物写真については高橋猪之介氏に撮影を委託した。また，試掘調査時の遺跡周辺の空中写真は，株式会社写植エンジニアリングに委託したものである。
5. 本遺跡出土の獣骨類および鹿角加工品(刻骨)については，奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官　土肥　孝氏から貴重な御教示を得た。
6. 本書に掲載した遺構図の方位は，すべて磁北を示す。
7. 本書の執筆は，辻本和美・竹原一彦・小橋拓司(立命館大学大学院地理学科修士課程)が分担して行い，末尾に明示した。なお，本書の編集は，原口正三・中谷雅治・杉原和雄のもと，劉　和子・寺内あゆみの両氏の協力を得て土橋　誠・辻本和美が行った。

本 文 目 次

はじめに…… 1
第1章　位置と環境…… 2
　第1節　地理的環境…… 2
　第2節　考古学的環境…… 6
第2章　調査の経過……10
　第1節　調査に至る契機と経過……10
　第2節　調査の方法と概要……13
第3章　遺構……16
　第1節　調査地の概要と層位……16
　第2節　第1期(弥生時代の遺構)……19
　第3節　第2期(古墳時代の遺構)……24
　第4節　その他の遺構……34
第4章　出土遺物……38
　第1節　土器・土製品……38
　第2節　土製品・石製品・玉類・鉄器・石器・鹿角製品……70
　第3節　木器・自然遺物……76
第5章　総括……97
　第1節　石本遺跡の変遷……97
　第2節　古墳時代後期の土器について…… 103
　第3節　古墳時代集落の問題…… 104
＜付載＞石本遺跡周辺の地形変化…… 114

挿 図 目 次

第 1 図　京都府北部地質図…… 2
第 2 図　由良川中・下流低地地形分類図…… 3
第 3 図　石本遺跡周辺地形分類図…… 4
第 4 図　周辺遺跡分布図…… 7
第 5 図　調査地位置図および地区割図……13
第 6 図　A地区北壁土層断面図……16
第 7 図　A地区遺構実測図……17
第 8 図　B地区遺構実測図……20
第 9 図　C地区遺構実測図……21
第 10 図　住居16実測図……23
第 11 図　建物1実測図……29
第 12 図　溝2(大溝)地区割り図(遺構は一部略)……30
第 13 図　溝1・溝2土層図 ……31
第 14 図　堰状遺構実測図……32
第 15 図　土坑10実測図……33
第 16 図　須恵器実測図(1)……39
第 17 図　須恵器実測図(2)……41
第 18 図　須恵器実測図(3)……43
第 19 図　須恵器実測図(4)……45
第 20 図　須恵器実測図(5)……47
第 21 図　須恵器実測図(6)……49
第 22 図　須恵器実測図(7)……50
第 23 図　須恵器実測図(8)……51
第 24 図　土師器実測図(1)……53
第 25 図　土師器実測図(2)……54
第 26 図　土師器実測図(3)……56
第 27 図　土師器実測図(4)……58
第 28 図　土師器実測図(5)……60
第 29 図　土師器実測図(6)……61

第 30 図　弥生土器実測図(1)……63
第 31 図　弥生土器実測図(2)……65
第 32 図　弥生土器実測図(3)……66
第 33 図　土坑10出土土器実測図……68
第 34 図　土器・土製品実測図……69
第 35 図　縄文土器実測図……69
第 36 図　土製品・石製品・玉類実測図……70
第 37 図　鉄器実測図(1)……72
第 38 図　鉄器実測図(2)……73
第 39 図　土錘実測図……73
第 40 図　土錘法量……73
第 41 図　石器・砥石実測図……74
第 42 図　鹿角製品……75
第 43 図　木器実測図(1)……77
第 44 図　木器実測図(2)……78
第 45 図　木器実測図(3)……81
第 46 図　木器実測図(4)……82
第 47 図　木器実測図(5)……83
第 48 図　木器実測図(6)……84
第 49 図　木器実測図(7)……86
第 50 図　木器実測図(8)……87
第 51 図　A地区遺構変遷図……98
第 52 図　C地区住居跡変遷図……101
第 53 図　遺跡周辺10cm等高線図……114
第 54 図　石本遺跡周辺深層地質断面図……115
第 55 図　メッシュ設定図……115
第 56 図　パネルダイアグラム……116
第 57 図　石本遺跡古地形復元図……118

付 表 目 次

付 表 1　調査日程抄……11
付 表 2　方形竪穴式住居跡一覧表……36
付 表 3　土坑一覧表……37
付 表 4　木器種類別一覧表……79
付 表 5　大溝(溝２)出土木製品観察表……90
付 表 6　出土土器法量表……109
付 表 7　大溝(溝２)出土須恵器集計表……112
付 表 8　大溝(溝２)出土須恵器杯類形別集計表……112
付 表 9　大溝(溝２)出土須恵器杯蓋類形別集計表……113
付 表 10　大溝(溝２)出土土師器集計表……113

図 版 目 次

図版第１　(1)調査地周辺空中写真(東から)　(2)調査地空中写真(上が北)
図版第２　(1)由良川・牧川合流部遠景　(2)調査地北方丘陵からの遠景
図版第３　(1)試掘調査時調査地全景(南から)　(2)調査地全景(北から)
図版第４　(1)Ａ地区＜大溝掘削前＞全景(北から)　(2)同上(南から)
図版第５　(1)Ａ地区弥生時代遺構＜白線部＞(南から)　(2)方形周溝墓１(南から)
図版第６　(1)Ａ地区古墳時代住居跡(南から)　(2)方形竪穴式住居跡2･3(西から)
図版第７　(1)方形竪穴式住居跡4･5･6･7(東から)　(2)方形竪穴式住居跡８(西から)
図版第８　(1)Ａ地区溝２＜大溝＞(北から)　(2)同上北半部分(北から)
図版第９　(1)堰跡(北東から)　(2)同上溝内堆積状況(南から)
図版第10　溝内木器出土状況
図版第11　溝内遺物出土状況
図版第12　(1)Ｂ地区全景(北から)　(2)方形周溝墓３(北西から)
図版第13　(1)Ｃ地区遺構検出状況(南東から)
　　(2)同上弥生時代住居跡検出面(南東から)

図版第14　(1)C地区全景(北東から)　(2)溝11(南東から)
図版第15　(1)円形竪穴式住居跡16(西から)　(2)土坑10(北西から)
図版第16　須恵器(1)
図版第17　須恵器(2)
図版第18　須恵器(3)
図版第19　須恵器(4)
図版第20　須恵器(5)
図版第21　須恵器(6)
図版第22　須恵器(7)
図版第23　須恵器(8)
図版第24　須恵器(9)
図版第25　須恵器(10)
図版第26　須恵器(11)
図版第27　土師器(1)
図版第28　土師器(2)
図版第29　土師器(3)
図版第30　土師器(4)竈
図版第31　土師器(5)
図版第32　弥生土器(1)
図版第33　弥生土器(2)
図版第34　その他の土器・土製品
図版第35　(1)須恵器杯・高杯類　(2)須恵器甕・鉢・壺類その他
図版第36　(1)須恵器横瓶・甕・大形甕　(2)土師器各種
図版第37　(1)弥生土器各種　(2)手づくね土器・土製品その他
図版第38　(1)古墳時代の鉄器　(2)弥生時代の鉄器
図版第39　紡錘車・石製品・玉類・砥石
図版第40　木器(1)
図版第41　木器(2)
図版第42　木器(3)
図版第43　木器(4)
図版第44　木器(5)

図版第45　木器(6)
図版第46　木器(7)
図版第47　木器(8)
図版第48　木器(9)
図版第49　木器(10)
図版第50　鹿角・鹿角加工品
図版第51　(1)獣骨　(2)植物種子

石本遺跡発掘調査報告書

はじめに

今回報告する石本遺跡は，綾部・福知山の市街地を抜け西流してきた由良川が北へ流れを変え，牧川と合流する地点の左岸に形成された狭小な沖積平野に立地する。周辺には，古墳時代後期の牧古墳群や波江古墳群，多量の土錘等が出土する薬師遺跡が分布している。

この石本遺跡の調査は，(仮称)宮福線鉄道の建設に伴うもので，建設工事を実施する日本鉄道建設公団大阪支社から当調査研究センターが依頼を受け，波江古墳群・河守遺跡の調査とともに実施したものである。現地調査は，昭和58年度に遺構・遺物の有無及び広がりの確認を目的に試掘調査を実施した。その結果，遺構が良好に遺存することが判明したため，翌昭和59年度に遺構・遺物の存在が顕著な地区を中心に拡張し，本調査を実施した。

調査の結果，弥生時代の方形周溝墓や古墳時代後期の竪穴式住居跡・大溝，奈良・平安時代の掘立柱建物跡等を検出し，多量の弥生土器・須恵器・土師器・木製品等が出土した。そこで，当調査研究センターでは，日本鉄道建設公団大阪支社と協議し，昭和60・61年度の2か年をかけて，石本遺跡の整理報告及び木製品等の保存科学処理を行うこととした。

調査に当たっては，周到な準備を行うとともに，下記のとおり，調査に伴う組織を決定し，発掘調査を開始した。

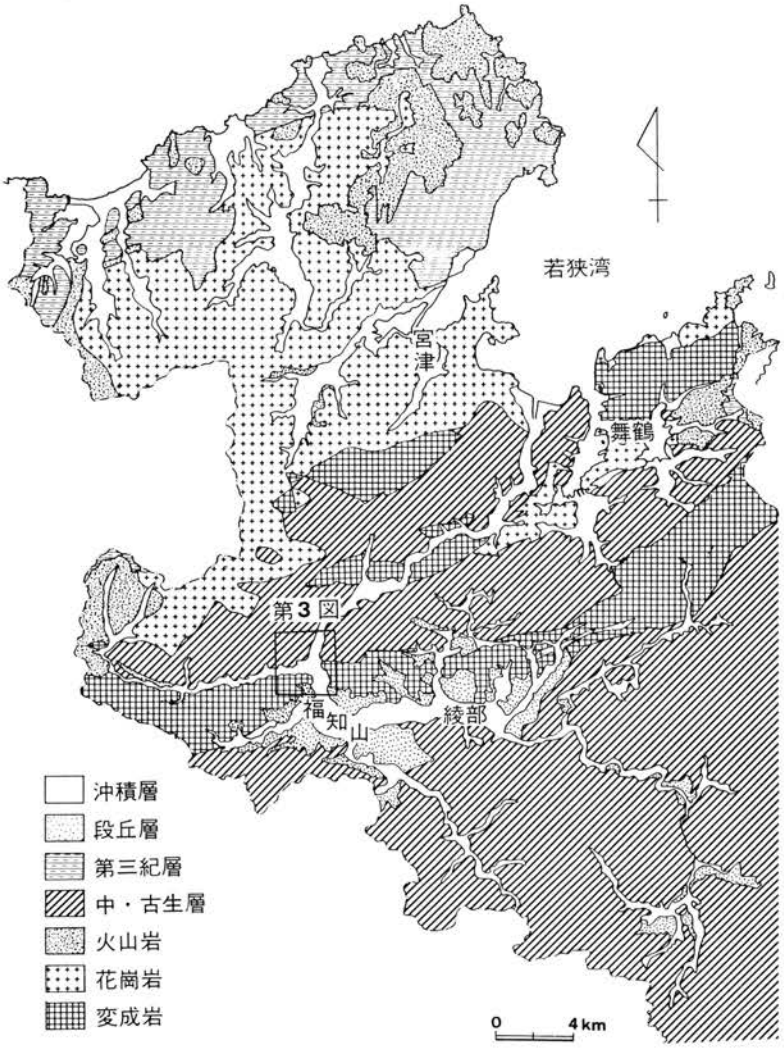
発掘調査総括責任者	栗　栖　幸　雄(事務局長　昭和59年度)
	荒　木　昭太郎(事務局長　昭和59～61年度)
発掘調査責任者	堤　圭　三　郎(調査課長　昭和59～60年度)
	中　谷　雅　治(調査課長　昭和61年度)
発掘調査担当者	辻　本　和　美(主任調査員)
	竹　原　一　彦(調査員)
発掘調査事務責任者	白　塚　　弘(総務課長　昭和59～60年度)
	中　西　和　之(総務課長　昭和61年度)

現地調査にあたっては，調査補助員や整理員，作業員として，各大学の学生諸君や地元の牧・石本各地区の有志の方々のほか，多数の人の参加・協力を得た。また，調査期間中，福知山市教育委員会をはじめとする各関係機関や地元自治会長並びに周辺各区長の方々からは，多大なる協力及び援助を受けた。この他地元の中川淳美・衣川栄一の両氏をはじめ，多くの方から御指導・御助言を賜った。これら，多数の機関及び個人の方々に対し，末筆ながら感謝の意を表します。

第1章　位置と環境

第1節　地理的環境

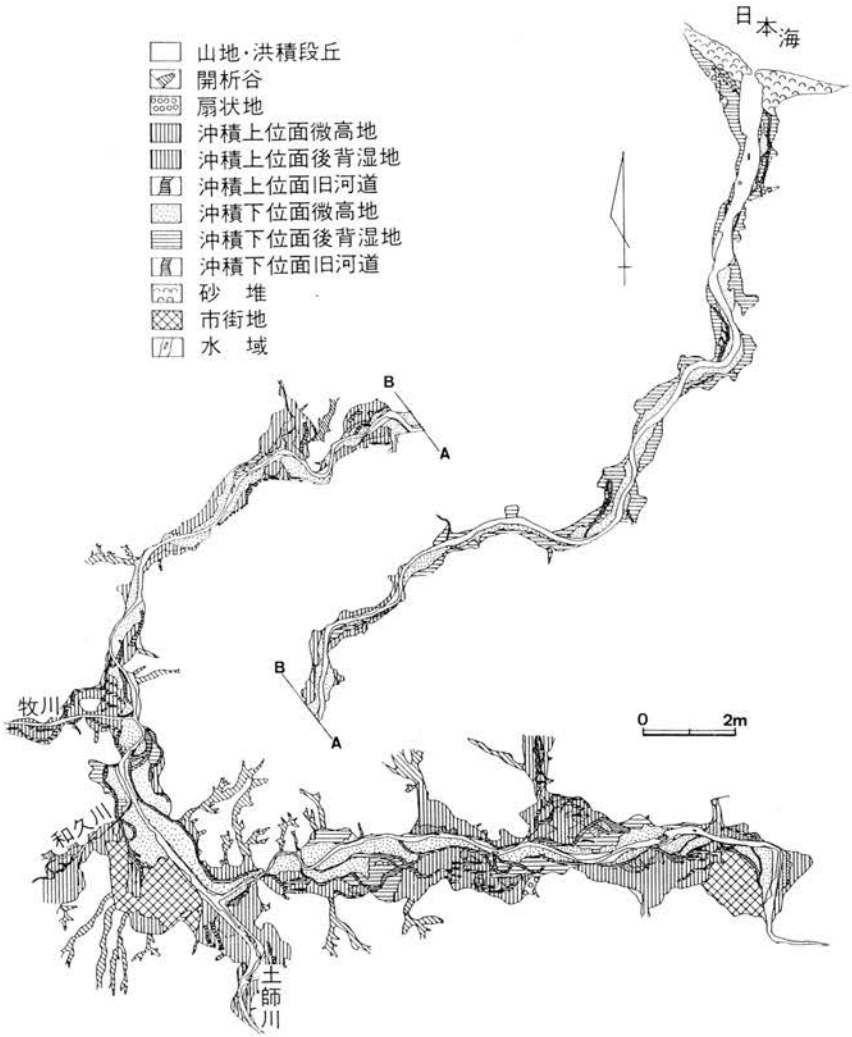
京都府北部は穏やかな山容を示す丹波山地と日本海に突き出す丹後半島からなる。丹波山地は1,000m以下の定高性の山頂が連なる隆起準平原と考えられ,大きくみると東高西低の傾動地塊となっている。丹波山地の北側の舞鶴湾や宮津湾では沈降海岸の様相を呈している。由良川下流より北西ではやや高くなり，丹後半島の骨組みとなる丹後山地をつくる。



第1図　京都府北部地質図

京都府北部の地質をみると，丹後半島では花崗岩や新第三紀の火山岩，堆積岩がみられるのに対し，丹波山地では中・古生界が広く占めている。この中・古生界は舞鶴層群・丹波層群と呼ばれており，東北東一西南西方向に帯状をなして発達している(第1図)。

近畿地方北部で最も大きな河川である由良川(流域面積約1,880km^2，全長約146km)は，三国岳に源を発し，傾動地塊である丹波山地の地形に従って西流している。中流域では綾部・福知山盆地を形成する。福知山盆地より下流では流れを北東に転じ，若狭湾に注いでいる。福知山盆地から河口部までは河守盆地を除いて大きな平野が発達せず，狭長な平野が続いている。由良川の支流としては，上林川・土師川・竹田川・和久川・牧川などがそ



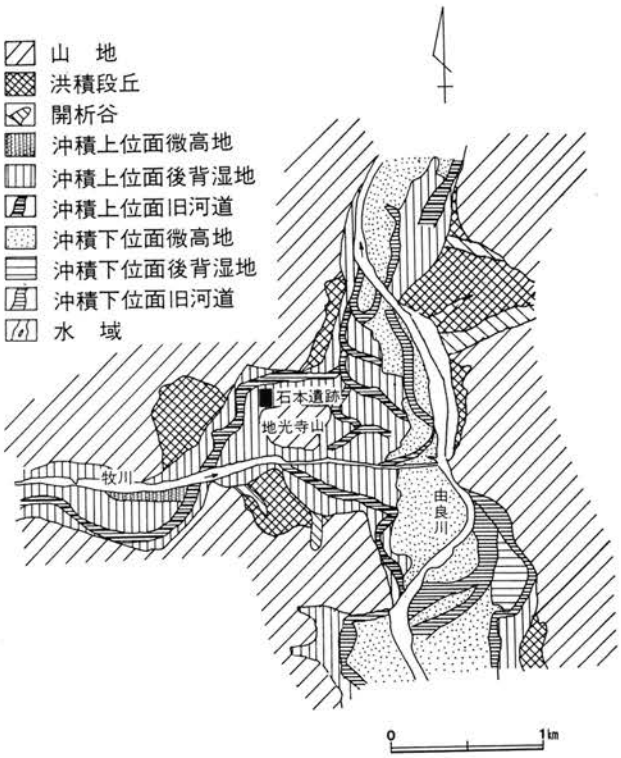
第2図　由良川中・下流低地地形分類図

の主なものである。これらの支流は，福知山・綾部盆地で本流と合流する求心状の河系パターンを示している。

20,000分の1の空中写真の判読，2,500分の1の国土基本図，建設省作成の水害地形分類図などの利用，および検土杖による表層地質調査から，由良川中・下流域平野全域について発達史的な地形分類図を作成した(第2図)。

由良川は，最下流域に平野を展開させない緩流な河川である。中流域では綾部・福知山・河守の各盆地を発達させるが，それ以外では幅1km以下の狭長な平野となっている。このようにあまり低地を発達させない狭長な平野をもつ河川としては，兵庫県の円山川・島根県の江川などが挙げられる。小出はこれらの河川を山陰型と呼んでいる。(注1) これに近い例として四国の肱川・四万十川，東北地方の最上川・雄物川などが挙げられよう。従来，こうした狭長な沖積平野の地形学的研究は，籠瀬良明氏の一連の研究(注2)を除いては，ほとんど行われてこなかった。

由良川中・下流域平野は高さ0.6～2.5mの崖により2つの地形面に分けることができる。上方の面を上位面，下方の面を下位面と呼ぶことにする。この沖積段丘崖は，福知山・綾部盆地で高く2.5mに達するところもあるが，下流へ向かうに従い比高を下げる傾向にある。



第3図　石本遺跡周辺地形分類図

上位面では微高地と後背湿地との比高が1mを越えることはない。また，表層の堆積物は，固く締まりがあるのが特色である。

下位面は，沖積平野全域にわたって細長く分布している。微高地は特に綾部・福知山盆地で顕著に認められる。そこでの微高地と後背湿地との比高は1.0～1.5mとなっている。下位面の表層堆積物をみると，後背湿地では締まりの悪いシルトから粗砂混じりシルト，微高地ではシルト混じり細砂である。微高地の構成物質は下流へ向かうほど細粒化する。

石本遺跡は，福知山盆地の出口付近，由良川と牧川との合流点付近に位置する(第3図)。遺跡の南側には地光寺山と呼ばれる標高82.1mの孤立丘陵があり，現在の牧川はさらにその南側を流れている。地形面では，上位面の後背湿地に当たる。

(小橋　拓司)

注1　小出　博『日本の河川—自然史と社会史—』1970　248頁。
注2　例えば，由良川については次の研究がある。籠瀬良明「京都府由良川下流谷平野」(『横濱市立大學紀要』A-29, No. 134)　1962　85頁。

由良川下流域部付近

第2節　考古学的環境

丹波国は和銅6(718)年,北部の加佐・与謝・丹波・竹野・熊野の5郡を割き新たに丹後国とし，丹波国は桑田・船井・多紀・氷上・天田・何鹿の6郡となった。このうち多紀・氷上の2郡は現在兵庫県に属している。石本遺跡の所在する福知山市域は前記の律令国郡制では天田郡にほぼ相当する。福知山市は，東接する綾部市とともに京都北部最大の河川である由良川の中流域を占めており，高原性の地形からなるこの地方としては，比較的広い流域面積をもつ沖積平野が展開している。

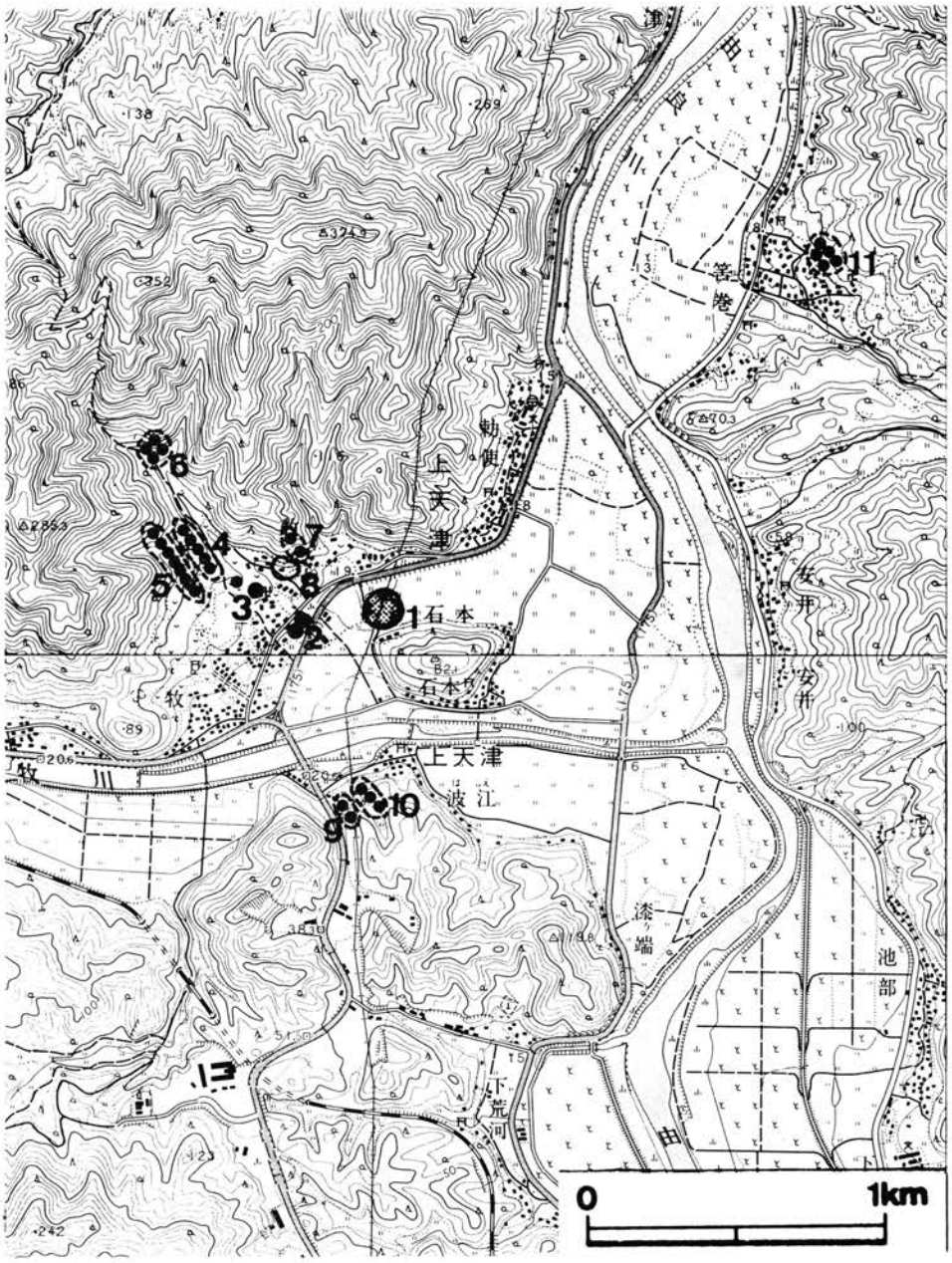
由良川は，日本海へ注ぐ途中に大小の河川と合流する。狭隘な河川平野の連続する由良川下流域との連接部，すなわち福知山市街地の北方付近において兵庫県境の夜久野高原に源をもつ牧川を合わせる。石本遺跡は，この両河川合流点の沖積平野に立地するが，その地形からも窺われるように，現在まで度重なる河川氾濫による洪水の被害を被ったことが知られる。しかし，現在の国道9号線や国鉄山陰本線の存在にみられるように，古来から由良川の本流や各支流の形成した谷隘の道を利用した陸路および水運によって周辺地域と結ばれている。特に兵庫県の但馬地方や北部の日本海若狭湾沿岸地域との交通路の要衝として重要な位置を占めている。

福知山市域の遺跡の分布状況や個々の様相については多岐にわたるため，ここでは石本遺跡を取り巻く考古学的環境についてのみ簡単にふれておくことにしたい。

由良川の支流である牧川流域部では，上流部の夜久野高原や流域の小河谷平野にも小規模ながら縄文時代から弥生時代の遺跡・遺物散布地が点在する。一方，縄文時代の各時期にわたる遺跡や弥生時代の集落遺跡については，由良川下流域の河岸段丘面や自然堤防上に多く立地している。この地域の弥生時代中期の土器については，兵庫県東部地域の土器との親近性が論じられており，牧川を媒介とした由良川・加古川水系を結ぶ交流経路が想定されている。古墳時代にはいると，盆地内では由良川流域からやや奥まった丘陵上に群小の古墳群が築造される。牧川から一本上流にあたる和久川流域の豊富谷地域では[注1]，弥生時代の台状墓の系譜を引くものを初現として古墳時代全般にわたって小規模な古墳が築造されている。これに対し，5世紀後半には一辺約45mの大型方墳である妙見1号墳[注2]が出現する。この古墳は，同時期では福知山盆地最大の方墳であり，当然牧川流域部もその勢力下に置かれていたものと考えられる。妙見1号墳の立地する豊富谷地域は横穴式石室をもつ後期古墳の顕著な地域でもあるが[注3]，白鳳時代には和久寺跡[注4]が建立され天田郡における中心的な位置を占めるものと考えられる。律令制の天田郡衙の所在地も当地に比定して誤まりないであろう。

さて，石本遺跡の周辺では北東に広がる丘陵斜面に若干の遺跡の分布をみる。牧古墳群[注5]

はそのうち最も著名なものである。この古墳群は，総数約30基前後の後期古墳で構成されており，5ないし6の支群に分けられる。群中の最高所に位置する一群については不明確であるが，他の支群は概ね横穴式石室を内部主体とする。古墳群全体に対する詳しい調査



第4図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

1. 石本遺跡　2. 牧正一古墳　3. 弁財古墳　4. 道勘山古墳群　5. 樋ノ口古墳群
6. 平石古墳群　7. 岩田古墳群　8. 薬師遺跡　9･10. 波江古墳群　11. 狐塔古墳群

は実施されていないが，これまで偶然の機会に行われた数例の古墳の調査によって，断片的にではあるがその内容等を知ることができる。すなわち，群中の一基である牧正一古墳は昭和10年に現在古墳の北側を通る道路の拡張工事によって，墳丘内の二か所から横穴式石室奥壁部の石組が露呈したため北東側の石室内の一部が調査された。この結果，須恵器(子持台付長頸壺1，子持台付壺1，台付長頸壺1，壺1，瓶1，高杯3，蓋付盌4，台付盌2，杯13，蓋2，器台等)および土師器等の土器類をはじめ直刀1・刀子1・鉄鏃約7・鉄釘約3・金環2・杏葉1・雲珠残欠等の豊富な遺物が出土した。このうち，杏葉等の馬具類が含まれるのが注目される。墳形については周囲の土取りのため変形が著しいが，残存する外形の特徴から，当初から考えられてきた双円墳説に対して全長約35mの前方後円墳の可能性が考えられている。この古墳は標高20m前後を測る台地状地形の先端部にあって，石本遺跡に近接する。また，築造時期についても6世紀後半から7世紀初頭の時期が想定されており，今回調査した石本遺跡の古墳時代集落の時期と重なり合うことなど，その築造にあたって両者の強い結びつきが考えられる。

弁財1号墳は径約25m・高さ6mの円墳で，全長約9.3m(玄室長5.5m)の横穴式石室をもつ。過去の調査によって，石室内から平縁四神四獣八鈴鏡1・金銅鈴2・鏡板付轡1・鉄地金銅張杏葉1・帯金具11・帯状鉄板5・鉸具1および須恵器類が出土した。築造時期は6世紀後葉と考えられている。

道勘山古墳群は弁財古墳背後の北西丘陵に立地する。群構成は4基からなり，そのうちの1号墳は径約19m・高さ約3.6mの円墳である。内部に大型の石材で構築された全長約8.4m(玄室長4.5m)の両袖式の横穴式石室を有する。玄室幅2mに対して天井の高い石室(高さ3.3m)をもつことが特徴である。この古墳の遺物としては金銅装単竜単鳳環頭大刀をはじめ金環・玉類・須恵器の出土を伝えるが，詳細は明らかでない。また，この他に，石本遺跡を見下ろす丘陵斜面には横穴式石室の開口する岩田1号墳が立地する。

牧古墳群の築造時期については，6世紀後半期の牧正一古墳の築造を契機として，その後，弁財1号墳，道勘山1号墳の順に築造され，7世紀前半頃まで群内の各古墳の形成が行われたと想定される。上記の3古墳は，いずれも石室構造や副葬品の内容等からみて群形成の核となる首長墓の系譜につながるものと推察されている。

牧古墳群周辺ではこの他の遺跡として，古墳群の立地する丘陵の下方に広がる段丘状平坦面に薬師遺跡が所在する。漁撈用の土錘が多量に出土することが知られているが，遺跡の内容については不明である。また，牧集落の各所や牧正一古墳の封土内からも弥生土器・土師器片が採集されているが，いずれも未調査であり詳細については明らかでない。

波江古墳群(注6)は牧川を挟んで石本遺跡と対峙する地点に立地するが，このうち今回，宮福

線の路線内に含まれる3・4・5号の3基の古墳を調査した。この古墳群は北面する丘陵尾根の急斜面に溝やテラス状の削り出しを行うことによって墳丘を形成しており，発掘調査の結果いずれも木棺直葬墳であることが判明した。副葬品として少量の鉄製品と須恵器類を持ち，築造時期は6世紀後半から7世紀初頭に比定される。この古墳群は，同時期に築造された牧古墳群が横穴式石室を内部主体とするのに対して，異なった埋葬方法を採用している。同一水系に位置する古墳群として両者を比較すれば埋葬方法の差異はその被葬者の性格の差異が反映しているのかもしれない。

牧川流域ではこの地域のほか，上流部の上夜久野盆地に後期の群集墳が少数分布する。(注7) それらのなかには，玄武岩で構築された長大な横穴式石室をもつ長者森1号墳や古式の竪穴系横口式石室をもつ流尾古墳等，特徴のある古墳が見られる。これまで述べて来たように，牧古墳群の成立にあたっては牧川流域部に分布する古墳および遺跡群相互の関係において考察するべきものであるが，交通の要衝に位置する点を重視すれば，単にこの地域にとどまらずより広範な地域との交渉を考慮に入れたうえで解明すべきであろうと思われる。

（辻本　和美）

注1　昭和54～56年にかけて，京都府教育委員会及び当調査研究センターが調査。松井忠春・増田孝彦・小泉信吾・田中　彰「豊富谷丘陵遺跡昭和55年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会）1981，松井忠春・増田孝彦・竹原一彦「豊富谷丘陵遺跡昭和56年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第1冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982等

注2　近藤義行「福知山市妙見1号墳測量調査略報」（『京都考古』16）1975

注3　額塚古墳群(30基)・下山古墳群(68基)等

注4　大槻眞純・友次雅子「和久寺跡第1次発掘調査概報」（『福知山市文化財調査報告書』第5集　福知山市教育委員会）1983，同第6集 1984，同第8集 1985

注5　牧古墳群に関する文献としては，次のものがある。

1. 梅原末治「牧の石室古墳」（『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第20冊 京都府）1940
2. 『新たに国の保有になった埋蔵文化財特別陳列目録』東京国立博物館　1965
3. 海老瀬敏正・笠井敏光「福知山地方の横穴式石室」（『京都考古』16　京都考古刊行会）1975
4. 新納　泉「京都府下出土の装飾付大刀」（『京都考古』26　京都考古刊行会）1982
5. 村川俊明「福知山市牧正一古墳測量調査略報」（『京都考古』27　京都考古刊行会）1982
6. 西岡巧次・村川俊明「牧古墳群」（『丹波の古墳Ⅰ—由良川流域の古墳—』山城考古学研究会）1983

注6　竹原一彦「波江古墳群(3・4・5号墳)—宮福線関係遺跡昭和59年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第13冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1985

注7　注5—6参照

第2章　調査の経過

第1節　調査に至る契機と経過

石本遺跡の発掘調査の契機となった(仮称)宮福線鉄道は，京都府北部の日本海側に面する宮津市と内陸側に位置する福知山市とを結ぶ新たな交通輸送機関として建設が計画されたものである。鉄道の敷設工事は，当初国鉄宮津線宮津駅と大江町河守の(旧)北丹鉄道河守駅区間で着工され，昭和55年には同区間内における一応の工事が完了した。

この建設工事に先立って昭和44年に路線内の遺跡分布調査が行われ，翌45年には，京都府教育委員会が調査主体となり直接路線にかかわる「丸山古墳」「荒木野遺跡」「桑原口遺跡」の3遺跡について事前発掘調査が実施された。(注1)

その後，延進計画については諸般の事情で中断していたが，昭和57年から第三セクター方式による新たな運営組織(宮福鉄道株式会社)により建設工事が実施されることになった。

この工事再開に伴い，京都府教育委員会・福知山市教育委員会によって再度，大江町から福知山市までの計画路線内の遺跡分布調査が行われた。その結果，大江町内で1か所(河守遺跡)，福知山市内で2か所(石本遺跡・波江古墳群)の合計3か所の遺物散布地及び古墳の所在が確認された。そのため，これらの埋蔵文化財の取り扱いについて工事の主体者である日本鉄道建設公団大阪支社と京都府教育委員会の両者で協議が重ねられた結果，遺跡の内容や範囲等を知るため，事前に発掘調査を実施することで合意に達した。また，その実施方を，当調査研究センターに依頼された。

現地調査は，工事の進捗状況との関係により，昭和58年度に，まず福知山市域に所在する石本遺跡の調査から開始することになった。石本遺跡については先に述べたように，今回の分布調査によってはじめて確認された遺跡であるため，58年度は路線内に係る部分での遺構・遺物の有無およびその範囲等を知るため試掘調査を行うことになった。この試掘調査の結果，当初の予想をはるかに上回る良好な遺構・遺物等が遺存していることが判明したため，翌昭和59年度は調査予定地区内の残余部分の試掘調査を引き続き実施するとともに，試掘調査の成果を基に遺構の分布密度の高い地域を中心に面的な拡張調査を行った。

なお，昭和59年度については波江古墳群の発掘調査も合わせて実施した。

石本遺跡の現地調査期間については次のとおりである。

(調査年度)	(調査内容)	(調査期間)
昭和58年度	試　掘　調　査	昭和59年3月10日～昭和59年3月31日
昭和59年度	試掘・発掘調査	昭和59年4月1日～昭和59年9月30日

調査期間後半の8月4日には，地元住民を対象に調査成果についての現地説明会を開催した。また，今回の調査では豊富な木器類が出土したが，これらは福知山地域のみならず，府下においても調査例の少ないものであるため，各報道機関を通じて資料を公表した。現地調査終了後は，当調査研究センター内において出土遺物の整理作業を行うとともに，京都府立山城郷土資料館に出土木器・鉄器の保存処理を委託した。

今回の発掘調査に際してはその全般にわたって，日本鉄道建設公団大阪支社，福知山市教育委員会・同市史編さん室・福知山市企画調整室・福知山市土地開発公社・福知山市文化資料館・福知山市立上天津小学校・福知山市立上天津保育園・福知山史談会等の諸機関の協力並びに援助を受けた。また，地元の郷土史家，中川淳美・衣川栄一の両氏および福知山市教育委員会　大槻眞純・崎山正人両氏からは現地調査について貴重な御教示・御助言を頂いた。さらに牧自治会長 高橋良男氏をはじめ各周辺地区の区長方には，格別のご高配を賜った。このほか，御芳名は省略させていただくが，有形無形にご援助いただきました各機関・個人の方々に対し，深く感謝の意を表したい。

なお，現地での発掘作業および整理作業にあたっては，各大学の学生諸氏をはじめ地元牧・石本各地区の有志の方々の参加・協力があった。(注2) 今回の現地調査は，例年にない大雪に見舞われた冬季にはじまり酷暑の夏場に至る長期にわたったが，その間さまざまな作業に従事していただきましたご労苦に対し，厚く御礼申し上げたい。

付表1　調査日程抄

年月日		年月日	
59・3・10	器材搬入・現地調査着手。	59・8・1	C地区重機掘削。
3・14	調査区域グリッド設営。	8・4	現地説明会開催。
3・27	付近空中写真撮影・現地作業終了。	8・6	C地区精査開始。
3・31	58年度調査終了。	8・10	A地区大溝掘削。
59・4・1	59年度調査開始。	8・22	新聞記者発表(鞍出土等)。
5・8	現地調査再開。	9・3	大溝掘り下げ完了。
5・23	試掘調査完了。重機掘削により調査区拡張（A・B地区)。	9・30	C地区調査完了。
5・24	A・B地区精査開始。	10・5	C地区関係者説明会開催。

調　査　風　景

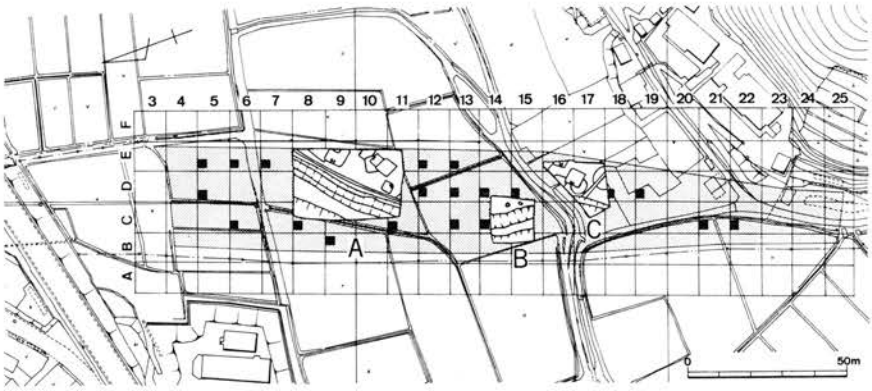
1. 試掘調査　2. 重機による拡張　3. 大溝掘り下げ　4. A地区遺構実測　5. 梅雨期の大雨によりトレンチ水没　6. C地区住居15の掘り下げ　7. 現地説明会　8. 小学生の見学

第2節　調査の方法と概要

前節で述べたように，石本遺跡は鉄道建設に伴う分布調査により確認された遺跡である。調査予定地は，狭小な沖積平野の一角に位置しており，周囲は水田・桑畑に利用されている。遺物の散布状態も取り立てて顕著という訳でもなく，外表面からは遺跡であるか否かの判断は難しかった。すなわち，この地域は由良川の氾濫で著名なところであり，このような低湿地における遺跡の存在を危惧する意見もあった。そこで調査にあたり，とりあえず遺構・遺物の有無を確かめるために，路線予定地にかかる延長約220mの区間を対象に試掘調査を実施することにした。

調査に着手するにあたっては，まず鉄道建設用の路線センター杭を利用して調査予定地全体を10m方眼の方形区画に割り付けた。それぞれの区画については南北軸を数字，東西軸をアルファベットで呼ぶことにし，この両記号の組み合わせによって調査地区を表現する方法をとった。この10mの基本区画はさらに四等分して遺物取り上げ等の最小区画単位とした。試掘調査はグリッド掘りによる確認方法で行い，実際の作業にあたっては先に述べた10mの方形区画毎に一辺3m四方のグリッドを一か所ずつ開けていくことを基本とした。今回の試掘調査で開掘したグリッド数は，合計35か所である。

この試掘調査の結果，地区割りBラインより以西および6ラインより以北の地域では，水田の床土直下から池あるいは沼沢状の地形の存在を示す青灰色粘質土や灰褐色の砂礫層が検出された。さらに，重機による深掘り部分の状況や工事に係るボーリング調査結果においてもこの周辺部に低湿地状の地形が広がることが確認されている。この範囲は，付近の水田畦畔に痕跡をとどめる牧川旧河道の想定ラインに一致しており，今回の調査結果と符合することが知られた。(注3)



第5図　調査地位置図および地区割図

他のグリッド調査か所においては後世に攪乱を受けたところが多く，特に調査地の中央地区に当たる11から15ライン付近は近年になって瓦粘土の採掘などが行われたため，当初の層序が保たれている部分は比較的限られた範囲であった。これに対し，C・E区の7から11ラインにかけてと，山麓部の15ライン以南の地域では，水田床土の下位に遺物を包含する黒褐色粘質土層が認められ，さらにその下位に当たる地山面から遺構の存在を示す土色の変化が確認された。このため一部のグリッドで拡張を行ったところ，竪穴式住居跡のコーナーと思われる方形の落ち込みや柱穴状のピットが検出されるに至り，この地域に集落跡が存在することが明らかとなった。

以上の試掘調査の結果を受け，遺構の遺存密度が高いと考えられるA・B・Cの3か所の調査区を設定し，昭和59年5月23日からは本格的な拡張調査に着手することになった。

拡張にあたっては，A地区から順次重機を用いて遺構面直上までの土砂を除去し，その後人力によって遺構の検出・精査作業を行った。以下，各地区の調査の概要を記す。

A地区　C～Eの8区から11区にかけて拡張を行った調査地区で，今回の3か所の調査地区の中では最も広い面積を占める(約700m²)。

A地区では弥生時代から中世にかけての多数の遺構・遺物を検出した。まず，弥生時代の遺構としては方形周溝墓・溝・土坑群がある。次に，古墳時代の遺構としては方形竪穴式住居跡群・掘立柱建物跡・溝・土坑のほか，多数の柱穴状ピットがある。竪穴式住居跡は6世紀後半の時期に属するもので，これらの西側には大小2条の溝が走る。大きい方の溝からは多量の土器類に混じって木器・自然遺物が出土しており，今回の調査成果のなかでは最も大きな比重を占める。掘立柱建物跡については竪穴式住居跡より若干下る時期に比定される。古墳時代以降のものとしては，平安時代から鎌倉・室町時代にかけての掘立柱建物跡・溝および多数の柱穴跡があるが，所属時期や遺構の性格を知ることのできるものは少ない。この他の遺構としては，近・現代の杭列・石組暗渠排水溝等がある。

B地区　B～Cの14・15区にかけて拡張を行った調査区である。試掘調査時C14グリッドで弥生時代の溝の一部を検出したため，その性格を確認することを目的として拡張を実施した。しかし，調査地周辺部は予想以上に攪乱を受けていることがわかり，調査面積は限られた範囲にとどまった(約170m²)。

B地区では弥生時代中期の方形周溝墓および古墳時代の竪穴式住居跡に付随するカマドの痕跡と思われる焼土や時期不明の土坑等を検出した。方形周溝墓は，全容を確認することはできなかったが，溝内から供献に用いられたと思われる一個体の壺形土器を検出することができた。

C地区　C～Eの16から18区にかけて拡張を行った調査区であり，地光寺山から張り出

す山麓斜面の縁辺部に当たる。調査地北辺は，用水路に合わせたため，ややいびつな平面をもつ(約270㎡)。

C地区では弥生時代から古墳時代の遺構・遺物を検出した。弥生時代の遺構としては2基の円形竪穴式住居跡がある。この住居跡は，出土した土器から弥生時代末期から古墳時代初頭の時期に属する。古墳時代の遺構としては，A地区で確認されたものと同様な6世紀後半代の方形竪穴式住居跡群のほか溝・土坑等がある。このうち，竪穴式住居跡は頻繁な建て替えが行われていることが明らかになった。また，これらの住居跡に切られた土坑内から石本遺跡から出土する須恵器のなかでは最も古い段階にあたる6世紀中葉頃の須恵器高杯が検出され，この遺跡における古墳時代住居群の形成時期を明らかにすることができた。古墳時代以降のものとしては多数の柱穴・ピット群があるが，今回の調査地内では建物としてまとまるものはなく，所属時期等不明な点が多い。このほか，中世以降の自然流路跡が調査区の西端で確認された。

以上，各調査地区での発掘調査によって石本遺跡の立地面は，調査地の南東に位置する地光寺山から舌状に張り出す自然堤防状の微高地の縁辺部分にあることが明らかになった。

(辻本　和美)

注1　中嶋利雄・杉原和雄・林　和廣・堤圭三郎「宮守線路線地域内発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1971

注2　調査補助員　川吉謙二・小橋拓司・佐藤達幸・藤田公徳・細見成喜・牧　正博
作　業　員　金田正男・金田和則・桐村英一・木崎嘉一・木崎久一郎・高木弥太郎・牧　鋼助
牧　治司・和久徳重・和久寅一・和久治男・松井信治郎・小笠原守・奥村重男・
高尾浩徳・中井八郎・川口うたの・高橋登美栄・牧　順子・片岡あや子・足立初子
梅垣ひとみ・白波瀬光代・福居敏子・八野美津子

(順不同・敬称略)

注3　周辺ほ場整備に伴い，福知山市教育委員会が，国道175号線脇で行った発掘調査においても，同様な状況が確認されている。崎山正人「石本遺跡発掘調査概要」(『福知山市文化財調査報告書』第10集　福知山市教育委員会)　1986

第3章　遺　　構

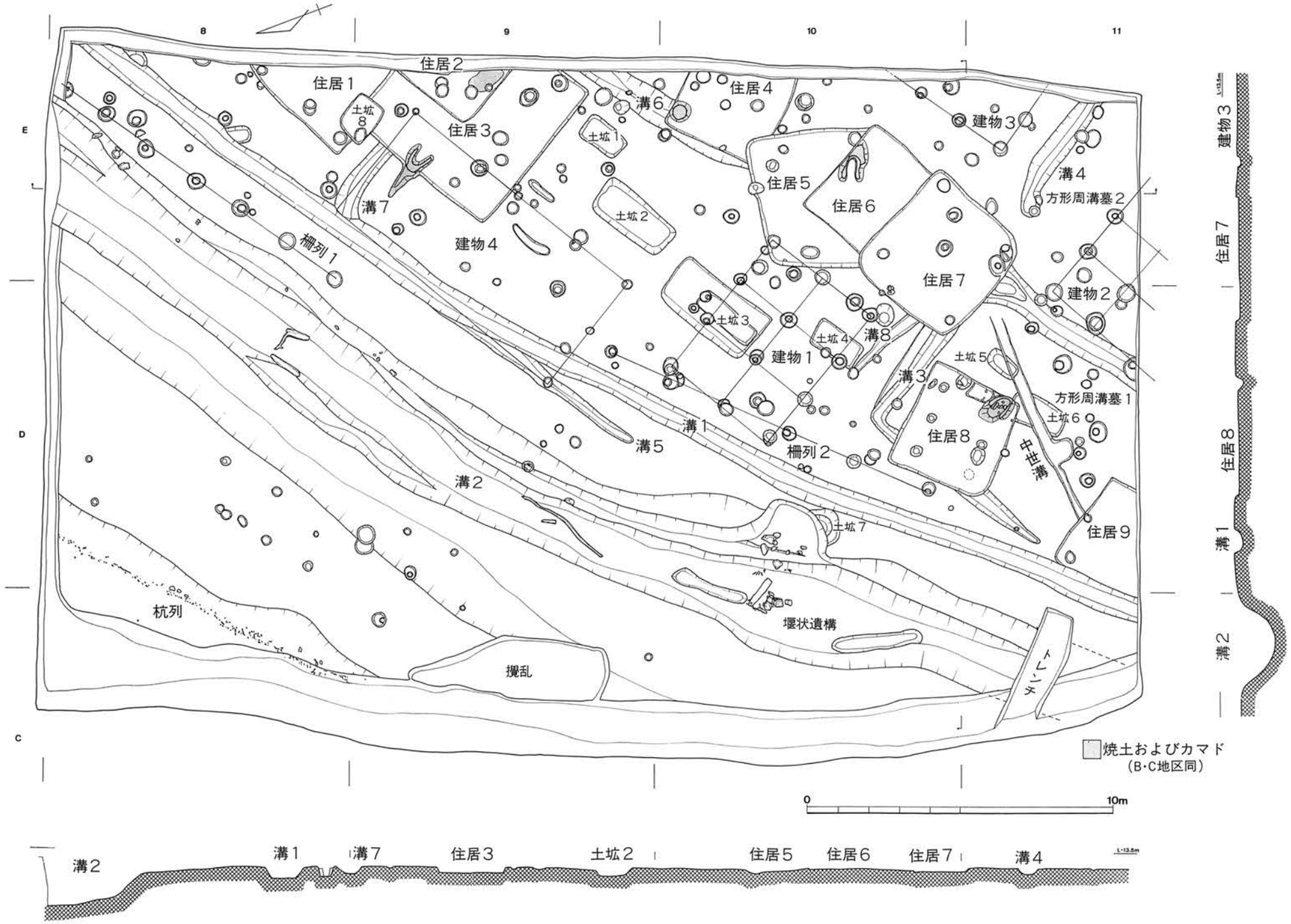
第1節　調査地の概要と層位

調査地は，水田として利用されており，全体を通して高低差はあまり認められない。標高は，地光寺山の裾に当たる調査区南東部が最も高く約14mを測る。この付近から北に向かって次第に低くなり，調査区北端の水田面では標高約13.4mを測る。現在，国道175号線に沿って細長い水田畦畔が続いており，牧川から派生する旧流路の痕跡と考えられている。

このような水田平坦面は，由良川河岸まで広がっているが，河岸部分には帯状の自然堤防が形成されており一段高くなる。いま少し周辺地形を細かく観察すると，今回の調査地から東方にかけての約200mの範囲が周辺部よりもわずかに高い水田レベルを呈している。

調査地全体の層位については基本的には余り変化はない。最上層の水田耕作土は厚さ10～20cmで，それ以下約40cmまで床土が続く。床土部分には，現水田を造成する際に造られた礫石詰めの暗渠排水溝が各所で認められる。床土以下は，厚さ約50mまで遺物を包含する暗灰褐色粘砂質土層が広がり，以下暗黄褐色土層(地山面)になる(第6図)。今回検出した遺構のほとんどは地山面を切り込んで構築されているが，中世時期に属する遺構については地山上面の黒褐色粘質土層の中位部分に一枚の遺構面を設定できる。地山面の標高は，調査地北端のA地区で約13m，南端のC地区で約13.3mを測る。C地区では地山の上に，丘陵部からの流れ込みと思われる茶褐色粘土の堆積がみられる。土層断ち割り部の観察によれば，地山面の深部は水分による還元作用によって青灰色ないし緑灰色に漸次変色する。層序に関しては概略以上の通りであるが，第2章第2節で述べたように，地区割りのBラインより以西の地域については水田床土下すぐに青灰色粘質土または

第6図　A地区北壁土層断面図



第7図　A 地 区 遺 構 実 測 図

灰褐色の砂礫層となる。砂礫層は，地表下2～3m付近まで確認できたが，それ以下は湧水が激しく不明である。

今回検出した主要な遺構は，弥生時代と古墳時代に所属する時期のものに大別される。その他，古墳時代以降から中・近世に至る遺構が検出されているが，前の2時期に比較して遺構全体のまとまりに欠ける。以下，弥生時代の遺構群を第1期，古墳時代以降の遺構群を第2期として各時期の遺構の概要を述べる。

第2節　第1期（弥生時代の遺構）

弥生時代に属する遺構には，方形周溝墓・竪穴式住居跡・土坑(墓)群・溝等がある。遺構の分布状況は，方形周溝墓・土坑群がA・Bの両調査区に集中しており，竪穴式住居跡はC地区で検出した。遺構の時期は，方形周溝墓が概ね弥生時代中期中葉，円形竪穴式住居跡が後期末葉頃に属するものと想定される。以下，各遺構の概要を述べる。

(1)　方形周溝墓

周溝墓1　A地区のD11区で検出した方形周溝墓。古墳時代の方形竪穴式住居8および7によって切られているが，コの字形に溝を巡らしているのが看取される。溝の主軸は，北東から南西方向に置く。南西辺では溝を確認していないが，それに接続すると思われる北西溝の状況からみて，削平を受けたものと考えられる。溝は，最も広い部分で幅1mを測る。溝の断面は浅いU字形を呈しており，溝内には暗褐色土が堆積する。南東辺の溝では，住居7と接するか所で一段深くなる部分が認められており，あるいは溝内埋葬の施設になる可能性がある。溝に囲まれた台状部中央と，その東寄り位置から2基の土坑を検出した。中央の土坑6は長軸1.9m・短軸1mの隅丸方形の平面形をもつ。土坑5は，長軸1.1m・短軸0.6mを測る。両土坑とも，中世の耕作溝により破壊されているが，本周溝墓の埋葬主体部と考えられる。

周溝墓2　周溝墓1の東側に接して存在する方形周溝墓。南東部が調査地外にかかるため平面の規模・形態について明らかではないが，現状では調査地南東隅からのびる溝4と周溝墓1の南東辺溝(溝3)とにより区画されるものと思われる。すなわち周溝墓1と一辺を共有する平面形が想定される。溝4は途中で途切れており，周溝墓1の溝との間隙はいわゆる陸橋部に相当するものであろう。土坑等の埋葬施設の存在については明らかでない。

周溝墓3　B地区西辺で検出した方形周溝墓。周囲は近世の土取りにより大きく攪乱を受けているが，南辺及び東辺の周溝と北辺溝への屈曲部の一部が遺存する。周溝の一辺の規模は約7mを測る。溝は断面逆台形状を呈しており，最大部幅80cm・深さ20cmを測る。溝

内には暗茶褐色土が堆積しており，東辺溝のやや南寄りの位置から壺形土器が一個体分出土した。口縁を南向きに横転した状態で検出されており，溝内に供献されたものと考えられる。溝の区画内には数基の土坑が存在するが，いずれも古墳時代の土器を含んでおり，この周溝墓に伴う埋葬施設ではない。

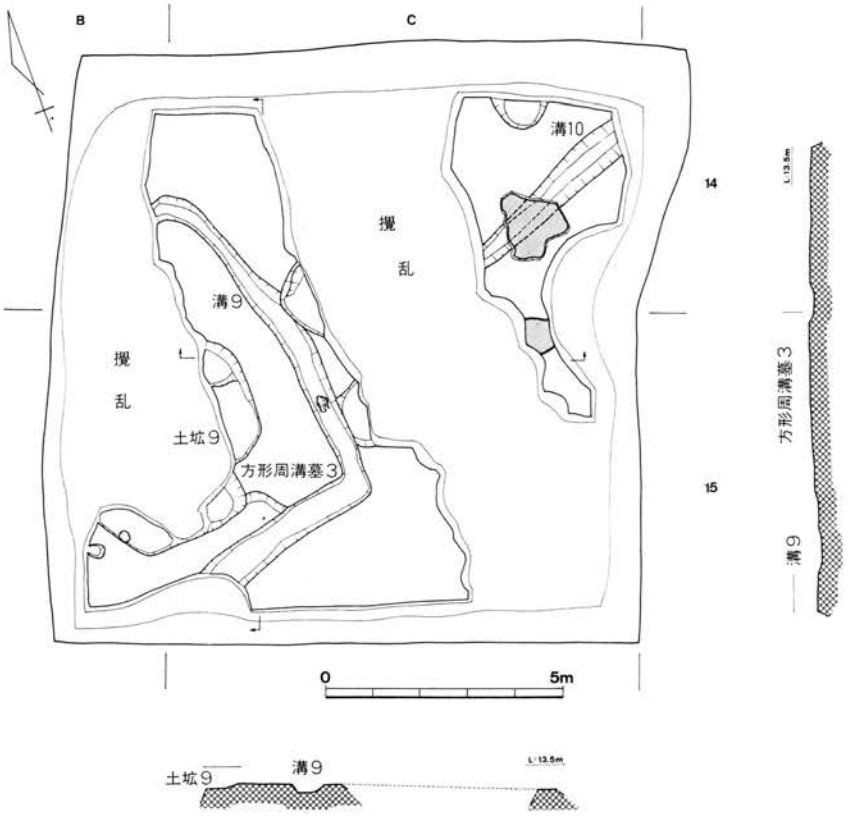
(2)　溝

今回の調査では弥生時代の溝のほか，古墳時代に属する溝からも弥生土器が出土している。また，各時期の遺構は，すべて地山面で検出されており，層位関係から時期差を判別することは困難であった。このため，本稿で弥生時代に含めた溝のなかには，同時期の遺構群との相関関係から時期を決定したものもある。

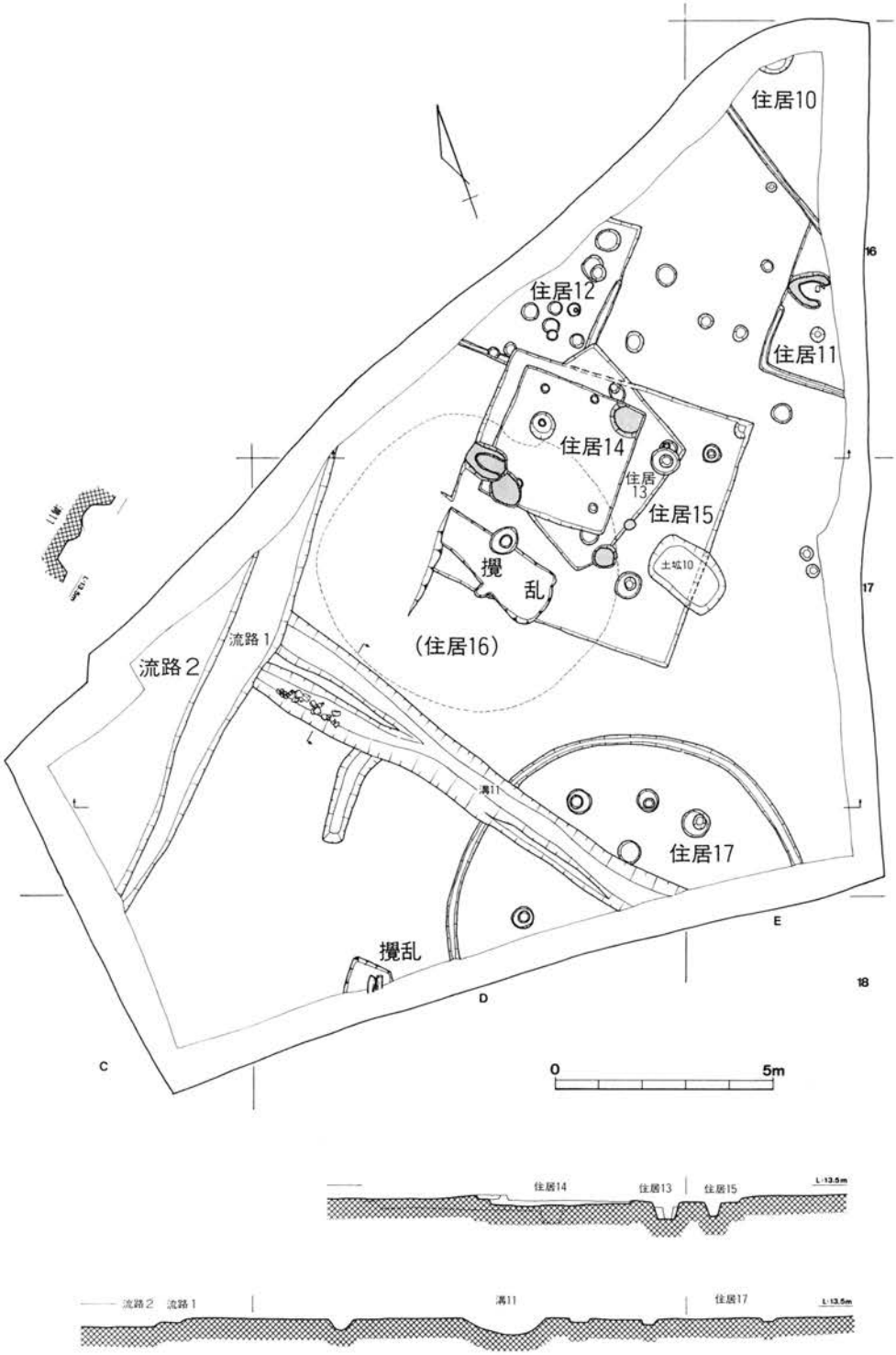
溝3　方形周溝墓1を区画する溝。前掲。

溝4　方形周溝墓2に伴う溝。前掲。

溝5　D9区で検出した北東～南西方向にのびる溝。古墳時代の溝1から分岐したような形態を示す。幅50cmを測り，溝断面形は逆台形状を呈する。溝南西端は，削平を受け途中



第8図　B地区遺構実測図



第9図　C地区遺構実測図

で途切れる。後述する，溝6・溝7と一連のものと考えられる。

溝6　E９から10区で検出した溝。北東から南西の方向にのびるが，南端は竪穴式住居4・5により切られている。幅1.8mを測り，断面は底の広い逆台形状を呈する。調査区の壁面に接する位置から弥生土器の甕２個体分が出土した。

溝7　E８とE９区の境で検出した溝で，南側は住居３，北側は溝１に切られる。溝北端部でわずかに湾曲するが，方向からみて溝５に続くものと想定される。幅60cm・深さ20cmを測る。出土遺物はない。

溝8　D10区で検出した溝。南端は住居７に切られており，北西側も途中で消える。溝の最大幅45cm・深さ20cmを測る。溝内から，弥生時代後期末に属する高杯脚部，複合口縁を有する壺片が出土した。

溝9　方形周溝墓３（B地区）を区画する溝。前掲。

溝10　B地区C14区で検出した溝。東西方向に走るが，西側は後世の攪乱により削平されている。溝上層は，古墳時代住居跡に伴う焼土層が覆う。幅80cm・深さ20cmを測り，溝の断面形は，上方で広がる⊔字形を呈している。周溝墓３と，ほぼ同じ方位をもち，本溝も方形周溝墓等の区画溝になる可能性が高い。溝内からは，弥生土器の小片が出土した。

(3)　土坑

弥生時代に属する土坑は，主にA地区で検出した。平面の形状は概ね隅丸の長方形を呈しており，方形周溝墓の主体部および，埋葬施設に係わるものと判断されている。

土坑1　E９区で検出した小土坑。西端に比べ東端の幅がやや広がる。

土坑2　同じくE９区にある土坑。平面隅丸長方形を呈する。土坑１と同様，西端に比べ東端がやや広がる。

土坑3　E10区からD10区にまたがって検出した土坑で，今回検出した土坑群のなかでは最も規模の大きいものである。平面形は長方形を呈しており，その内側に，西側に偏って一段低い長方形の掘り込みを有する。いわゆる二段墓坑状の形態を示す。上部と下部の土坑埋土は同質のものであり，棺を据えた痕跡等についても検出することはできなかった。

土坑4　土坑３の南西に位置する小規模な土坑。平面形態は，長方形を呈する。

土坑5　周溝墓１の埋葬主体部。前掲。

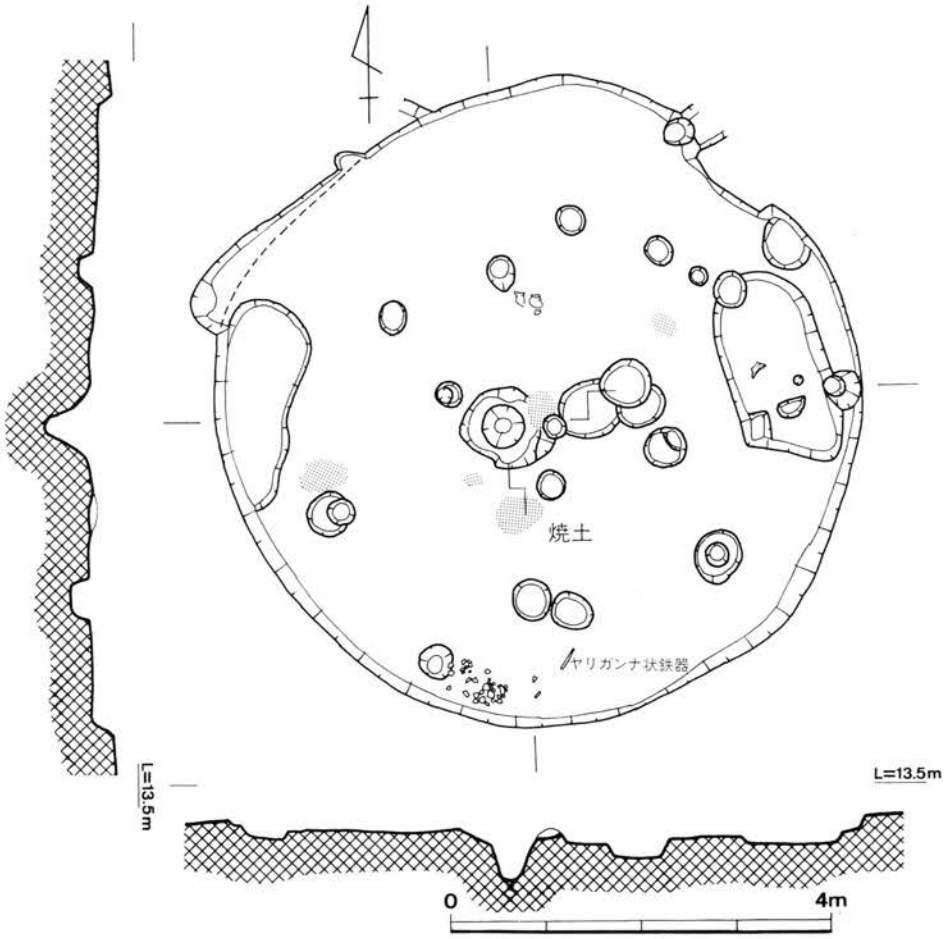
土坑6　土坑５と同じく周溝墓１の埋葬主体部。前掲。

土坑7　D10区で検出した不整形土坑。溝２（大溝）の突出部によって北側が削平されており，全体の形状・規模等については不明である。残存長1.2m・幅1.15mを測る。土坑の断面形は二段に掘られており，上段は浅く，下段は，すり鉢状に深くなる。内部から弥生土器の小片が出土した。

(4) 竪穴式住居跡

地光寺山北西斜面裾部に設けたC地区から，弥生時代の円形竪穴式住居跡2基を検出した。住居跡は標高13m付近に構築されており，石本遺跡のなかでは比較的高所に位置する。

住居16(第10図)　D17区を中心に検出した円形竪穴式住居跡。後述する住居跡17とは約2.5m離れている。直径約6.8m・壁現存高約20cmを測る。床面は，ほぼ水平を保つが，周溝等の施設は認められなかった。住居跡床面の中央部に直径約90cm・深さ約50cmの柱穴状のピットが存在する。ピットは，2段に掘り込まれており，中位部分での径約50cmを測る。住居跡に伴う柱穴は，床面の東南部分にやや偏って存在する。床面には，上層の古墳時代住居跡に伴う柱穴も遺存するが，この住居跡に伴うものとしては，直径約30～40cmの柱穴6か所が想定される。住居跡内の東西両端部から，長さ2m・幅約40～50m・深さ約15cm



第10図　住居16実測図

の不定形土坑を2か所検出した。土坑内には，多数の土器片が存在しており，貯蔵穴等の施設になるものと思われる。このほか，床面には5か所で焼土の広がりが認められており炉跡と思われるが，あるいは焼失家屋の可能性がある。また，この住居跡では，これまで京都北部の同種住居跡の発掘調査では確認することのできなかった出入口の施設を明らかにすることができた。すなわち，住居内の東北部で壁面が長さ90cm・幅20cmの範囲で内側へ突出するか所がみられ，その突出部の両端部から各1か所ずつ柱穴状のピットを検出した。この突出部の前面住居跡側には，柱穴が存在せず，出入口と想定して誤りないものと思われる。床面には，土器の小片が小範囲に広がる部分がある。一部叩き締められた痕跡が認められ，貼床等の施設とも考えられる。住居跡からの出土遺物としては，弥生時代後期末(庄内並行)の土器片のほか，特筆すべきものとして住居南端部の床面上から出土したヤリガンナと考えられる棒状の鉄製品が3点ある。

住居17　D17・18区を中心に検出した円形竪穴式住居跡。住居跡の北半分を確認したのみであり，全体の規模等については不明である。復原径8.5mを測る。住居跡は削平を受けており，そのため壁部はなく，外周を巡る周溝および柱穴が遺存するのみである。床面の周囲には，柱穴状のピットが存在するが，このうちの3か所が本住居跡に伴うものと考えられる。柱穴掘形は，円形でいずれも直径50～60cmを測る比較的大形のものである。中央の柱部分の径は，約25～30cmを測る。住居跡の柱穴は位置関係からみて，本来6本からなるものであったことが窺える。床面は，前述したように大きく削平されており，炉跡等の付属施設や共伴遺物については不明である。住居跡の所属時期は住居16と同様，弥生時代後期末と考えられる。

第3節　第2期（古墳時代の遺構）

古墳時代に属する遺構には，竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑等がある。この時期の遺構はすべての調査区で検出されており，今回確認された遺構群の中では主要な部分を占めている。特にA地区で検出した溝2(大溝)は，規模および出土遺物の内容からみても石本遺跡の性格を最も特徴づけるものである。

(1)　竪穴式住居跡

今回の調査では合計15基の竪穴式住居跡を検出することができた。A・C地区をはじめB地区でも住居跡の痕跡が確認されており，広範囲に広がることが予想される。住居跡は互いに重複するものが多くみられ，また，上面の削平等により遺存状態は必ずしも良好ではない。切り合い関係をもつ一連の住居跡群を単位として，さらに幾つかのグループに編成

することができる。以下，それぞれの住居跡について概略を述べる。なお個々の規模等については住居跡一覧表を掲げる。

住居1　A地区8E区で検出した方形竪穴式住居跡。住居跡南西部の一角を検出したのみであり，東側部分は調査範囲外になるため全体の規模は明らかでない。住居跡内の柱穴については南西隅のものを除き不明である。カマド(注1)の有無は今回の検出範囲内では確認できなかった。この住居跡は，住居3・土坑8によって切られている。

住居2　A地区9E区で検出した方形竪穴式住居跡。南西隅部分を検出したのみで，全体の規模・付属施設等については不明である。住居3の炉跡と思われる焼土層が住居跡の埋土上面を覆っており，住居3に先行して建てられたことがわかる。

住居3　A地区9E区で検出した方形竪穴式住居跡。住居規模は一辺5.6mを測り，A地区で検出した住居跡の中では比較的大型の部類に属する。住居の各隅は，ほぼ方位に合わせており，西および南のそれぞれの角を確認した。このほか，北角は住居1・土坑8が重複し，東角については調査範囲外になる。住居跡に伴う柱穴は4本あり，今回の調査地外のものを除く3か所で柱穴を確認した。柱穴掘形の直径は平均約60cm・深さ約40cmを測る。柱間の距離は，北西辺で約3.2m・南西辺で約2.8mである。住居壁北西辺の中央部にカマドを付設する。カマドの本体は粘土で構築され，平面の形状は馬蹄形を呈する。カマドの規模は，長さ90cm・炊口部の幅60cmを測るが，住居の外方にさらに煙道がのびる。煙道は地山を浅く掘り込んだ状態で遺存し，全長1.3m・カマド取り付き部での幅50cmを測る。また，カマド内部の焼灰層から甑に復原される土師器片が出土しており，使用時の様相を知ることができる。住居の床面には，暗褐色粘土によって薄く貼り床された跡がある。床面中央付近には約1mの範囲に焼土層が広がる。炉跡の痕跡と思われる。なお，検出範囲内では周溝や貯蔵穴等の施設は見られなかった。この住居跡の出土遺物としては土師器等の土器片のほか，平根式鉄鏃が1点出土しており注目される。

住居4　A地区10E区で検出した方形竪穴式住居跡。住居跡の北隅を確認したのみで東側3分の1が今回調査地外になる。北辺と南辺の間隔から復原して一辺約3.5mの住居規模を持つものと考えられる。住居跡内の主柱については複数の柱穴状ピットが存在するが，対応関係は不明である。住居北西隅から東寄りの所に径約70cmを測る，造り付けカマドの痕跡と思われる焼土塊が遺存する。この住居跡は，弥生時代の溝3を切って造られており，さらに北西に位置する住居5により西南角が破壊されている。後述する住居5から住居7までの竪穴式住居跡と連続的な重複関係をもつ。

住居5　A地区10E区で検出した隅丸方形の竪穴式住居跡。A地区の住居跡の軸線は南北軸に対し30～45度の傾きをもつものが多いが，この住居跡の軸線の振れは20度前後であり

比較的小さい。住居跡の南半部は，住居6の重複により破壊され，全体の形状等は不明であるが，一辺約4.3mの規模に復原される。カマドの有無については明らかでない。

住居6　A地区10E区で検出した方形竪穴式住居跡。住居5を切って構築されている。住居南辺は住居7によって切られているが，北東辺の規模約3.6mを測る。北東壁の中央部付近にカマドの痕跡と思われる焼けた粘土の塊が遺存する。焼土塊は，長軸約1.3m・短軸約0.8mを測り，住居壁に沿って長くのびる。焼土の平面形は馬蹄形を呈しているが，焼灰層の散布範囲や断ち割り部分の断面観察からみて，このカマドの炊口位置は北西方向，すなわち住居壁に向かって斜め方向に取り付く可能性が大きい。柱穴については不明である。遺物としては，匙形の土製品と鉢形土器が出土している。その他，床面に貼り付いて土師器甕の破片が出土した。

住居7　A地区10D～10E区にかけて検出した隅丸方形の竪穴式住居跡。住居6の南西辺と重複しており，住居6の規模をやや大きくして南西方向に平行に移動させたような形態をとる。柱穴は，四隅に接して検出された。柱穴の平面形状は，円形で径約40cm・深さ40cmを測る。カマド等の施設は持たない。この住居跡は，住居4から住居7までの切り合い関係にある一群の住居跡の中では最も新しいものである。

住居8　A地区10Dから11E区にまたがって検出した方形竪穴式住居跡。住居北西壁と溝1との距離は約1mと近接している。住居規模は，一辺3.6mを測りA地区住居跡のなかでは小形の部類に属している。また，他の住居跡との切り合い関係もみられない。住居の南東隅部に近い位置に平面馬蹄形の造り付けカマドを持つ。カマドは，今回検出した他の住居跡のカマドに比べ比較的残りがよく，長さ70cm・炊口部分の幅80cmを測る。カマドの本体部分は住居内にほぼ収まり，炊口は住居壁に向かってやや斜め方向に取り付いている。炊口前面の住居床部分には焼灰が散布し土間状に堅く焼け締まっている。カマド中央の焼成部から土師器片が出土しており，使用時の状況を窺うことができる。このほか，カマドの東側に接する位置に貯蔵穴をもつ。貯蔵穴は，平面形が不整な方形状で長軸78cm・短軸50cmを測る。深さは約10cmで内部から土師器・須恵器の小片が出土した。住居の柱穴については，4本の主柱からなると思われるが，南東柱にあたる所にはカマドが存在しており，この部分では柱跡を検出することはできなかった。一方，北辺2柱の中間と，同じく相対する南辺の同位置からこの住居跡に伴うものと思われる径30cm程の柱穴状ピットが検出された。これらの小柱穴の性格については，その位置からみて上部に渡された梁を支えるための補助柱と考えられるが，主柱穴の配置とともにこの住居跡の上部構造が通常のものとはやや異なっていたことが窺われる。なお，北東柱と住居壁の間に，長径40cm大の粗い石塊を置く。

住居9　A地区11D区で検出した竪穴式住居跡。住居跡北辺の一部を確認したのみで全体の規模・形状等は不明である。住居跡の北東辺は溝1に切られる。溝1との先後関係が知られる唯一の住居跡である。検出範囲内ではカマドの痕跡らしきものは認めることができなかった。住居跡内の柱穴についても北西隅柱と想定されるものを確認したのみである。

住居10　C地区北東隅の16E区で検出した方形竪穴式住居跡。調査トレンチの制約により，確認できたのは住居跡南西辺と推定される一部分のみである。周壁溝を持ち，壁溝の幅は18cm・深さ8cmを測る。住居11とわずかな切り合い関係がみられる。

住居11　C地区16E区で検出した方形竪穴式住居跡。住居跡南西隅の一角を検出したのみで，他の辺はすべて調査地外になる。住居跡北西辺に造り付けカマドが遺存する。カマドは平面の形状が馬蹄形を呈しており，長軸約1m，炊口部の幅80cmを測る。カマドの本体は住居跡内にほぼ収まる。カマド位置の南側から住居跡南西辺にかけて，幅約18cmの周壁溝を巡らしている。

住居12　C地区16D区で検出した方形竪穴式住居跡。北辺および東西の三辺の一部を検出したが，その他は調査地外にかかる部分が多く全容については不明確である。住居南隅は重複する住居13と住居15によって削平されているが，一辺約4mの規模が想定される。住居南東辺と南西辺の二辺に周壁溝をもつ。周溝は幅20cmを測り，南東辺では途中で途切れる。今回の検出範囲ではカマド等の施設は認められなかった。

住居13　C地区16D～17D区で検出した方形竪穴式住居跡。住居12・住居14・住居15とで複雑に重複するが，切り合いの状況等からみてこの住居跡が最も先行することが窺える。住居跡北辺部は削平されているが，残る三辺の周壁からその規模は，東西約3.9m・南北約3.4mと復原できる。周壁は南東辺がやや外側に張り出し，いびつな平面形態をとる。柱穴は北東と南東の2柱を検出しており，柱間は4mを測る。

住居14　C地区の16D～17D区で検出した方形竪穴式住居跡。住居15の北西部分に重なるように位置するが，この住居跡の方が先行して造られている。住居跡床面の東隅に造り付けカマドの痕跡と思われる焼土塊が遺存する。住居の隅部にカマドを構築する例としては，今回の調査では住居4・住居8があるが，いずれも床面規模の小さい点が共通する。柱跡は東角のものを除き3か所で確認している。柱穴の径は建物規模に比例して小さいものである。東角の柱想定位置は，カマドと重なる位置に当たっており，当初から存在しなかったことも考えられる。この場合，カマド跡の北西寄りに同様な小ピットがあり，東角の主柱になる可能性もあるが建物平面の形態がいびつになる点問題をのこす。柱間隔は北西側の列で約2.3m，南西側の列で約1.9mを測る。この住居跡は住居15と方位を同じくし，また，この住居跡の一辺を約2倍(床面積では4倍)に拡大した規模が住居15とほぼ等しいこ

とがわかる。先に述べたように，この住居跡は住居15に先行して建てられているが，以上のことからみてこの両住居跡の造営にあたっては密接な関係が存在することが窺われる。

住居15　C地区16Dから17Eにかけて検出した方形竪穴式住居跡。調査地のほぼ中央部にあり，他の住居跡と複雑に重複し合うが，築造順ではこの住居跡が最も新しい。

一辺6mを測り，住居3とともに，石本遺跡から検出した住居跡の中では比較的大型の部類に属する。住居跡各隅は，ほぼ方位に向いており，住居壁北西辺の中央部に造り付けカマドを付設する。カマドは，平面馬蹄形を呈しており，長さ90cm・炊口部幅50cmで住居内にほぼ収まる。このカマドの南側に一部重複して，焼土塊がある。この焼土の遺存面は，明らかに本住居跡の床面であり，遺存状況からみて一時期のカマドの痕跡と考えられる。また，住居跡の中央やや南東寄りにも，炉跡と思われる焼土塊が残存するが，この方も50cm離れて東西2か所に認められる。すなわち，この住居跡は，やや位置をずらしながら，二回にわたってカマド・炉の改作を行ったものと想定される。柱穴は，4か所確認され，柱の掘形は円形で径約60cmを測る。掘形内には，径30cm程度の柱跡を残し，柱間は各々3mの間隔をもつ。なお，住居施設としての，貯蔵穴・周壁溝はない。本住居跡は，6世紀前半から中葉段階の須恵器が出土した土坑10を切り，また，弥生時代末の円形竪穴式住居跡(住居16)と重複する。

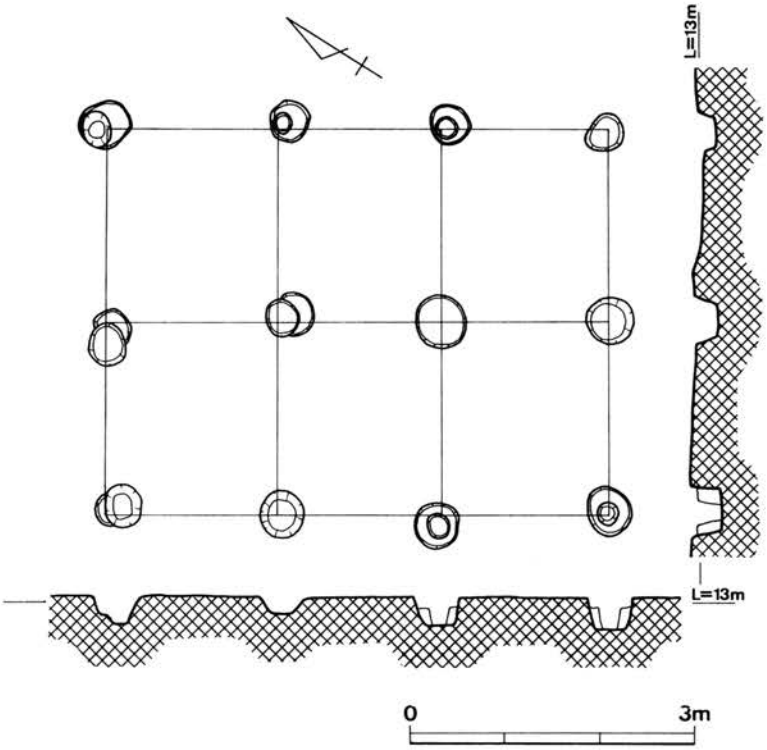
(2)　掘立柱建物跡

建物1(第11図)　A地区10D区で検出した桁行3間・梁間2間の東西棟の総柱の掘立柱建物跡。建物方位はN30°Wを示し，同地区で検出された竪穴式住居跡と同じ主軸方向からの傾きをもつ。建物規模は，桁行総長5.3m・同梁間4.1mで，各柱間寸法は，桁行が各1.7m・梁間が2.0mを測る。柱掘形は，径40～50cm程の円形を呈するもので，深さは平均約30cm前後を測る。掘形内には柱痕跡を残すものがある。西側列の柱穴には，一部建て替えの跡が認められる。掘形埋土から土師器の小破片が出土している。住居5の竪穴式住居跡と重複しており，切り合い関係からみてこの建物が後から建てられたことがわかる。

建物2　A地区11E・11D区で検出した桁行・梁間ともに2間以上の規模をもつ掘立柱建物跡。柱間の間隔は1.7～1.8mを測る。掘形は，径50～60cmの円形で，建物1に比べ一回り大きい規模をもつ。また，建物規模・方位とも建物1に等しく，総柱のものになるものと思われる。

建物3　A地区10E～11E区で検出した桁行・梁間ともに2間以上の規模をもつ掘立柱建物跡。東側が調査地外になるため不明な部分が多いが，柱間寸法は東西間が1.7m，南北間が1.2mを測る。柱掘形は，径50cm程の円形で，深さは平均15cm前後である。

(3)　柵列



第11図　建 物 1 実 測 図

柵列1　A地区8E区で検出した北東から南西方向に伸びる掘立柱柵列跡。方位はN55°Eを示す。各柱間は，北から1.4m・1.7m・2.0m・1.7m・1.8m・2.0mでばらつきが見られる。柱掘形は50～60cmの円形を呈しており，深さ20～25cmを測る。溝1と溝2のほぼ中間に位置するが，特に溝1とは約1mの間隔をもって並走する。掘形からは時期等の手掛かりとなる遺物は出土していないが，先に述べた建物跡と一連のものと想定される。

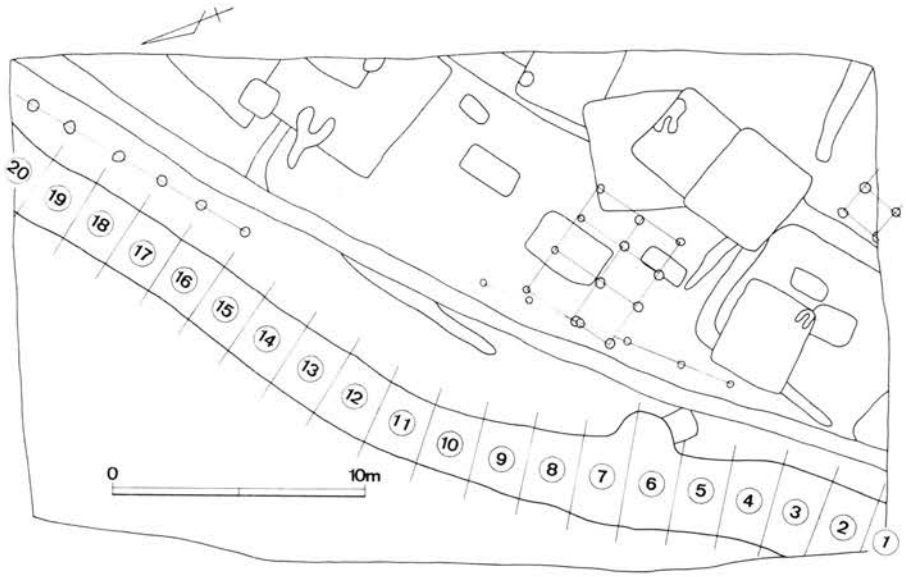
柵列2　A地区9から10区で検出した北東～南西方向に走る柵列跡。方位はN41°Eを示す。各柱間の間隔は，2.2～2.6mを測る。柱掘形は径40～50cmの円形を呈しており，約30cm前後の深さをもつ。溝1と約90cmの間隔をもって並走しており，柵列1と同様な性格をもつものであろう。

(4)　溝

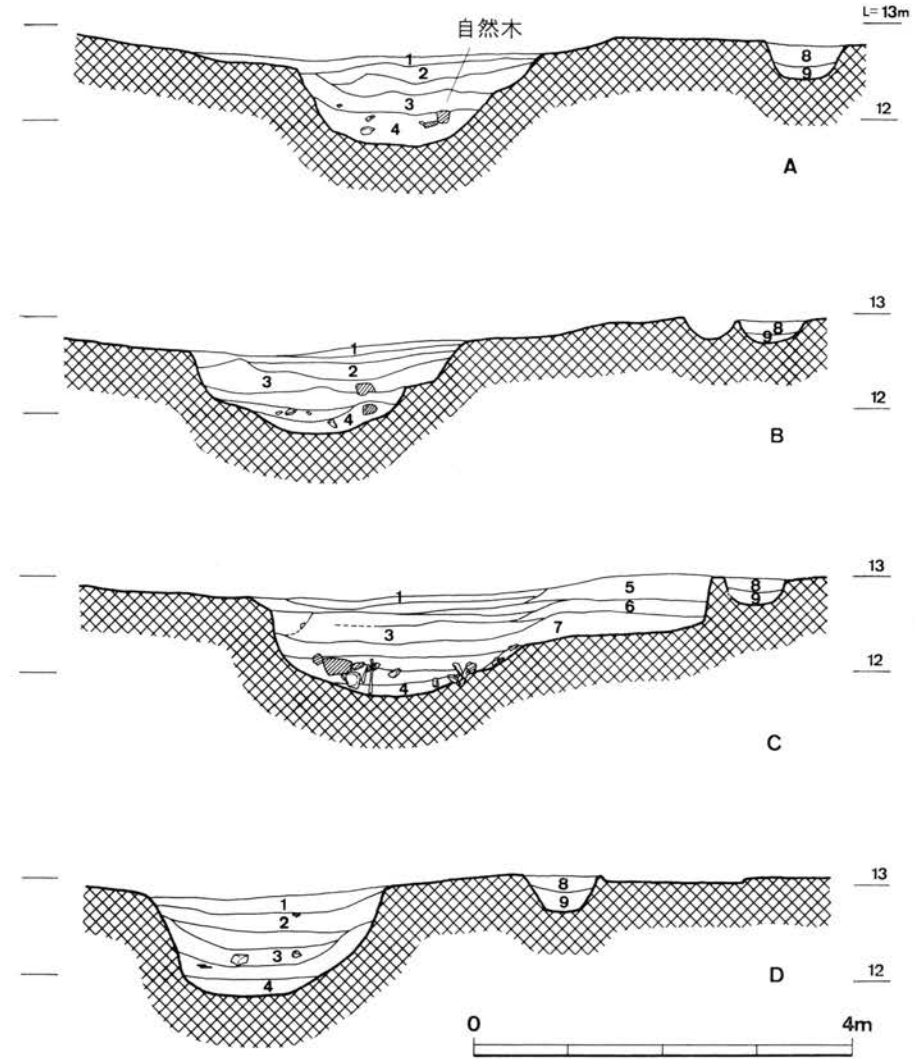
溝1　A地区を斜行する素掘溝。調査地の南西から北東方向に，緩やかな湾曲を描いて走る。溝幅60～80cm・平均の深さ30cmで，断面はU字形ないし逆台形状を呈する。溝全体を詳しく観察すると，所々直線的に走るか所が認められる。これについては，溝掘削の際の作業単位を現すものと考えられる。溝内の堆積土は，概ね上下二層に分かれ，上層は暗

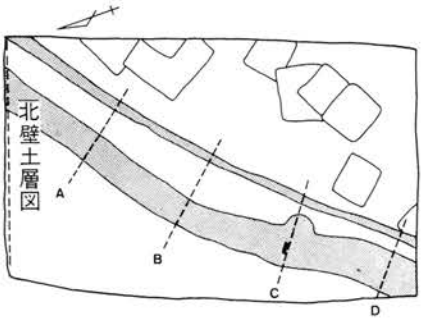
褐色土，下層は暗茶褐色粘質土である。溝内から，土師器を主体とする土器類が比較的まとまって出土した。また，土器類に混在して，拳大から小人頭大の角礫が多く出土した。この溝は，検出部の南端で古墳時代の住居跡(住居9)を切っており，また，出土遺物の時期差からみても，次に記す溝2(大溝)に比べてやや遅れて開削されたものと思われる。

溝2(大溝)　A地区11C～8E区にまたがって検出した溝で，古墳時代後期の土器類・木器類を多量に包含する。溝は，調査地の南西隅から北東隅に向かって緩やかな曲線を描きながら走り，今回確認した部分で約40mを測る。溝掘り下げにあたっては，遺物取り上げのための地区割りを行った。地区割りは，溝南西端の壁面から2m毎に区画し，それぞれ1～20の通し番号を付けた(第12図)。本溝の説明についても，概ねこれを用いることにする。溝の規模は，南端部での幅2.3m，北端部で3.0mを測り，深さは，0.8～0.9m前後を測る。溝南端部は北端部の溝底より，約20cm高い。溝の断面形は，緩いU字形を呈するが，溝11区から15区にかけては，溝斜面の中程に段を形成している。溝6区では，幅3m・長さ1.3m程の半円形に西側に張り出す部分がみられるが，これは，後述する堰跡に係わるものと思われる。溝底は，ほぼ平坦であるが，堰状遺構の周辺では溝に対して平行に，一部深くなるところがある。溝内の堆積層は，灰褐色ないし黒灰色の粘土・砂の互層からなり，6～7層に細分されるが，大略暗青灰ないし黒灰色粘質の上層と，黒灰色粘土下層の上下2層に分別できる。ただし，遺物の出土状況からは，上下層に時期差を与えることは難しい。溝内からは，後節で述べるように多種多量の遺物が出土しており，一部，弥生土器も含む



第12図　溝2(大溝)地区割り図(遺構は一部略)





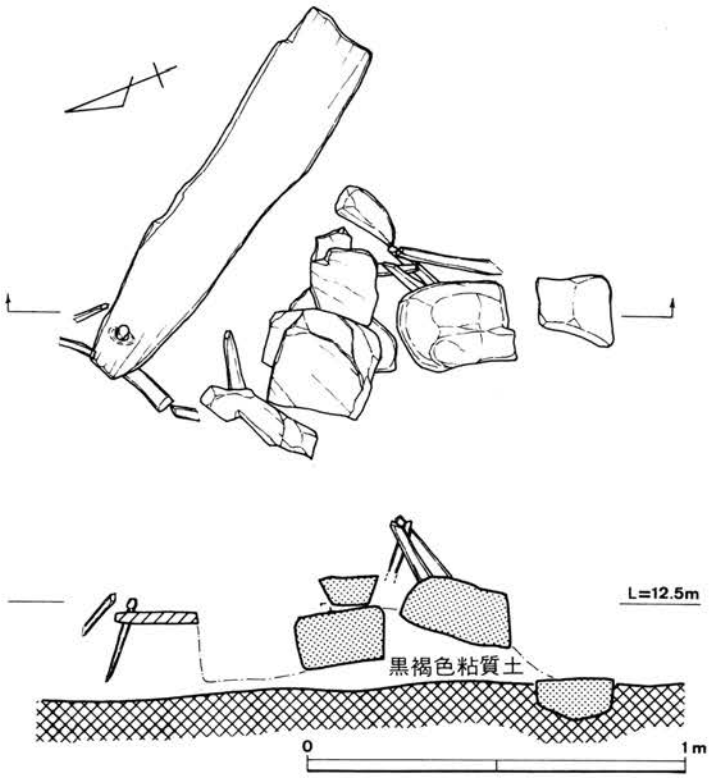
1 灰褐色粘砂質土(溝上層堆積土)
2 暗青灰色粘質土
3 黒灰色粘砂質土
4 黒灰色粘土
5 暗茶褐色土
6 暗茶灰褐色土
7 暗灰色粘土
8 暗褐色土
9 暗茶褐色粘質土

第13図　溝1・溝2 土層図

が，これらは弥生時代の遺構面を開削して作られたためであり，溝内出土の遺物の時期は，6世紀後半期にほぼ限定されるものである。遺物は，溝内の全域からまんべんなく出土しているが，特に堰状遺構の周辺(6・7区)と(12・13区)が，木器・土器とも顕著であった。溝底の所々に自然木が遺存する。

このほか，本溝の外縁に沿って，幅約15m前後の浅い凹地が巡る。凹地の堆積層上部からは，少量の瓦器片が出土しており，中世時期に埋没したことが窺われるが，周辺地形からみて，あるいは，本溝の掘削前から同様な地形が存在していた可能性がある。

堰状遺構(第14図) 溝内7区の堰状遺構は，溝に対して直行する形で検出した。長さ110cm・幅25cm前後の長方形の板材と石組みから構成される。板材は，北端部に孔を穿ち，そこに丸棒状の杭を打ち込み固定させる。杭の先端部には抜けを防ぐために突出する節を削り出している。石組みは，板材の西側に接しており，一辺30cm前後の角礫を最大として5ないし6石が，長さ70cmにわたって，上下2段に組まれている。石の積みかたは乱雑で，単なる集石ともみえるが，周囲に杭を打ち込み固定した状況が窺える。溝底に遺存するもの以外にも，掘り下げの際に多くの石塊が出土しており，本来はもう少し高さをもつものであったことが想像される。先の大形の板材も，本来の位置を留めるものではなく，遊離したものであろう。この板材については，流水の調整弁的な使用用途が考えられる。



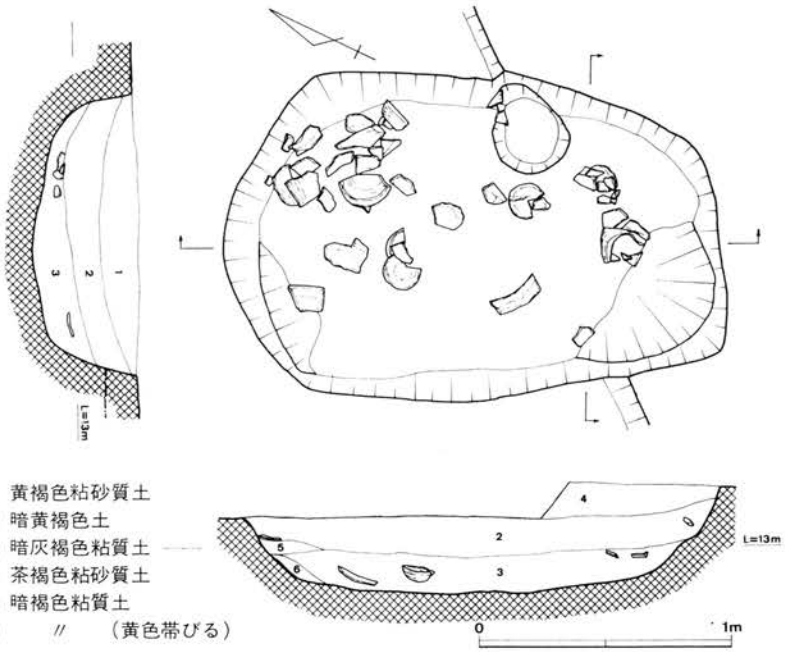
第14図　堰状遺構実測図

溝11　C地区D17区の南東から北西方向に走る溝。途中で二本に分岐する。切り合い関係からみて西側の溝が古く，東側の溝が新しい。北西端は，流路1・2により切られる。溝断面形は，逆台形状な

いしU形を呈する。溝幅は，南東端で80cmを測るが，分岐部分では約1mの幅をもつ。溝の深さは平均30cm前後を測る。溝内からは，多数の礫と混在して，須恵器および土師器片が出土しており，中には完形品に近い須恵器の瑳等もみられる。これらの土器類は，6世紀後半を中心とするものであるが，前述した新旧両溝の時期的な差異は，遺物からは見い出すことはできない。本溝は，地形からみて，地光寺山から流れ出た水を排水する役割をもつものと思われるが，規模や形状および時期等，A地点で検出した溝1ときわめて類似する。調査範囲が狭いため断定することはできないが，本溝より南側では住居跡は検出されておらず，また，地形的にも山裾に当たることから，古墳時代集落の南縁を限る区画溝になる可能性が高い。ただし，溝1とは，方向がかなり異なる。これについては，両溝の中間に設けたB地区の攪乱が激しく，遺構の遺存状況が悪いため，両溝の直接的な関係を明らかにするには至らなかった。

(4)　土坑

土坑8　A地区E8・E9区にある土坑。住居跡との切り合いからみて，古墳時代に属するものと判断される。平面形状は方形を呈しており，長辺1.4m・短辺1.1m・深さ12cmを測る。壁面の立ち上がりは急である。住居1および住居3の廃絶後に掘られたものであるが，坑内からの遺物の出土はなく，土坑の性格等については不明である。



第15図　土 坑 10 実 測 図

土坑10(第15図)　C地区E17・D17区にまたがって検出した土坑。北側の半分以上を住居15によって削り取られており上面での形状は不明であるが，ほぼ南北に主軸を置く隅丸方形の平面形を呈している。長さ1.9m・南辺幅80cm・北辺幅1.25mを測り，南側に対し，北側部分が若干広い。深さについては，削平を受けていない部分で40cm。住居15の床面からでは30cmである。調査地全体の後世の削平を考慮に入れると，本来60cm以上の深さを有していたものと想定される。土坑断面は，皿状の底部をもつ逆台形状を呈しているが，南北の壁面の立ち上がりは緩やかである。土坑内の埋土は，概ね3層に分けることができ，最下層の暗灰褐色土層を中心に，須恵器および土師器片がまとまって出土した。検出した土器類には，土師器杯等，完形のものを一部含むが，それ以外はすべて破損品であり，使用に耐えなくなったものを土坑内に一括廃棄したものと思われる。なお，坑内から少量の灰とともに獣骨とみられる微量の骨片を採集した。土坑内から出土した須恵器杯は，立ち上がり部の形状からみて6世紀前半から中葉の時期に編年されるもので，石本遺跡で確認されている須恵器杯類の中では，最も古い段階に属するものである。今回の調査範囲からは，この土坑と同じ時期に属する住居跡等の遺構は検出されていないが，石本遺跡の古墳時代集落の開始時期が，6世紀中頃まで遡ることを立証する資料として貴重である。また，土坑の性格についても，同時期では，一般的に祭祀に使用されたとみられる竈等が含まれている事などから，何らかの祭祀行為に伴う可能性がある。

第4節　その他の遺構

前節では，古墳時代までの遺構を述べたが，それ以降の時期に属するものとして，次の各遺構がある。

建物4　A地区のE9区からD9区で検出した，梁行2間(4.4m)・桁行4間(9m)の掘立柱建物跡。桁行北西辺の柱列は，溝1調査の際注意せずに掘り下げてしまい，この部分については不明のままである。建物方位は，N30°Wを示しており，古墳時代の掘立柱建物跡と同様，地形に応じた建物方向をとる。柱間寸法は，桁行2～2.2m・梁間2.4mを測るが，各柱間は不揃いである。柱穴は小ぶりのもので，径20cm前後の円形を呈しており，柱穴の一か所の埋土から，黒色土器片が出土した。建物時期については，土器の示す年代からみて，平安時代の後半に所属するものと考えられる。

杭列　A地区の北西隅で検出したもので，北側に広がる沼状湿地部の縁辺に沿って打ち込まれている。落ち込み部上面からは，近世の陶磁器片が出土しており，近年まで存在していた溜池ないし川の護岸施設として造られたものであろうと思われる。

流路1・流路2　C地区のC17区で検出した自然流路。流れの方向を同じくする二時期の流路からなるが，両者とも南東岸の一部を確認したのみであり，全体の規模・方向等は不明である。護岸施設は，認められなかった。流路内からは，黒色土器片が出土しており，平安時代以降の存続時期が窺われる。なお，C地区とB地区との間には，現在，小規模な用水路が流れているが，おそらく今回検出した流路跡の位置を踏襲したものと思われる。

（辻本　和美・竹原　一彦）

注1　以下，住居内の造り付けかまど（遺構）については，「カマド」，土師質移動式かまど(遺物)については，「竈」と表記する。

付表2　方形竪穴式住居跡一覧表

住居番号	平面形態	規模(m) 南北	東西	※壁高	方位	住居内施設 カマド位置	炉	貯蔵穴	周溝	柱穴 数・間隔	出土遺物	備考
1	方形	不明	4.2以上	0.15	N27°W				×		土師甕片 須恵杯片	住居3・土坑8に切られる。
2	〃	不明	不明	0.1	N30°W				×		土師甕片 須恵杯A・B	住居3より古い。
3	〃	5.6	5.6	0.15	N32°W	北辺 中央	○	×	×	4 (3.2×2.8)	土師甕A・B 甑片	
4	〃	3.5	3.4	0.1	N44°W	北西隅	×		×		土師甕片 須恵器片	住居5により切られる。
5	隅丸方形	4.2	4.3	0.1	N20°E	×	×		×		土師甕片 弥生土器片	住居4を切り住居6に切られる。
6	方形	3.6	7	0.05	N27°W	北東辺 中央	×		×	4 (3.1×2.8)	土師甕・高杯 甑片	住居5を切り住居7に切られる。
7	隅丸方形	4.2	4.1	0.15	N25°W	×	×		×	4 (3.1×3.0)		住居6を切る。
8	方形	3.6	3.4	0.15	N42°W	南西隅	×	○	×	5? (1.2×1.2) (1.9)	土師甕片 杯AⅡ 須恵杯片	
9	〃	3.3	不明	0.1	N31°W				×		土師甕片 須恵器杯	
10	〃	不明	不明	0.1	N18°W				○			住居11を切る。
11	〃	不明	不明	0.06	N40°E	北西 中央			○		土師甕片	
12	〃	4.0	不明	0.12	N40°E				○			
13	〃	3.2 ～3.6	3.9	0.06	N20°W				×	4? (2.6× 不明)		
14	〃	3.2	3.1	0.05	N40°E	北東隅		×	×	4? (2.2×1.9)	土師甕片	
15	〃	6.0	6.0		N40°E	北西 中央	○	×	×	4(3×3)	土師甕片 須恵高杯脚	

＊壁高は，残存部の計測

付表3　土 坑 一 覧 表

土坑番号	地 区	規模（m）			方 位	出土遺物	所属時期	備 考
		長 軸	短軸	深さ				
1	9 E	1.5	8.5	0.2	N30°E		弥 生	
2	9 E ～10 E	2.8	1.3	0.26	N30°E	弥生土器片	〃	北端長1.1m
3	10D ～10 E	上段 3.5 下段 2.2	1.7 0.7	0.2	N59°E		〃	2段になる。 建物1により切られる。
4	10D	1.7	0.9	0.23	N55°E		〃	建物1により切られる。
5	11D	1.1	0.6	0.13	N60°E		〃	方形周溝墓1の埋葬主体部。
6	11D	1.9	1.0	0.18	N48°E		〃	同 上
7	10D	1.2		0.4		弥生土器片	〃	溝2に切られる。2段になる。
8	8 E ～9 E	1.4	1.1	0.12	N30°W		古 墳	
9	15C	2.6		0.1		土師器片	古 墳 ?	
10	17D ～17E	1.9	1.3	0.4	N28°W	須恵器・土師器	古 墳	住居15に切られる。

第4章　出　土　遺　物

今回出土した遺物は，土器・木器・鉄器・土製品・石製品・骨角器・自然遺物等多種にわたるが，このうち最も多いのは土器類である。また，遺構別では溝2（大溝）からの出土量が最も多く全体の80％を占める。次に多いのは包含層からの出土であり，住居跡や土坑等に伴うものはわずかにすぎない。各遺物の時期については，縄文時代後期から中・近世に至るまでのものを含むが，前述したように，大部分は溝2（大溝）の所属時期である古墳時代後期のものが占めている。

第1節　土器・土製品

今回出土した土器類の総出土量は遺物収納コンテナに約150箱を数える。種別は縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・陶磁器など各時代のものがあるが，そのほとんどは溝2から出土した古墳時代後期（6世紀中葉～後半）を中心とする須恵器および土師器類である。ここではまず溝2出土の土器類を中心に記述することとし，次に遺構に伴うものについて概略ふれることにする。

(1)　須恵器（第16～23図）

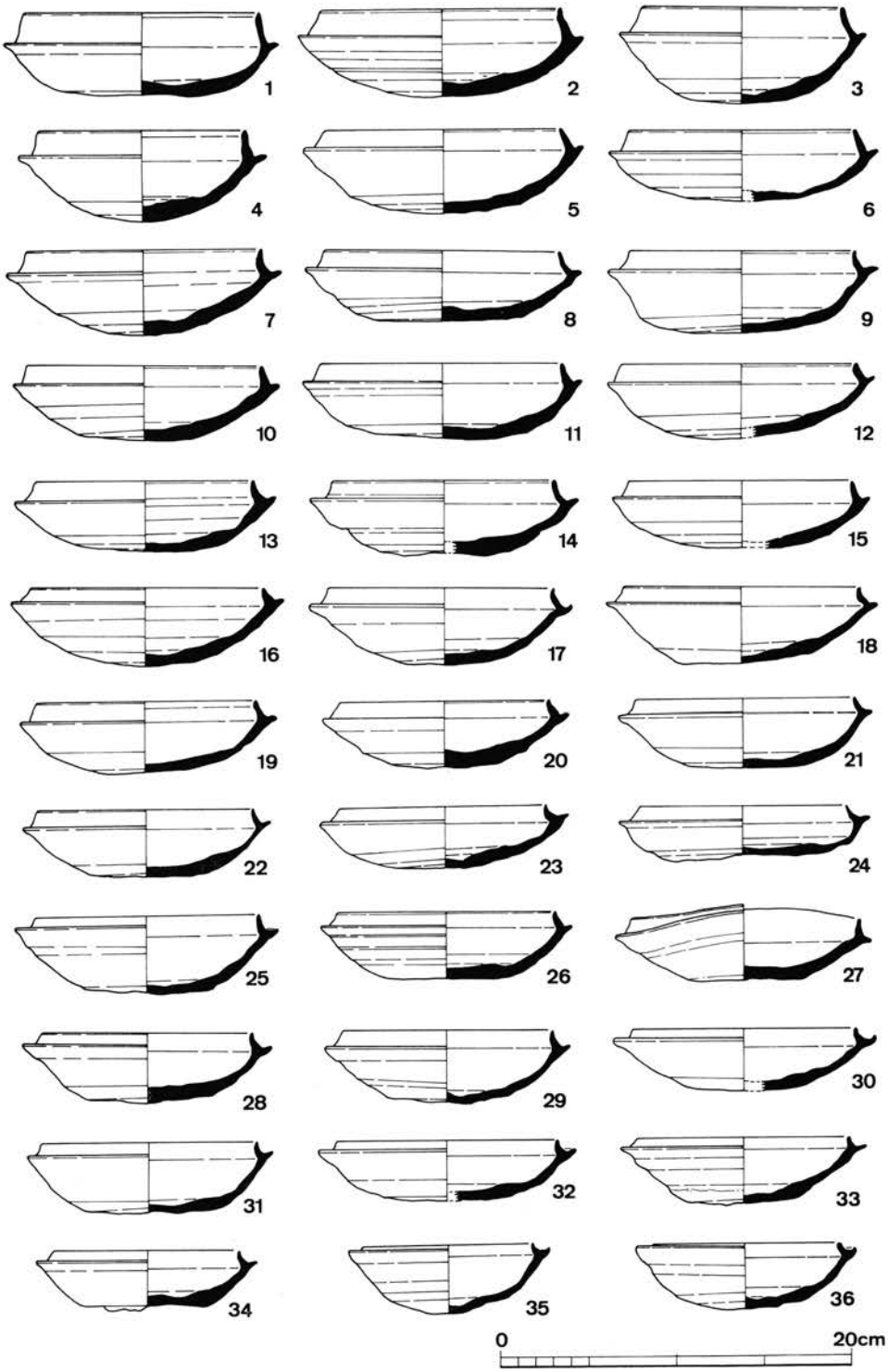
須恵器には，杯・杯蓋類をはじめとして高杯蓋・壺蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・鼓・椀・台付椀・台付長頸壺・直口壺・短頸壺・広口壺・小型壺・ミニチュア壺・提瓶・すり鉢・横瓶・甕等の各器種があり，器台・装飾壺を除いたほぼ全器種が揃う。

杯（1～36）　須恵器各器種のなかでは杯蓋とともに最も多くの出土比率を占めるものである。今回出土した杯は，そのすべてが立ち上がり部を有する形態のものであり，高台を付けるものは壺類の底部と識別が不明確なものを除いて認められなかった。口径の法量や立ち上がり部の形状等にわずかな差異が認められるため，便宜上A～Hの8種に分類した。

A　1・2が含まれる。口径16cm前後を測り，底部は深く丸い。立ち上がりは，ほぼ直立し高さ1.8cmを越える。立ち上がりの端部内面は浅く凹み段をなす。

B　3・4が含まれる。口径14cm前後を測るものが主体となる。A類に比べ，やや小ぶりであるが，器高が高く底部は丸味を帯び深い。立ち上がりは，高さ約1.6cm前後で，端部は丸く仕上げる。

C　5～8が含まれる。口径は15cm前後を測り，やや扁平な器形を呈するものが多い。立ち上がりの高さは1.3～1.5cmの間に位置し，やや内傾化の傾向が窺われる。



第16図　須恵器実測図（1）

D　9～15が含まれる。全体的にはC類に類似するが，立ち上がり部の高さは，さらに低くなり，内傾の度合いも増す。立ち上がり端部は面をなし比較的厚作りである。口径の平均は15.5cmである。

E　16～24が含まれる。口径は14～15cmの間にあり，縮小化の傾向を示す。これに対応して器高も低くなり，器形は全体的に扁平な印象を与える。立ち上がりは高さ1cmを平均とし，短小化および内傾化の傾向が著しい。立ち上がりの端部は丸く収めている。

F　25～32が含まれる。立ち上がり部の形態はE類と同種のもので，底部の回転ヘラ切りのあとが未調整のままのもの。器高はE類に比べて高く，底部から体部にかけての断面形状が逆台形を呈するものが多い。底部内面にうるしと思われる有機物が付着するものがみられる。

G　33･34が含まれる。全体の作りはF類に類似するが，立ち上がり部の高さは1cm未満で，さらに短小化の傾向が認められる。口径は12～14cmの範囲にある。当遺跡出土の杯類には焼け歪みのみられるものがあるが，34は，底部に別個体の須恵器破片を容着する例である。

H　35･36が含まれる。口径は11～13cmの範囲にあり，今回の類別の中では最も小型に属するもので，杯身に立ち上がりをもつ最終の形態である。立ち上がり部は極端に矮小化し受部端部の高さとの差が変わらなくなる。36は受部の端部が上方に折り返り，立ち上がり部との間が凹状をなしている。本例は底部中央がやや尖り気味で，また底部に朱を施している。

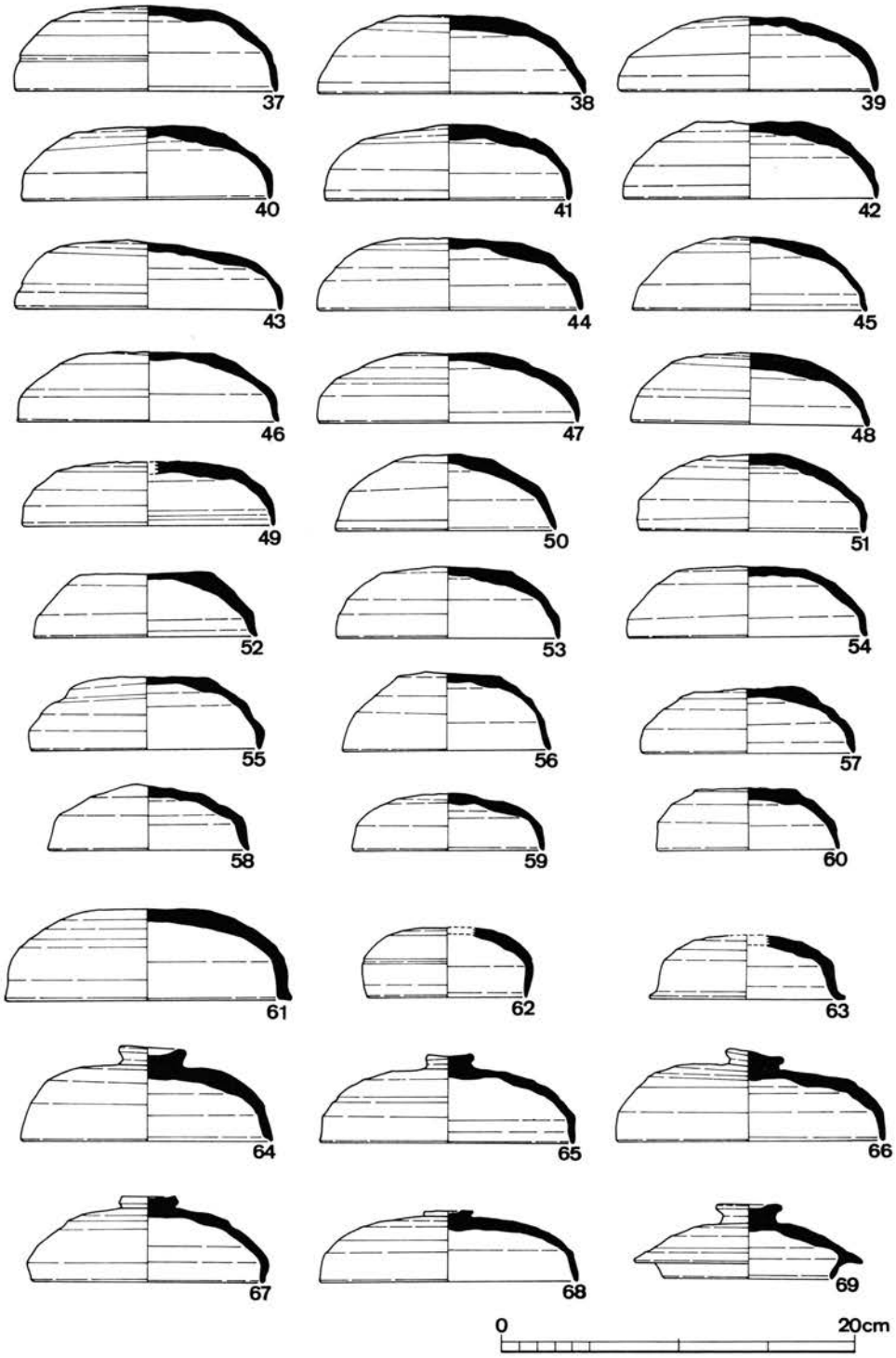
杯類は，以上細部の形態的な特徴によりA～Hの8種に細分を試みたが，各器種相互の変化はもとより漸次的であり明瞭な線引きは困難である。いま一度，型式的な編年により整理するとⅠ期(A・B)・Ⅱ期(C～F)・Ⅲ期(G・H)の3時期に分けることができる。

杯蓋(37～60)　杯身類に比較して形態状の差異を見い出すのは困難であるが，法量や天井部の形状から同じくA～Eの5種に細分した。

A　37が該当する。天井部は丸く仕上げられ，口縁部との境に凹線をめぐらす。口縁端部内面には段を付ける。杯A及びB類に対応するものと思われるが，出土点数は少ない。

B　38～45が含まれる。口径14～15cm・器高3.5～4cm前後を測る。概ね天井部は丸く仕上げられており，口縁端部は鋭角的であるが，丸くおさめるものが多い。45は天井部にX形のヘラ記号を描く。

C　41～50が含まれる。口径12.5～13.5cm・器高4～4.3cmの範囲にある。B類との差異はC類の方が口径に比べて器高が高いことと，天井部の回転ヘラ切り痕が未調整のままのものが多いこと等である。杯B・C・Dと対応するものと思われる。



第17図　須恵器実測図（2）

D　51～57が含まれる。口径12～13.2cm・器高3.5～4cmを測り，口径・器高とも若干縮小化の傾向を示す。天井部は回転ヘラ切りのままの未調整であるため，平坦な面を呈する。口縁部はやや内傾気味である。杯G類およびF類に対応するものと思われる。

E　58～60が含まれる。口径10.5～11.5cm・器高3.5～4cmを測り，D類以上に矯小化が著しい。天井部の作りはD類に類似する。杯H類に対応するものであろう。

壺蓋(61～63)　壺蓋は大形のものと小形のものがある。61は大形に属するものである。本例は蓋としての類例に乏しく，天地を逆にして盤の可能性もあるが，天井部の形態からみて，ここでは壺の蓋とした。口縁端部は平坦な面をなす。62・63は小形のもの。共に有蓋短頸壺に組み合うものである。62の口縁端部が内湾するのに対して，63の口縁端部は大きく外側に広がる。

高杯蓋(64～68)　天井頂部に，中凹みの扁平なつまみをもつもので，口縁部の形態やつまみの作り等に微妙な差異が認められる。64は口径に比べ器高が高く，天井部と口縁部の境に細い沈線を施す。また，口縁端部には内傾する浅い段を有しており，古い形態をとどめる。これ以外のものは口縁端部を丸く仕上げるか，やや鋭角的に終わる。65・67の口縁端部は内傾する。

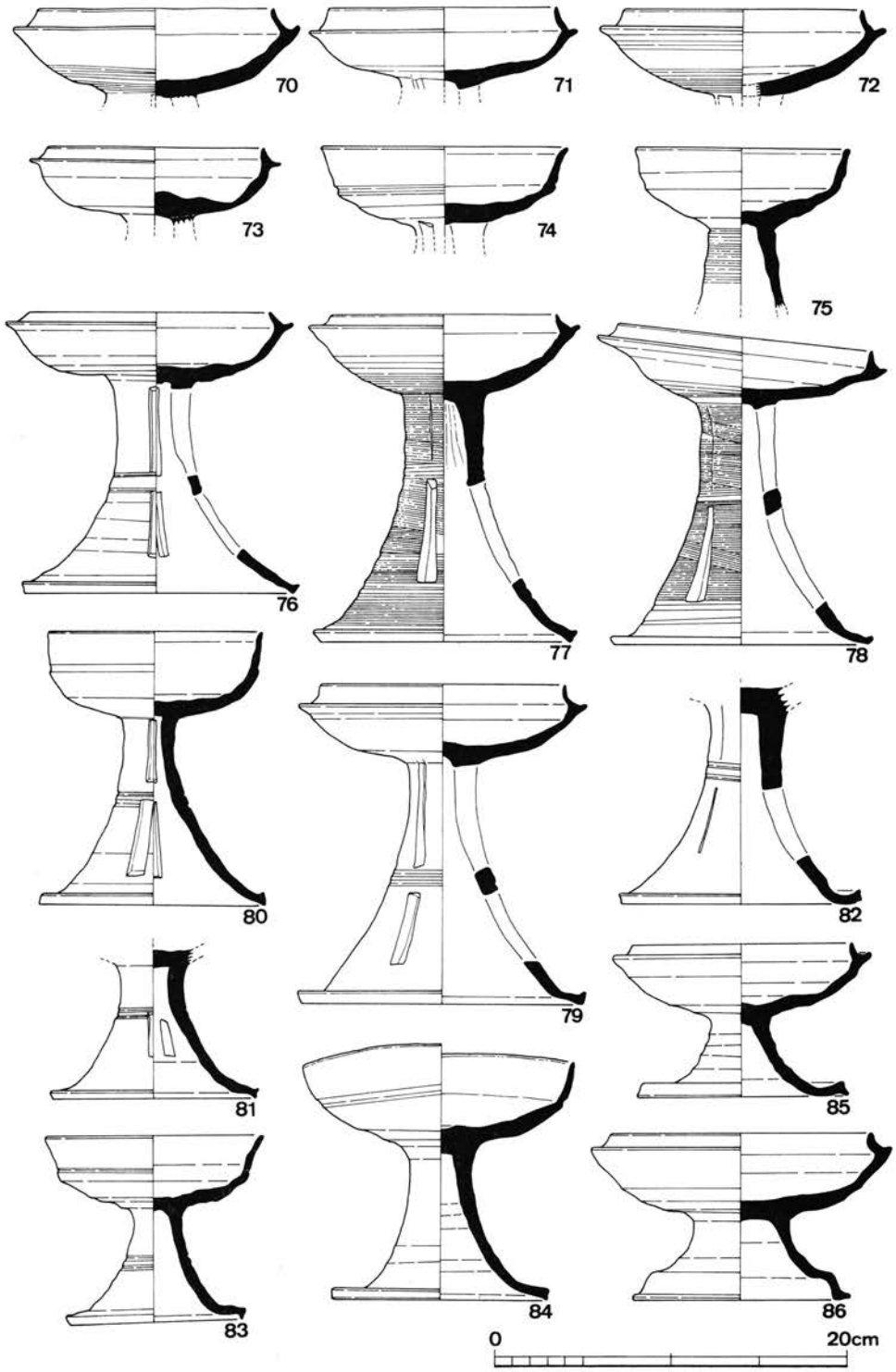
長頸壺蓋(69)　天井部のつまみは扁平で中央部が浅く凹み，内面下方に長いかえりをもつ。

高杯(70～97)　高杯は有蓋のものと無蓋のものとに大きく分けられる。また，脚の長短，透かしの有無や形状，さらに脚端部の形態等の組み合わせにより，さらに細分化が可能である。

有蓋高杯　有蓋高杯は脚部の形状により長脚と短脚の2種に大別される。

長脚類は，脚部に透かしを有し脚裾部を外側へ拡張させるものが多く，脚部の端面は平坦で，上下方向に外反させる。透かしは，(a)脚中段の凹線帯を境に上下2段に穿たれたものと，(b)1段のみのもの，に分けることができる。また，その形状が，(イ)通常の長方形の透かし窓をもつもの，(ロ)鋭いヘラ状の工具によって線を引くのみで内側まで貫通していないもの，(ハ)下段はイ，上段はロの透かしを併用するもの等がみられる。透かしの配置は，2方向と3方向のものがある。すなわち，長脚類をこれら脚部と透かしの形態分類の組み合わせにより整理すると，76・79はaイ類に属し，77・78はaハ類に属する。このうち76は2方向透かしであるが，その他はすべて3方向に透かし孔を穿つ。また，杯部の不明な82はaロ類に，81はbイ類，90はbロ類にそれぞれ属している。77・78は脚部にカキ目を施している。

次に短脚類は脚部の形態上の差異により，(a)杯接合部分から大きく外側に拡張する脚



第18図　須恵器実測図（3）

裾部をもつもの，(b)脚端部付近で屈曲した段をもつものの2種に分けることができる。すなわち，85•87•88•89はa類に含まれ，86はb類に含まれるものである。杯部不明の94もb類に属する。

有蓋高杯の杯部の形態は，長脚類の70•71が杯C類に，同じく，72•73•76～79が杯DないしE類に類似する。また，短脚類の85•86は杯F類，87～89は杯G類に対応しており，杯部の型式は短脚のものが長脚に比べ後出する傾向を示す。

無蓋高杯　無蓋高杯のうち脚部の明らかなものはすべて長脚類に属している。このうち74•80は透かしを有するもので，80はaイ類透かしで2方向に配置する。75•83•84は透かしをもたないもので，83は脚部の中央に凹線帯を巡らしている。杯部の形態は，80のように底部から口縁端部まで比較的丸味をもちながら移行するものと，83のように底部から口縁部に移る部分に段を有し，そこから外反して口縁部が外上方にのびるものがみられる。

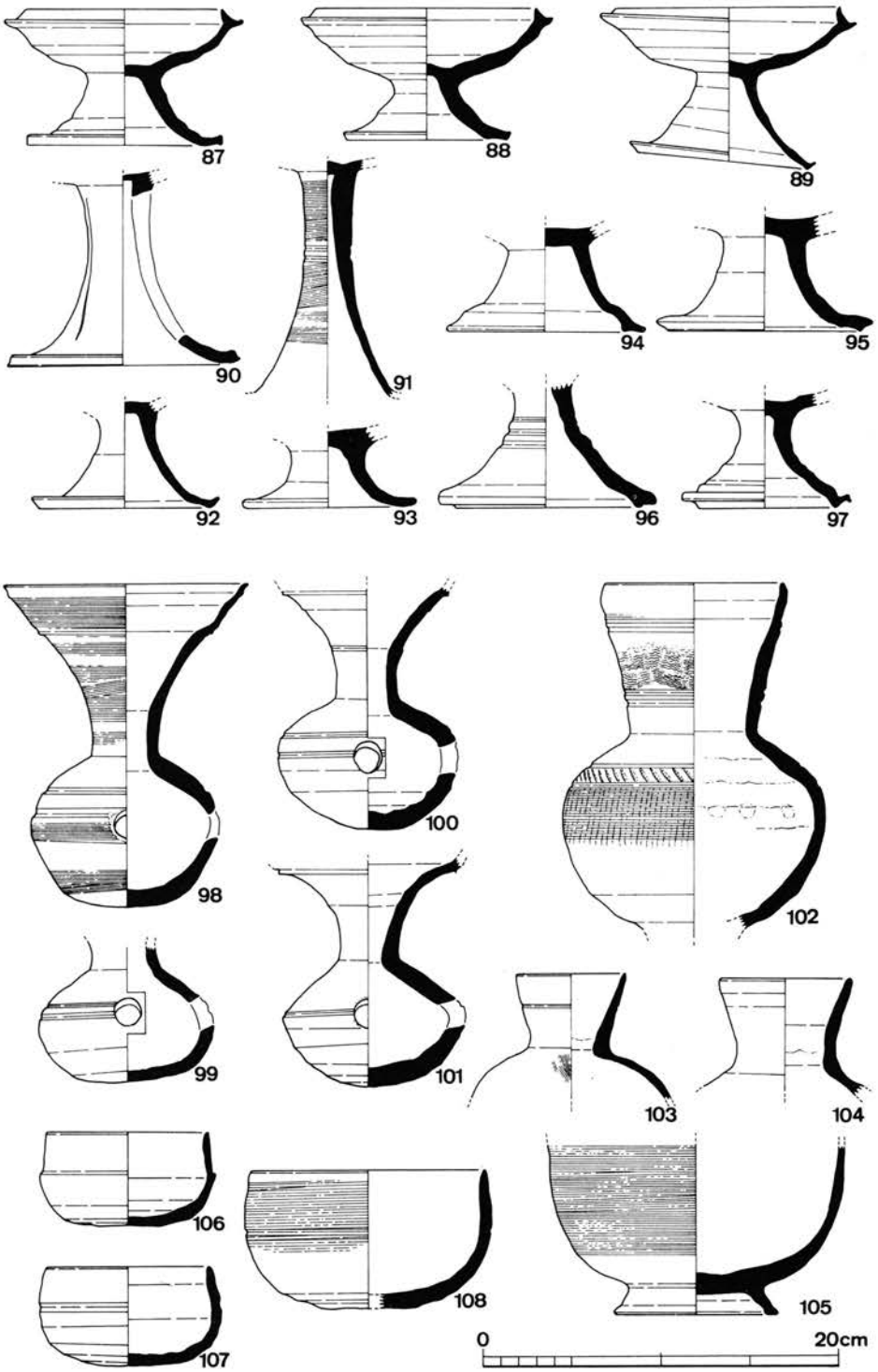
高杯類にはこの他，杯部が不明で脚部のみのものが多数存在する。ここでは，脚の端部に特徴のあるものを例示した。90•91は長脚，92～97は短脚に属するもので，このうち，91は棒状の細い脚部をもち，上半部分にはカキ目を施している。96•97は脚端部の下面に凸帯をもち，96は脚部中央にも2条の凹線を巡らしている。

甕(98～101)　甕は頸部が細く，頸部上段の屈曲部から口頸部が外上方に強く広がる形態をとる。体部が球形で円孔部とその上部に凹線を巡らすもの(98•100)や，やや扁平な体部をもち円孔部に同じく凹線を巡らすもの(99)，円孔が穿たれている体部中央が張り出し気味で肩部が直線的に走るもの(101)がある。98は，頸部と体部の中央部にカキ目を施している。

台付長頸壺　102は，脚部を欠失するもので，直線的に外上方にのびる頸部の上段と下段に凹線を巡らし，その間に細かい櫛描きの波状文帯を施す。口縁端部は，やや内湾気味に仕上げる。体部は球形で肩部には列点文を施し，それ以下をカキ目調整する。105は，体部上半部を欠失するもので，カキ目調整する体部に低平な脚台を付ける。

壺頸部　103•104は，肩部以下を欠失する。外上方に直線的にのびる短い口頸部をもち，口径は比較的小さい。体部は，肩部の湾曲からみて，あまり大きくないものが想定され，小形の台付壺か提瓶・平瓶類の口頸部が考えられる。

椀(106～108)　椀は，大小2類に分類される。106は小形のもの。体部と口縁部との境に段を施し，そこから内湾気味に口縁部がのびる。107も同じく小形に属するもの。体部に凹線を巡らしている。108は大形のもの。丸底の底部から口頸部が立ち上がり，口縁部の端部でやや内傾する。広口で器高が深く，鉢とも呼べる器形である。体部の上半部はカキ目調整する。



第19図　須恵器実測図（4）

台付椀　109は，ジョッキ形の深い器形に外方にふんばる短い脚台をつけている。体部は底部から直線上にのび，口縁端部でやや内傾する。体部には上下2か所に沈線を巡らし，これに接する部分の側面に大きな環状把手をつけていた痕跡をもつ。

直口壺　110は球形の体部から直立する短い口頸部をもつもの。口縁端部は，内傾気味に終わる。

短頸壺(111～115)　短頸壺は器形の大きさにより大・中・小の3種に分ける。111・112は小形のもの。内傾して立つ口縁が極端に短く，このうち112は肩の張った扁平な体部をもち，中段から下半部にかけてカキ目調整する。この2点は，蓋をもつものであろう。

113は，中形で外反する口縁をもつもの。体部は，肩の張りが強く，その部位にカキ目を施す。114・115の2点は，大形のもので，外反する広口の口縁をもつ。体部は，肩が張り，中段からやや上方に最大径をもつ。115の口縁端部は内傾する段をなし，外面全体はカキ目調整する。

ミニチュア壺　116・117はミニチュアの単品で，116は広口壺の形態をとる。口縁部は外反し，端部は面を形成する。体部の下半部に最大径をもち，安定した感じを与える。

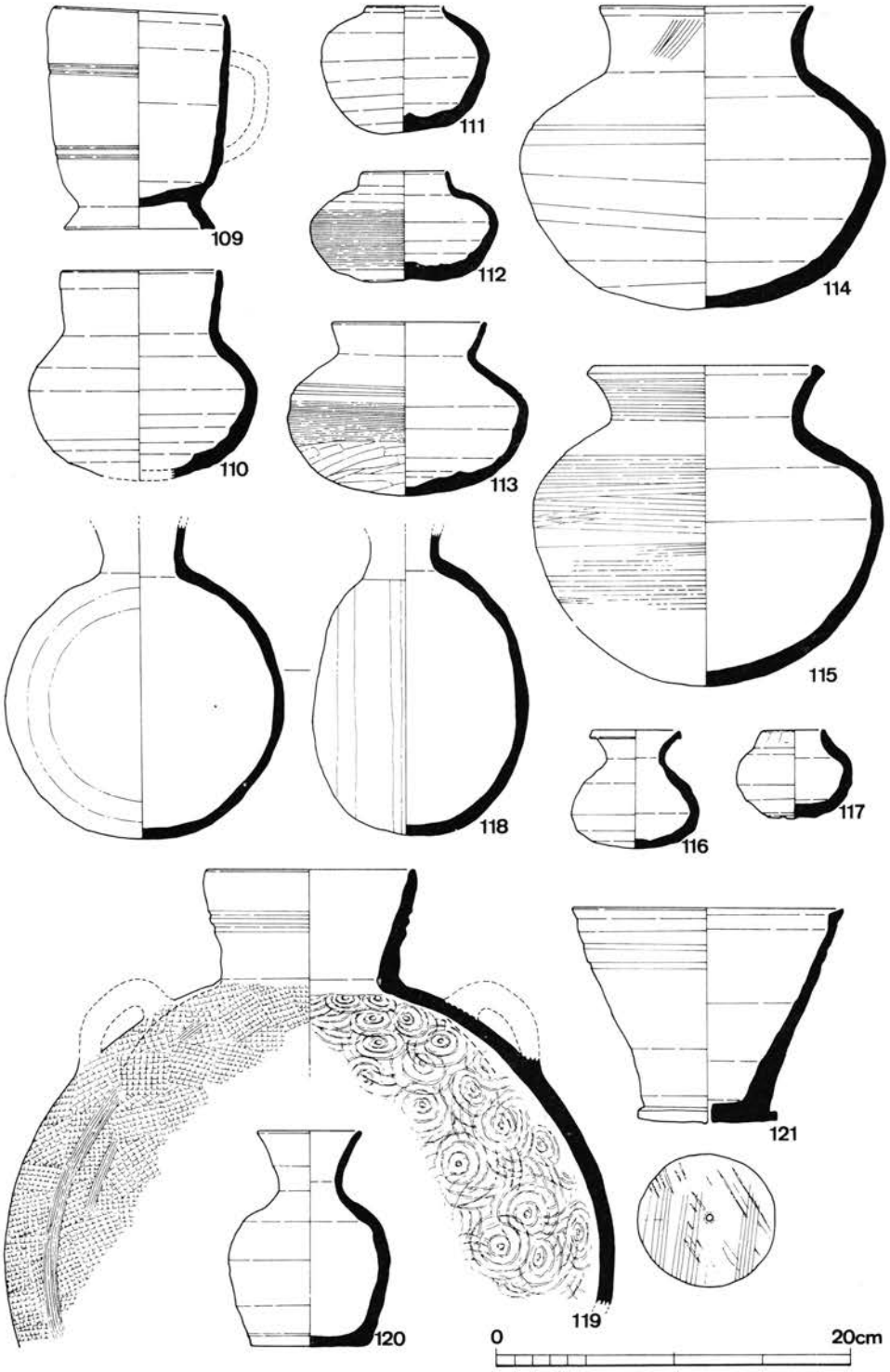
117は一見手ずくね土器のように見えるが，体部は，ロクロによる回転を利用して成形する。口縁部は内傾し，体部との区別は不明瞭である。内面には赤色顔料が付着しており，容器として使用されたことが窺われる。赤色顔料を入れたミニチュア壺の出土例としては，福知山市域では，向野西9号墳および城ノ尾古墳に類例が見られる。

提瓶(118・119)　提瓶は器体の大小および把手の有無等各々差異が認められる。
118は，小形で把手の消失するもの。口縁の上部を欠失する。体部は，片面のみふくらみをもつ。119は大形品で，現在欠失しているが，体部肩の高い位置に環状の大型把手を貼り付ける。口縁部は内湾気味で漏斗状をなし，中程に凹線帯を巡らす。体部は片側の側面しか残存しないため全体は不明であるが，前面のふくらみの少ないものと推定される。体部外面には，細かな格子ふう叩き目文，内面には同心円叩き目文が残る。

小型瓶　120は，外反する口縁部と肩に丸みをもたせた体部をもち，底部は平底でヘラ切りが未調整のままのもの。A地区溝1から出土した。これまで述べてきた須恵器に比べ焼きが甘く灰白色を呈しており，型式からみて奈良時代に属するものと思われる。

すり鉢　121は，外上方へ真っすぐのびる体部に円盤状の底部が付くもの。口縁端部は，やや内傾する水平面をなし，口縁の上半部に3条の沈線を巡らしている。底部にはひっかき傷状の細い条痕がみられ，中央部に底部を貫通する小孔を穿つ。

横瓶(122・123)　横瓶は比較的出土数の多い器種であるが，全体を復原できたのは2点のみである。体部は，いわゆる俵形で，口の広い外反する口縁部を付ける。122の口縁端部



第20図　須恵器実測図（5）

は外面が丸みをもつ。123は頸部が短く，外反する頸部から口縁端部がもう一度屈曲する形態をとり，端部は面をなす。両者とも外面は平行叩き目文，内面は同心円叩き目文を施す。

甕(124～137)　甕は破片数が多いわりには全体形の判明するものは少ないため，ここでは主に口縁端部の特徴により分類を試みた。また，口径の大小は必ずしも器体の大きさをあらわすものではないが，一応の目安として口径31cm以上の大形のものを**I群**，18cmから25cm前後のものを**II群**，12cm以下のものを**III群**とした。

A　口縁端部外面は上下に肥厚し角ばった断面形を呈する。また，端部は内傾する斜面をなし外面中央に稜をつくっている。口径法量による分類ではII群に属するが，20～21cmの範囲にあるもの(124・125・137)と15cm内外のやや小さいもの(135)がある。

B　A類口縁端部の内面を強くナデて凹面状を呈するもので体部肩の張りは弱い。126・127は口径II群に属する。

C　128・132・133・134が含まれる。口縁端部を丸く肥厚させるもので，体部外面のみ丸みをもつものから端部を折り曲げて玉縁状の口縁を呈するものなど多様である。口径はII群に属するものが多いが，128は，25cm前後とやや大きい部類に入る。132・133はIII群に属するもので，頸部が短く直立する。

D　129～131が含まれる。口縁端部を上下に拡張するもので，端面上方をつまみ上げ気味に仕上げるもの(130・131)もある。III群に属する小形のものが多い。

E　136を代表例とする。口縁端部は肥厚させず直線的に終わるもので，端部は角ばっており，外面に稜をもつ。136は，今回出土の甕類のなかでもほぼ全形を知ることのできる数少ない例で，しかも口径30cm・器高70.6cmを測る大型品である。長大な頸部の上半部に3段の凹線帯を巡らしその間に波状文を施すもので，体部は，肩の張りが弱く底部も突出気味にすぼまっている。

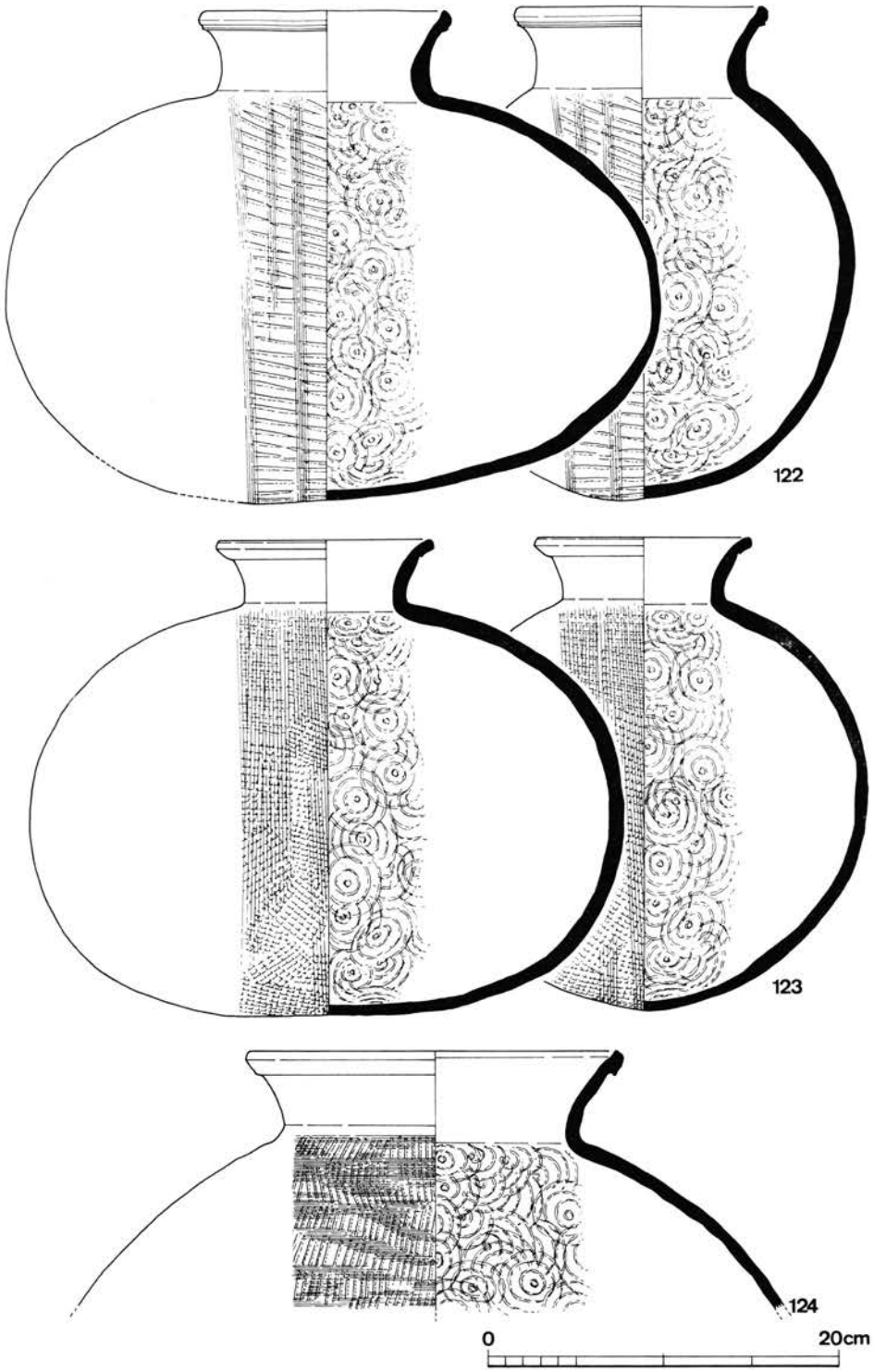
今回検出した甕類の調整については，外面は平行叩き目文，内面は同心円叩き目文を施すものが一般的であるが，内面には放射状の文様をもつ叩き目原体を使用するものも認められる。

(2)　**土師器**(第24～29図)

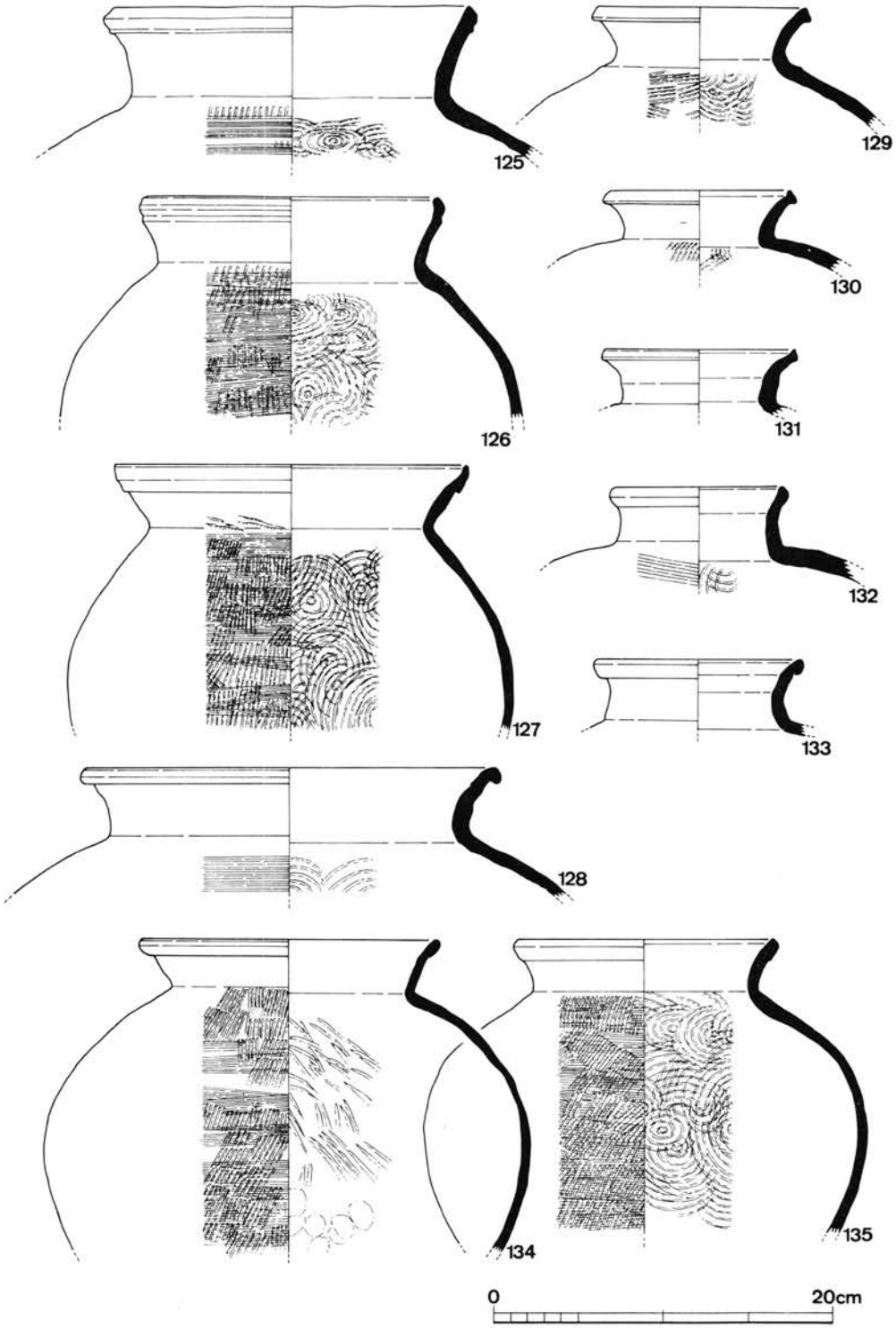
土師器には杯・鉢・高杯・壺・甕・鍋・甑・竈の各種がある。

杯　杯は内外面の調整手法の差異によりA・Bの2種に大別される。

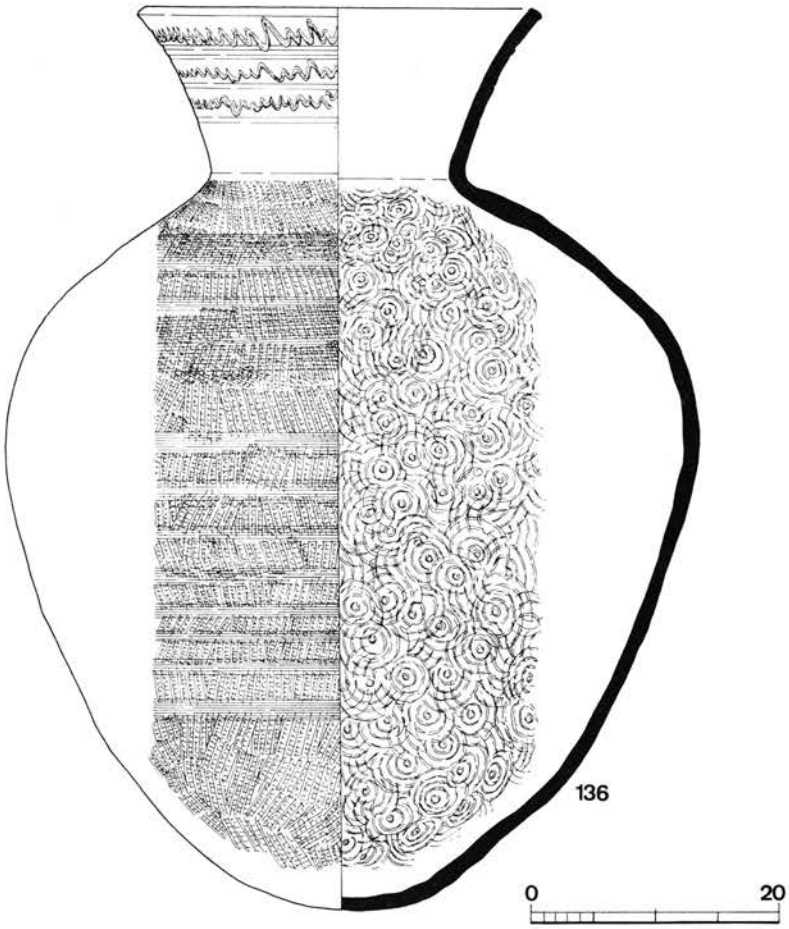
杯A(138～143)　体部外面はヘラケズリまたはハケ目による調整を行い，内面はハケ目調整およびヨコナデを併用するもの。杯Bに比べ相対的に荒い胎土を用いており，色調は暗褐色を呈するものが多い。口径寸の大小および口縁端部の形状によりさらにAI～AIIIの3種に細分できる。

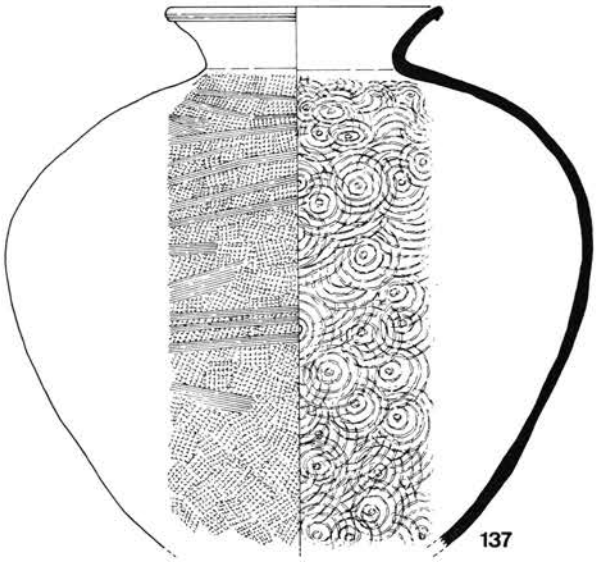


第21図　須恵器実測図（6）



第22図　須恵器実測図（７）





第23図　須恵器実測図（8）

A I　口径10cm・高さ5.5cm前後を測るもので，口径に比べて深い体部をもつ。径高指数(器高÷口径×100)は50前後の数値を示す。例示した138には，内外面とも細かいハケ目調整が施されている。口径端部は外側にやや肥厚させるが，断面三角形で先端部は鋭角的に終わる。

AII　口径12～14cm・高さ5～7cm前後を測るもので，径高指数が30～40前後の数値を示すもの(139～141)と，50前後の数値を示す深い体部をもつもの(142)がみられる。体部は全体に丸みをもち，口縁端部を肥厚し丸く収めるものが多い。139は，内面見込み部分にハケ目，141は外面に細かいハケ目を施す。

AIII　口径16～18cm・高さ7cm前後のもの。径高指数は40前後である。143は，口縁端部が肥厚し，丸みのある体部へと移行する。体部下半部はハケ目調整する。分厚い器壁を有しており，口径・器高とも大きく，形態は鉢に類似する。

杯B(144～149)　杯Bは，体部外面をヘラミガキするもの。体部側面に指圧痕を残すものもみられる。内面は，放射状暗文をもち，口縁端部はヨコナデする。胎土は比較的精良なものを用いており，色調は赤褐色を呈する。Aと同様，口径の大きさによりB I～Ⅲの3種に細分することができる。

B I　144は，口径9.8cm・高さ4.4cmを測る。径高指数は，45前後の数値を示す。口縁端部は外反し内面には小さな面を作る。

BII　口径12～14cm・高さ4cm前後のもの。径高指数は30～36の数値を示しており，今回例示した杯類のなかでは最も扁平な器形をもつ(145～148)。口縁端部の形状は，丸みをもつものが多いが，なかには外反し端面に小さな面をもつもの(147)もみられる。

BIII　口径16cm・高さ6cm前後を測るもの。149は，径高指数38を示し，口縁端部を強くナデ仕上げする。端面は丸みを帯びる。また，底部には指圧痕が残る。

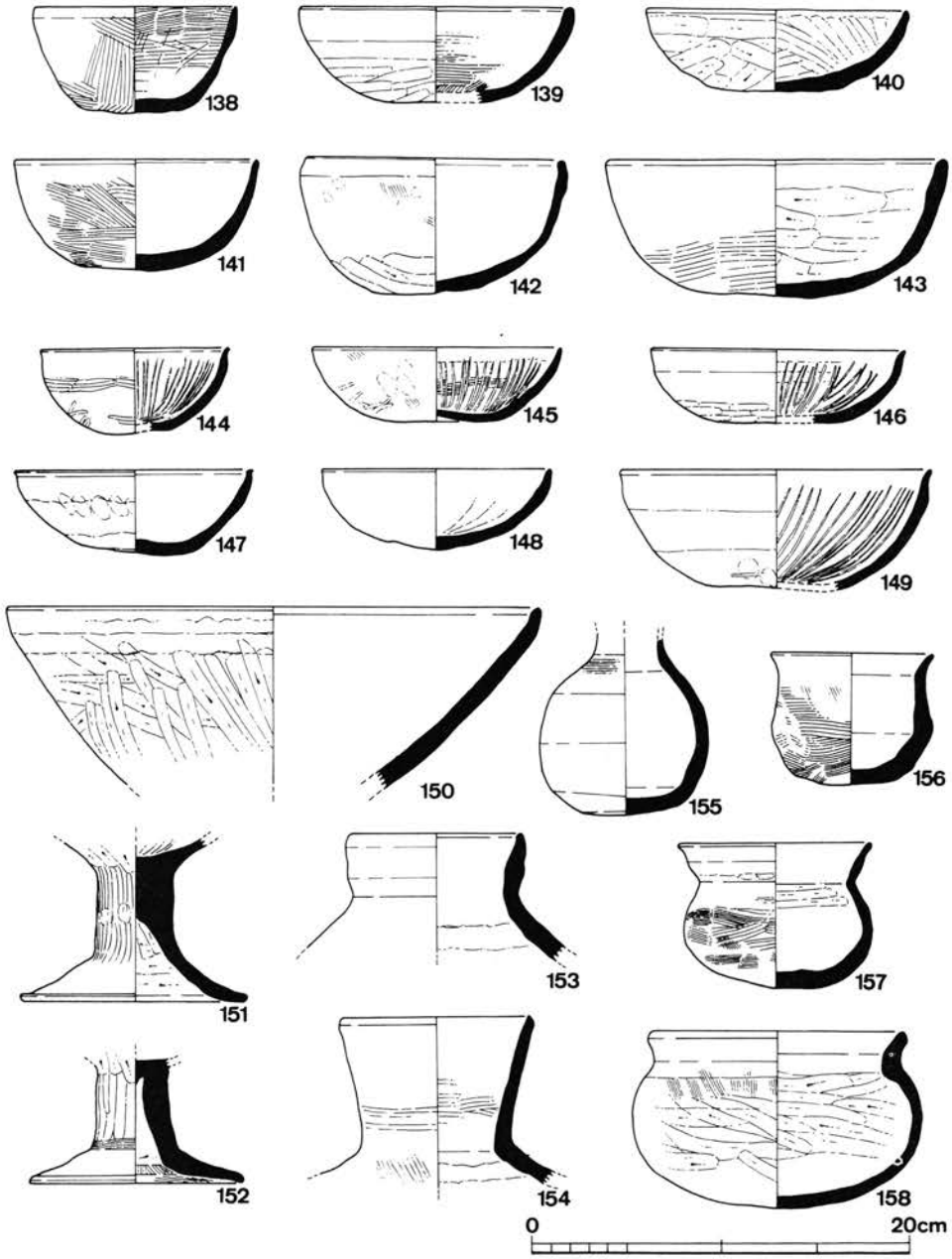
以上の杯類については，調整手法からみてA類からB類への型式変遷が与えられる。また，溝2(大溝)より開削時期が遅れる溝1出土の杯類の半数がB II類に属する点等からみて，時期が新しくなるにしたがって径高指数が小さくなる傾向が窺える。なお，溝1では口縁端部の総破片数126点に対し，杯A類が69点，B類が57点を数える。

鉢　150は，口縁部が体部から直線的に外上方にのび，口縁端部をつまみ上げ気味に丸く仕上げる。体部外面は縦方向のヘラケズリ，口縁端部内外面はヨコナデする。今回出土したものの中では類例の少ないものである。

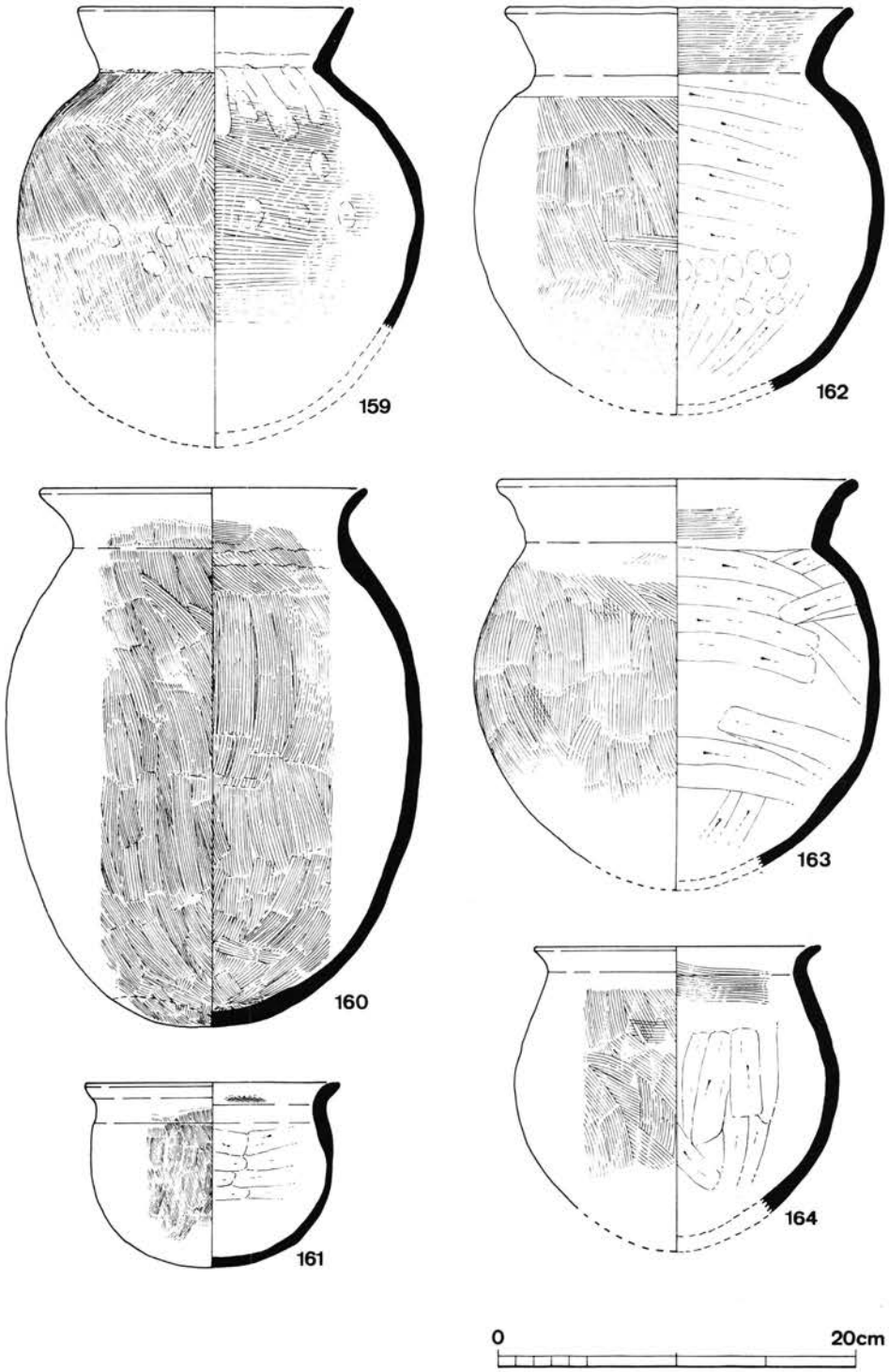
高杯　脚台部の存在により確認されるもので，杯受部の形態は不明である。151は，柱状部の上半が中実のもの，脚端部は柱状部から大きく外方へ広がる。柱状部外面はタテ方向の荒いハケ目，内面はヘラケズリを行った後端部をナデ調整する。152は，柱状部が中

空で，柱状部から大きく屈曲して横方向に広がる脚部をもつもの。上部に粘土を充塡し杯受部と接合する。柱状部外面は，タテ方向のハケ目，脚裾部は外面ナデを行い，内面はヘラケズリする。

壺　壺類は頸部の形態の特徴からA～Dの5種に分類できる。



第24図　土師器実測図（1）



第25図　土師器実測図（２）

A 153・154は，頸部の長いもの。153は，口径8.9cmを測る。頸部は，短く直立気味にのび口縁端部は内湾し丸く終わる。口縁部は内外面ともヨコナデする。154は，外上方に直線的にのびる長い頸部を有し，須恵器直口壺に類似する。口縁端部は，断面三角形を呈し外側に面を作る。口縁端部内外面ともヨコナデし，頸部から体部肩にかけてハケ目を施す。

B 155は，体部肩から上方になだらかに移行する細い頸部をもつもの。口縁部は，上半を欠失する。胴部は球形で，最大径が低い位置にあるためか安定した感じを与える。底部は丸底。器壁が荒れており，細かい調整・成形については明らかでないが，肩部付近に細かいハケ目を残す。溝1から出土した。

C 156は，外上方に広がる口縁部をもつもの。頸部の屈曲は小さく，外形は深い椀状を呈する。底部は，平底気味で胴部中位からやや下方に最大径をもつ。外面はハケ目，口縁部付近および内面はナデ調整する。

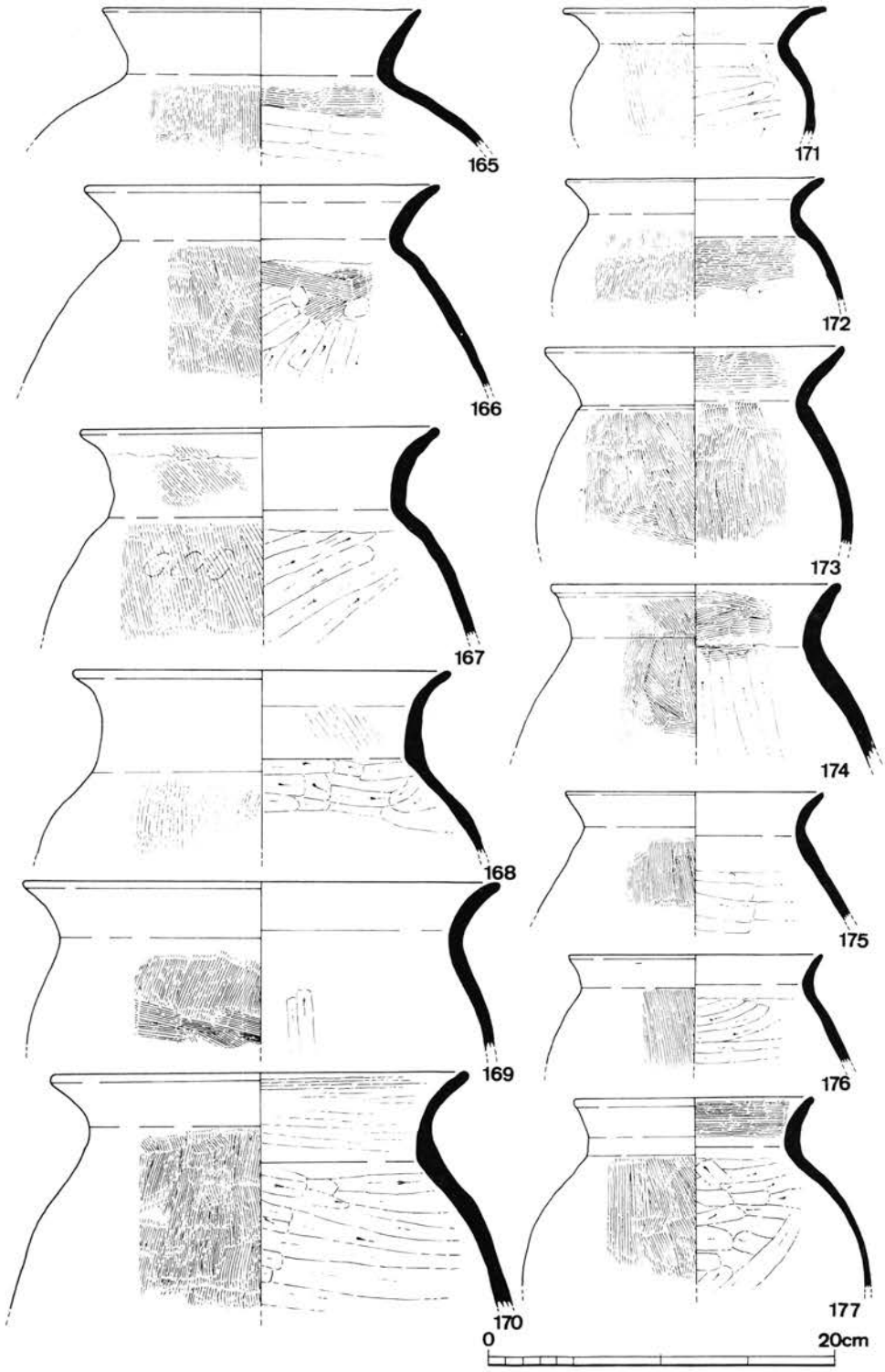
D 157は，小形の丸底壺で，口径は胴部最大径をわずかに上回る。口縁部は体部肩から「く」の字形に屈曲し外上方にのび，口縁端部は丸く終わる。体部は，やや扁平な球形を呈する。口縁端部外面はヨコナデ，体部外面はハケ目調整。内面は頸部との接合部付近をヘラケズリする。158も前者と同様，口の広い丸底のもの。口縁部は厚手で，胴部からわずかに屈曲して短く外反する。体部は扁球形を呈する。口縁部内外面はヨコナデ，体部外面はヘラによる磨きを行い，器壁を平滑に仕上げる。

甕 全器種中最も破片数が多いもので，全体の7～8割以上を占めるものと思われる。体部片がほとんどであり全容の明らかなものが少ないため，ここでは口縁部の形状・口径の法量等により分類化を図った。口径については必ずしも器形全体の大小を示すものではないが，便宜上口径18cm以上のものを**I類**(大形)，13cm以上18cm未満のものを**II類**(中形)，13cm未満を**III類**(小形)とし，3つのグループに大別した。

今回出土した甕類の成形・調整に関しては，基本的に体部外面はタテ方向のハケ目，内面は頸部直下から底部までヘラケズリを行う。口縁部は内外面ともヨコナデを行うが，内面のみ横方向のハケ目を有するものもある。また，体部の遺存するものでは，160のように胴長のものと，162・163のように球形に近い胴をもつものの2種がある。以下，前記した口径法量を基本にしながら，さらに口縁部の特徴等による分類を併用して細分化することにしたい。

口縁部の形態の特徴から，次のA～Iの9種に分けられる。

A 頸部が体部肩から「く」の字形に屈曲し外上方にのびるもので，最も一般的な形態をとる。口縁端部は，丸く収めたものとやや尖がり気味に終わるものがある。体部内面は頸部との接合部以下を強くヘラケズリし，頸部内面側が稜をなしているものもみられる。



第26図　土師器実測図（３）

Ⅲ類に属する小形のものでは，球形の体部の外面に荒いハケ目を施すものがある。

Ⅰ類(162•163•165•166)・Ⅱ類(171～173・175～177)・Ⅲ類(185•186•188•189)

B　Aに比べて頸部が長く屈曲の緩やかなものを含む。口縁端部付近で外反の角度が大きくなるものもみられる。口縁端部は丸く収める。B類に該当するものは，口径が20～22cm前後を測るものが多く，Ⅰ類の中でも比較的大形の部類に属している。体部の遺存する例や肩部の形態からみて，長胴のものか縦長球形の胴部との組み合せが比定される。Ⅰ類(160•167～169)

C　Aに類似する頸部の形態をもつが，口縁部内面が強くヨコナデされるため波状を呈するもの。Ⅰ類のみにみられる。Ⅰ類(178•179)

D　Aのなかで特に口縁部端面を玉縁状に丸く収めるもの。口縁部端面を上方に積み上げ気味にして丸く仕上げるものもみられる。Ⅰ類(180•181)・Ⅱ類(174)

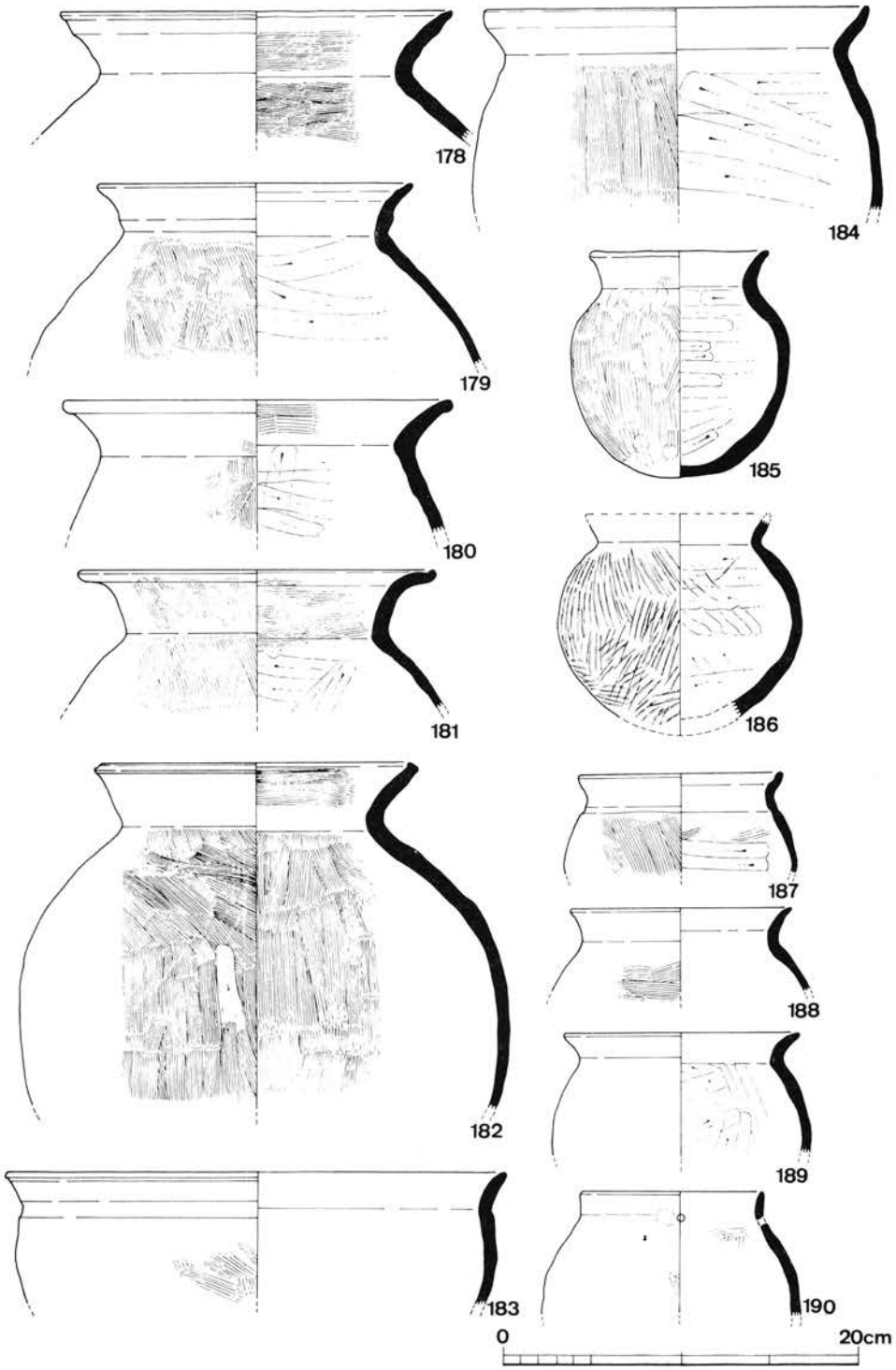
E　口縁部は「く」の字形に屈曲し外上方に直線的にのびるもので，口縁端部の断面形は方形で外面が面をなすもの。端面の内側を積み上げ，小さな段を作るものもある。Ⅰ類(182)・Ⅱ類(159)

F　口縁部は斜め上方に短く立ち上がり，口縁端部はやや内湾し受け口状を呈するもの。頸部内面は稜をなす。体部の肩の張りが小さく，長胴の類に属するものである。Ⅰ類(184)・Ⅲ類(187)

G　体部肩の張りが小さく，口縁部はわずかに屈折しながら短く外反するもの。口縁端部は丸く終わる。鉢に類似する形態をとる。Ⅰ類(183)・Ⅱ類(161)

H　口頸部が直立気味に短く上方へのびるもの。190は，頸部に小孔を穿つ。類例は少ない。Ⅲ類(190)

把手付甕(191～194)　甕類にはこの他把手がつくものがある。把手はいずれも牛角状のもので，胴部から外れて出土したものを合わせて(計56点)形態分類すると，(**a**)棒状で短く，先端部が丸いもの(30点)。(**b**)先端部が細くなり，やや上方に曲がるもの(23点)。(**c**)先端部の屈曲の度合いが大きいもの(3点)等に分けることができる。191•192•194は，甕の口縁部による分類ではⅠA類に属するもので，aおよびb種の把手が付随する。把手は，厚く粘土を補足して胴部に接合されており，周囲には指による圧痕が残る。194は，前二者に比べやや小ぶりの体部を有し，把手の取り付け位置も胴部のほぼ中段に置く。193は，甕Eに類似する頸部の特徴をもつ。把手はc種で胴肩部から少し下がった位置に取り付けられている。以上の把手付甕類は体部外面・口縁部内面はハケ目調整，体部内面はヘラケズリを施す。



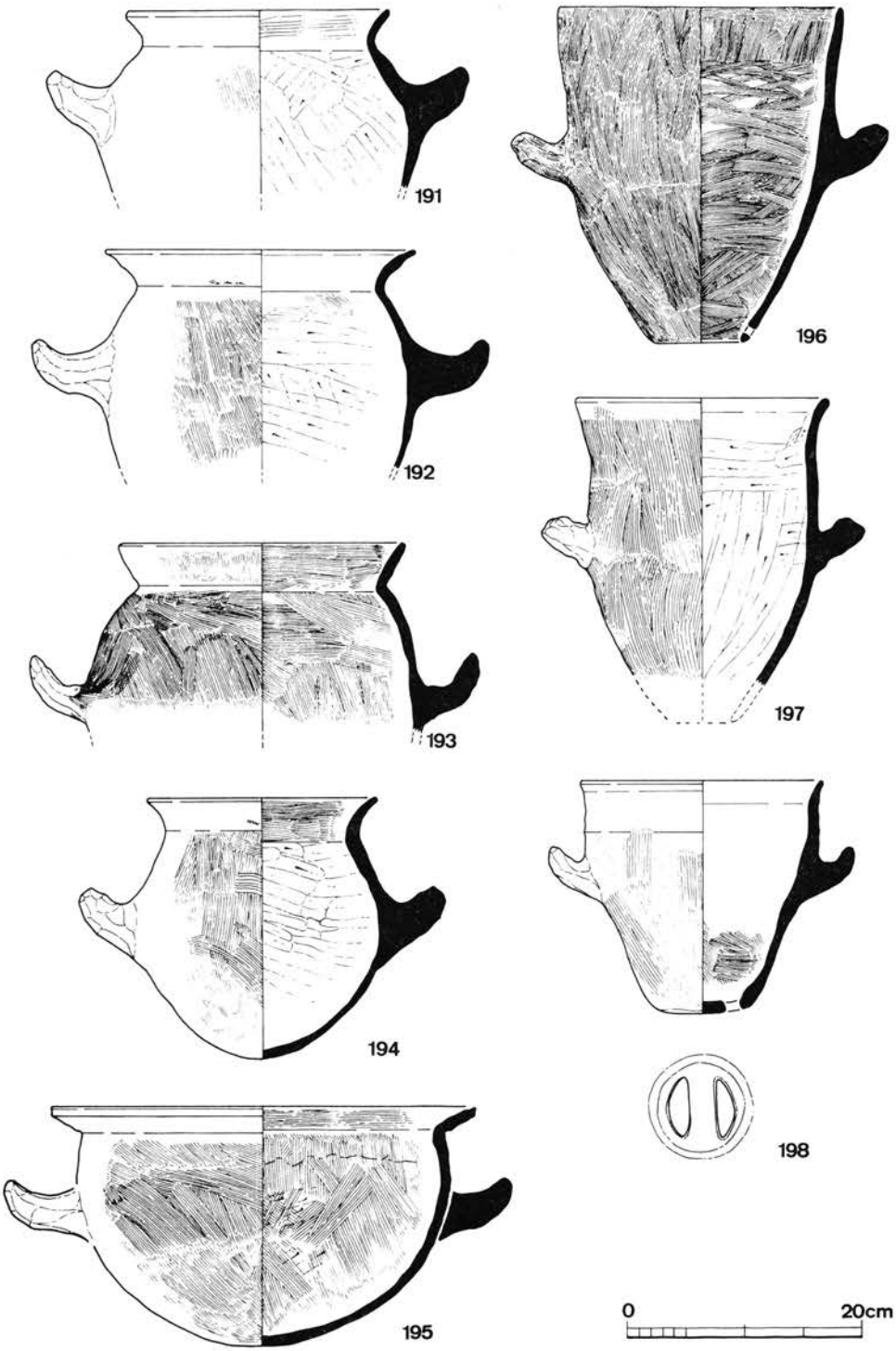
第27図　土師器実測図（４）

把手付鍋 195は，現状では把手を欠損するが，他の同種の破片で補足・復原したものである。口縁部は，体部から強く屈曲し斜め上方に広がるもので，口縁端部は，平坦な面をなす。体部は丸底の半球形を呈し，体部内外面・口縁内面はハケ目，口縁部外面はヨコナデを施す。

甑(196～198) 下方ですぼまる砲弾状の体部をもつもので，口径に比べ器高の高い長胴のもの(196・197)と低いもの(198)がある。いずれも器高の中位に牛角状の把手を付ける。196は，体部上半が直線的に立ち上がり，口縁部と体部との間に明瞭な区別をもたない。体部下半は底部まで緩やかに内湾し，底部蒸気孔の縁辺に接して径5mm程度の小孔を穿っている。片側部分は破損しているが，2孔一対のものである。外面は口縁端部から底部に至るまでハケ目，内面は口縁部上半部にハケ目，以下はヘラケズリする。197は，前者と同様な形態をとるもの。口縁部は，やや外反しながら上方にのび，口縁端部は丸く収める。先端部の丸い棒状の把手を接合する。外面はハケ目，内面はヘラケズリを施し，口縁端部付近をヨコナデする。198は，体部の中位から急に底部に向かってすぼまるもので，口縁部はわずかに外反する。口頸部と体部の境界付近にb種の把手を接合する。底部は平底で外から切り込まれた2か所の蒸気孔をもつ。蒸気孔は，相対する半円形を呈しており，中央に長方形の粘土板が残る。口縁部は内外面とも，端部より下約5cmの範囲をヨコナデし，それ以下は底部に至るまでハケ目を施す。

竈 199は，口径31.2cm・器高47cmを測る大形のもので，ほぼ全形が窺える例である。口縁部(釜口)は，甕類の口縁と同様に体部から緩やかに外反するもので，全体が厚いつくりであるのに比べ，口縁端部は薄く仕上げている。体部前面では左右の壁が大きく下方に広がるのに対し背部では底部付近でやや内湾する。炊口周囲にはひさしを付ける。ひさしは上部では張り出しを大きくするが，側面下方に移るにしたがって断面台形の凸帯状になる。把手，背後の煙出しの孔はない。細部の観察によれば，底部(基部)は，幅2～3cmの粘土紐を接合して帯にし，それを4～5段積み重ねて成形するもので，底に近い部分では特に入念に内外面から粘土を加え補強し指圧により整えている。次にこの上に粘土板を何回かに分けて積み上げ体部以上を成形し，さらに体部成形後の生乾きの時期に鋭利な器具により炊口を切り取り，その周囲にひさしを貼り付ける。ひさしの貼り付けの後は，さらに底部を中心に粘土で補強する。体部内外面は，縦方向の指ナデを行い，粘土の継ぎ目痕を擦り消すものの，底部から上方10cmの範囲には輪積み痕が明瞭に残る。器壁には部分的にハケ目の痕を残すが，炊口の縁部およびひさしの接合部分は指ナデ，口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。内面には煤が付着するが，顕著ではない。色調は茶褐色を呈する。

200は，底部から1/3程を欠損するが，199と同様の形態をとる。口縁部は，前例より屈

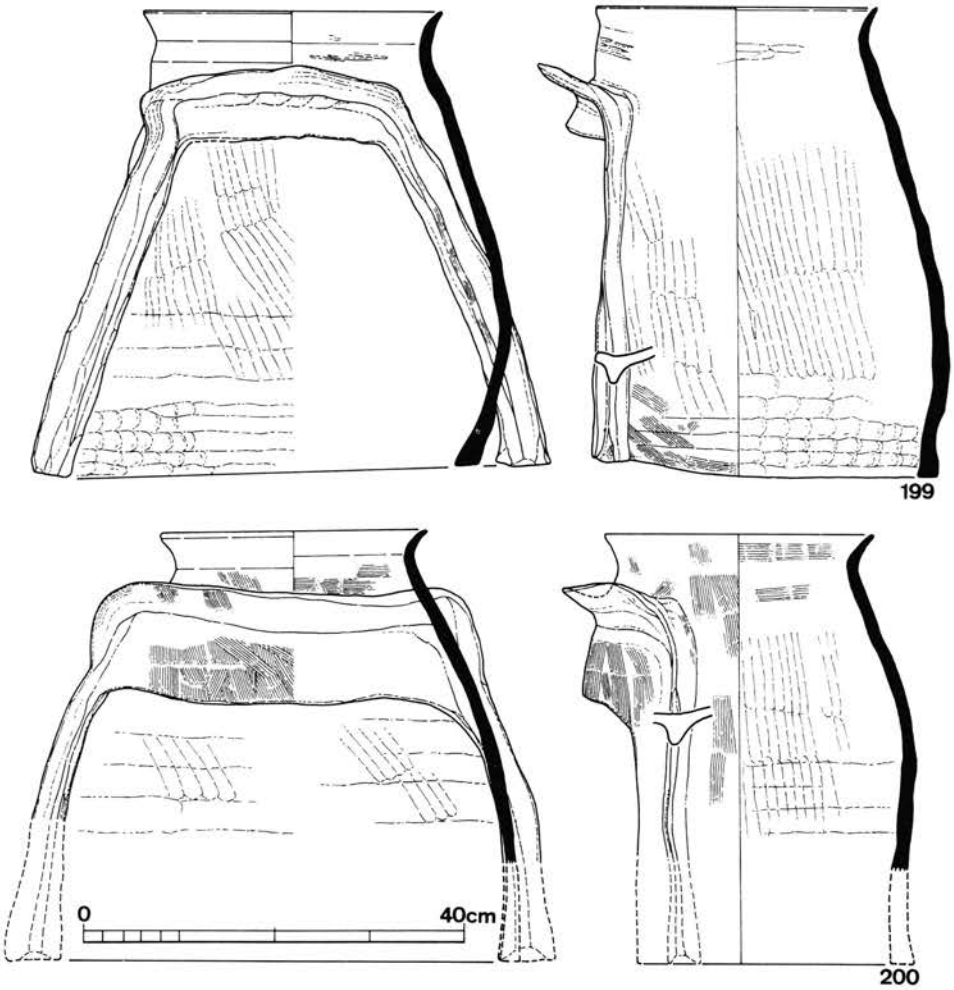


第28図　土師器実測図（５）

曲が大きく甕類の口縁形態に極似する。炊口上縁部の角はやや丸みをつけて切り取られている。ひさしは，炊口切り取り位置から間隔をあけて貼り付けられており，上縁部は外上方へ反りかえる。また，体部前面の左右の壁も内湾気味に下方にのびる。体部外面は，ハケ目のあとナデ調整し，内面は縦方向の丁寧な指ナデを行う。口縁部内外面はヨコナデ。内面には，口縁部を除き煤が付着する。この2例に類似する竈としては，周辺部では綾部市青野南遺跡・同味方遺跡で出土しており，また，口縁の形態が甕類に類似するものは山陰・北陸方面等の日本海沿岸地域に広く分布することが知られる。

(3) **弥生土器**(第30～32図)

A地区溝2(大溝)・同方形周溝墓・B地区方形周溝墓・C地区円形竪穴式住居跡(住居16)及び遺物包含層(遺構覆土)から弥生土器が検出されている。弥生土器には，壺・甕・



第29図　土師器実測図（6）

鉢・台付鉢・器台・高杯の各器種があり，今回出土の土器については，弥生時代中期(第3・4様式)に属するものと，後期末に属するものとの2時期に大別することができる。ここでは，両者を一括して説明する。

壺　口縁部の形態により細分を行った。

壺A(201・202・203)　口縁部が体部から「く」の字形に屈曲し外上方に大きく外反するもの。口縁端部は上下に拡張し面をなす。壺Aには，口縁端部が無文のものAa(201・203)と，2～3条の凹線文を施すものAb(202)がある。201は，ほぼ完形のもので，体部外面の下半はハケ目，上半および口縁部は細かいヘラミガキを行う。内面は体部中段以下をヘラケズリする。203は，体部の上半部と下半部は接合せず図上で復原した。広口大形のもので，口縁端部外面は広い面をなし，頸部に2条の凸帯文を巡らす。外面調整は体部内外面ともに縦方向のハケ目を施し，内面の中段以下底部までヘラケズリする。202は，先の2例に比べ胴部の張りが強く，口縁頸部は短く直立した後外反する。体部外面はハケ目調整する。この遺跡の弥生土器は，茶褐色ないし橙褐色の色調をなすものが大半を占めているが，本例は灰白色を呈しており，搬入品の可能性が高い。201・203は，ともにA地区弥生溝4(方形周溝墓2)出土。202は，B地区方形周溝墓3の溝内供献土器である。

壺B(204)　長頸壺頸部の破片。頸部は，わずかに外反しながら上方にのび，端部でやや直立する。内外面とも，細かなヘラミガキを施す。

壺C(230)　口縁部の屈曲状況は壺Aに類似するが，頸部がさらに大形化するもの。口縁端部は上下に粘土を補足して拡張を行い，端面には4～5条の浅い擬凹線文を施す。頸部の外面は縦ハケ目による調整を行う。

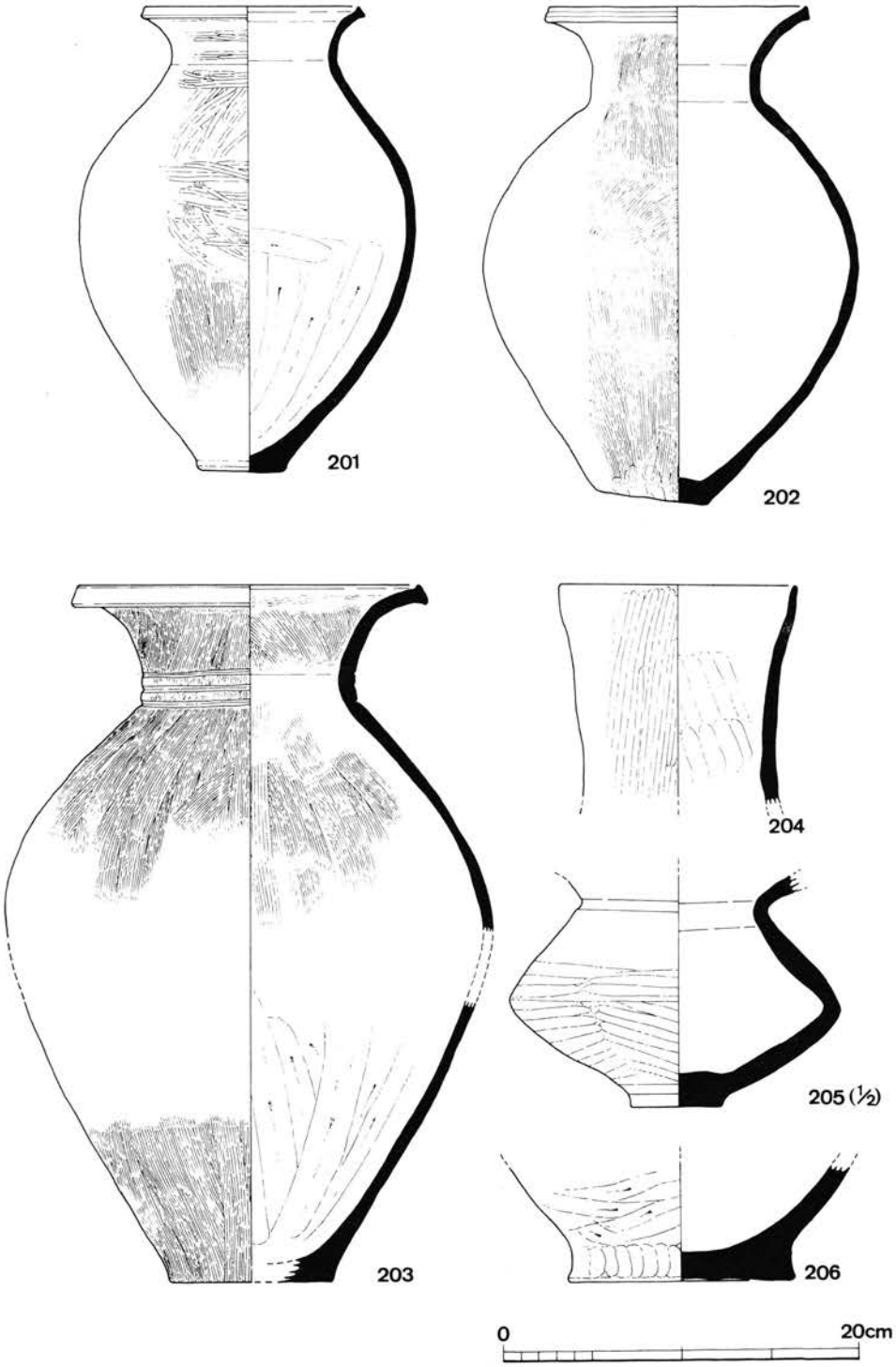
壺D(231・232)　壺C類の口頸部を短くしたような形態をとるもので，口縁端部は上下に粘土を継ぎ足して拡張を行う。端部拡張面には3～4条の擬凹線文を入れる。232は，体部との接合部が不明であるが壺D類に含めた。

壺E(235・236)　口頸部は緩やかに外反した後，大きく屈曲し直立気味に立ち上がるもの。いわゆる複合口縁の形態をとる。甕類に同類のものがみられるが，頸部が比較的長いこと，器壁外面にヘラによるミガキを施すこと等から壺類に含めた。233・234は，口縁端部をヨコナデしており無文である。両例とも体部内面はヘラケズリを行っている。

壺F(235・236)　口縁頸部が外上方にのび，端部が広い面を形成するもの。壺D類に類似するが，端部の拡張が上方にのみ行う点が異なる。端面に2～3条の擬凹線文を施すものFa(235)と，無文のものFb(236)がある。

206は大形の壺底部の破片である。平底で底部外面の周囲には指押さえ痕が残る。

以上，口縁部の形態により分類を試みた。このうち壺Aは，瀬戸内海側の兵庫県播磨地



第30図　弥生土器実測図（1）

方に類例が認められており，弥生時代中期中葉から後半(畿内弥生土器編年第3様式新～同第4様式)期に所属するものである。また，壺Cから壺Fまでは，いわゆる丹後系と称せられる土器で，その所属時期は弥生時代後期(第5様式)から古墳時代初期(庄内並行期)に比定される。これらの様相は，後述する甕類ほかの土器とともに，これまで調査が行われてきた周辺の同時代遺跡の土器群のあり方と変わるところがない。

ミニチュア壺(205)　扁平な体部をもつ小形のもの。口縁部は上半を欠失するが複合口縁状を呈するものと思われる。体部は算盤玉状で突出した平底の底部を付ける。体部外面は細かいヘラミガキを行う。C地区の円形竪穴式住居跡(住居16)から出土。

鉢　鉢は平底のもの(鉢A)と，脚台をもつ台付鉢(鉢B)に大別できる。

鉢A(210～212)　口径がほぼ同じで体部の深いもの(210)と，低平で浅いもの(211)がある。210の口縁端部はやや内湾する。214は，体部が直線的に斜め上方にのびるもので，底部中央は凹みをもち高台状を呈している。

鉢B(213・214)　外上方に直線的に開く上半受け部に，同じく下方に開く台部が付随するもの。鉢部と台部との接合部分は細くくびれている。

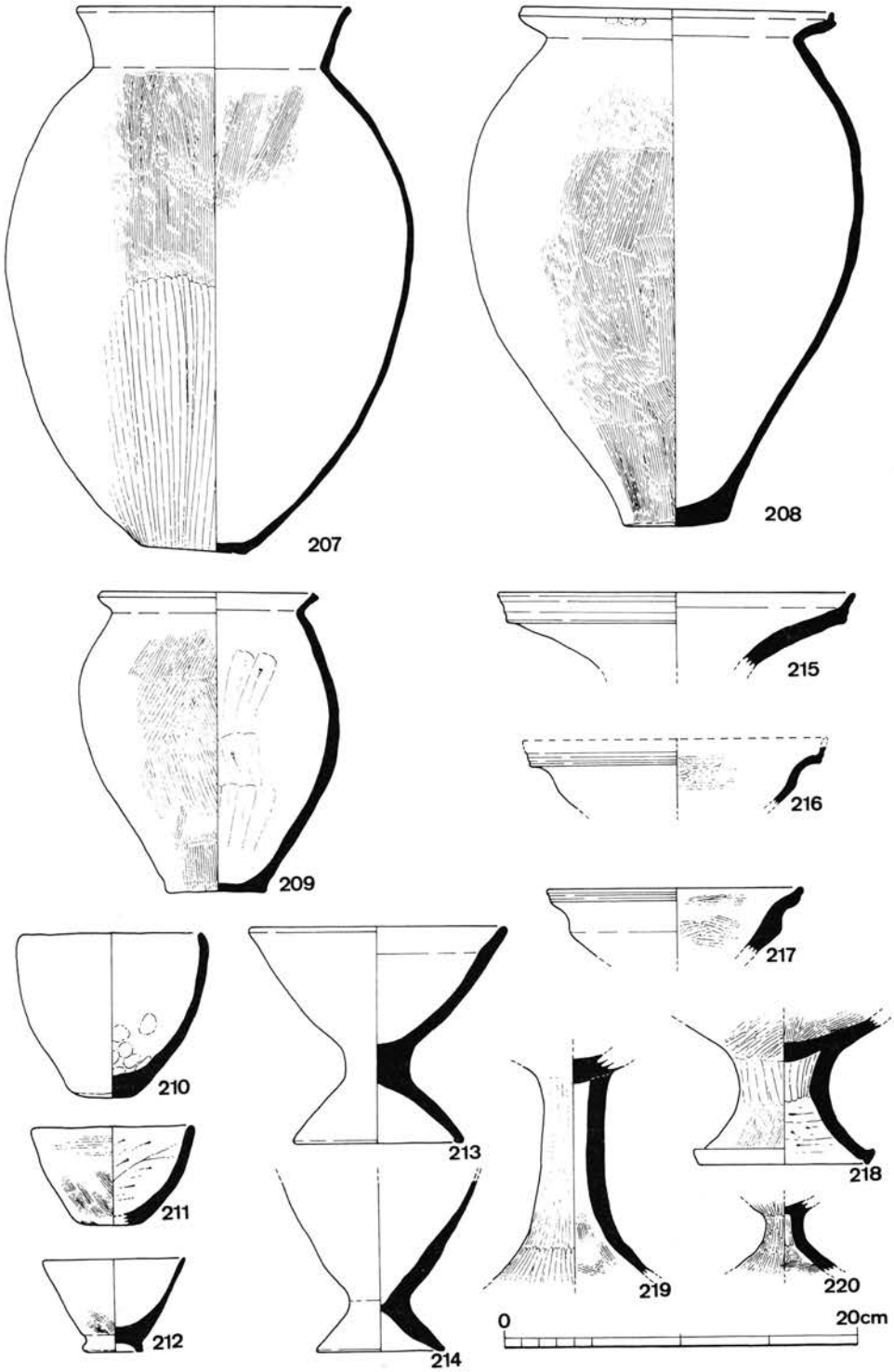
器台(215～217)　いずれも口縁部のみの破片であるが，器台に属するものと思われる。口縁部の形態差から2種に分けられる。215は，壺Fに類似する口縁部をもつが，頸部の開き具合はより大きい。216・217は，頸部が中段で一旦屈曲した後粘土を補足し，さらに口縁端部で立ち上がるもので，口縁端部側面には擬凹線文を施す。このほか，口縁端部に渦巻き文のスタンプを施す小片がみられる。

高杯(218～220)　高杯類はすべて杯部を欠失する。長脚のもの(219)と，短脚で脚裾部の端部側面に広い面を形成するもの(218)の2種がある。219は，円柱状の脚柱部をもち，脚部の内面下段に細かいハケ目を施す。218は，杯部と脚部を成形後，杯部底部に粘土を拡充する技法をとる。220は，小形のもので脚裾部の張りが大きい。全体を丁寧にヘラミガキする。

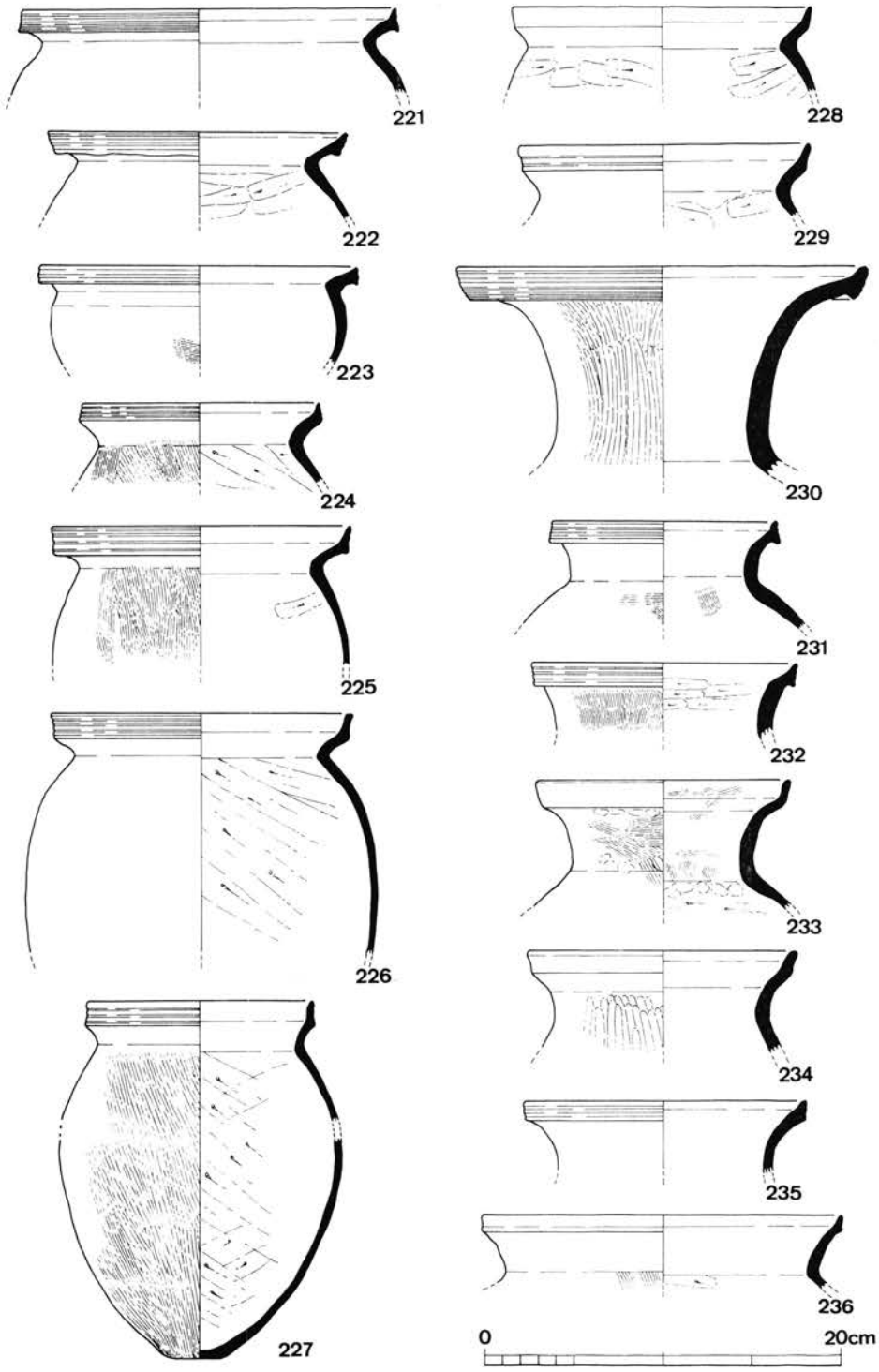
甕　数量的には最も多く出土したもので，壺類と同様に口縁部の形態的な差異により数種に分類する。

甕A(207)　口縁部が体部の接合部分から「く」の字形に屈曲し，外上方に直線的に立ち上がるもの。口縁端部は，平坦な面を形成する。体部は中位に膨らみをもつ卵形を呈しており，底部は平底である。外面調整は体部上半はハケ目，下半は箆状のもので細かくナデている。

甕B(208・209)　甕A類に比べ，口縁部は体部から強く屈曲し短く斜め上方に開くもの。208の口縁端部はつまみ上げ気味に肥厚する。体部の形態は，底部から2/3のところに最大



第31図　弥生土器実測図（2）



第32図　弥生土器実測図（３）

径をもち，下半に行くにしたがってすぼまる。底部は突出した平底を呈する。外面は，縦方向の細かいハケ目調整をする。209は，小形のもので，口縁端部をやや上下に拡張する。外面はハケ目，内面はヘラケズリを施す。

甕C(221～223)　甕B類の口縁に類似するが，口縁端部はさらに上下に肥厚させ広い面を形成し，そこに3～4条の擬凹線文を巡らすもの。221は，上方への拡張が大きく内面に段を作る。外面は細かいハケ目，内面は口縁接合部以下を横方向にヘラケズリする。

甕D(224～229)　口頸部は体部から「く」の字形に短く屈曲した後粘土を補足し，角度を変えて上方に立ち上がるもの，いわゆる複合口縁の形態をもつ。口縁部側面に3～4条の擬凹線文を施すものDa(224～227)と，口縁部をヨコナデするのみで無文のものDb(228・229)がある。全形が判明するものは少ないが，227のように，体部は肩部から少し下に最大径をもち，底部は形骸化した平底になる。外面は細かいハケ目，内面は口縁部分をヨコナデし体部との接合部以下をヘラケズリする。外面には口縁端部まで煤の付着するものが多い。口縁部無文のDbは，頸部と体部の内面接合部が明確に稜を形成しており，また，口縁部立ち上がりの形態からみてもDaに比べ後出するものと考えられる。あるいは別の形式として捉えるのが適当であろうか。甕D類は，丹波北部・丹後地域において弥生時代後期の煮沸用土器として広く認められているものである。

(4)　土坑10出土の土器(第33図)

C地区で検出した土坑10からは，須恵器杯1・高杯1，土師器杯2・甕3～4・竈破片が出土した。この土坑は，住居跡15により北東側の上面を削り取られているが，これらの土器は，一括資料として捉えることができるのである。

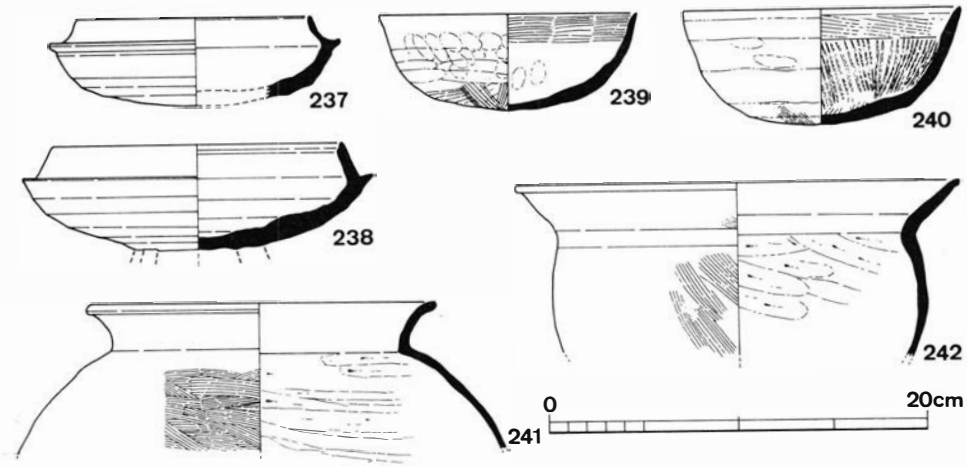
須恵器

杯　237は，立ち上がりが高く，やや内傾の度合いが大きい。口縁部の端部は，丸く仕上げており，受け部の先端部も丸く終わる。底部のヘラ削りは，全体の約1/3に及ぶ。

高杯　238は，脚部を欠失するが，杯部分は，ほぼ完形である。口縁部は，やや厚作りで，内傾する端部に段をもつ。脚部は，杯との接合部から完全に欠落しており，意識的に打ち欠いたものと思われる。脚部の透かしは，3方向透かしである。口径15.3cmを測り，全体に大ぶりで，調整も比較的荒い。

土師器

杯　ほぼ完形をとどめるものが，2点ある。239は，口縁端部がわずかに外反するもので，先端部は鋭角的に終わる。底部は丸底で，内面と外面底部付近は，荒いハケ目による調整を施す。口径13.7cm・高さ5.1cmを測り，器高指数は，37を示す。土師器杯類のAⅢ類に属する。240も，同じくAⅢ類に属するが，体部は丸みをもち深いもの。口縁端部は



第33図　土坑10出土土器実測図
237・238：須恵器，239～242：土師器

肥厚し，端部は丸く仕上げる。口縁部内面は横方向のハケ目，それ以下，底部まで縦方向のハケ目調整を行う。体部外面は，指押さえで器壁全体を整えた後，底部付近はハケ目調整する。ハケ目は総じて荒い。口径14.6cm・高さ6cm，器高指数は41を測る。全体に厚作りで，杯より椀と呼ぶ方が適当であるかもしれない。

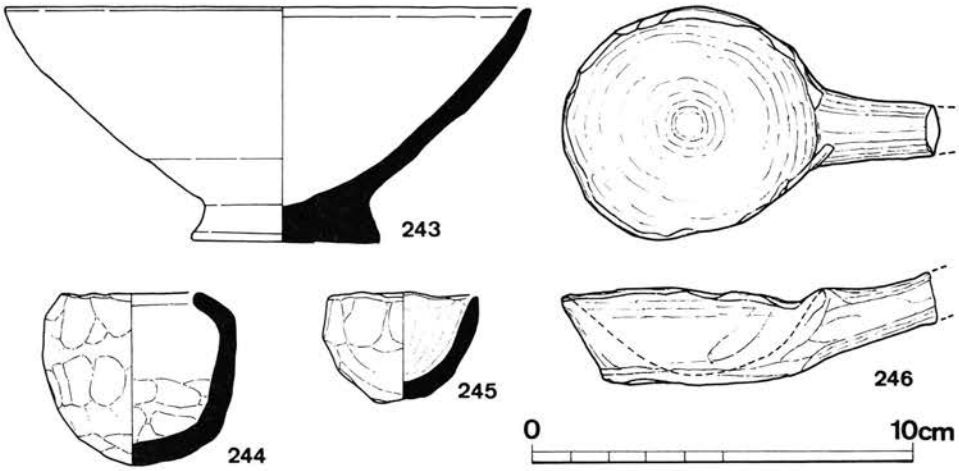
甕　241は，甕Ｂ類に属するもの。口頸部は，体部から「く」の字形に屈曲し，外反する。口縁端部は，丸く仕上げる。体部内面は，頸部との接合部分が稜をなしており，以下横方向のヘラケズリを行う。体部外面は，細かいハケ目調整を行う。

242は，口縁部が体部から斜め上方に直線的に立ち上がるもの。口縁端部は丸みを帯びる。体部の最大径は，口径よりも小さく，肩の張りも緩やかである。体部内面は，横方向のヘラケズリ，外面はハケ目調整する。口縁部は，内外面ともヨコナデする。

竈　移動式竈の破片は，４点出土している。うち，１点は庇部分の破片で，Ａ地区溝２（大溝）から出土した竈と同種のものである。竈全体からみれば，ごく一部しか残存せず，おそらく破損品を投棄したものと考えられる。共伴した須恵器は，形式編年からみて６世紀中葉前半に置くことができるものであり，本土坑から出土した竈資料は，６世紀中頃には，既にこの地域において，移動式の竈が使用されていたことを物語るものである。

(5)　その他の土器・土製品（第34図）

243は，外部に張り出す平底の底部から外上方に直線的に開く体部をもつ土師器の鉢型土器。口縁部の器壁は厚くやや内湾する。器壁は荒れており調整手法は不明であるが，一部にハケ目痕と思われる跡がみられる。胎土には粒子の荒い砂が含まれており，赤褐色を呈する。口径14cm・高さ6.2cmを測る。Ａ地区竪穴式住居（住居５）の埋土から出土。



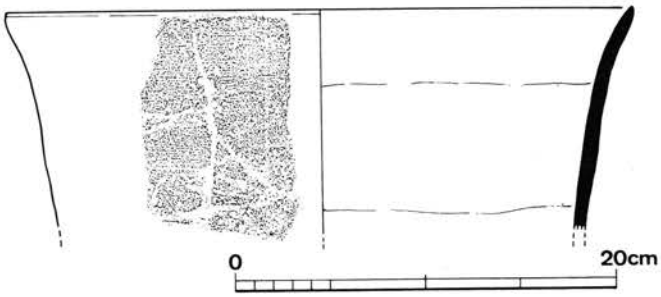
第34図　土器・土製品実測図

244・245は，ともに土師質の手づくね土器で粗製小型のもの。244は，口頸部がすぼまり体部は球形を呈している。底部は丸底で，内外面に指による成形圧痕がみられる。245は，鉢状を呈するもので，内外面に指圧による手抉りの痕を残す。ともに溝2（大溝）出土。

246は，土師質の匙形土製品。円形の匙部に棒状の柄が付くもの。現在柄部の先端は，欠失する。匙部の凹みは半球状を呈しており，上面部径6.5cm×6cmを測る。底部は，平坦な平底。柄は，匙面に対してやや上向きの角度に取り付けられており，断面円形で径1.4cmを測る。柄取り付け基部には指圧による成形痕がみられるほかは，全体を指ナデにより丁寧に調整する。色調は黄褐色を呈する。土師器鉢(243)と同様，竪穴式住居跡(住居5)からの出土である。

(6)　**縄文土器**(第35図)

縄文土器は，今回，B地点から2点出土している。掲示例は，口縁部の破片で，胴部の屈曲のみられない深鉢形の器形をもつものである。口縁部は，平縁である。粗製品で，器壁は全体に荒れており調整等不明瞭であるが，無文のままか，若しくは条痕文を施す可能性がある。色調は，暗褐色を呈しており，復原口径33cm・器厚は9mmを測る。縄文時代後期に属する。他の1例は，沈線文を施す小破片である。



第35図　縄文土器実測図

由良川流域部では，石本遺跡の下流約17kmの

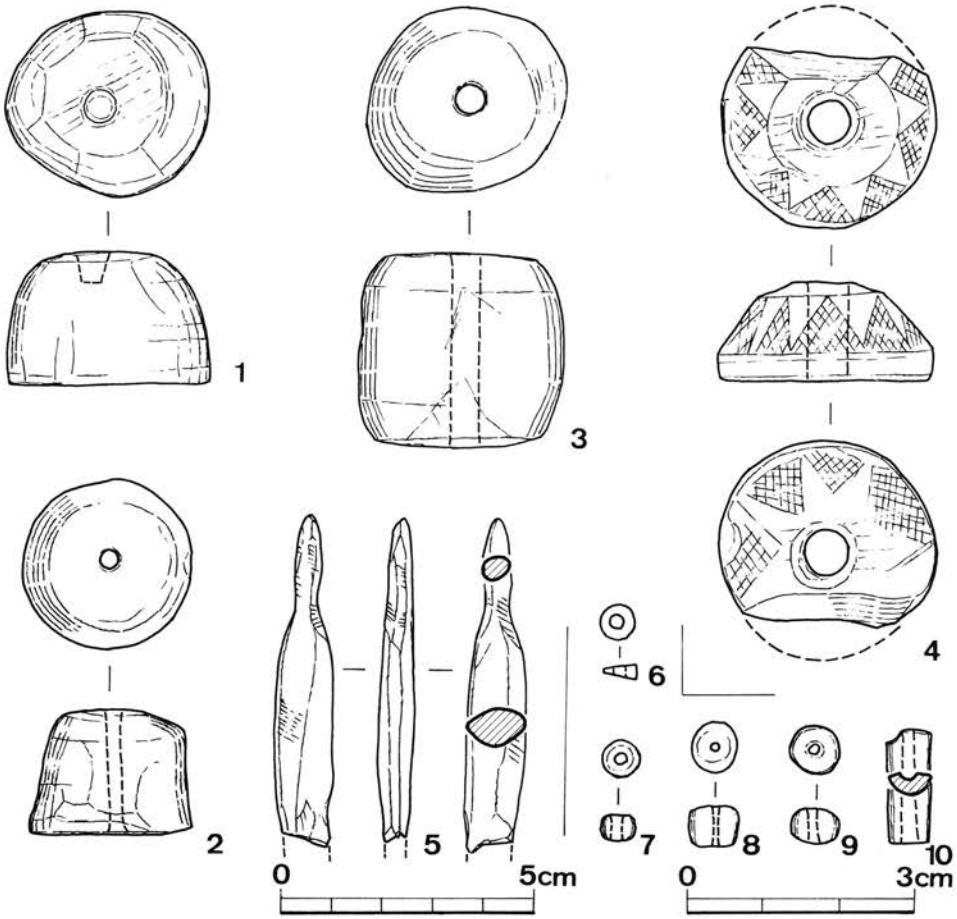
由良川自然堤防上に，縄文時代後期の集落跡として著名な桑飼下遺跡が立地する。桑飼下遺跡から出土した豊富な縄文後期の土器群については，その特徴から，桑飼下式の様式名が提唱されており，近畿地方における縄文時代後期中葉段階の標識例として位置づけられている。すなわち，今回出土の深鉢形土器は，桑飼下式の分類では，第4群条痕文系深鉢Lないし同群無文系深鉢B類に比定されるものである。

（辻本　和美）

第2節　土製品・石製品・玉類・鉄器・石器・鹿角製品

(1)　土製品・石製品・玉類（第36図）

用途不明石製品　1は，上面が丸みを持つ半球形の石製品。底径4cm・高さ2.6cmを測る。側面は面取りされ，全体が平滑に仕上げられている。頂部は平坦で，中央に先の鈍い



第36図　土製品・石製品・玉類実測図

錐状のものを使用して上部径6mm・底径4mm・深さ6mmの円孔を穿っている。白色の泥岩を用い，重さは47.5gを測る。形態からみて，紡錘車の未製品と思われる。

紡錘車(2～4)　2は釣鐘状を呈し，1と類似する形態をもつ。各面は指圧により成形される。底径3.25cm・高さ2.3cm・軸孔は径3.5mmを測る。焼きは，須恵質で堅緻。色調は，青灰色を呈する。3は上下の角が取れた円柱状を呈するもの。最大径4.2cm・高さ3.7cm・軸孔は径6mmを測る。各面は平滑に仕上げられている。土師質で胎土は良質，色調は淡茶褐色を呈する。本例は，大形の土錘とも考えられるが，各面が特に丁寧に成形されていることからみて紡錘車とした。重量は60.4gを測る。4は滑石製紡錘車。断面台形状で，一部欠損するが，上面径2.5cm・底径4.2cm・高さ1.9cmを測る。孔径は，8.5mmで，頂部の穿孔部周辺はやや高くなる。各面ともよく研磨され，上斜面及び底面に内部を細かい格子文で埋めた線刻の鋸歯文帯を置く。文様は上斜面で9単位，底面で6～7単位が巡るものと思われる。石材の色調は，やや青味を帯びた淡灰色を呈している。残存重量は，31.4gを測る。

舌状石製品　5は小さな棒状の石材を加工したもの。一部破損し，現存長6.5cm，最大部幅1.1cmを測る。一方の端部に近い部分を両側から削り込みくびれを付け，さらにその先端部を鋒状に尖らす。基部の断面は不整な楕円形を呈し，自然の形状を残すが，側面はよく研磨され，所々に金属器によると思われる削痕を残す。用途については不明であるが，その形態からみて，先端のくびれ部を紐でゆわえて釣り下げ，馬鐸等の舌として使われた可能性が考えられる。残存重量は，6.9gを測る。

玉類(6～10)　6は滑石製臼玉。径4.2mm・最大の厚さ2mmを測る。断面クサビ形を呈しており，厚さは不整である。切り離し面は，研磨していない。7は，ガラス小玉。径4.6mm・厚さ3.3mm。扁球形状で色調は半透明なコバルトブルーを呈する。8・9は，土製丸玉。8は，角の取れた円柱状を呈し，径7mm・厚さ4.7mmを測る。9は，扁平な球状で，径7mm・厚さ4.6mmを測る。両者とも径1mm前後の細い紐孔をもち，色調は，黒灰色である。10は碧玉製管玉。破損品で全周の約半分が遺存するのみである。長さ1.55cm・復原径5.3mmを測り，径約1.5mm前後の紐孔を片面穿孔する。硬質で，色調は濃い緑色を呈している。

6は，A地区住居7。7は，C地区弥生時代住居15。その他は，A地区溝2(大溝)からの出土である。

(2) 鉄　　器

鉄器(1)(第37図)

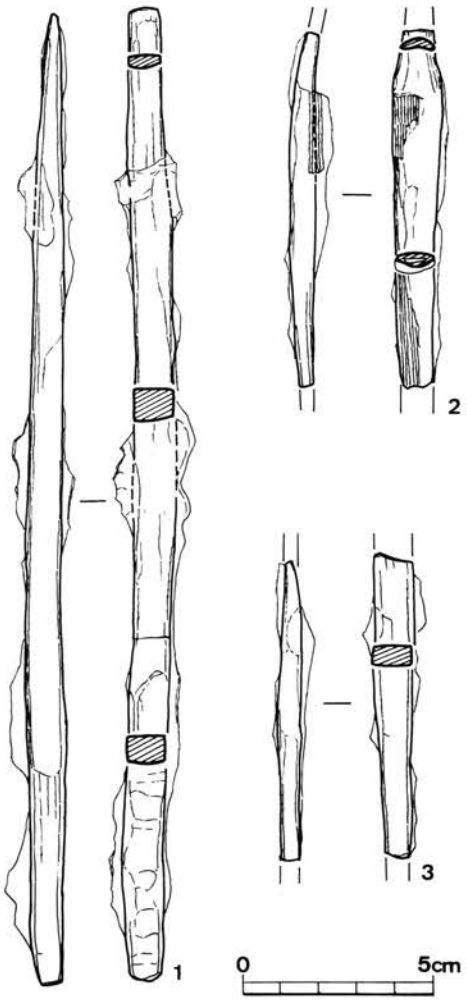
鉈(1～3)　1は長さ25.4cmの完形品。茎部と刃部の境は不明瞭である。茎は断面長方形で，先端部は角形に終わる。刃部は厚さを減じて刃先にいたる。側面は，現状では刃をつくらず厚みをもったままだが，銹のため本来の形状は明らかでない。鉈としたが，あるいはノミに属するものかもしれない。2は刃部・茎部とも欠損する。刃部は，茎部関から先

端に向かって細くなり，明瞭に返りをもつ。刃部は甲の中央に鎬をもち両刃につくる。茎部には木質が残る。現存長9.4cm。3は茎部の残部。茎は断面長方形で，先端に向かって細くなる。現存長7.8cmを測る。

1～3は，いずれもC地区弥生時代住居跡16から出土した。住居跡16は，弥生時代末から古墳時代初頭に属するもので，これらの鉄器類も同時期のものであろう。

鉄器(2)(第38図)

鉄鏃(1～3)　鉄鏃には2型式がみられる。1は平根式に属し，刃先の一部と茎の大部分を欠失する。身部の根に浅い逆刺をもち，箆被は，断面が長方形を呈し厚みがある。銹化が著しいが，箆被から茎部にかけて一部木質が残る。現存長8.8cm・身部最大幅2.5cmを測る。2も平根式に属するもので，刃先と根の逆刺の両先端部を欠く。逆刺は鋭利でやや外側に広がる。箆被の長さは4cmあり，関から細長い茎部へつづく。湿気を含んだ土層中にあったためか，全体に脆くなっているが，表面での銹化はほとんどみられない。表面は黒色を帯びる。現存長12cm・身部最大幅2.3cmを測る。3は，斧矢式と呼ばれるものである。刃先の両角を欠いている。茎部は，現存長0.9cmと短いものであるが，途中で折れた形跡がなく，おそらく本来の形状を留めるものと思われる。現存長4.7cm・刃部の先端幅2.7cmを測る。

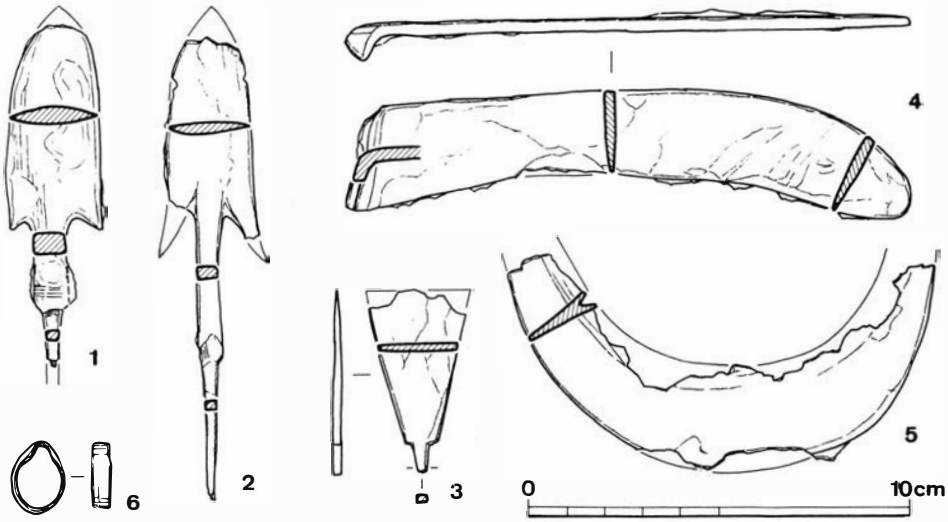


第37図　鉄器実測図(1)

鎌(4)　ほぼ全形を留めるもので，身部刃は内湾し，基端部に着柄のための折り返しをもつ。全長14.9cm・最大刃幅2.4cm・棟厚0.3cmを測る。

鋤先(5)　U字形の鋤先をもち，両端部は欠損する。内縁には木質部をはめるV字形の切り込みをもつ。現存長11.2cm・復原刃幅2.9cm・切り込み部幅0.5cmを測る。

鉄環(6)　薄い鉄板を折り曲げ環状にしたもの。環の形状は楕円形をなしており，縦長方向の一端は両側から内へ押さえ，ややいびつになる。刀子等の責金具と考えられる。長



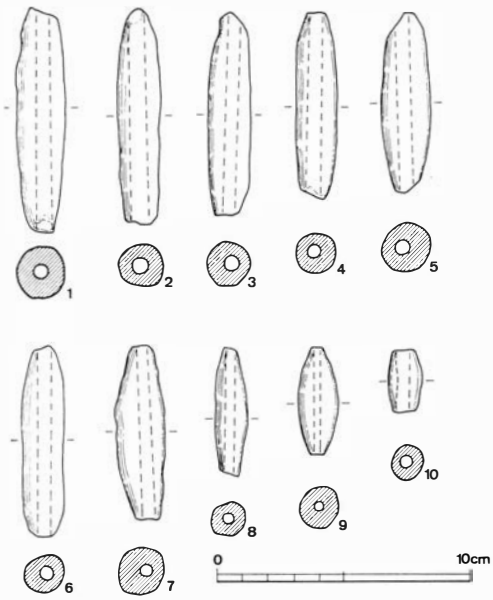
第38図　鉄 器 実 測 図 (2)

径2.9cm・短径1.4cm・幅0.5cmを測る。

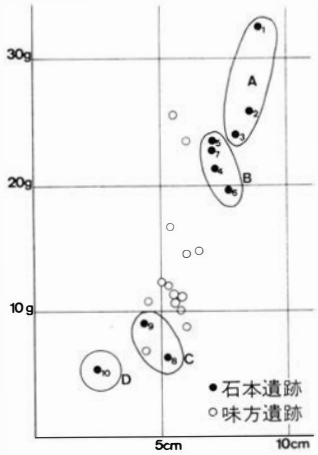
1は，A地区住居跡3，2～6は大溝(溝2)からの出土品。いずれも6世紀後半に属するもの。

(3)　土　　錘(第39・40図)

土錘は，総数18点出土した。出土地点は，包含層と溝2(大溝)に大別される。土錘はすべて，土師質軟質で管状の形態をもつ。成形にあたっては，径5m前後の芯棒に粘土を巻き付けて抜き取るといった通常のもので，整形も粗雑で，表面には，指押さえの痕が残る。



第39図　土 錘 実 測 図



第40図　土 錘 法 量

今回出土した土錘は，長さ・重量により，A～Dの4類に分類される。

A類：長さ，8～9cm前後。重さ，24～32.4gを測る。今回分類した中では，最も大形のものである(1・2・3)。

B類：長さ，7～8cm前後。重さ，19.8～23gを測る。A類より，やや小ぶりである(4・5・6・7)。

C類：長さ，4～5cm前後。重さ，6.3～9gを測る。小形のもの。B類とは直接接続せず分類の空白が入る(8・9)。

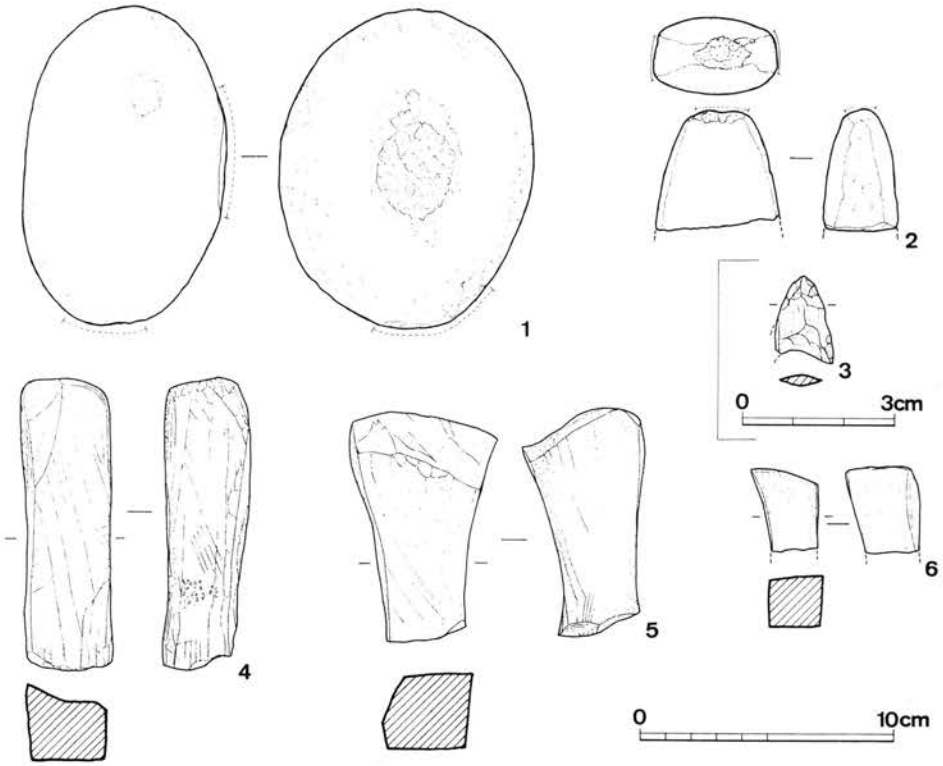
D類：長さ2.5cm・重さ5.4g。極小のもの。この部類のみ両端に面をもつ(10)。

上記の土錘の時期は，溝2の構築時期と同様，6世紀後半期に所属するものと考えられる。これらの土錘の存在は，由良川・牧川で，当時，網漁が盛んに行われていたことを物語るものである。なお，石本遺跡北側の丘陵腹には薬師遺跡と呼ばれ，これまで土錘が多量に採集されている遺跡が存在するが，遺跡の明確な性格については明らかでない。

なお，参考資料として掲示した味方遺跡は，上流の綾部市に所在する6世紀後半の集落遺跡である。

(4)　石器・砥石(第41図)

1は，円礫を用いた敲石で，片面の中央部と各縁辺部に敲打痕を認める。長径12.5cm・



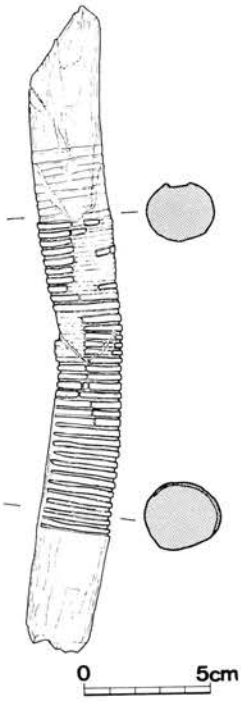
第41図　石　器・砥　石　実　測　図

短径10cm・厚さ8cm。重量は1.2kgを測る。材質は，花崗岩である。このほか，敲石の破片と思われるものが計4点出土している。2は，磨製石斧で刃部を欠損する。基部端面に敲打痕が認められ破損品を敲石として再利用したものである。現存長4.5cm・厚さ3cmを測る。3は，凹基式石鏃。片方の逆刺を欠損する。表裏の剥離調整は荒い。全長1.7cm・幅1.2cmを測る。材質は，サヌキトイドである。

1～3は，溝2（大溝）からの出土で，いずれも弥生時代に所属するものと思われる。

砥石（4～6）　4は，方柱状の河原石を用いたもの。各面とも使用摩滅が著しく，片面中央部には凹みがみられる。また，各側面の縁辺部には長軸に直行して細かな条痕が多数認められる。現存長11.5cm・各辺幅約3cm・重さ219.7gを測る。頁岩製。5・6は，断面方形をなすもの。両者とも破損するが，表裏側面の四面ともよく使用されており，中央部が擦り減って細くくびれている。5は大型品で，平面形態がバチ形を呈する。現存長9cm・最大部幅5.6cm・厚さ4.8cm・重さ255.6gを測る。灰白色の素地に赤褐色の細かな粒子を混じえる砂岩を用いる。6は小型品。上面端部が反り上がり，現存長3.3cm・幅2.8cm・厚さ2.1cm・重さ37.8gを測る。白色の砂岩製である。これらの砥石は，A地区溝2（大溝）から出土したものであり，所属時期は，概ね6世紀後半代に比定される。

このほか，石製品と呼べるかどうか不明であるが，浮子に利用されたと思われる軽石の小片が出土している。



第42図　鹿 角 製 品

(5)　鹿 角 製 品（第42図）

鹿角を加工し，その側面に数条の平行沈線を施すもので，刻骨とも呼ばれる。出土した時点で，すでに中央部で折れており，また両端部も破損や腐食のために整った切断面をなしていないが，現存長25.5cmを測る。角の断面形はやや扁平な円形を呈し，比較的残りのよい部分での計測では長径約3cm・短径約2.7cmを測る。本例は鹿角の幹部から枝角を除去し，さらに表面を丁寧に削り込んで全体を成形しており，緩やかに湾曲する幹部の凸面側部分を利用し，幹長軸に対して直角に条線を刻んでいる。刻線は，上下両端部に約5cm程度の空白部を残し，その中間部15.2cmの間に平行して合計44条が施されている。刻み目の溝断面は凹凸面とも直角を呈しており，鋸等を用いて切り込まれたことが窺える。一単位の刻み目の幅は凸面部で2.5～3.0mm，凹面部で0.5～1.0mm，深さ0.8～1.8mmを測り，幹部の全周に対しほぼ半周する範囲（約4.2

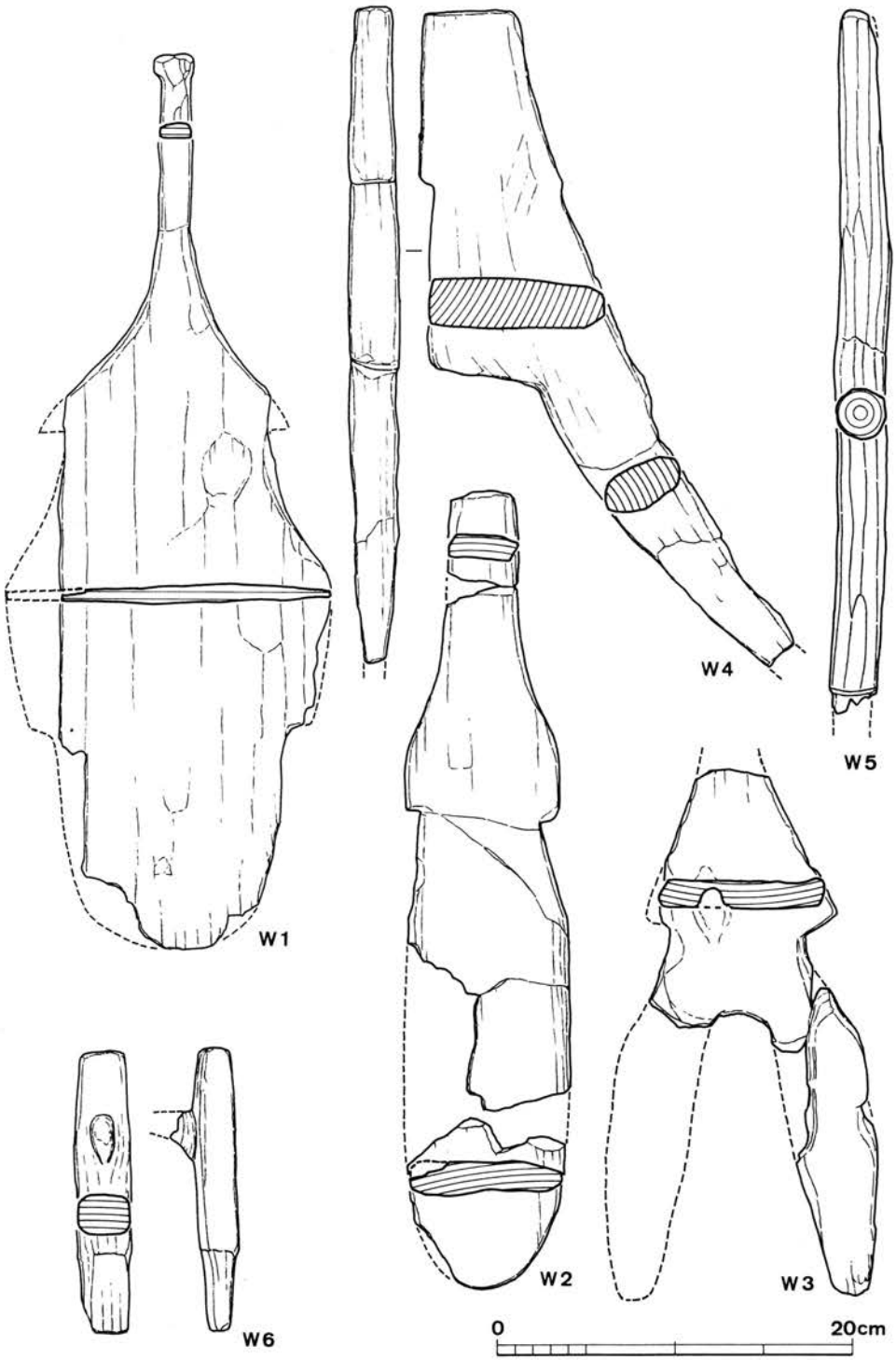
cm)まで行われている。刻線の文様面は長年土中にあったためか，剝離が著しく充分な観察ができないが，表面に摩滅痕を残す部分が認められる。本例は溝2(大溝)3区から出土したものであるが，同溝からは他にもう1点，長さ6cm程の，刻み目部分のみが剝離した同種の破片が出土している。本例とは別個体のものであり，少なくとも2例存在することが明らかである。

鹿角あるいはウマ・ウシの骨に刻線を施す類例は，日本国内および韓国南部の遺跡から出土しており，現在まで15遺跡23例が確認されている。各遺跡の所属時期は弥生時代から奈良・平安時代までわたっているが，傾向として時代が新しくなるものはウマ・ウシの長管骨を利用する。刻骨の性格については，卜骨説・刻線部摩滅痕により「ササラ」としての用途を考えるいわゆる楽器説・刻線の数に規則制を認め記号の意味が含まれるとする説・農耕儀礼に伴う祭器具等，形態・用途・思想面から各々の説が出されているが，結論までには至っていない。ウマ・ウシの骨を用いた刻骨の出土する6世紀以降の遺跡では，同じく井戸・大溝内からウマ・ウシの遺存骨の出土することが注意されている。これらは従来から指摘されているように，水神(農耕神)に対する儀礼(犠牲獣)行為，すなわち漢神祭祀に係わるものとして捉えられており，素材を同じくする刻骨についても同様な解釈が与えられている。石本遺跡でも獣骨を伴う点など全く同様な出土状況を示しており，鹿角という素材の差はあるが，同一の性格を持つものと想定される。また，大溝内からは，手づくね土器・玉類・竈さらに舟・刀・馬形代等の木器など祭祀的色彩の濃い遺物が多量に出土しており，本例も集落の外縁部で行われた祭祀行為に伴う遺品と考えて誤りないであろう。本例の所属時期は共伴する土器から6世紀後半から7世紀初頭に置くことができ，使用年代の確定できる例として貴重である。ちなみに，刻線の総数44本は現在知られているもののなかでは最大のものである。　(辻本　和美)

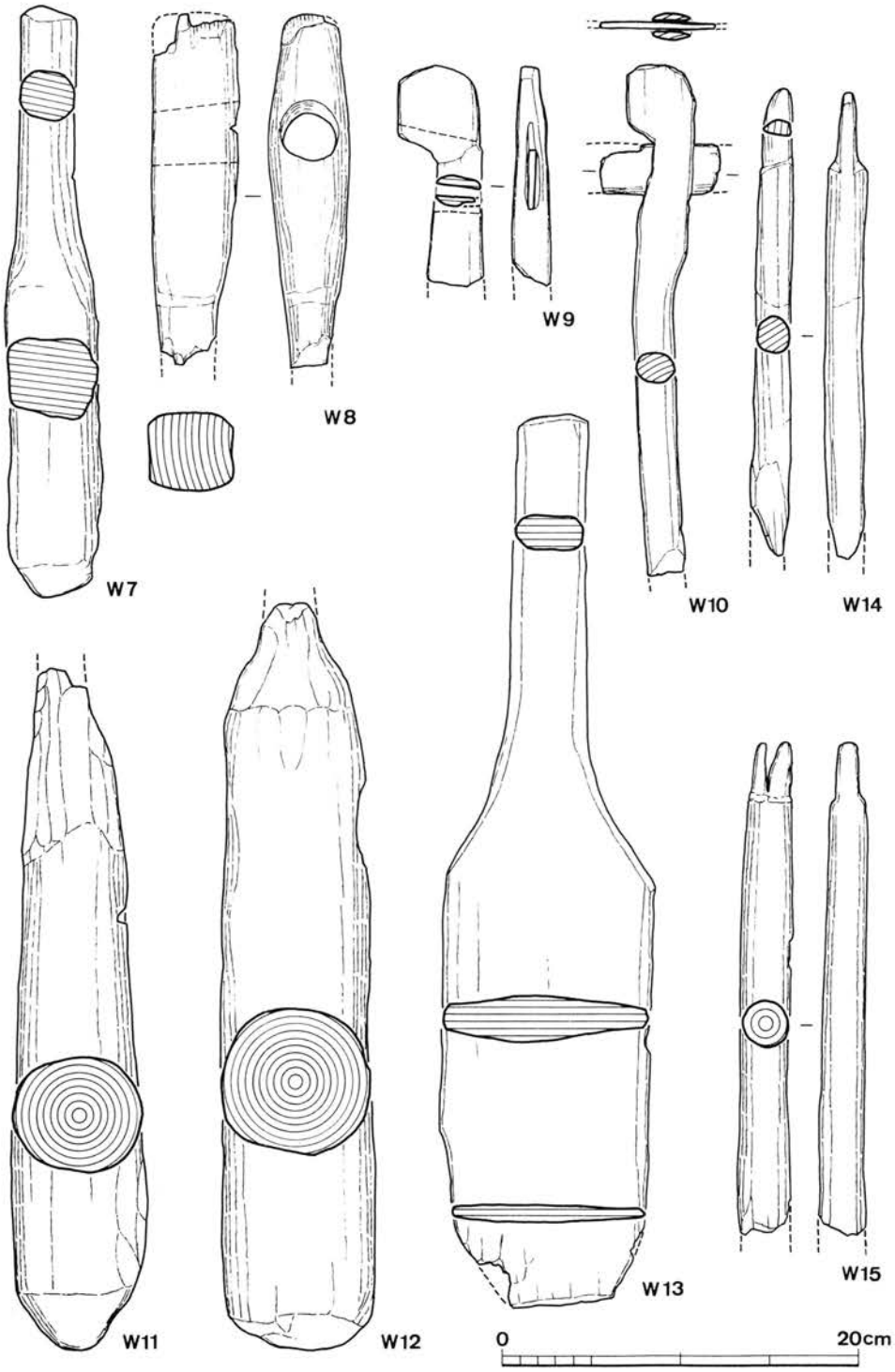
(参考文献)　木村幾多郎・神澤勇一「刻骨・卜骨」(『弥生文化の研究』8雄山閣) 1987
土肥　孝「狩猟儀礼から農耕儀礼へ」(『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所) 1984

第3節　木器・自然遺物(第43～50図)

この節で取り扱うものは，A地点で検出した溝2出土の植物性遺物である。この植物性遺物には，木材・樹皮・草木等を加工したもの(製品)と未加工の自然遺物がある。いずれも溝底部付近からの出土であり，6世紀後半～7世紀初頭の多量の土器と共伴したものである。植物性遺物の総数は数百点にのぼり，そのなかでも加工痕をとどめる遺物は約200点あった。加工品のうち大多数を占めるのは木製品であり，その他少量ではあるが樹皮・草木等を材質にした遺物を含む。



第43図 木 器 実 測 図 (1)



第44図　木　器　実　測　図　(2)

付表4 木器種類別一覧表

項目	種類	点数	小計	項目	種類	点数	小計
農具	鍬	6	24	祭祀具	馬	7	11
	鍬柄	1			刀子	1	
	杵	4			舟	2	
	槌の子	13			修羅	1	
工具	斧柄	2	3	雑具	火鑽臼	1	5
	鎌柄	1			火鑽弓	1	
武具	弓	2	3		自在	1	
馬具	鞍	1			樹皮紐	2	
容器	盤	3	5	部材	部材	9	13
	蓋	2			建築部材	4	
服飾具	下駄	4	5	用途不明		26	26
	櫛	1		その他		97	97
紡織具	枠	1	1	計			181

ここでは加工痕をもつ遺物の中でも，主として製品をとりあげることとする。出土遺物は推定される機能・形状によって農具・工具・武具・容器・服飾具・紡織具・祭祀具・雑具・部材等に分け，順次とりあげることとする。

農具

A地区溝2から出土した農具には鍬・槌・杵がある。

鍬は4点(このほか未確定品2点がある)が出土した。4点ともナスビ形鍬であり，刃部が板状のもの(W1・2)と二叉に分れるもの(W3・53)の2形態が認められる。いずれの鍬も基部下端が傘状に開き，着柄部緊縛のために切り込みをもつ。W1の刃部先端は幅を狭めており，その形状から「U」字形の鉄製鍬先を着装していたようである。W1は幅広で薄い身をもつことから，荒ら起こし等の耕起作業には身部が耐えられない可能性がある。耐久性の強化の点ではW2及び叉鍬等の厚手の身と刃部をもつものがまさる。W1は刃部に鉄製鍬先を装着することからある程度の耕起作業を行ったものとはみられるが，耕起後のかきならし用の鍬とみることもできよう。鍬に着装したとみられる柄(W4)の出土をみている。膝柄とみられる。鍬身と柄の握部は約32°の角度をもっている。鍬との着装は2か所で緊縛したものとみられる。

槌はその形態により横槌と槌の子に分けられる。

横槌(W7)は，槌部の断面形が方形をなし，握部は円形を呈する。木取りは縦木取りで

あるが，心材は用いていない。槌部の各面には使用による浅い凹みが認められる。

槌の子(W16～25)は12点の出土をみた。器形は，すべて丸太の中央に向かい，自然に細くなるような典型的な鼓形で，両端に旧丸太面を残す。すべて心持材を使用している。これらの槌の子は「もじり編み」用の木製錘(注1)とみられる。

もじり編みを行うには，錘と糸・紐・縄の他に台と目盛板がセットになった編み台が必要である。目盛板は細長い板材の側面に目盛を刻み込んだものでありW57が相当する。目盛板は愛知県南木戸遺跡(注2)(弥生時代後期)・静岡県伊場遺跡(注3)(奈良時代)・山形県嶋遺跡(注4)(8世紀以降)・秋田県脇本遺跡(注5)(平安時代中期)等で出土している。

杵(W11・12)は3点が出土した。形態は，断面が楕円形もしくは円形の長い棒状の中央部を細くつくり，搗部と握部を区分したものである。すべて心持材を使用している。

工具

鉄斧柄と鎌柄が出土している。

鉄斧柄は縦斧と横斧が各々1点出土している。着装部の状況から，いずれも袋状鉄斧をとりつけたものである。縦斧柄(W8)は斧台と握りを枘口で組合わせるものであり，大型の斧台をもつ。横斧(W6)は木の幹と枝の叉部を利用し，幹から斧台を，枝から握りをつくりだしたものである。斧台は細長く小型で，表面は特に丁寧に仕上げている。

鎌柄(W9)は1点のみ出土している。柄の先端付近に設けた枘穴に鉄鎌を装着するタイプである。枘穴は柄に対してやや鈍角をもって穿たれている。

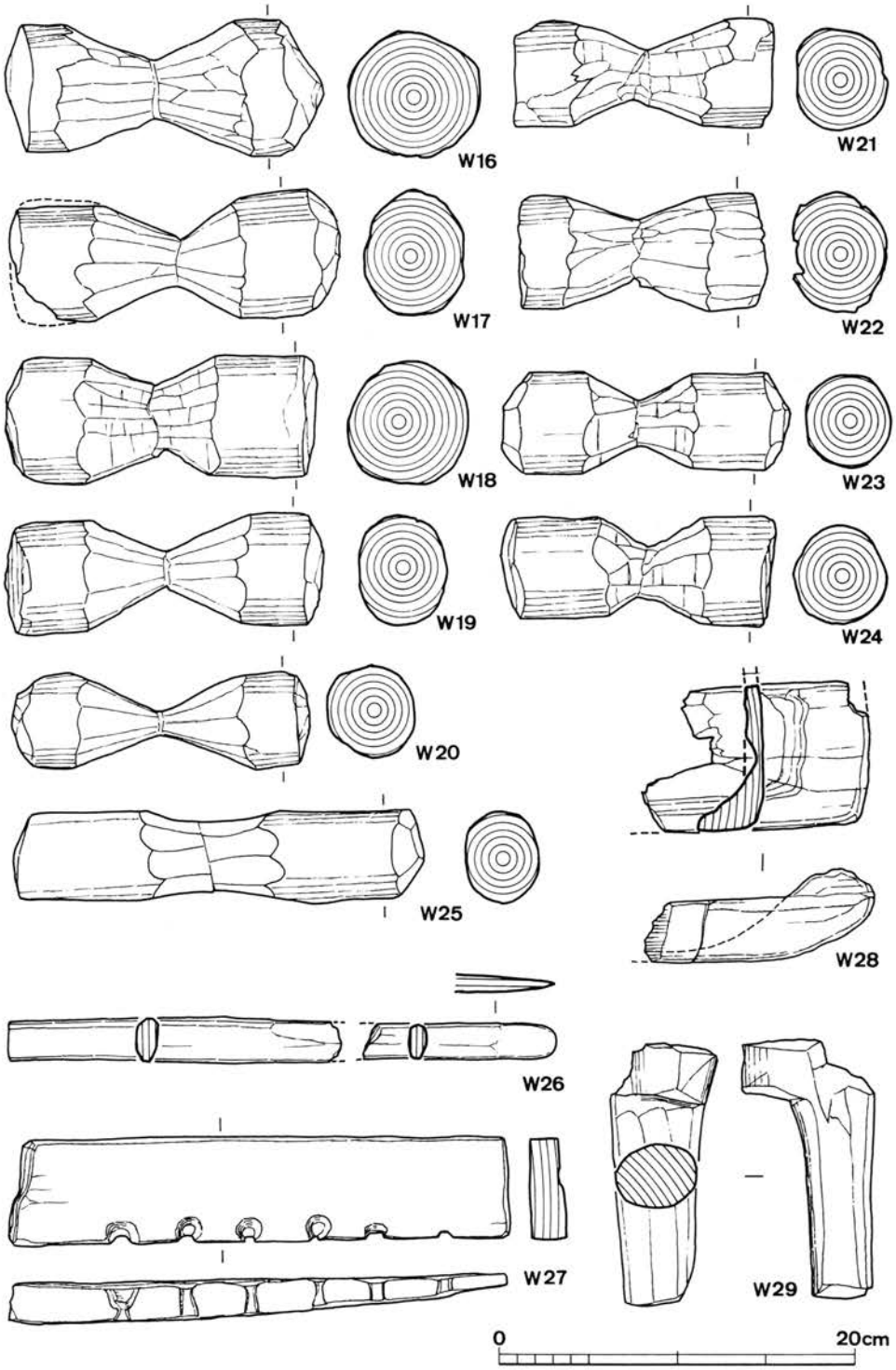
武具

狩猟具ないし武具として，丸木弓(W14・15)2点の出土をみた。いずれも丸木弓の断片であり，一端に弓筈を設けている。丸木を利用し，先端を両側から削り込み，枘状の弓筈を削り出す。

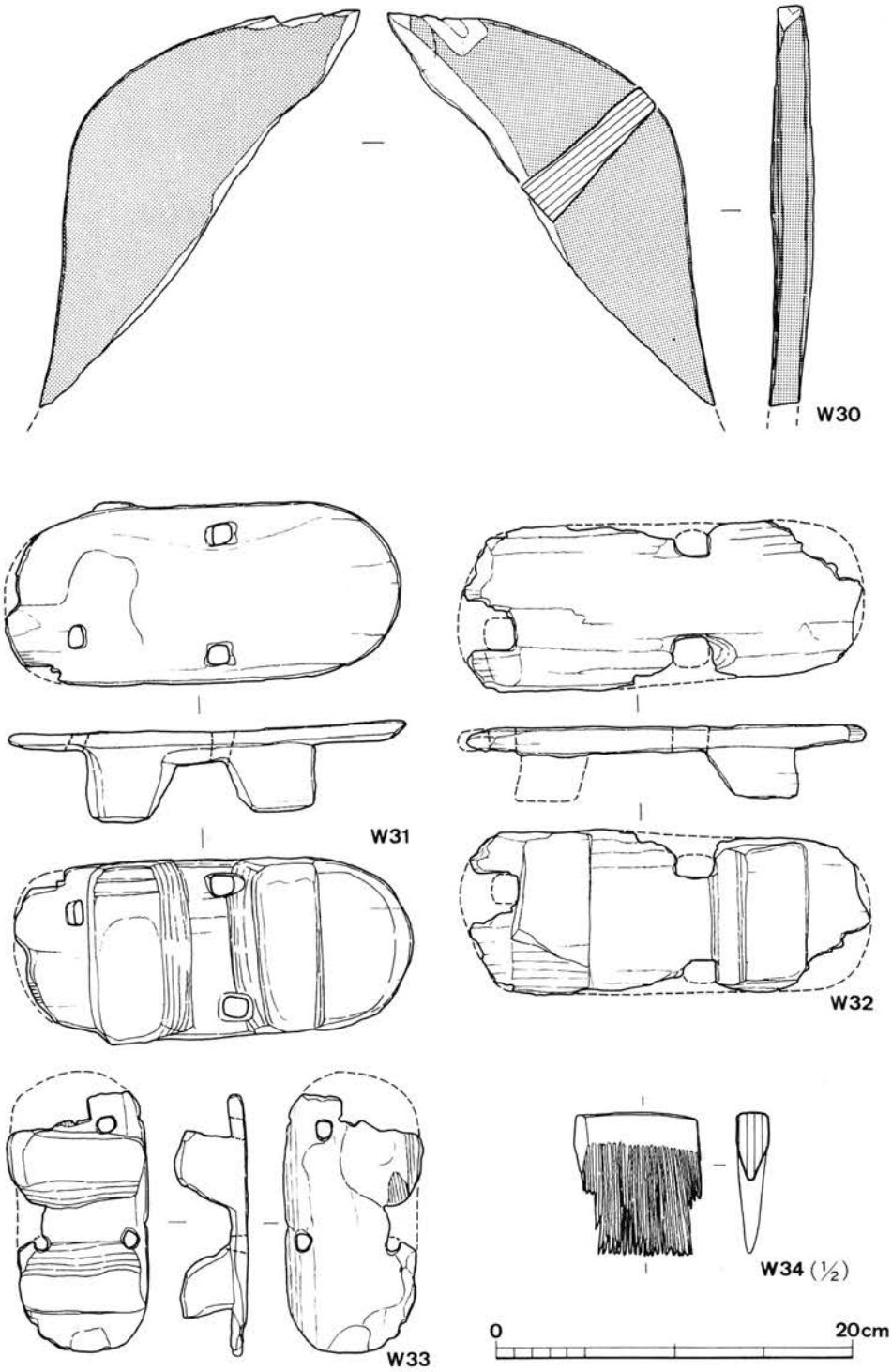
馬具

黒漆塗りの木製鞍(W30)の出土をみている。破損しているが，形状からみて前輪と思われる。居木に接する州浜部分から木目に沿って斜めに割れたものと判断する。現存する鞍橋部分には居木に連結する孔が見当らないことから，孔は欠失部分に設けられていたものとみられる。木地の表面は特に丁寧に仕上げ，表面全体に黒漆を厚く塗っている。樹種は不明である。覆輪等を付けた痕跡は認められない。

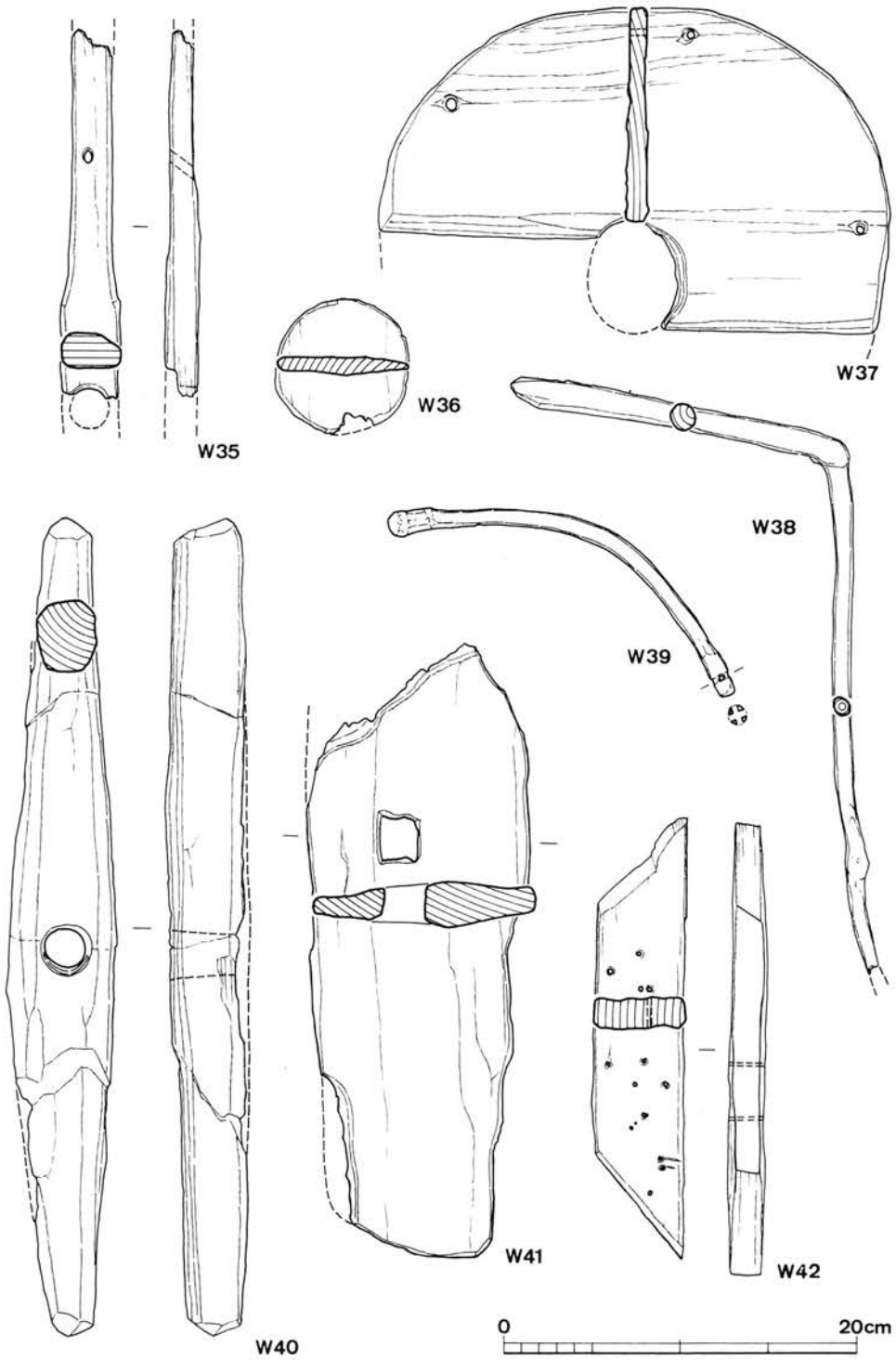
古墳時代の木製鞍としては本例の他，わずか4例が知られているにすぎない。以下出土例をあげると，大阪府百舌陵南遺跡(注6)(5世紀中頃)・奈良県谷遺跡(注7)(5世紀後半)・佐賀県石木遺跡(注8)(6世紀前半)・滋賀県志那湖底遺跡(注9)(古墳時代後期～白鳳時代)がある。以上のほかに時代は下るが，山形県嶋遺跡(注10)(8世紀以降)でも鞍が出土している。なお，嶋遺跡からは



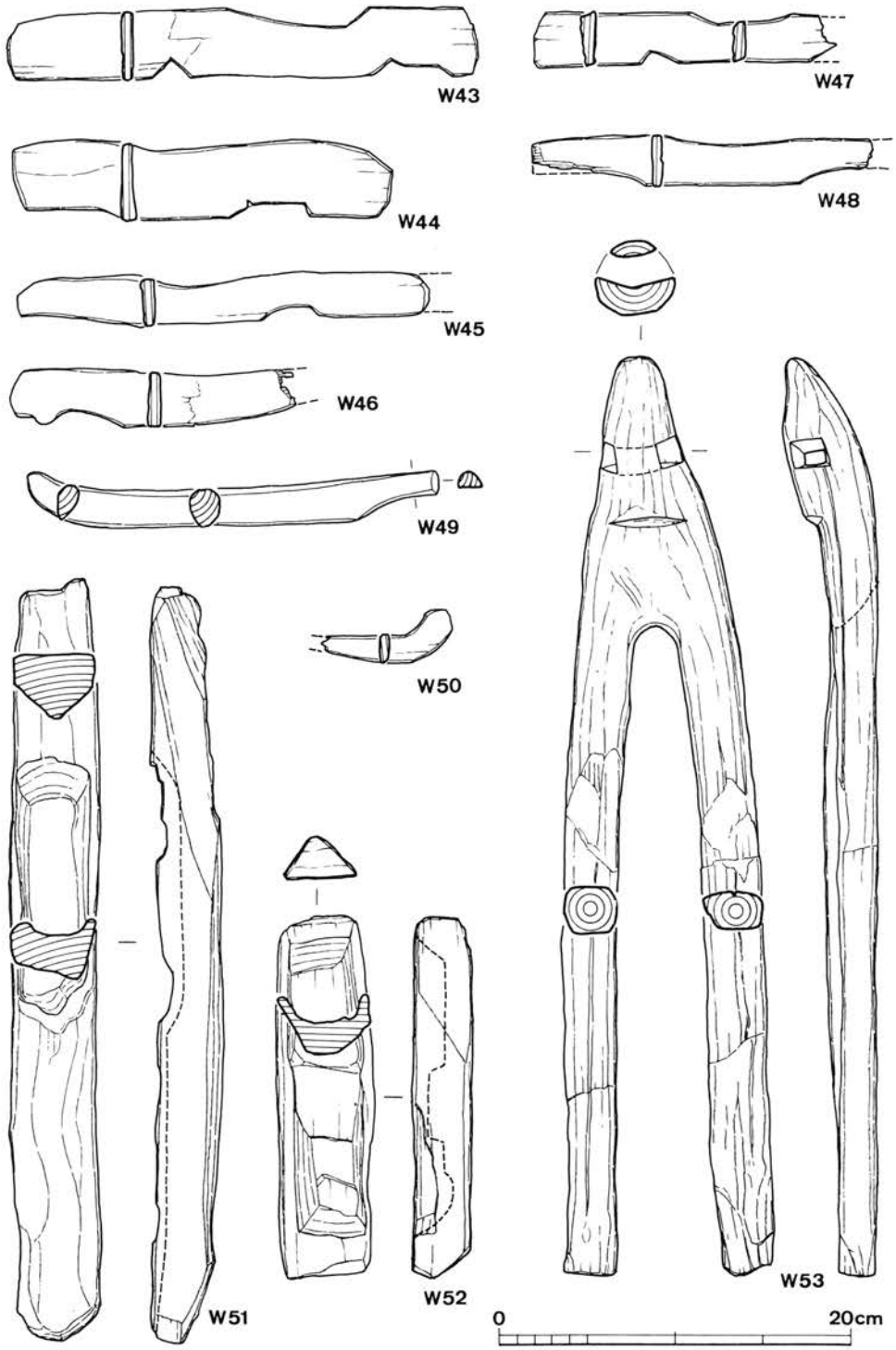
第45図 木 器 実 測 図 (3)



第46図　木　器　実　測　図　(4)



第47図 木 器 実 測 図 (5)



第48図　木　器　実　測　図　(6)

木製壺鐙も出土している。

容器

盤3点の他，容器に付属したとみられる蓋2点の出土をみている。

盤(W28・58・59)はいずれも挽物であり，平面形は方形を呈するものとみられる。部分的な出土であるため全様は不明であるが，平底の盤と推定される。器面は丁寧に仕上げている。

蓋とみなしうるもの(W37・71)2点が出土している。W37は円板の中央にやや大きめの円孔をあけたものである。同様な円孔をもつ蓋としては京都府大藪遺跡[注11]・奈良県の平城宮[注12](6ABO-D区)と白毫寺遺跡[注13]に類例が認められる。

服飾具

服飾具としては下駄4点・櫛1点の出土をみている。

下駄(W31～33)は台と歯を一木からつくりだした連歯下駄である。下駄の鼻緒孔(前壺)は中央から片寄ってあけている。後壺は後歯の前にあけている。歯は台幅よりやや内側から始まり，縦断面は歯の内側が「ハ」の字状に開く形態をとる。いずれも板目材の木表側を上面にする。奈良時代以前の連歯下駄としては本例の他に滋賀県滋賀里遺跡[注14](6世紀末)から18点，奈良県川原寺下層遺跡[注15](7世紀前半)から1点，京都府綾部市睦合町[注16]から1点の出土がみられる。

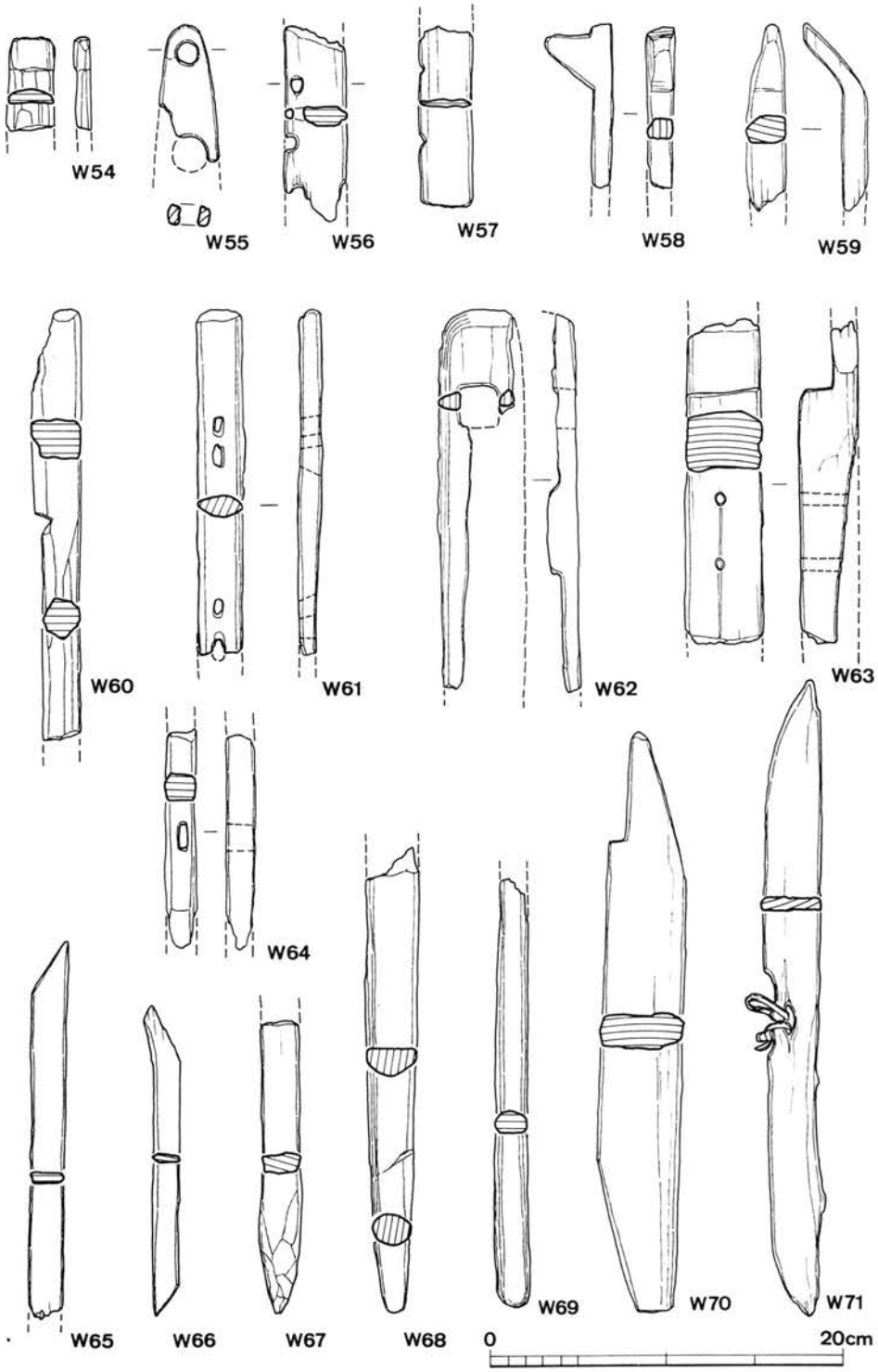
櫛(W34)は横櫛である。櫛の表面は平滑に研ぎあげた精整品である。肩部の形状は両端部を欠失しているため不明であるが，背の円弧の状況からみてやや肩の張る形態をとるものとみられる。

紡織具

枠(W35)が1点出土している。枠は，紡績した糸を綛にするために巻き取る道具である。形態としては「エ」字形を呈するものであり，横木部分の出土をみた。古墳時代の枠は弥生時代の枠に比べ腕木が短く，横長の形態をとる。本例と同様の枠は，同じ京都府古殿遺跡[注17]に類例が認められる。

祭祀具

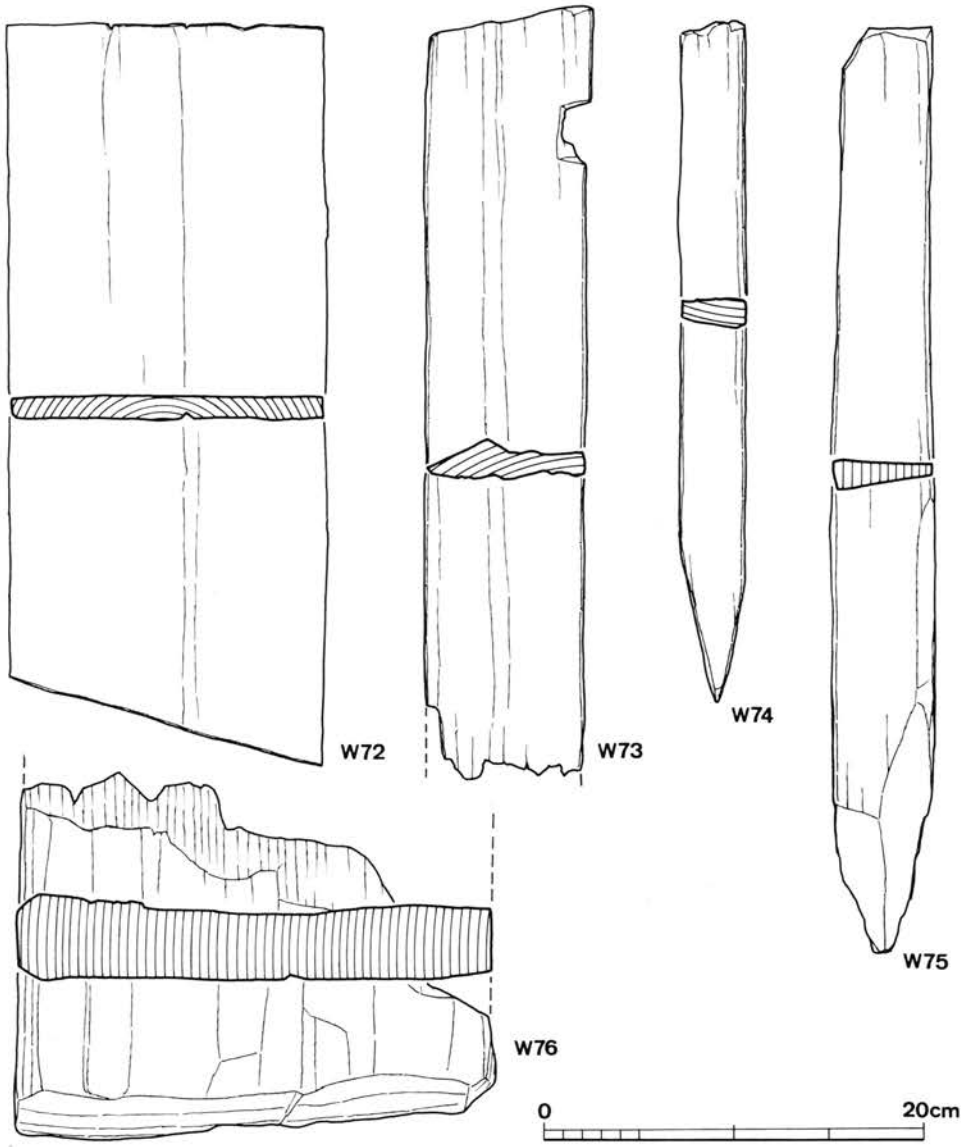
祭祀具と判断される木製品は確実なものだけで13点が出土している。用途不明品の中にも祭祀遺物と思われるものも存在するが，ここでは省くことにする。木製の祭祀具は，実際の器物や禽獣を模したり抽象化したものであり，一般に形代と呼ばれている。今回出土した祭祀具には馬形(W43～48)とみられるもの9点のほか，刀子形(W49)・舟形(W51・52)2点・修羅形(W53)1点が出土している。多くの形代は板を切りぬいてつくる平面的な形態が多いが，刀子形・舟形・修羅形のように立体的な表現をとるものも認められた。馬形


W54
W55
W56
W57
W58
W59
W60
W61
W62
W63
W64
W65
W66
W67
W68
W69
W70
W71
0
20cm

第49図　木　器　実　測　図　(7)

は水神祭祀に使用されたとする見方が一般的であるが，行疫神の乗物とみる説もある。(注18) 刀子形は武器としての機能から，祓の場で罪穢や悪気を打断ったものであろう。舟形・修羅形等は馬形とともに運搬機能をもつものであり，行疫神や罪穢を負った人形等を他界へ運んだとみることもできよう。

修羅は，古墳の石材等の重量物を運搬する用具である。実物として大阪府藤井寺市に所在する中ツ山古墳の陪塚である三ツ塚古墳周溝内から大小2基の修羅の出土をみている。W53の木製品は三つ塚古墳出土の修羅と形態が酷似し，底面には擦過痕跡が認められるこ



第50図 木 器 実 測 図 (8)

とからも，修羅の形代とみることができよう。

雑具

これまでの分類に含まれない器物で，使用目的がある程度推察できるものを雑具とする。

火鑽臼(W27)は板の一側縁に間隔をおいて6か所に切り欠きを設け，うち4か所に火鑽杵を回転させた臼部を上面にとどめる。臼部の断面は半球形を呈し，上面での直径は約1.5cmを測る。

火鑽弓(W40)は形態の特徴から，舞鑽発火に使用した火鑽弓とみることができよう。厚味をもつ中央部に直径約2cmの円孔をあけているところから，この円孔に火鑽棒を通したものと判断される。今回の調査で出土した木製品中には火鑽棒として使用可能な円棒が数点存在したが，確実に火鑽棒として使用した痕跡を残すものはみあたらなかった。

W55はその形態の特徴から自在の可能性が高い。長楕円形を呈する板材の板面に円孔を設けている。円孔に紐縄等を通し，長さの調節を行ったものと推察する。円孔は少なくとも中央と両端部の3か所に設けられていたものとみられる。器表面と円孔部は平滑に仕上げ，すべての角部分は丸味をもたせている。

樹皮紐(W88)が2巻分出土している。桜の樹皮を2～3cmの幅で剝ぎ取り，数10cm分を巻き取っている。今回の出土木製品中，蓋(W71)には幅約6mmの樹皮紐が遺存していたことから，これらの樹皮紐の使用例をうかがうことができた。樹皮紐は容器と蓋のほか，農具・工具等の緊縛等にも使用したものとみられる。

部材

用途を決められないが，他の部材と組み合わせて製品を構成したとみられるものである。板面に紐綴孔と考えられる小円孔をもつもの(W56・61)，枘穴とみられる方形孔をもつもの(W62・64)が出土している。W63は切り欠きのある角材の一部を斜めに削り，他の部材と接合したと考えられ，接合に際しては直径約5mmの木製釘2本を用いている。

建築部材と推定されるものも数点出土している。W73は板材の長側面部に方形の切り込みを入れたものである。板面は調整を行わず，割り取ったままの状態である。小口面は斜方向に落としている。板材の幅は17cmを測るが，元はもう少し大きかったようである。長側面に存在する切り欠きは方形孔であったと推定され，他の板材等との緊縛孔とみられる。この部材は，壁板とみることができよう。W76は竪穴式住居跡の壁板とみられる。幅約25cm・厚み約3～4cmを測る。小口部分は表裏両面からの加工により尖らせている。板面には調整痕が認められるが，丁寧な仕上げは行っていない。

用途不明木製品

他の部材と組み合わさることなく単独で形態を整えているもの，また部分的な出土であ

り現在のところ用途を確定するに至っていないものである。

W38は樹枝の一部に加工を行ったものである。W39は草茎を加工したものである。球形に近い先端部は特に平滑に仕上げ，中央部は細く削り，基部には紐を通したとみられる孔を設けている。この形態をもった遺物の出土例は他にみられない。形態の特徴からみて太鼓等の楽器のスティックとみることもできるが，現時点では確定するには至っていない。W60は祭祀具ともみられるもので，角棒に加工痕が認められ，人形ともみてとれる。W70は部材の可能性もある。

その他・自然遺物

その他の自然遺物としてW26等にみるヘラ状木製品のほか，板材・円棒・角棒・有頭棒状木製品が多数出土している。杭・矢板状木製品の出土も多くみられる。W78は板状木製品であり，W86の有頭杭とともに大溝(溝２)の堰に使用されていたものである。堰部の構築にはこの他に数10本の杭・板材を使用していた。

その他，樹幹・樹枝等の一部に加工痕を残す遺物の出土もみられたが，多くの場合切断痕跡と判断できるものであった。

溝２内には木製遺物のほか，自然遺物も多数遺存していた。W82にみる大形の樹幹のほか，樹枝・木の葉・種子・草茎・サルノコシカケ等各種多様な自然遺物の包蔵がみられた。サルノコシカケは１個体のみの出土であるが流入遺物とみるよりも，人為的な採取品とみることができよう。サルノコシカケは古来より薬用として使用されているものであり，石本遺跡で生活を営んだ人々の生活の一端を窺える資料であろう。

このほか，自然遺物として，動・植物遺体(種子)がある。動物には，ウマ・ウシ・シカ・イノシシ・小動物(ウサギ又はタヌキ)・サメ類(脊椎)等が見られる。

ウマは，左上顎骨・右下顎骨および大臼歯が出土しており，歯冠の磨滅の少ないところから，一体分の幼獣と推定される。ウシは，大腿骨・踵骨。シカは，角の他，膊骨・下顎骨・大腿骨。イノシシは，下顎骨(幼獣)の各部位の骨片が出土している。(注19) 鹿角については，幹部を金属器で切断したものがあり，製品として加工途中のものと思われる(図版第51)。

植物種子には，モモ・トチ・オニグルミおよび小形の種子類がある。モモ核は，総数40点以上が出土している。いずれも，食料として供せられたものと思われる。

(竹原　一彦)

付表5　大溝（溝2）出土木製品観察表

番号	名称	地区*	法量(cm)	形態の特徴	備考
W 1	ナスビ型着柄鍬	14区	全長 50.0 現存幅 17.2 頭部幅 2.3 厚さ 1.0	着柄部の基部と耕起部の刃部からなる。基部は上半が細く，下部は傘状に幅を広げる。基部と刃部の境にナスビのヘタ状の突起をもつ。刃縁は一段削り込み，U字形に成形する。	U字形鉄製鍬先を装着するとみられる。 図版第40
W 2	ナスビ型着柄鍬	3区	全長 44.8 刃部幅 9.0 厚さ 2.1	W1と形態は似るが，厚い作りであり細長い形態をとる。刃縁部には削り込みをもたない。	図版第40
W 3	二叉鍬	9区	現存長 30.1 刃部長 16.2 刃部幅 4.3	着柄部はW1と同一形態をもつ。二叉に分かれる歯は「ハ」字状に開き，先端部は細く丸みをもつ。	図版第40
W 4	柄	8区	現存長 41.4 着身部長10.1 着身部幅 2.8	一木でつくりだしたものである。鍬との着柄部分は内側への切り込みを入れ，滑止め効果を高めている。柄の着身部に対応して紐止めを行ったへこみ痕が2か所に残る。	図版第40 ナスビ型着柄鍬の柄とみられる。
W 5	棒状木製品	3区	現存長 39.6 直径 2.7	表面は面取りにより樹皮を取り去る。先端部は丸く仕上げ，先端から約28cm付近に深い削りによる段をつくる。	図版第40
W 6	横斧柄	3区	現存長 16.0 身部長 10.6 身部幅 3.1 装着部幅 2.6	樹木の幹と枝の股部を利用。斧台は方柱形で中央部が太く，基端部・着装部をやや細めに削る。着装部は周囲から斜めに削り，明瞭な段は設けない。表面は平滑に仕上げる。	図版第40
W 7	槌	3区	全長 32.8 槌部長 16.8 槌部幅 5.2 柄部径 3.0	槌部断面形は方形を呈する。槌部中央の角が浅く凹む。柄部は断面円径を呈する。柄部の先端に顕著な加工は認められない。	図版第41
W 8	斧柄	7区	現存長 18.6 斧台長 15.6 斧台幅 4.5 斧台高 4.8 円孔径 3.2	身部は方柱状を呈するが，中央部がふくらんだ形状をもつ。表面は平滑に仕上げる。斧台中央付近にやや斜方向の円孔を穿つ。斧台から着装部にかけて斜めに削り込む。着装部の断面形は楕円形。表面は平滑に仕上げる。	図版第41
W 9	柄	5区	現存長 12.3 頭部幅 4.7 柄部厚 2.2	扁平な頭部は丸みをもち，頭部下端に長さ3.2cm・幅0.4cmの方形孔を穿つ。頭部と柄部の境は2.5cmの幅に狭める。表面は平滑に仕上げている。	図版第41 鉄鎌の柄とみられる。
W 10	用途不明木製品	9区	現存長 28.5 先端部幅 3.8 先端部厚 1.6 柄部厚 1.6	一方の端部を「7」字状に加工し中央部に長さ2.6cm・幅0.5cmの方形孔を開け，板材を通している。先端部は丸く仕上げる。柄状部分は断面楕円形を呈する。表面は比較的粗いまま仕上げている。	図版第41
W 11	杵	18区	現存長 38.0 搗部長 33.6 搗部径 7.6 握部径 3.2	搗部のみ出土。搗部断面は楕円形。搗部先端に向って太くする。搗部と握部は段をつけて区分される。加工方向は木目と同一方向。丁寧な加工。	図版第41 搗部先端は使用のため磨滅

番号	名称	地区	法量(cm)	形態の特徴	備考
W 12	杵	13区	現存長 41.8 搗部長 35.9 搗部径 8.5 握部径 3.2	搗部のみ出土。搗部断面は楕円形。搗部と握部は段をつけて区分される。加工方向は木目と同一方向。丁寧な加工。	図版第41 搗部先端は使用のため磨滅
W 13	鋤状木製品	11区	全長 49.8 身部長 23.8 身部幅 11.8 身部厚 2.8 柄部幅 4.0	柄部から身部にかけて傘状に開く。身部から先端部にかけて厚みは薄くなる。身の先端部は直線的な面を残すが両肩部は丸く仕上げる。身部の中央先端寄りに段をもつところから，鉄製U字形鋤先が装着されていた可能性が高い。	図版第40
W 14	弓	9区	現存長 26.3 最大径 2.3	弓筈付近のみ残存。弓筈頭の両側面を削り落し，段をつけて扁平な突起をつくりだす。弓身部の断面は円形を呈する。	図版第41
W 15	弓	13区	現存長 27.4 最大径 3.0	W14と同一形態	図版第41 収縮により弓筈頭が割れる。
W 16 〜 24	槌の子	3区 6区 10区 14区 16〜 18区	全長 14.1〜18.8 身部径 5.4〜7.1 頸部径 1.3〜3.9	心持材。中央部は周囲から斜方向に削り込み，鼓形の器形をつくる。両端部は，直線的なもの（W21タイプ）と丸みをもつ（W16タイプ）の2形態が認められる。丁寧な加工。	図版第42
W 25	槌の子	17区	全長 23.3 身部径 5.2 頸部径 4.1	心持材。中央部に浅い削り込みを巡らせ，頸部をつくる。加工は簡単。	図版第42
W 26	ヘラ状木製品	8区	現存長 29.8 幅 2.6 厚み 1.2	先端部は表裏両面から削り込み，扁平で丸く仕上げる。	
W 27	火鑽臼	5区	全長 28.4 幅 6.1 厚み0.8〜2.3	板材の一側面に3.5cmの間隔で6か所に方形の抉り込みをもつ。	図版第47 4か所に火鑽痕跡を認める。
W 28	盤	7区	現存長 14.6 現存幅 8.1 高さ 5.3	身の平面は方形を呈するとみられる。体部の側面は垂直に立ち上がるが，小口方向はカーブを描いて立ち上がる。くり込みは深く，底の厚みは薄く仕上げる。	図版第47
W 29	用途不明木製品	6区	現存長 14.9 柄部長 11.6 柄部径 4.6	面取りした柄状部分の断面は楕円形を呈する。上端部に身部の一部が残る。	図版第47 横槌か？
W 30	鞍	11区	現存高 21.8 現存幅 18.4 厚み 1.5〜2.8	破損品であり居木との接合部を欠く。頂部から肩部にかけてはゆるやかなカーブを描く。垂直に下降する側面は下端で外反する。器壁は内から外方へ向って薄く仕上げる。木地面は特に平滑に仕上げ，黒漆を全面に塗布する。	図版第43 前輪とみられる。
W 31 〜 33	下駄	9区 13区 16区	全長 22.0〜22.6 幅 9.2〜10.1 高さ4.2〜5.2 台部厚 1.0〜1.6	連歯下駄。板材を鋸で切り込み，のみで割り取り，歯を作る。歯内側の面取りは斜方向であり，「ハ」の字状を呈する。台部は前後の縁辺を丸く削り上げる。鼻緒孔は前歯の前面に接し，中央より左に片寄って穿たれる。孔は方形。	図版第43 右足用

番号	名　　称	地区	法　量(cm)	形　態　の　特　徴	備　　考
W 34	横　　櫛	不明	最大長　3.5 現存幅　4.0 最大厚　0.9	棟部は平坦な面をもち，弧を描く。歯は両側から鋸挽きし，目は密である。	図版第43
W 35	棒	11区	現存長　20.5 腕部幅　2.4 腕部厚　1.3	横木部のみ出土。腕部分は幅・厚みとも中央部より細く削り込む。肥厚させた中央部には腕木が接合する直径2.3cmの円形枘穴をもつ。	図版第44
W 36	円　形　板	5区	直径　7.6 最大厚　1.1	柾目板。平面は正円形に近く，断面は丸みを帯びた長方形を呈する。一端を欠く。	図版第44
W 37	蓋　　板	18区	直径　29.2 厚み　1.1	やや角張った円形を呈すものとみられる。中央付近に長径7cm・短径5cm前後の楕円形孔を開ける。外周から1.5cm内側に直径6mmの小孔を3か所穿つ。	図版第44
W 38	用途不明木製品	5区	現存長　48.2 直径1.0～1.7	樹枝に加工痕を認める。一本の支枝を残し上部を取り去る。直角に曲るコーナーと先端部は丁寧に丸く仕上げる。	図版第44
W 39	用途不明木製品	8区	全長　23.8 頭部径　1.4 茎部径　1.0	直径約1.2cmの草茎を加工。両端部を長さ約2.6cm削り残し，頭部と基部をつくる。頭部は支根部のふくらみを利用し，球形に仕上げる。基部には直交して交差する小孔を穿つ。丁寧に仕上げる。	図版第44
W 40	用途不明木製品	6区	全長　46.3 最大幅　6.1 端部径 2.5～4.0 円孔径　2.0	かつお節形に加工。中央から両端にかけて細く削り込む。中央付近にやや片寄って垂直方向の円孔を穿つ。	図版第44 火鑽弓か？
W 41	有孔板状木製品	17区	全長　34.6 現存幅　12.8 最大厚　2.6	小口の一端からやや入った箇所に方形孔を1個穿つ。一方の小口は斜めに切り落とす。板面には手斧等による加工痕をよく残す。長側縁部分は薄く仕上げる。	図版第44 田下駄の破損品ともみられる。
W 42	板状木製品	3区	全長　25.1 幅　5.2 厚み　1.0	柾目材。 平面形は扁平な台形状を呈する。板面には小孔が多数認められるが，虫喰い穴ともみられる。	図版第44
W 43 ～ 48	馬　　形	3区 4区 7区 ～ 8区 17区	全長 21.7～26.6 高さ2.6～4.4 厚み　0.5	扁平な板材の周囲を切りぬいて形を整える。板材の上辺中央付近に1か所，下辺に2か所の切り込みを入れ，頭・胴・尾部をつくり出す。切り込みの形状により頭・胴・尾が明確なものと簡略的なものが認められる。	図版第45
W 49	刀子形木製品	4区	全長　23.6 刃長　19.0 刀身幅　2.2 刀身厚　1.8	刀身断面形は逆涙滴形をなす。切先は大きく反り返る。刃部から茎にかけては，下部をなだらかに削り込む。茎部断面形はカマボコ状を呈する。丁寧な加工。	図版第45
W 50	用途不明木製品	16区	現存長　7.5 幅　1.6 厚み　0.5	扁平な板材の周囲を切り取る。一端はやや幅を広め，大きなカーブを描いて曲がる形をもつ。	形代か？

番号	名称	地区	法量(cm)	形態の特徴	備考
W 51	舟形木製品	17区	全長 43.2 幅 4.8 高さ 3.6	構造船の形態を模す。舳先は幅をやや狭め，底部は斜めに削り落とす。舳先の断面形は逆三角形を呈す。舟底の形態は平底を呈す。上面の中央部舳先寄りに長さ15.1cm・深さ15cmの刳り込み部をもつ。	図版第45
W 52	舟形木製品	17区	全長 20.6 幅 5.4 高さ 3.3	構造船の形態を模す。舳先は幅をやや狭め，舳先の断面形は逆三角形を呈す。舟底の形態は平底をなす。上部からの刳り込みは中央部を高く残し，前後を深める。刳り込み部は粗い仕上げのまま残す。	
W 53	修羅形木製品	10区	全長 52.1 二叉部長36.8 〃 幅 3.4 〃 高 2.7	基部は尖りぎみに上方へ緩やかなカーブを描きながら立ち上がる。基部先端から約6cm付近に，方形孔を横に通す形で穿つ。基部中央の上面は段をつけて削り，二叉先端まで平坦面をつくる。2本の方柱部は，側面はやや丸みをもつが，上下両面は平坦である。	図版第45 修羅の形代？ 樹幹の二叉部を利用。 底面に擦過痕跡。
W 54	有頭板状木製品	不明	現存長 5.3 幅 2.6 頭部厚 0.9	裏面は平坦で，断面形は低いカマボコ状をなす。表面の上端に方形の有頭部を削り残す。端部は直線的に終る。	図版第46
W 55	用途不明木製品	不明	現存長 7.6 厚み 1.1 推定最大幅 3.8	扁平な板材の中央部が幅広で，両端部は細く丸く終る形態をとると考えられる。中央部に直径約2cm・両端部に直径約1.2cmの円孔をもつとみられる。器面は特に平滑に仕上げる。	図版第46 「自在」か？
W 56	部材	11区	現存長 10.6 幅 3.5 最大厚 1.1	断面三角形を呈する板材。厚みを減じる一方の側縁付近に，直径0.7cmの方形孔を3か所に穿つ。各孔間は3cm前後を測る。	図版第46
W 57	目盛板	11区	現存長 9.8 幅 3.2 厚み 0.5	扁平な板材の一側縁に「V」字状の切り込みを2か所にもつ。切り込みは約4cmの間隔をとる。	図版第46
W 58	盤	5区	現存長 9.4 現存幅 1.4 高さ 3.8 底部厚 1.0	柾目材。小口の側面は底部から段をもって5mm程内へ入り，垂直に立ち上がる。内面は斜方向に削り込み，底は平底をなす。	図版第46
W 59	盤	18区	現存長 10.6 現存幅 2.1 高さ 3.5	平坦な底部から斜め上方に立ち上がる器形をもつ。側面部の器壁は約1cmの厚みをもち，底部の厚みは1.5cmを測る。	図版第46 盤の一部？
W 60	用途不明木製品	8区	全長 24.2 頭部幅 2.8 基部径 2.0	方柱状の板材中央部の一面に「V」字形の切り込みを入れ，頭部と基部を分ける。頭部は上端の一面(切り込み面)を斜めに削る。基部は方柱の角を面取りし，円棒状を呈す。	図版第46 形代か？
W 61	部材	5区	現存長 19.6 幅 2.6 厚み 1.1	断面形はレンズ状をなす棒状木製品である。2孔一対の方形孔を2か所に穿つ。一対の孔は端部から約7cm付近に穿たれる。一対の孔は約1cmの間隔をもつ。約7cmの間隔を置いてさらに2孔一対の孔が存在する。	図版第46 柾目材

番号	名　　称	地区	法　量(cm)	形態の特徴	備　　考
W 62	部　　材	18区	現存長 21.3 現存幅 4.2 厚さ 1.1 孔 2.1×2.1	裏面は欠損。表面は平滑に仕上げ，小口部は周囲に丸みをもつ。小口端から5.5cm内側の板面に方形孔を穿つ。方形孔のさらに内側，8.3cmの間隔をおいて，細長い方形孔を横方向に穿ち，枘穴を通す。	図版第46 (裏面)
W 63	部　　材	3区	現存長 18.2 幅 4.3 最大厚 3.4 木釘径 0.7	部材接合部のみ出土。接合部は板面を斜めに削る。2か所で木釘による接合。接合点から2.6cm離れた外面には，「相欠接」の切り込みをもつ。	図版第47
W 64	部　　材	10区	現存長 12.1 幅 2.8 厚み 2.6	方形の柱状材。板目の中央に長さ2.6cm・幅0.5cmの枘穴を通す。	図版第46
W 65	用途不明木製品	18区	現存長 21.4 幅 2.0 厚み 0.6	扁平な板材の一端を斜めに切り取る。	
W 66	用途不明木製品	13区	全長 17.6 幅 1.4 厚み 0.5	扁平な板材の両端を斜めに落とし，台形状の板材を切り取る。底辺は一方の端を残して内側へ削り込む。	
W 67	角杭状木製品	10区	現存長 16.6 幅 2.2 厚み 1.2	細長い板材の一端を面取りし，尖らせる。	図版第47
W 68	円棒状木製品	3区	全長 26.1 幅 3.1	断面は円形。先端部は丸みをもって尖らせる。表面は丁寧に仕上げる。	図版第47 身部は半欠損
W 69	円棒状木製品	13区	全長 24.2 幅 1.9	断面は楕円形。端部は丸く仕上げる。	
W 70	用途不明木製品	11区	全長 32.6 幅 4.8 厚み 2.0	両端の小口面は，交差関係をもつ一方の対角を斜めにカットする。平面形は平行四辺形に近い形状をもつ。一方の小口部分は，残る角部を長さ6.0cm・幅1.0cmの大きさで「L」字状に切り取る。加工は丁寧である。	図版第47 部材ともみられる。
W 71	蓋　　板	11区	現存長 36.0 現存幅 3.4 厚み 0.8	原形は円形に近いものとみられる。推定直径は約38cm。周縁の一部を直線的にカットし，中央部に紐綴じ穴を穿つ。綴紐として桜の樹皮(幅6mm)が2本残る。	図版第47
W 72	板　　材	不明	全長 38.6 幅 18.6 厚み 1.2	幅の広い板材である。一方の小口は斜めに切り取る。表裏両面とも平坦に整える。	図版第48
W 73	板　　材	3区	現存長 40.2 現存幅 8.8 最大厚 2.0	小口部分はやや斜めに切り取る。側面部は約46°の角度で斜めに削る。小口端から内側5cmに紐綴り孔とみられる方形孔を穿つ。板面は加工を施さず，割板のまま残す。	図版第48 建築部材（壁板？）
W 74	杭	6区	現存長 35.6 幅 3.8 厚み 1.5	細長い板材の一方の小口部を，両側面から斜めに削り，先端を尖らせる。	

番号	名称	地区	法量(cm)	形態の特徴	備考
W 75	杭	17区	現存長 48.6 幅 5.4 最大幅 1.4	細長い板材の一方の小口部を削りによって尖らせる。	図版第48
W 76	壁板	8区	現存長 18.6 幅 25.3 厚み 3.6	表裏両面に調整痕を多数残す。下端の小口は表裏両面からのハツリにより尖らせる。	竪穴式住居跡の壁板？
W 77	角杭様木製品	5区	現存長 48.1 幅 4.1 厚み 1.8	先端部は両側面からの削りにより尖らせる。先端から上方10.7cm付近の1側面に方形の抉りをもつ。	図版第48
W 78	堰板	5区	全長 96 最大幅 16.5 厚み 2	細長い砲弾形の平面形をもつ。先端部から約20cm内側に杭止めの方形孔を穿つ。	図版第48 有頭杭W86で止める。
W 79〜81	棒状木製品		全長110〜140 幅 5前後 厚さ 3前後	断面は方形。比較的丁寧な加工を行う。	図版第48
W 82	樹幹（柱）	15区〜16区	現存長 115 直径 25	顕著な加工はみられない。 半截丸太材。	図版第48
W 83	叉鍬	4区	現存長 30.5 幅 6 厚み 1	二叉部の上部は外側面を削り，なだらかな肩部をつくる。先端部は細く外側面は緩やかな円弧を描く。平滑に仕上げる。	図版第49
W 84	用途不明木製品	5区	全長 31.2 現存幅 19 厚み0.6〜1.5	一方の板面の上部⅓は，低い突起部をもつ。上部の角は丸く仕上げる。上端部の中央付近に直径3cmの円孔をもつ。	図版第49
W 85	用途不明木製品	3区	現存長 81.2 支枝部長 20	樹皮の二叉部を利用，二叉の基部を斜めに切り落とす。支枝の先端を尖らせる。	図版第49
W 86	有頭杭	5区	現存長 16.2 幅 3.2	角材の上端からやや下がった所を浅く削り頭部を削り出す。	図版第49 堰板W78を固定。
W 87	有頭棒	7区	現存長 10.5 頭部径 3 直径 2	削り出しによる円形の頭部をもつ。頭部の断面形はやや楕円形を呈する。	図版第49
W 88	樹皮紐	10区	全長 30前後 幅 1.5	桜の樹皮。1.5cmの幅で巻き取る。他にもう1点出土。	図版第49
W 89	用途不明木製品	11区	現存長 7.5 幅 3.5 厚み 0.5	刀の切先状の形態をもつ。刃部は緩やかな弧を描く。	図版第49

＊ 木器取り上げ地区，第12図(大溝)地区割図による。

注1　渡辺　誠「もじり編み用木製錘の考古資料について」(『考古学雑誌』66-4　日本考古学会)　1981
注2　注1による。
注3　斎藤　忠・辰巳　均他「伊場遺跡遺物編1」(『伊場遺跡発掘調査報告書』第3冊　浜松市教育委員会)　1978
注4　柏倉亮吉他『嶋遺跡』山形県教育委員会　1964
注5　注1による。
注6　神谷正弘氏(高石市教育委員会)の御教示による。
注7　「榛原町谷遺跡」(『奈良県遺跡調査概報』奈良県立橿原考古学研究所)　1985
注8　「石木遺跡」(『佐賀県文化財調査報告書』第35集　佐賀県教育委員会)　1976
注9　奈良俊哉「志那湖底遺跡」(『滋賀文化財だより』110　(財)滋賀県文化財保護協会)　1986
注10　注4に同じ。
注11　梅川光隆『大藪遺跡発掘調査報告』六勝寺研究会　1973
注12　岡田茂弘「木製品・金属製品」(『平城宮跡発掘調査報告』Ⅳ　奈良国立文化財研究所学報第17冊)　1966
注13　中井一夫他「白毫寺遺跡」(『奈良県遺跡調査概報』1982年度第1分冊　奈良県立橿原考古学研究所)　1983
注14　田辺昭三他『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会　1973
注15　奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報第9冊)　1960
注16　渡辺　誠「京都府綾部市睦合町出土の古代下駄」(『古代文化』10　(財)古代學協會)　1978
注17　平良泰久他「古殿遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』京都府教育委員会)　1978
注18　水野正好「祭祀と儀礼」『古代史発掘』10　講談社　1974
注19　角・歯・部分骨の表面には，保存に良好な土壌中(水分が多く，酸性が低い)に埋没した場合にみられる，ビビアナイト(藍鉄鉱)の付着が認められる。

第5章　総　　括

第1節　石本遺跡の変遷

今回の調査では，弥生時代から中・近世に至る各時期の遺構や多種多量の遺物が検出され，当初の予想を越える多大の成果を得ることができた。調査によって判明した事実は，単に福知山盆地内に留まらず，京都北部における集落跡の研究に寄与するところが大きいものと思われる。しかしながら，個々の資料については，その内在する問題が多岐にわたっており，今後，さまざまな方面からの検討が必要とされる。ここでは，各時期の遺構の変遷を通して，調査成果の要約と今後の課題等について，整理しておくに留めておきたい。

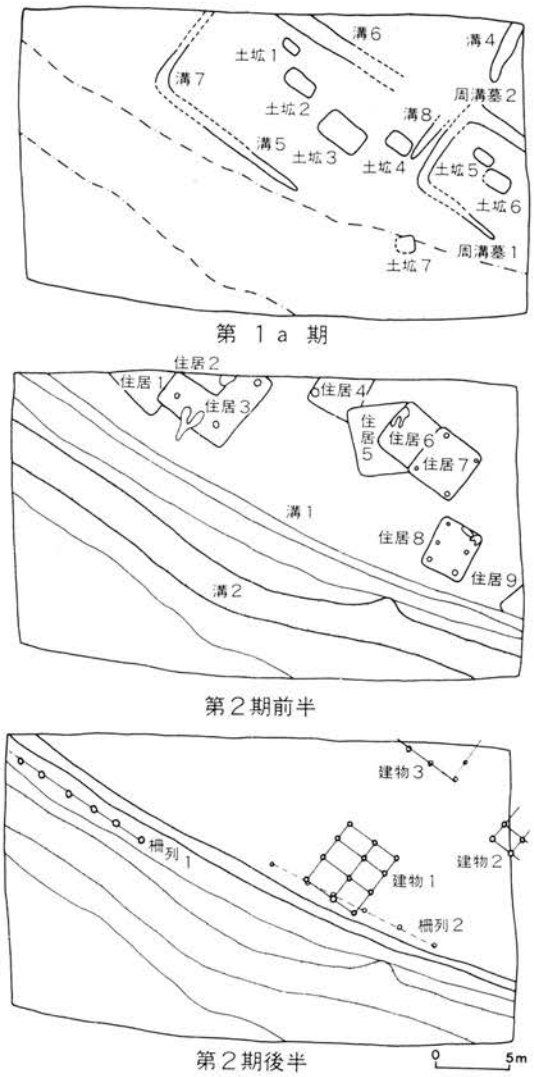
今回調査によって検出した遺構は，概ね，弥生時代と古墳時代の2時期が中心であり，この遺跡の変遷上，それぞれ大きな画期となる。以下，弥生時代の遺構を第1期，古墳時代の遺構を第2期とするが，各時期内においても細かな遺構の変遷が窺われる(第51図)。

第1期以前

まず，第1期以前(弥生時代以前)について若干ふれておくと，今回の調査地からは，縄文時代後期の土器片が出土している。包含層からの断片的な出土資料であり，また，調査地内においても同時期の遺構は確認されていないが，周辺部に同時代の遺跡が存在する可能性が高い。当遺跡より下流の由良川流域部では，舞鶴市志高遺跡・桑飼下遺跡・大江町三河宮の下遺跡等の縄文早・前期から晩期に至る著名な縄文遺跡が分布しており，京都府下においても縄文遺跡の密度の濃い地域として注目される。これらの遺跡は，いずれも自然堤防上に占地しており，石本遺跡が，それよりやや低い自然堤防状の微高地上に位置するものの，共通した立地環境を有している。福知山市域では，武者ケ谷遺跡(草創期)[注1]・半田遺跡(中期・後期)[注2]等が知られているが，これまで縄文遺跡の確認されていない由良川縁辺の平地部についても，今後，遺跡の存在について注意を払う必要があろう。

第1期

遺跡として明確になる時期である。この時期は，方形周溝墓および土坑(墓)群からなる弥生時代中期(第Ⅲ新・Ⅳ様式)の墓地(墓域)としての性格をもつ時期(a期)と，円形竪穴式住居跡によって構成される，弥生時代末から古墳時代初頭の集落(居住域)の時期(b期)に大別される。また，調査地A・B地区は前者，C地区は後者の遺構群からなり，それぞれの時期・性格によって地点の移動があったことが窺われる。



第1a期

第2期前半

第2期後半

第51図　A地区遺構変遷図

a 期

方形周溝墓　A・B両地区で検出した方形周溝墓は，大きく削平を受けていたが，一辺約7m前後の規模をもち，隣接する周溝墓の一辺の溝を共有するものであることが判明した。また，陸橋部の存在が窺われる。埋葬施設については，不明な部分が多いが，中央部の主体部と周辺の従属する埋葬施設からなり，一部で溝内埋葬の存在も推測される。周溝墓の覆土については，おそらく埋葬施設のみを覆うような低平なものであったと推測される。今回の調査では，周溝墓の確認は不明なものを含め3基に留まったが，周辺の地形からみて南東方向へ群を形成するものと思われる。溝内出土の供献土器には，壺・甕があり，いずれも，畿内第Ⅲ新から第Ⅳ様式の弥生時代中期中葉から後半に属するものである。由良川流域におけるこの時期の土器様相については，すでに知られているように，瀬戸内地域東部，特に兵庫県播磨地域と類似する。兵庫県側の丹波・但馬地域と福知山盆地とを結ぶ古代の交通路は，幾本か想定されるが，概ね，円山川―牧川―由良川ルートと加古川―竹田川・土師川―由良川ルートが水系による代表的なものである。今回出土の土器中にも，周辺地域からの搬入品と思われるものがあり，交流の一端が窺われる。

福知山市域における方形周溝墓の調査は，これまで宮遺跡(注3)で確認されたものが唯一のものであったが，今回，新たな調査例を加えることができ，この地方における弥生時代墓制について新たな知見を得た。宮遺跡の方形周溝墓については，築造時期，溝共有の形態等，石本遺跡例と共通する要素をもつが，宮遺跡例が丘陵腹に立地しており，また，2基のみ

の小規模な単位からなるとみられるなど，相違する点もある。由良川下流域では，舞鶴市志高遺跡において，中期(第Ⅲ様式・第Ⅳ様式)から古墳時代初頭に至る20数基の方形周溝墓が調査されており，この遺跡の位置する丹後南東部においても弥生時代の一般的な墓制として広く採用されていたことが窺われる。志高遺跡の方形周溝墓は，独立して存在するもの，溝を共有するものの二類に形態上分けられる。主体部はいずれも単独であり，沖積地の自然堤防上に立地する点など，石本遺跡例と共通する要素もみられる。特に，弥生時代中期のものについては，各々の溝を共有して一群を形成すること，大型のものが群構成の核になることなど，興味ある指摘がなされている。このほか，京都府北部の方形周溝墓は，峰山町カジヤ遺跡(注4)など丹後の中心地域でも確認されているが，丹後地域に関しては，本来，山陰・北陸等の日本海沿岸地域と同じく，弥生時代全般を通じて方形台状墓の卓越する地域であり，後期段階には，福知山市豊富谷遺跡例(注5)のように丹波(由良川中流域)にも，その影響を及ぼしている。方形周溝墓については，先ず畿内中央部で採用され，その後，周辺の各地域に広まっていったものと推察されているが，この地方への伝播経路に関しては，地理的にも近い関係にある兵庫県側丹波地域の篠山町藤岡山遺跡(中期)や同春日町七日市遺跡(中期)での調査例から窺われるように，加古川上流から竹田川～由良川の移入経路が想定される。すなわち，方形周溝墓の伝播に際しても，先にふれた中期土器の様相と同様，播磨地域との密接な関連が考えられよう。

今回，石本遺跡で検出した方形周溝墓については，墓地を形成した集団の居住地が確認されておらず，また，弥生時代中期以後の墓地の有無等，課題も多く，今後の周辺部の調査がまたれるところである。

土坑墓群　A地区で検出した土坑群については，遺構の説明で述べたように埋葬施設に係わるものと思われる。方形周溝墓と同様，主軸の方向を北東から南東に置き，平面形態は，概ね隅丸長方形を呈している。この内，最大の土坑３は，長さ3m以上の規模を測り，二段墓坑を持つ。棺の痕跡等不明確であるが，内部に組合式木棺を埋納したものであろう。遺跡の説明で触れたように，この土坑(墓)群を取り囲む形で，南を除く三方に溝が巡る。攪乱が激しく，痕跡のみが辿れる状態であるが，東西10m・南北18m程度の方形区画が想定される。これを一基の大型方形周溝墓と見ることも可能であるが，検出状況で判断する限りでは，土坑墓群からなる墓域の一角を区画するための溝と考えておきたい。溝内からは，完形の甕が出土しており，方形周溝墓での供献土器のあり方と共通する。なお，前述した方形周溝墓の造営対象が，中央部に葬られる個人であるのに対し，ここでは複数の埋葬者を対象にしており，家族墓ないし同族墓的な性格が浮かび上がる。いずれにせよ，土坑墓群の被葬者の性格や方形周溝墓の被葬者との関係，また，台状墓を営む集団との差異

等については，今後の課題である。

b期

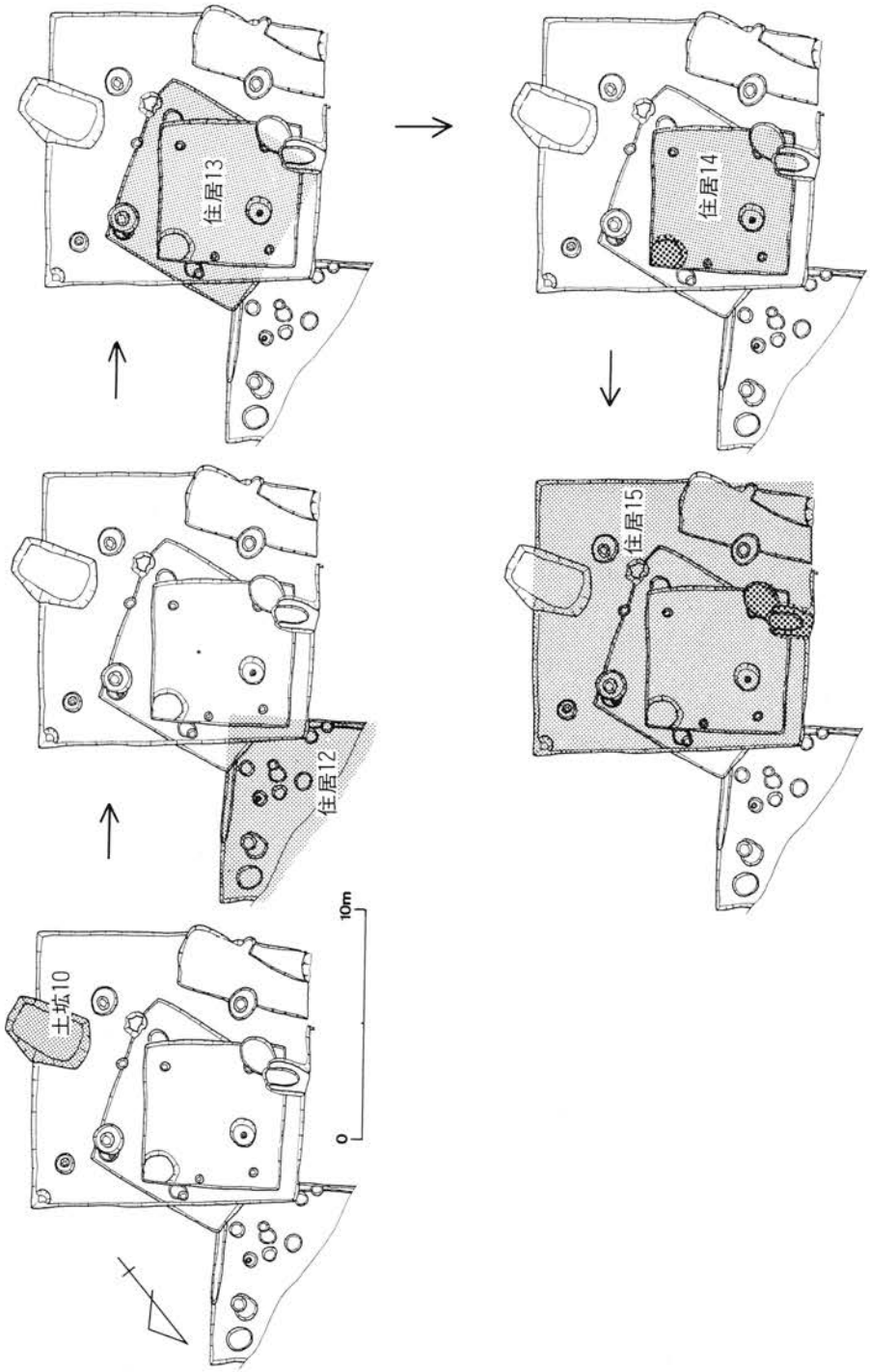
弥生時代中期段階に墓地として利用された後，弥生時代末から古墳時代初頭(畿内庄内並行期)には，C地区に住居が営まれる。今回検出した住居跡は，2基とも円形竪穴式住居跡であり，京都府北部では，この時期の住居跡の調査例として貴重な資料となった。特に残存具合の良好であった住居16からは，ヤリガンナと思われる鉄器類が出土しており，遺存例の稀な住居内出土の鉄器資料として重要である。住居は，前代の墓地域とは対称的に，地光寺山縁辺の高燥地に営まれており，水害に対しての備えを思わせる。ただ，この時期に属する口縁部に擬凹線を施す土器片は，A地区の古墳時代溝(大溝)からも多数検出されており，今回の調査地では明確な遺構は検出されていないが，北側平坦部にも住居が広がっていた可能性がある。

なお，福知山盆地における弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器の様相については，古墳文化の導入と絡んで重要な研究課題であるが，これまで，調査例が乏しく不明な部分が多かった。今回，主に包含層からの出土ではあるが，比較的まとまった資料を得ることができた。今後の研究に寄与するものと思われる。石本遺跡では，この時期以降，6世紀段階に至るまで遺構・遺物等は確認されておらず，空白の時期となる。

第2期

古墳時代後期の集落が営まれる時期であり，石本遺跡が最も隆盛を極める時期に相当する。実年代では，ほぼ6世紀後半代を中心に，7世紀中頃までの期間が含まれる。竪穴式住居跡群と，それを限る大溝によって構成されるが，竪穴式住居跡は，後半，掘立柱建物に変遷していく。

竪穴式住居跡　竪穴式住居跡は，今回16基を検出した。隅丸ないし方形の平面形をもち，群中最大の15号住居跡で，一辺の規模約6m(床面積36m²)，最小の4号住居跡で約3.1m(床面積約10m²)を測る。内部施設としては，造り付けカマドを付設するが，住居一辺の中央に造るものと，住居の隅角付近に造るものの二つの形態がある。特に，隅に造るものは，住居規模の比較的小さいものにみられる傾向がある(住居4・8・10)。また，住居規模の大きいもの(住居3・15)は，中央に炉を付設しており，住居規模により内部の施設が異なることが窺われる。その他，張り床・貯蔵穴・台石等を持つものもある。住居跡は，頻繁に建て替えの跡が認められる。建て替えには，二つの形態がみられ，A地区の4号から7号住居跡のように，南側に少しずつ住居の位置をずらしながら建て替えが行われていくものと，C地区の12号から15号住居跡のように，同じ場所で建て替えが行われ，しだいに規模の拡充をはかっていくものがある(第52図)。住居跡内からの遺物の出土は少ないが，3号住居



第52図　C　地　区　住　居　跡　変　遷　図

跡の平根式鉄鏃のほか，6号住居跡の匙形土製品，9号住居跡の滑石製臼玉が特に注目されるものである。住居跡から鉄製武器等が検出される例は少なく，3号住居跡出土の鉄鏃は，集落内での武器保有のあり方を知るうえで貴重な資料になるものと思われる。

古墳時代集落の造営時期は，大溝(溝2)出土の須恵器杯の型式編年から，6世紀中葉に開始時期を想定できるが，C地区土坑10の資料の存在からみて，当地における営みが6世紀前半頃に一部，遡る可能性がある。検出した住居跡群は，集落の北西から南西縁に当たる部分であることがわかったが，今回調査地から東方にかけて，地光寺山から張り出した同様な微高地(南北約100m・東西約200m)が続いており，集落全体が同範囲に広がることが予想される。

大溝　A地区で検出した大溝(溝2)は，住居跡の立地する微高地の縁辺に沿って掘られており，大溝の西側に広がる低湿地と集落とを区画している。今回検出した部分は，予想される規模からすれば，そのごく一部分にすぎないと思われるが，出土遺物の内容の多様性等，今回調査の最も大きな成果であった。大溝は，牧川旧河道の痕跡である低地に沿って掘削されたものとみられ，仮に取水口を牧川に求めると，現在の由良川まで，約1.5kmの総長が想定されるが，集落の付近以外は，旧河道や沼等を巧みに利用したものと推測される。周辺地形からみても，集落全域を取り囲む可能性は薄い。この溝は，住居跡群のある東側に，並行して走る溝(溝1)を伴う。二本の溝の間隔は，広い所で約3mあり，現状では何らの痕跡も留めていないが，この間隙部に土塁状の施設が存在していた可能性がある。また，両溝内からは，多数の礫石が検出されており，これらの石材は土塁の護岸として使用されていたものとも考えられる。ちなみに，土塁構築に際して溝掘削時の排土を利用したものとすれば，約1.5m程度の高さに復原でき，溝の深さとの相乗効果を高めたものと推察される。この土塁は，その後何らかの原因で削平され，代わりに柵列が付加されることになる。大溝の開削時期は，早くて6世紀中葉に比定されるが，溝の計画的な開掘が，この地区へ住居を営むにあたって不可欠の要素であり，古墳時代集落の成立に密接に係わるものと思われる。大溝の機能としては，水田耕作に伴う灌漑や排水・洪水や外敵から集落を守るための防御溝・運河としての用途等，集落経営に伴う多目的な役割が想定される。内側の溝については，集落内の排水溝としての役割をもつものであろう。大溝は，7世紀初頭頃には多量の遺物類とともに大半が埋没し，その機能を消失する。ただし，溝1については，出土遺物から，大溝埋没以降も暫くは溝として保持されていたことがわかる。なお，大溝埋土の最上層部分からは中世の瓦器片が検出され，その頃まで凹地状の地形として遺存していたらしい。

掘立柱建物　今回検出した柱穴状のピットは200か所以上に達しており，調査地のすべ

ての地区にみられる。それらの所属時期については，不明な部分が多く，建物としてまとめることができるのは，調査地A地区の3棟のみであった。確認された建物跡は，いずれも総柱建物であり，倉庫としての性格をもつものと推定される。一部，竪穴式住居跡を切るものがあり，住居跡との先後関係が窺われるが，時期を決定する資料に乏しい。竪穴式住居から掘立柱建物へ完全に移行したとみるよりも，現状では，ある時期には両者が共存するものと考えて置きたい。掘立柱跡には，柵列として復原されるものがあり，溝2に沿って設営されている。これらは，土塁に代わって集落外周を区画する機能をもつものであろう。

第2期以降については，平安時代の掘立柱建物跡・中世溝・杭列等の水路護岸施設があるが，遺構・遺物の量とも，極端に少なくなり，今日見られる水田地帯に移り変わって行くものと思われる。　　（辻本　和美）

第2節　古墳時代後期の土器について

今回の調査では，A地区大溝から多量の土器類が出土した。古墳時代後期の土器については，この地域においても，古墳の副葬品としては，これまで多く知られているが，集落からまとまって出土した例は比較的少ない。今回の資料も，住居跡に直接伴うものではないが，集落と密接に関係する溝からの出土であり，集落内における土器の使用状況を窺わしめる貴重な資料となるものと言える。以下，これらの土器類がもつ意義や問題点等について，若干整理しておきたい。

(1)大溝から出土した須恵器と土師器の比率については，各々破片が多く正確な集計は難しいが，おそらく須恵器：4対土師器：6程度の割合になるものと考えられる。これは，従来，畿内周辺の集落遺跡で知られる一般的な出土比率(須恵器：2対土師器：8)からみても，須恵器の占める割合が高いことが注目される。集落内での須恵器の占める割合が高い例としては，大阪府の泉北地域の集落遺跡のように須恵器の窯業地に近接する遺跡が代表として挙げられ[注6]，その背景に須恵器の工人集団との関係や製品の集荷地としての役割が想定される。石本遺跡の須恵器中には，実用に耐えない焼け歪みの大きい杯身や窯壁の破片が付着した甕の破片が見られ，その入手経路が問題となる。ちなみに，石本遺跡周辺では，牧川上流の夜久野町末[注7]に大規模な須恵器の窯跡群が存在するが，操業時期は7世紀後葉以降とされており，直接的な関係は少ない。6世紀後半は，各地に群集墳が爆発的に造営される時期であり，副葬される須恵器の受容を満たすために各地に窯が作られる。福知山盆地周辺でも，同時期の窯跡は数か所で確認されているが，本格的な調査例はなく，規模・内容等も不明である[注8]。集落出土の須恵器については，今後に残された課題が大きい。

(2)須恵器杯類は，Ⅲ期7類に細分した。和泉陶邑窯の型式編年に当てはめると[注9]，Ⅰ期は

陶邑Ⅱ型式3から4段階，Ⅱ期は同じく5段階，Ⅲ期は6段階に対応する。須恵器杯類の総出土点数は，200点以上に達するが，このうち8ないし9割がⅡ期に含まれるものであった。杯類以外の須恵器についても，陶色Ⅱ型式後半の諸段階の形態をもつものであり，6世紀後半期に中心を置く。須恵器は，ほぼすべての器種がみられるが，器台や装飾壺のように古墳の副葬品として特殊な役割を有するものは，含まれておらず，集落内で日頃用いられるものと，古墳に副葬されるものと厳密な区別があったことが窺われる。また，須恵器器種の中でも，特に杯や高杯が大きな比重を占めており，反対に土師器杯類等の供膳形態が少なかったこと等，時期的なものか，或いはこの遺跡のみの特徴であるのか否か問題となろう。器種構成の問題については，今後，他地域の遺跡との比較や，周辺の古墳(群)に副葬された土器の器種構成等の細かな分析を通して，明らかにされるべきものと思われる。

(3) 6世紀後半代の土師器については，須恵器に比べ，これまで不明な部分が多かった。今回出土した多量の土師器は，器種も豊富であり，集落内での須恵器との組み合わせや，各器種毎の構成を知るうえで，今後，重要な資料になるものである。土師器のほとんどは，甕類等の煮沸形態をとるもので占められており，集落内における土師器の役割を再確認できた。煮沸土器に関しては，今回，竈資料が多数出土した。京都北部においては，これまで断片的に知られているのみで，このように多量に検出された例はない。(注10) 移動式竈の出現時期については，明確な時期は明らかでないが，早くても5世紀中葉から後半段階にあるものとされており，6世紀後半期の石本遺跡例は，地方における導入時期としては，比較的早い段階に属するものであろう。石本遺跡においては，同時期の住居に，造り付けカマドが付設されており，集落内で同時に使用されたことが窺える。移動式竈(韓竈)の性格については，日常的な炊飯器具としてではなく，祭祀に用いられたとする説が強いが，(注11) 今回出土の竈類についても，スス等が厚く付着したものは見られず，祭祀等の短期間の使用によって廃棄されたものと思われる。竈は，貼り付け庇をもち，口縁部(釜口)は，同時期の甕の口縁部に極似するものである。この種の特徴を有するものは，山陰北陸等の日本海沿岸地域にも分布がみられ注意される。竈の問題については，今後，同種資料の増加をまって改めて検討してみたい。

第3節　古墳時代集落の問題

石本遺跡からは，15基以上の竪穴式住居跡が検出された。調査範囲は，集落のごく一部分に留まったが，住居の分布密度が高く，大規模な集落跡に発展する可能性がある。石本遺跡が立地する由良川流域部では，古墳時代後期の住居跡が検出された遺跡として，(注12) 下流

から，舞鶴市志高遺跡，同桑飼下遺跡，大江町三河宮の下遺跡，同高川原遺跡，綾部市青野遺跡，同綾中遺跡，同青野南遺跡，同久田山遺跡，同味方遺跡等が知られている。このうち，丘陵部に位置する久田山遺跡を除いて，いずれも由良川の自然堤防上か，その縁辺部に立地する。これらの遺跡は，石本遺跡同様，弥生時代(或いは，縄文時代)以来の立地面を踏襲しており，同地形が集落立地に適していたことが窺える。これは，由良川流域の特徴である，河岸段丘の未発達によることが一因と考えられるが，河川交通や漁労・水利面での利点が大きく関係するものと思われる。各遺跡の規模・存続期間については，不明な部分が多く問題点も多い。上流域との変換点に当たる綾中・青野南遺跡では，7世紀前半以降も盛んに竪穴式住居跡が造営されており，石本遺跡と異なるあり方を示す。

石本遺跡の古墳時代集落で，特に興味深い点は，すでに何度か触れたように，北方山腹に存在する牧古墳群の形成時期と重なる点である。牧古墳群の内容については，不明な部分が多いが，台地先端部に占地する牧正一古墳を盟主として，6世紀後半に築造が開始され，7世紀初頭まで継続して群形成が行われている。横穴式石室墳を主体とする群集墳で比較的規模の大きいものとしては，周辺では，福知山市の額塚(30基)・向野西(30基)・下山(68基)の各古墳群が知られているが，その他は，概ね散発的で，むしろ木棺直葬墳が後代まで卓越する地域といえる。この地における牧古墳群の出現は，突然といった形容がふさわしく，その消長を等しくする石本の古墳時代集落と密接な関係を有していたものと考えられる。村落と古墳群の問題については，個々別々に研究が行われる傾向にあるが，今回の調査は，両者の関係について，より具体的な資料を提供するものと思われる。

今回，出土した遺物には，祭祀に用いられたと考えられるものが多い。特に，木器類では，実用品に比べ祭祀具の比率が高いという傾向がある。また，多量に出土した須恵器についても，単なる日常の什器でなく，集落内での祭祀行為に伴う容器としての一面をもつ。このほか，ウマ・ウシ等の獣骨については，動物儀礼との関係が窺えるが，(注13) 集落内での祭祀がどのような内容をもっていたか，今後の大きな課題である。(注14) 6世紀段階の祭祀については，後の律令時代祭祀の萌芽となるものが散見されるが，一般集落での状況についてはあまり知られていない。今回の石本遺跡のあり方は，畿内縁辺部に位置する一集落での祭祀行為の一端を窺える資料であり，この時期の村落生活の具体的な姿を知る上に役立つものと思われる。

(辻本　和美)

注1　渡辺　誠・鈴木忠司『武者ケ谷遺跡発掘調査報告書』福知山市教育委員会　1977

注2　奥村清一郎・植田千佳穂『半田遺跡発掘調査概要報告書』福知山市教育委員会　1975

注3　辻本和美・石井清治・引原茂治「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会)　1981

注4　田中光浩他『カジヤ遺跡発掘調査報告』峰山町教育委員会　1978

注5　1.　松井忠春「豊富谷丘陵遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』京都府教育委員会)　1980

2.　松井忠春・竹原一彦・増田孝彦「豊富谷丘陵遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

注6　以上の問題については，中村　浩「須恵器の生産と流通」(『考古学研究』28-2 考古学研究会)　1981・石神　怡「Ⅶまとめ―周辺遺跡との関連において―」(『府道泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』1　(財)大阪文化財センター)　1984・原口正三『須恵器』(日本の原始美術4　講談社)　1979を参照。

注7　京都府立丹後郷土資料館『丹波夜久野の文化財』　1976

注8　例えば，福知山市猪崎の賀茂野窯跡等がある。賀茂野窯からは，陶邑TK43号窯型式の須恵器(杯・甕・甕)が採集されている。

注9　中村　浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981

注10　由良川流域部では，前掲した綾部市青野南遺跡・味方遺跡のほか，舞鶴市志高遺跡・大江町高川原遺跡等で出土している。

注11　稲田孝司「忌の竈と王権」(『考古学研究』25-1　考古学研究会)　1978

注12　各遺跡については，関連遺跡掲載文献を参照されたい。

注13　土肥　孝「日本古代における犠牲馬」(『文化財論叢―奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集―』　同朋社)　1983

注14　石本遺跡出土の祭祀遺物については，(1)大溝を核とする集落内の農耕儀礼に伴うもの　(2)古墳被葬者に対する集落内での葬送儀礼に伴うもの　(3)集落南方の孤立丘陵地光寺山を神奈備の対象とみる祭りの場に伴うもの　(4)交通上の祭祀等が想定されるが，一般的にみて(1)が妥当であろうと考えられる。同時期の畿内中心部の集落遺跡と共通する多彩な祭祀的性格をもつ遺物の保有は，交通の要衝としての石本遺跡の性格を物語るものであろうか。

由良川流域部関連集落遺跡掲載文献

志高遺跡

1.　杉本嘉美『志高遺跡調査概報』舞鶴市教育委員会　1981

2.　吉岡博之『志高遺跡―昭和56年度花ノ木・スドロ藪下地区および久田美地区の調査概要―』(舞鶴市文化財調査報告　第6集　舞鶴市教育委員会)　1982

3.　吉岡博之ほか『志高遺跡―昭和57年度カキ安地区の調査―』(舞鶴市文化財調査報告　第4集　舞鶴市教育委員会)　1983

4.　吉岡博之『志高遺跡―昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要―』(舞鶴市文化財調査報告　第7集　舞鶴市教育委員会)　1984

5.　岩松　保「志高遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第16号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985

桑飼下遺跡

渡辺　誠編『桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会　1975

三河宮ノ下遺跡

1.　竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会)　1981

2.　竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

高川原遺跡

中谷雅治ほか「高川原遺跡発掘調査報告書」(『大江町文化財調査報告』第1集 大江町教育委員会) 1975

青野遺跡

1. 山下潔巳・川端二三三郎・中村孝行・鈴木忠司・釋　龍雄「青野遺跡A地点発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告』第2集　青野遺跡調査報告書刊行会) 1976
2. 増田信武・中谷雅治ほか「青野遺跡第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第3集 綾部市教育委員会) 1977
3. 増田信武・中谷雅治ほか「青野遺跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第4集 綾部市教育委員会) 1978
4. 中村孝行「青野遺跡第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集　綾部市教育委員会) 1981
5. 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集　綾部市教育委員会) 1982
6. 辻本和美・増田孝彦・小山雅人「青野遺跡第6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
7. 中村孝行「青野・綾中地区遺跡群の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第3号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982.3

青野西遺跡

1. 小山雅人「青野遺跡第8次」(『京都府埋蔵文化財情報』第6号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982.12
2. 小山雅人「青野西遺跡の発掘調査について」(『京都府埋蔵文化財情報』第9号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983.9
3. 小山雅人「青野西遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

青野南遺跡

1. 中村孝行「青野南遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集　綾部市教育委員会) 1982
2. 中村孝行「青野南遺跡第3次・第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第10集　綾部市教育委員会) 1983

綾中遺跡・綾中廃寺

1. 中村孝行・小山雅人「綾中廃寺第1次・第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集　綾部市教育委員会) 1981
2. 中村孝行「綾中遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集　綾部市教育委員会) 1982
3. 中村孝行「綾中廃寺第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第10集　綾部市教育委員会) 1983

久田山遺跡

大槻眞純「久田山—久田山遺跡・久田山南遺跡発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告』第5集 綾部市教育委員会) 1979

味方遺跡

1. 辻本和美「味方遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第15号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985.3

2. 辻本和美「味方遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第13冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985
3. 西岸秀文・辻本和美・引原茂治「味方遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第18冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986

牧　古　墳　群

1. 梅原末治「牧の石室古墳」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第20冊　京都府)　1940
2. 『新たに国の保有になった埋蔵文化財特別陳列目録』東京国立博物館　1965
3. 海老瀬敏正・笠井敏光「福知山地方の横穴式石室」(『京都考古』16　京都考古刊行会)　1975
4. 新納　泉「京都府下出土の装飾付大刀」(『京都考古』26　京都考古刊行会)　1982
5. 村川俊明「福知山市牧正一古墳測量調査略報」(『京都考古』27　京都考古刊行会)　1982
6. 西岡巧次・村川俊明「牧古墳群」(『丹波の古墳Ⅰ—由良川流域の古墳—』山城考古学研究会)　1983

全般に係わるもの

『京都府遺跡地図』京都府教育委員会　1972
『綾部市史』上巻　綾部市史編さん委員会　1976
『福知山市史』第1巻　福知山市史編さん委員会　1976

付表6　出土土器法量表

須恵器　　( ) 残存高

土器番号	器形	法量 (cm)		土器番号	器形	法量 (cm)		
		口径	器高			口径	器高	
1	杯	13.2	4.7	43	杯蓋	14.8	4.0	
2	〃	13.7	4.9	44	〃	14.8	4.1	
3	〃	11.3	5.4	45	〃	13.3	4.1	
4	〃	11.8	5.2	46	〃	13.9	3.2	
5	〃	13.4	4.8	47	〃	14.5	3.9	
6	〃	12.8	4.0	48	〃	13.2	4.0	
7	〃	13.4	4.8	49	〃	14.1	3.6	
8	〃	13.2	4.0	50	〃	12.6	4.3	
9	〃	12.7	4.6	51	〃	12.5	4.4	
10	〃	13.1	4.2	52	〃	12.4	3.6	
11	〃	13.6	4.2	53	〃	12.6	4.0	
12	〃	13.4	4.2	54	〃	13.3	4.1	
13	〃	12.4	4.0	55	〃	12.9	4.0	
14	〃	12.4	4.2	56	〃	11.6	4.4	
15	〃	12.6	3.8	57	〃	12.0	3.7	
16	〃	13.1	4.4	58	〃	11.0	3.7	
17	〃	12.7	4.4	59	〃	10.8	3.3	
18	〃	13.3	4.3	60	〃	10.3	3.4	
19	〃	12.4	4.0	61	壺蓋	16.0	5.1	
20	〃	11.8	3.8	62	〃	9.1	3.9	
21	〃	12.4	3.9	63	〃	11.0	3.5	
22	〃	12.2	3.8	64	高杯蓋	14.1	5.4	
23	〃	11.7	3.5	65	〃	14.2	5.0	
24	〃	11.7	3.1	66	〃	15.0	5.2	
25	〃	12.7	4.4	67	〃	13.0	4.8	
26	〃	12.3	3.7	68	〃	14.6	4.1	
27	〃	12.9	4.3	69	長頸壺蓋	9.4	4.3	
28	〃	11.9	4.0			口径	器高	底径
29	〃	11.9	4.1	70	有蓋高杯	13.4		
30	〃	12.6	3.5	71	〃	12.8		
31	〃	12.2	4.1	72	〃	13.5		
32	〃	12.5	3.5	73	〃	12.3		
33	〃	12.0	3.9	74	〃	13.9		
34	〃	10.6	3.5	75	〃	12.1		
35	〃	9.6	4.0	76	〃	13.1		
36	〃	10.6	3.8	77	〃	12.6	18.5	14.1
37	杯蓋	14.6	4.9	78	〃	14.3	17.3	14.3
38	〃	14.8	4.5	79	〃	13.8	18.0	16.0
39	〃	14.5	4.1	80	無蓋高杯	12.1	15.4	12.8
40	〃	14.0	4.1	81	高杯			11.5
41	〃	13.8	4.3	82	〃			13.6
42	〃	14.3	4.4	83	無蓋高杯	12.2	10.7	9.8

土器番号	器形	法量(cm)			土器番号	器形	法量(cm)		
		口径	器高	底径			口径	器高	底径
84	無蓋高杯	15.5	14.6	12.3	111	短頸壺	4.3	7.2	
85	有蓋高杯	12.3	8.6	11.9	112	〃	4.8	6.1	
86	〃	14.7	9.6	12.2	113	〃	9.0	9.7	
87	〃	11.0	7.5	11.0	114	〃	11.8	17.0	
88	〃	12.4	7.3	9.1	115	〃	12.6		
89	〃	12.6	8.6	9.6	116	ミニチュア壺	4.9	6.6	
90	高杯			13.0	117	〃	3.6	5.0	
91	〃		(残存高12.8)		118	提瓶			
92	〃			9.6	119	〃	11.6		
93	〃			9.1	120	小型瓶	4.7	12.3	
94	〃			11.0	121	すり鉢	15.3	12.0	7.8
95	〃			10.8	122	横瓶	13.6	27.5	
96	〃			10.3	123	〃	11.9	26.6	
97	〃			7.8	124	甕	20.7		
98	甕	13.6	17.8		125	〃	20.6		
99	〃		(7.6)	5.0	126	〃	17.4		
100	〃		(13.4)	4.0	127	〃	20.8		
101	〃		(12.6)	3.8	128	〃	24.6		
102	台付長頸壺	9.8			129	〃	12.0		
103	壺	6.0			130	〃	10.4		
104	〃	7.2			131	〃	11.6		
105	椀			9.0	132	〃	10.2		
106	〃	9.0	5.3		133	〃	12.4		
107	〃	9.0	5.6		134	〃	17.4		
108	〃	13.0	7.8		135	〃	15.0		
109	台付椀	9.6	12.3	8.5	136	〃	30.0	70.6	
110	直口壺	8.7	11.6		137	〃	21.0		

土師器

土器番号	器形	法量(cm)		土器番号	器形	法量(cm)		
		口径	器高			口径	器高	
138	杯	10.6	5.5	150	鉢	27.7		
139	〃	14.0	5.0			口径	器高	底径
140	〃	13.6	4.3	151	高杯			11.5
141	〃	12.6	5.8	152	〃			11.2
142	〃	13.5	7.0	153	壺	8.9		
143	〃	17.4	7.2	154	〃	10.0		
144	〃	9.8	4.4	155	〃		(9.7)	4.3
145	〃	13.0	3.9	156	〃	8.4	6.9	
146	〃	13.4	3.9	157	〃	10.2	7.4	
147	〃	12.3	4.4	158	〃	13.2		
148	〃	12.0	4.3	159	甕	14.9		
149	〃	16.4	6.3	160	〃	18.4(推定口径)		

土器番号	器形	法量 (cm) 口径	器高	底径	土器番号	器形	法量 (cm) 口径	器高	底径
161	杯	14.0	10.3		181	杯	19.6		
162	〃	18.9			182	〃	17.1		
163	〃	19.4			183	〃	27.7		
164	〃	16.0			184	〃	21.4		
165	〃	18.0			185	〃	10.8	12.5	
166	〃	19.9			186	〃		(11.0)	
167	〃	20.2			187	〃	11.2		
168	〃	21.3			188	〃	12.4		
169	〃	27.0			189	〃	13.0		
170	〃	22.5			190	把手付甕	9.0		
171	〃	15.0			191	〃	21.8		
172	〃	14.6			192	〃	26.3		
173	〃	17.0			193	〃	23.9		
174	〃	16.4			194	〃	19.5		
175	〃	14.6			195	把手付鍋	36.2		
176	〃	14.6			196	甑	24.0	28.3	
177	〃	13.5			197	〃	21.4		
178	〃	21.8			198	〃	20.4	19.2	
179	〃	17.0			199	竈	31.2	47.0	48.0
180	〃	21.2			200	〃	27.7	44.5	

弥生土器

土器番号	器形	法量 (cm) 口径	器高	底径	土器番号	器形	法量 (cm) 口径	器高	底径
201	壺	12.4	25.7		219	高杯		(12.7)	
202	〃	14.2	27.3		220	〃		(4.0)	
203	〃	19.0	39.0	8.8	221	甕	19.6		
204	〃	13.1			222	〃	16.4		
205	ミニチュア壺		(6.3)	2.5	223	〃	17.5		
206	壺底部			12.2	224	〃	13.2		
207	甕	15.2	30.5	5.2	225	〃	16.8		
208	〃	17.5	28.8	5.7	226	〃	16.7		
209	〃	11.6	16.5	5.6	227	〃	12.5	20.0	3.0
210	鉢	10.0	9.1	3.5	228	〃	16.4		
211	〃	8.8	5.6	3.5	229	〃	16.7		
212	〃	8.1	5.2	2.8	230	壺	22.8		
213	〃	14.2	12.1	9.3	231	〃	12.5		
214	〃		(9.2)	7.1	232	〃	14.6		
215	器台	20.0			233	〃	14.2		
216	〃	17.0			234	〃	14.5		
217	〃	14.1			235	〃	15.7		
218	高杯			9.6	236	〃	20.0		

付表7　大溝(溝2)出土須恵器集計表

器形	杯	蓋	壺蓋	高杯蓋	高杯 有蓋	高杯 無蓋	鼓	椀	台付椀	台付長頸壺
個体数	130 (177)	76 (272)	2	15	7	7	7	5	1	2
比率	41.5	24.2	0.6	4.8	4.5		2.2	1.6	0.3	0.6

器形	短頸壺・直口壺	広口壺	小形壺	提瓶	すり鉢	横瓶	甕 I	甕 II	甕 III	合計
個体数	10	12	2	6	1	9	5	15	2	314
比率	3.2	3.8	0.6	1.9	0.3	2.9		7		100

備考：杯・蓋（　）は，破片数。

付表8　大溝(溝2)出土須恵器杯類形別集計表

型式	類形	数量※1	%	小計	%
I	A	4	3.1	6	2.0
		2			
	B	9	6.9	13	4.2
		4			
II	C	30	23.1	40	13.0
		10			
	D	40	30.8	61	19.9
		21			
	E	17	13.1	163※2	53.1
	F	13	10.0		
		133			
III	G	12	9.2	17	5.5
		5			
	H	5	3.8	7	2.3
		2			
合計		130	100	307	100
		177			

※1 上段一個体として判別できるもの。
下段破片点数(細片は除く)
※2 E・Fは底部不明のものを合計した数量。

付表9　大溝(溝2)出土須恵器蓋類形別集計表

	数　量	%
A	4	5.2
B	17	22.4
C	25	32.9
D	24	31.6
E	6	7.9
小計	76	100

その他破片数272点

付表10　大溝(溝2)出土土師器集計表

器形	杯							鉢	高杯	壺				
	A			B						A	B	C	D	小計
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	小計							
個体数 (　)破片数	1 (5)	7 (65)	3	1	9 (55)	1	22 (125)	1	12	2	1	1	2	6

器形	甕										把手付甕・鍋	甑	竈
	A	B	C	D	E	F	G	H	不明	小計			
個体数 (　)破片数	40 (165)	50 (249)	10 (43)	10 (75)	7 (36)	(11)	(13)	(13)	(256)	200以上 (861)	4 56(把手数)	6 (39)	6～7 (184)

備考　1. 個体数で取り上げたものは，残存状態の良いもののみ。
　　2. (　)破片数は，口縁部破片の数量である。
　　3. 甕の個体数の計測については，口縁部破片の合計長から，完形品の口縁円周を割ったものから類推した。概数。

<付載>　石本遺跡周辺の地形変化

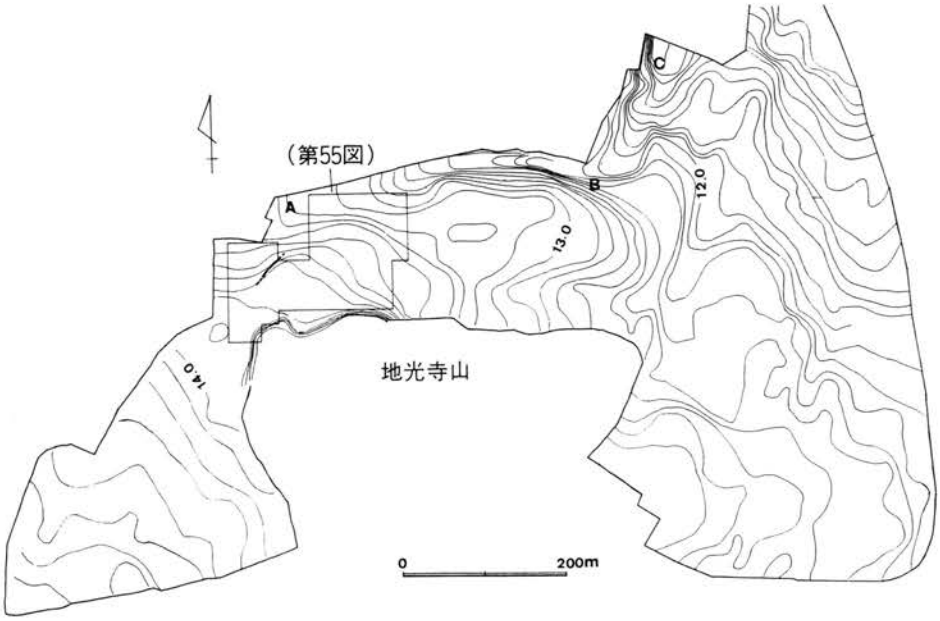
小　橋　拓　司

1.　はじめに

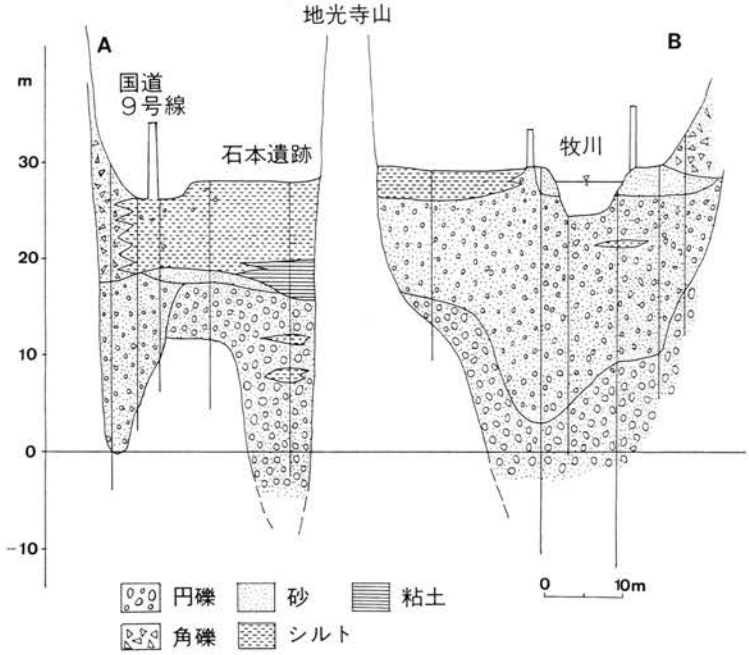
石本遺跡は，福知山盆地の出口，由良川と牧川の合流点付近に立地する。遺跡のすぐ南側には，地光寺山と呼ばれる孤立丘陵があり，現在の牧川はその南側を流れている。当遺跡は地形的には，沖積上位面の後背湿地に相当する。この付近においては沖積上位面と沖積下位面との比高は，由良川と牧川の合流点で約0.6mであるが，その他のところではあまり崖がはっきりしない。これは，沖積下位面における自然堤防の形成により，沖積段丘崖が埋積されたためと考えられる。遺跡付近においては沖積平野の幅は，250mと狭い。第53図の10cm等高線図からもわかるように，石本遺跡に接して北側には細長い窪地(A-B-Cライン)が存在しており，牧川旧河道と考えられる。石本遺跡周辺は，旧河道の南に広がる微高地の西部に位置している。

2.　石本遺跡周辺の層序

深層試錐資料を用いて，調査地を南北方向に切った断面図を描くと，国道9号線付近と



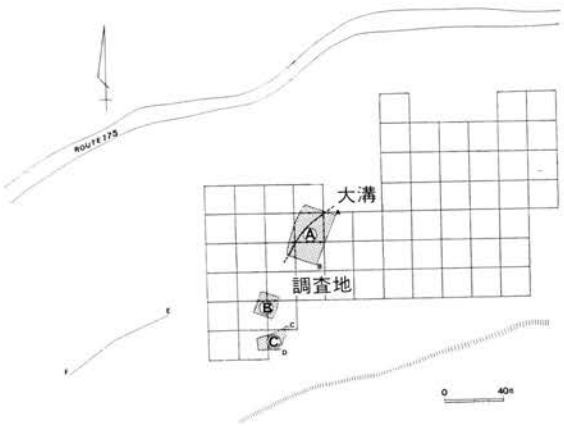
第53図　遺跡周辺10cm等高線図



第54図　石本遺跡周辺深層地質断面図

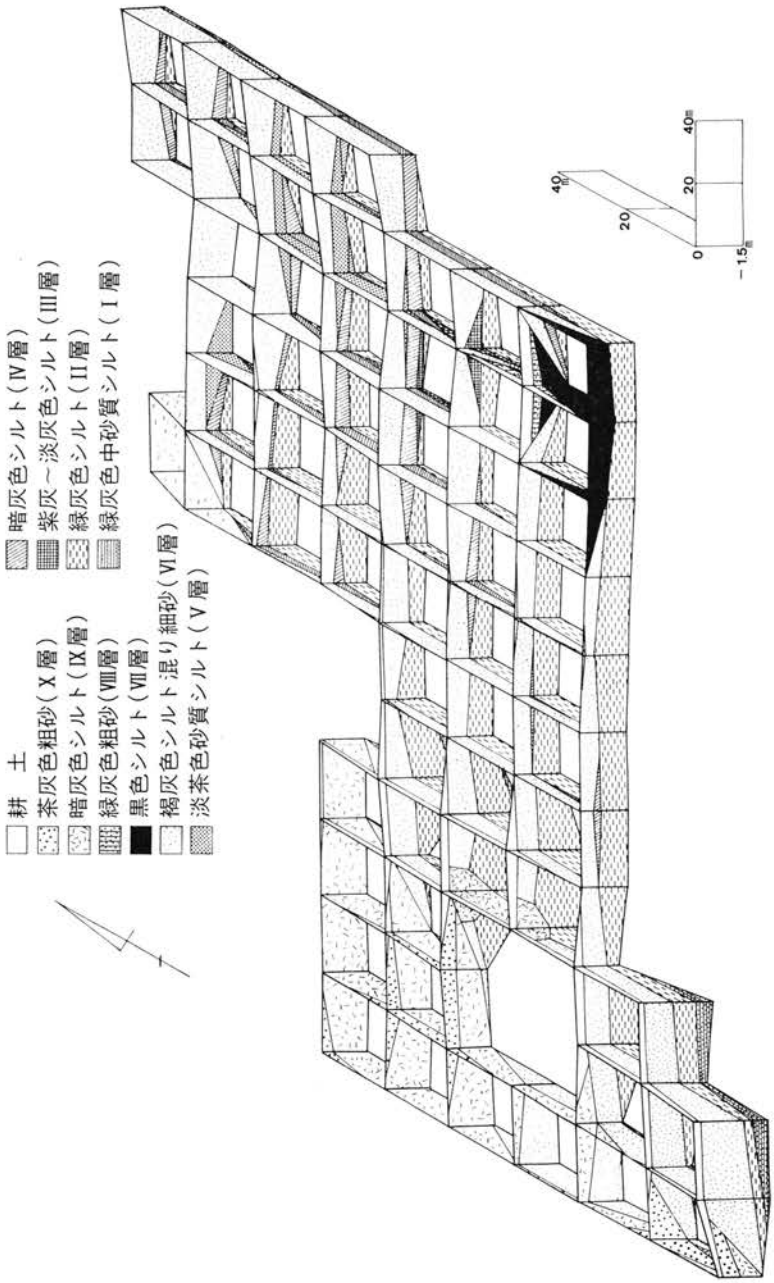
石本遺跡周辺とに深さ約8mと10m以上の二つの谷が刻まれていることがわかる。これらの谷は，比較的ルーズな砂礫によって埋積されている。このことは，ある時期には古牧川が地光寺山の北側を流れていたことを示している。また，北側の谷が南の谷を埋める砂礫層を刻んでいることから，北側の谷がより新しいと考えられる。この二つの埋没谷の形成時期に関する資料は得られていないが，N値(注1)が30前後で40を越えないことから，最終氷期最盛期前後かあるいはそれ以後に形成されたものと考えられる。

遺跡周辺では砂礫層の上部に層厚5.5から6.0mのシルトが堆積している。遺跡内における発掘と検土杖による調査でも3m以上のシルト層が確認された。



第55図　メッシュ設定図

次に，発掘区域において地層断面の観察をおこなった。弥生時代中期から古墳時代の遺構は，暗褐色粘質土層に載っている。これらの遺構の3から4回の切り合いは同一の堆積面(地山)で行われているが，この間由良川からも牧川からも堆積作用を受けていない。このことは，地山下層の緑灰色シルト直上から遺構面付近までの層中に酸化したマンガン塊が多量に含まれており，乾燥化に向



第56図　パネルダイアグラム（メッシュの位置については第55図参照）

かっていることと矛盾しない。B地区では地表下1.0m付近に縄文時代後期の土器片を包含している。このことから，弥生時代中期以降の遺構を載せる堆積物は縄文時代後期以降に堆積したものと考えられる。

遺跡において地層断面を観察したのち，遺跡周辺の地形変化をみるため1.5mの検土杖による調査をおこなった。遺跡周辺にオフセットおよびレベル測量により一辺20mのメッ

シュを掛け，その交点で堆積物を調べた(第55図メッシュ設定図)。メッシュの設定は，10cm等高線図で明らかになったが遺跡を載せる微高地が収まる範囲とした。その調査結果を第56図のパネルダイアグラムに示す。また，工事現場の露頭も観察することができた。遺跡周辺の堆積物はⅠからⅩまでの10層に分けられる。この結果に基づいて各地層堆積期ごとに古地理を復原したものが第57図である。レベル測量の結果から各層の上面の標高もおとしてみた。

Ⅱ層の緑灰色シルトは，深層地質断面図(第54図)では最上部にあるシルト層に対応すると考えられる。また遺跡内の地層断面では11層（第6図)に対応する。工事現場の露頭(第55図E-F)においても最下部にⅡ層が確認され，遺跡周辺に広く堆積していたことは明らかである。このシルト層は低湿で静穏な時代が長く続いたことを示している。続いて，ⅢからⅤ層までが堆積した時代も比較的安定しており，Ⅱ層の堆積頂面の起伏を埋積するように細粒な物質が堆積した。

Ⅵ層の堆積時期になると，牧川が地光寺山の北を通るようになり，以前よりも粗いシルト混じり細砂が堆積した。この頃の流路は現在でも旧河道として認められる。これにより自然堤防状の微高地が形成された。この時期は先に述べたように堆積物中の土器の編年から縄文時代後期以降のことであろう。弥生・古墳時代の住居は，この比較的高燥で安定した微高地の上に立地した。

続いて，旧河道にあたる微低地を細粒な物質が埋積するようにⅦからⅨの堆積が進行した。弥生・古墳時代には，住居のある微高地と牧の古墳群を載せている洪積段丘との間には，細長い微低地が湿地となって存在していたと考えられる。その後，支流からの流れ込みにより湿地は徐々に埋められていった。

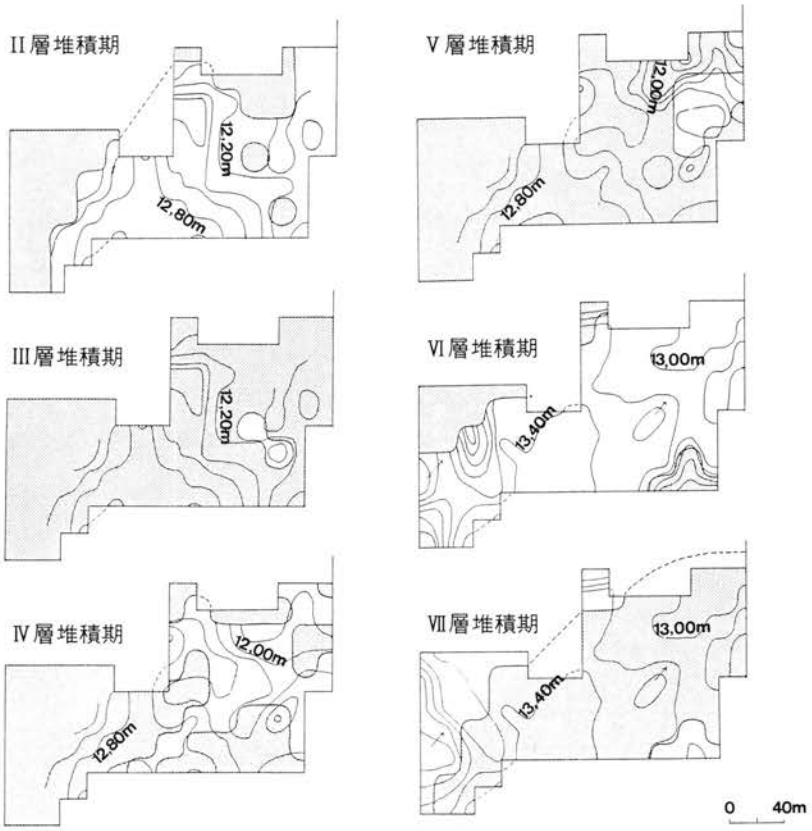
3. 石本遺跡の地形変化

以上の調査結果から石本遺跡周辺の地形変化は次のように考えられる。

(1) 更新世には遺跡の北側に古牧川の谷が形成されていた。更新世末から完新世の初めにかけて砂礫が堆積し，谷を埋没させた。

(2) その後，牧川は，地光寺山の南側を流れるようになり，遺跡周辺は由良川・牧川の双方から取り残される形となった。このため，沼沢地の時代が長く続いたと考えられる。

(3) やがて縄文時代後期以降になると，牧川の水が地光寺山の北側へ流れ込むようになった。この時の流路は北側の地山に沿うような形で流れていたと考えられる。これにより，シルト質細砂からなる微高地が形成された。弥生時代中期よりこの微高地上に住居が営まれるようになった。微高地は発掘範囲から更に東側に広がっており，遺跡もさらに東



第57図　石本遺跡古地形復元図（白ヌキは堆積域）

に広がっていた可能性が高い。一方，河岸段丘と微高地との間には河道の跡が低湿な地帯となって存在していた。

(4) この微低地は支流からの埋積を受け，微高地との比高が徐々に減少していったと考えられる。このような立地条件の悪化は，中世以降の住居の移転の一因とみてもよいのではないだろうか。

(5) 石本遺跡においてみられたように，弥生時代中期以降における洪水のあまりおこらない安定した状況は，由良川中・下流域低地における沖積上位面の段丘化すなわち沖積下位面の形成開始と密接にかかわっているものと考えられる。

沖積平野の古地理を復原する研究は，特に戦後盛んになってきた。そうした研究の多くは，1つの沖積平野全域をカバーするスケールでおこなわれてきた。復原の対象となる時期は，最終氷期最盛期，一万年前の海面停滞期，縄文海進最盛期，弥生時代の海面の小低下期というように，海水準の変化と対応して10^3年オーダーの数ステージで復原を行っているものが多い。しかし，自然環境と人間活動との相互作用を究明する立場からすると，

人間の活動が沖積平野の歴史に刻まれるようになる弥生時代以降については，あまり重点が置かれていない点が指摘できよう。そのため，遺跡発掘による成果と地形学的手法により明らかとなった復原図とが，対象とするスケールが違うため議論がかみ合わないこともしばしば生じてきた。

過去における自然環境と人間活動の相互作用について最も具体的に検討できるのは，遺跡に対応した空間的，時間的スケールであろう。近年，遺跡発掘はますます盛んになってきており，そうした研究のできる可能性も高まってきていると考えられる。

本稿では，石本遺跡周辺の地形変化を明らかにすることを目的としてきた。その結果牧川の流路変更による微高地の形成と旧河道の埋積過程をある程度明らかにすることができた。今後，こうした考察をおこなうにあたっては，平野全域スケールにおける地形発達の中で遺跡発掘スケールの地形変化がどのように位置づけられるのか検討する必要があろう。

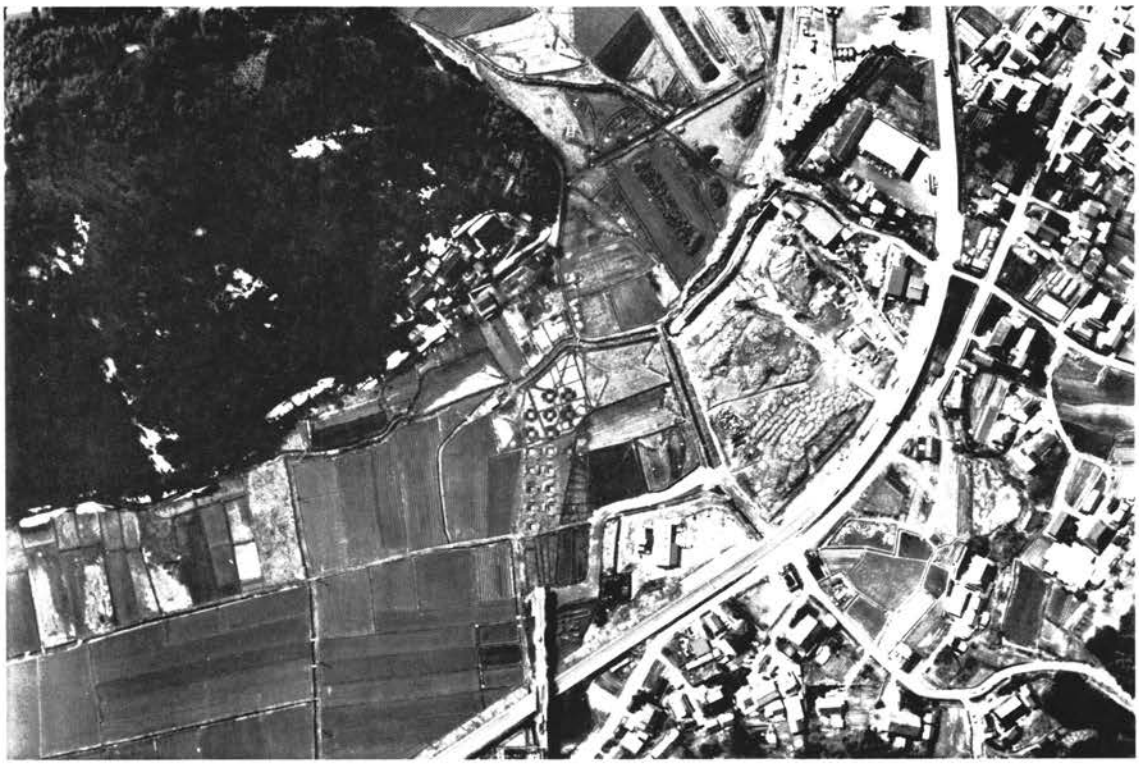
注1　標準貫入試験値のこと。ボーリング孔底において63.5kgのハンマーで75cmの高さから落とし，サンプラーが地盤中に30cm貫入する打撃回数をN値とする。

<参考文献>

小橋拓司「由良川中・下流低地の古地理と地形環境」(『立命館文学』483・484)　1985　73～97頁

図　　版

(1) 調査地周辺空中写真（東から）



(2) 調査地空中写真（上が北）

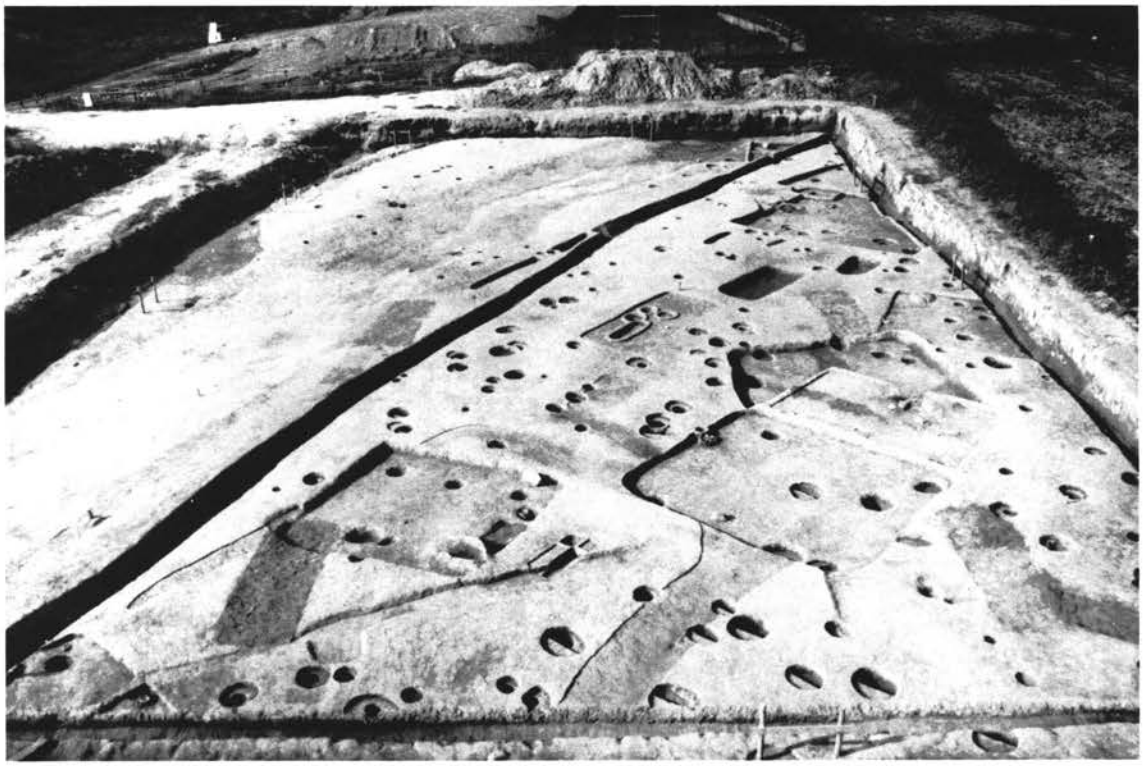
(1) 由良川・牧川合流部遠景

(2) 調査地北方丘陵からの遠景

(1) 試掘調査時調査地全景（南から）

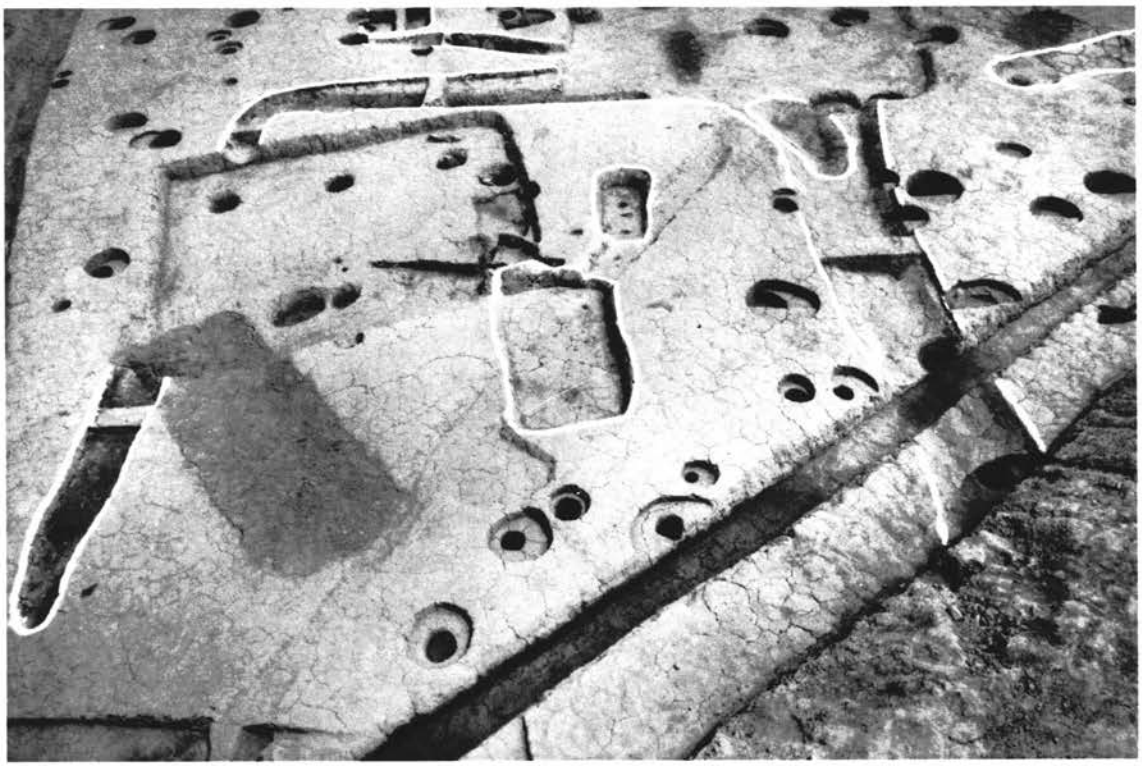
(2) 調査地全景（北から）

(1)　A地区大溝掘削前全景（北から）

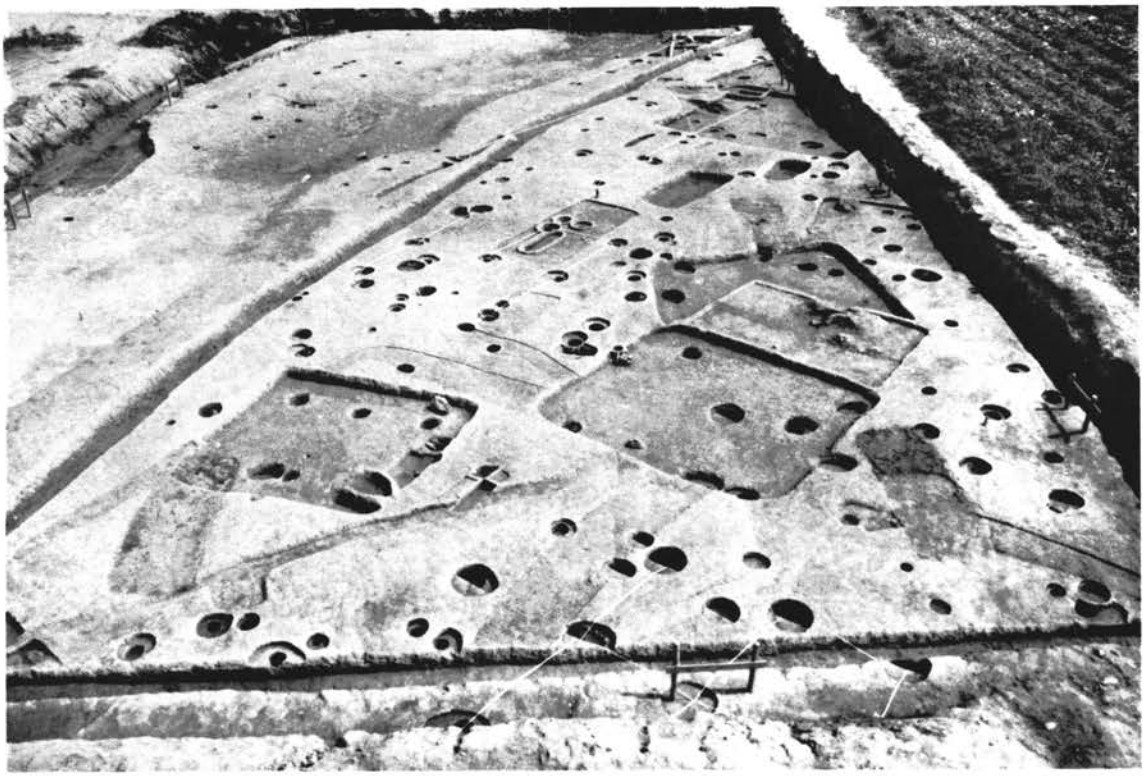


(2)　同上（南から）

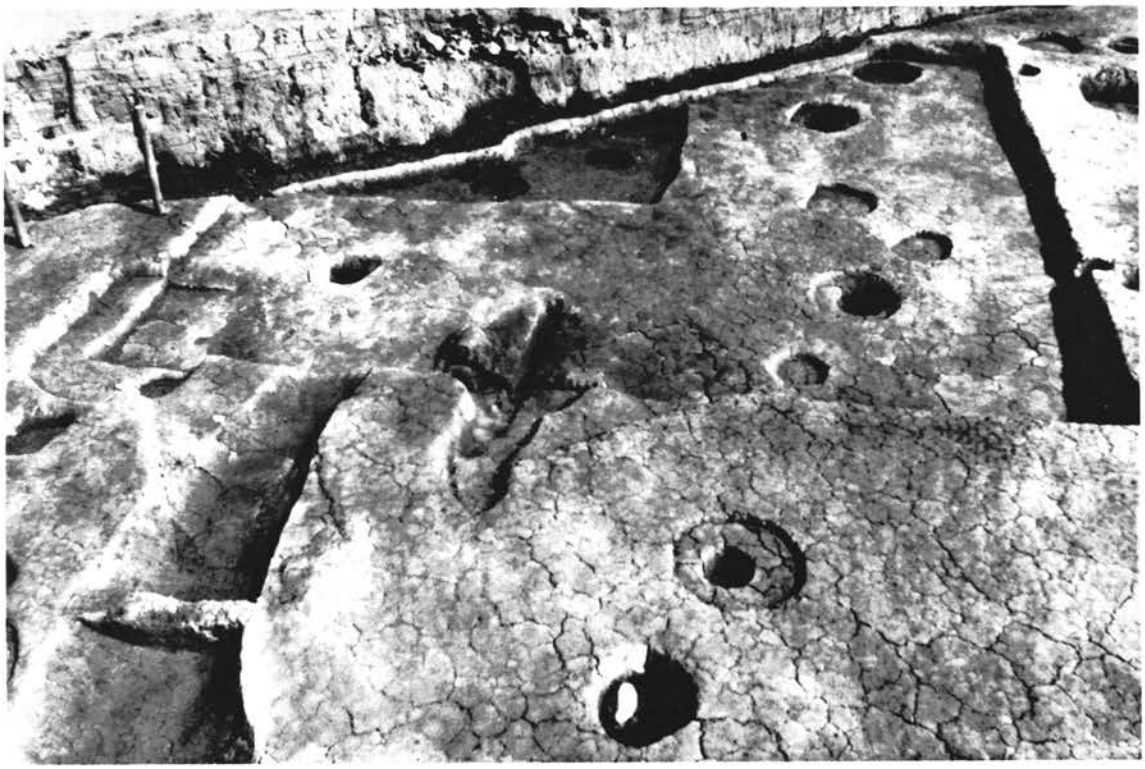
(1)　A地区弥生時代遺構〈白線部〉(南から)



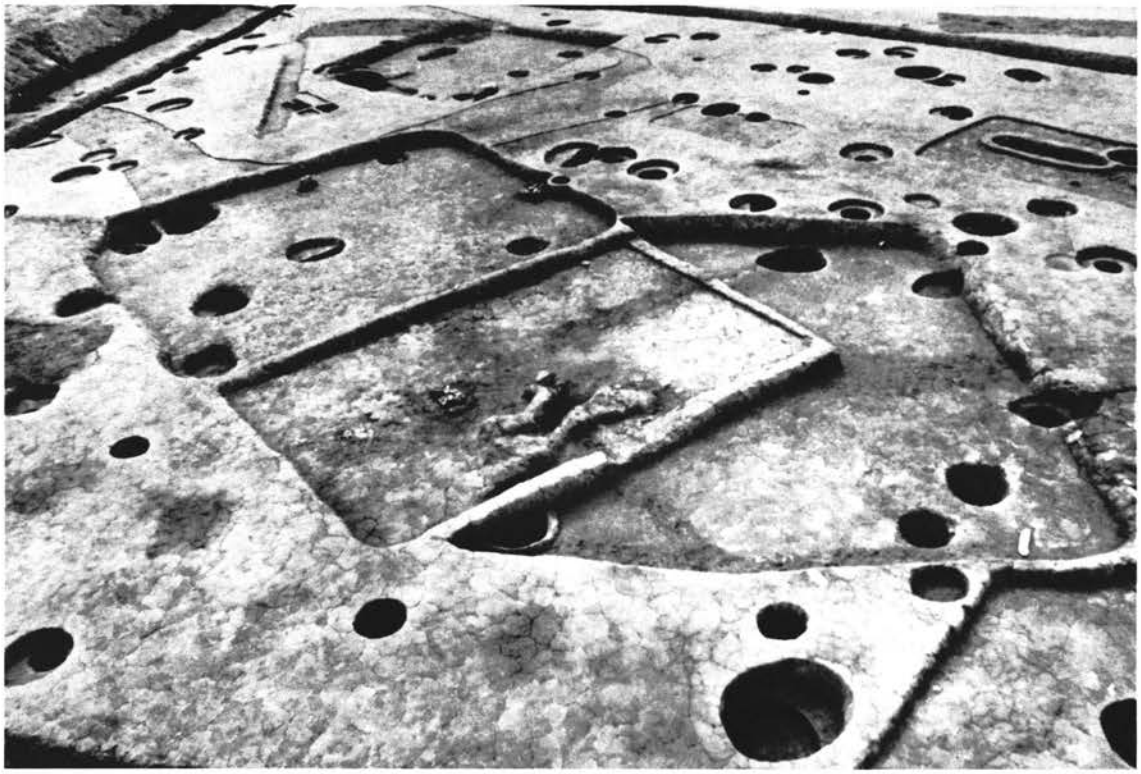
(2)　方形周溝墓1 (南から)



(1)　A地区古墳時代住居跡（南から）



(2)　方形竪穴式住居跡２・３（西から）



(1) 方形竪穴式住居跡４・５・６・７（東から）

(2) 方形竪穴式住居跡８（西から）

(1) A地区溝2〈大溝〉(北から)

(2) 同上　北半部分(北から)

(1) 堰跡（北東から）

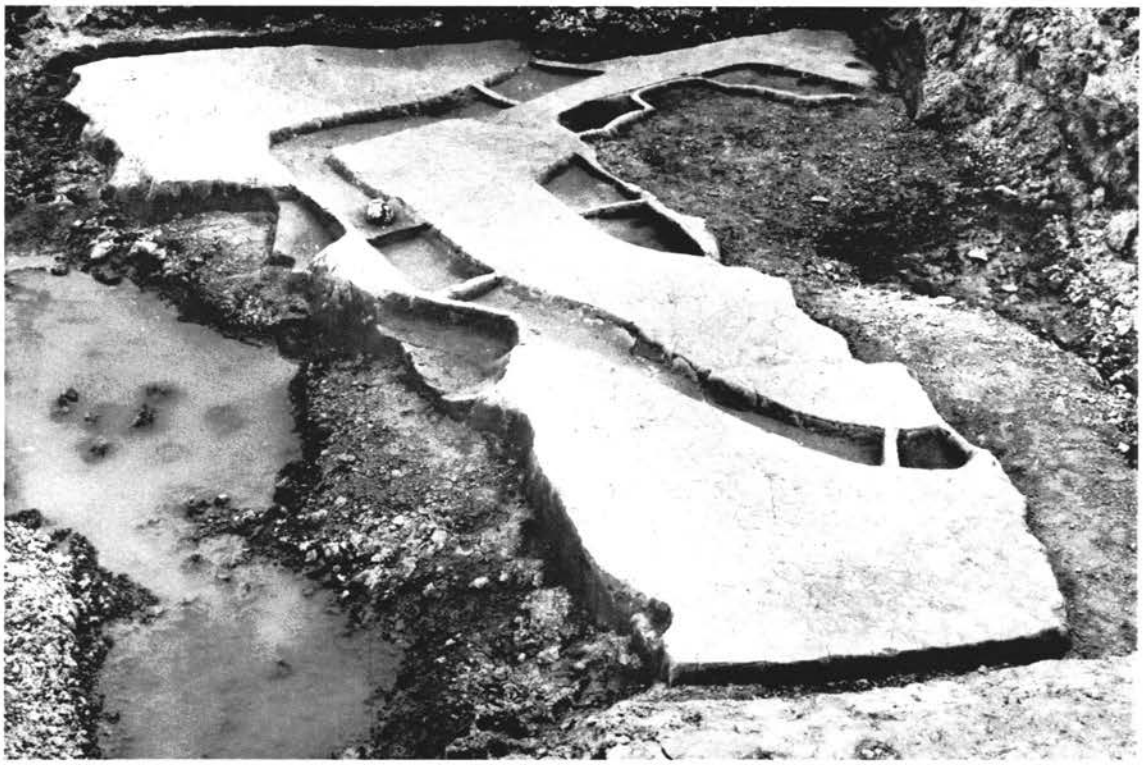
(2) 同上　溝内堆積状況（南から）

溝内木器出土状況

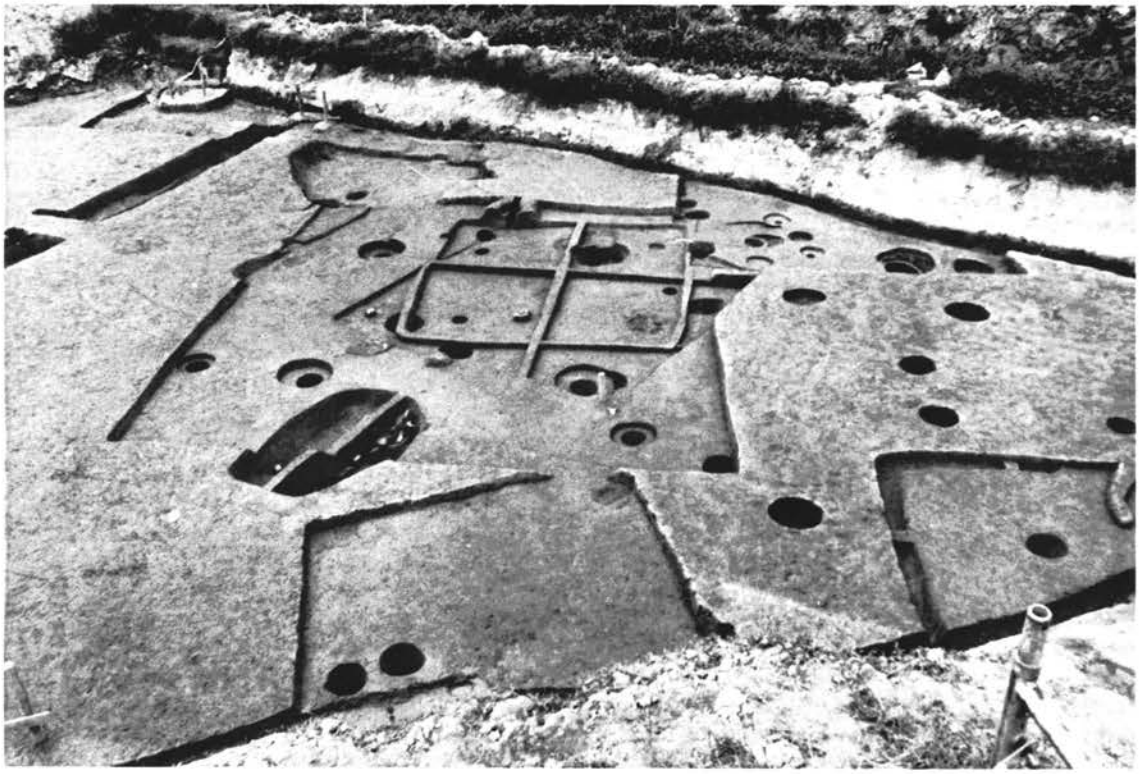
溝内遺物出土状況　(1)鞍　(2)下駄・須恵器　(3)鎌　(4)小形甕

図版一一

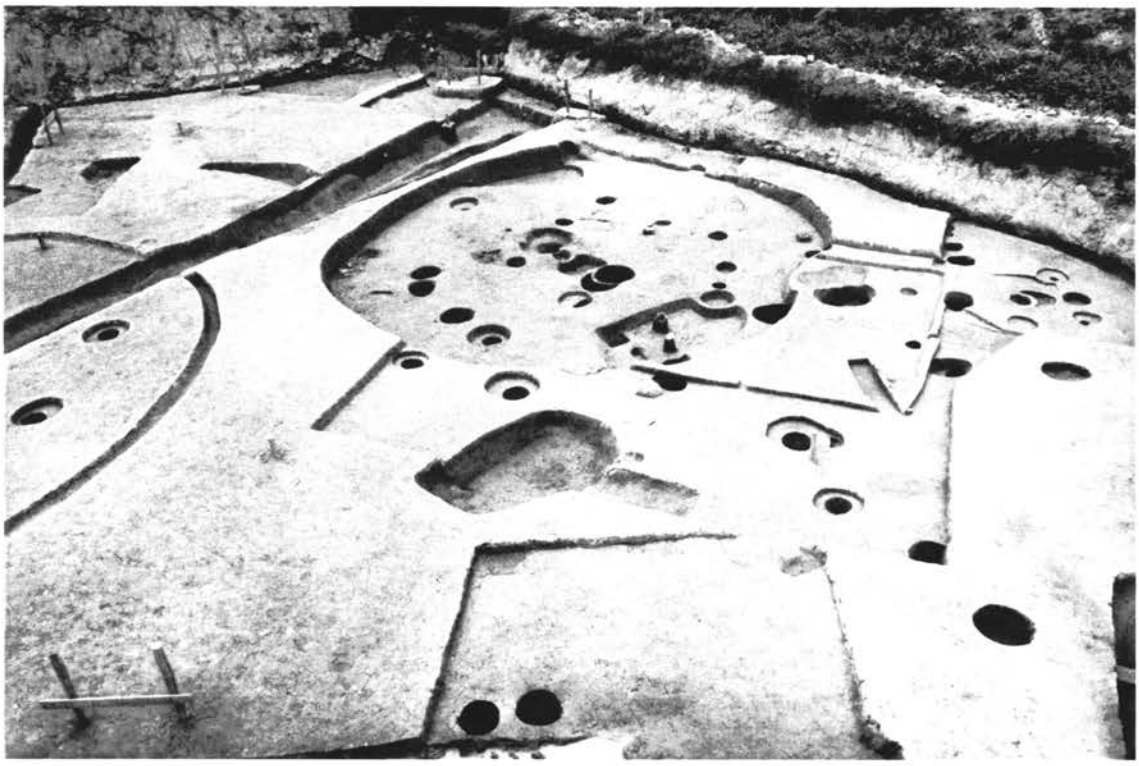
(1)　B地区全景（北から）



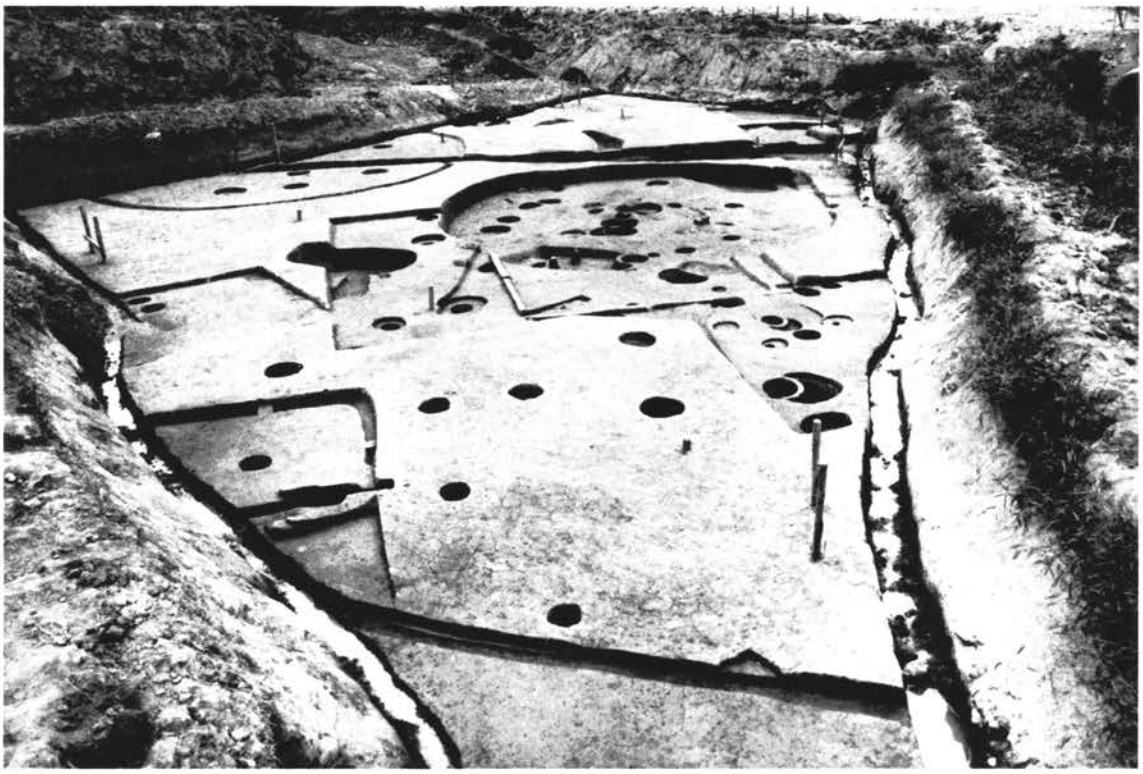
(2)　方形周溝墓３（北西から）



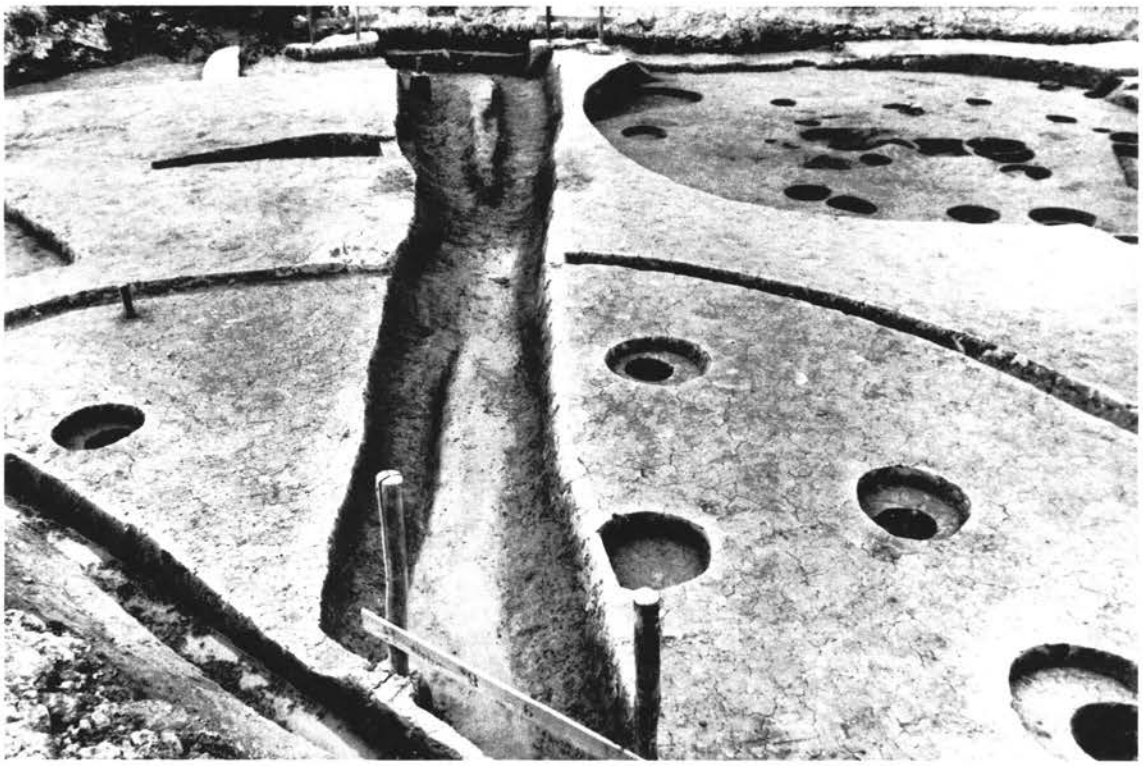
(1) C地区遺構検出状況（南東から）



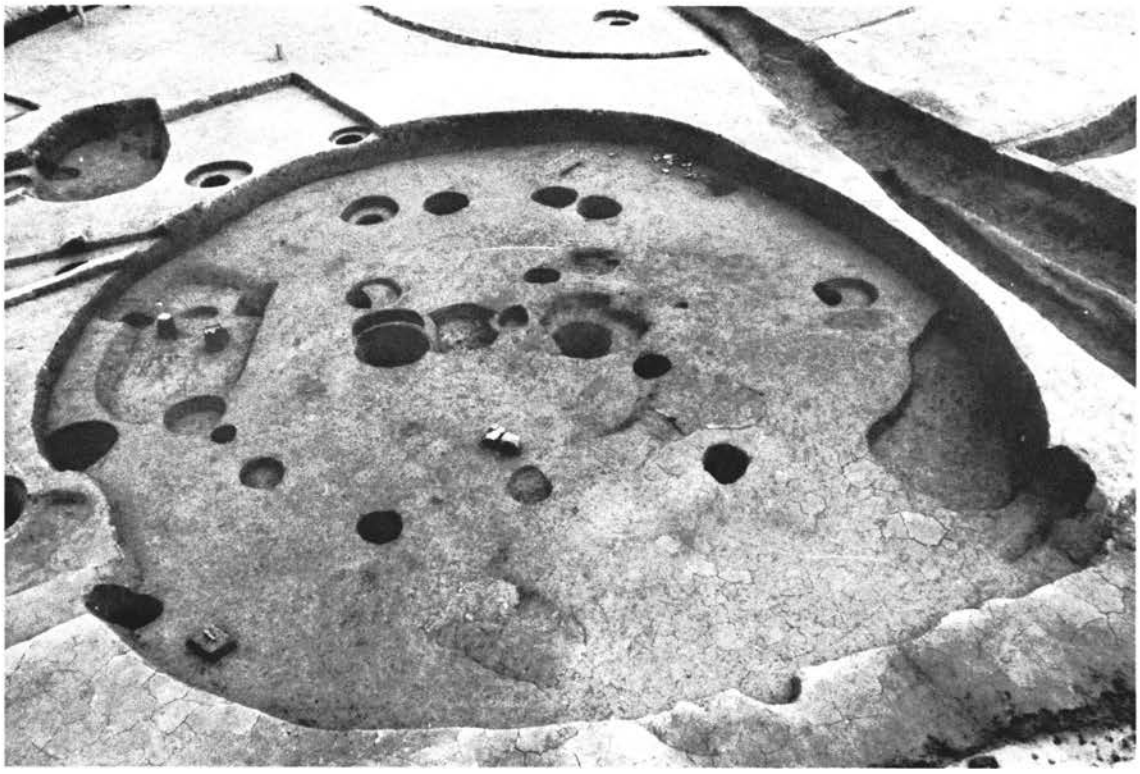
(2) 同上 弥生時代住居跡検出面（南東から）



(1) C地区全景（北東から）



(2) 溝（南東から）



(1) 円形竪穴式住居跡16（西から）

(2) 土坑10（北西から）

2

21

6

23

9

24

10

25

11

27

16

28

須恵器 (1)

29

31

33

34

35

36

37

39

40

41

42

須恵器 (2)

51

238

57

58

82

60

64

90

須恵器 (3)

76

79

78

80

須恵器 (4)

84

86

94

85

95

89

97

須恵器 (5)

98

99

118

須恵器 (6)

109

107

112

111

116

121

須恵器 (7)

110

115

113

114

120

須恵器 (8)

須恵器 (9)

須恵器 (10)

137

須恵器 (11)

136

図版11

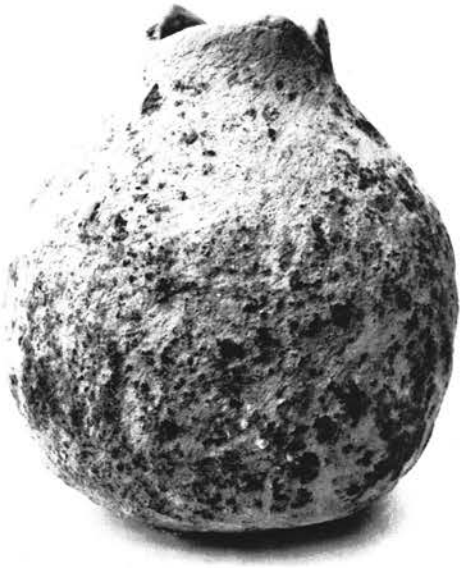
138

142

240

144

145



155

157

185

土師器 (1)

159

163

169

160

182

土師器 (2)

196

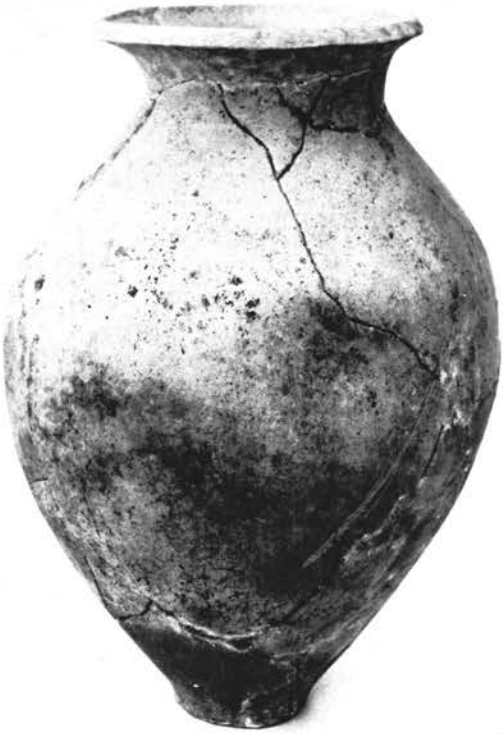
198

191

192

土師器 (3)

炊飯具組合せ



201

203

205

202

213

弥生土器 (1)

207

209

208

210

211

弥生土器 (2)

117

244

243

247

246

245

その他の土器・土製品

(1) 須恵器杯・高杯類

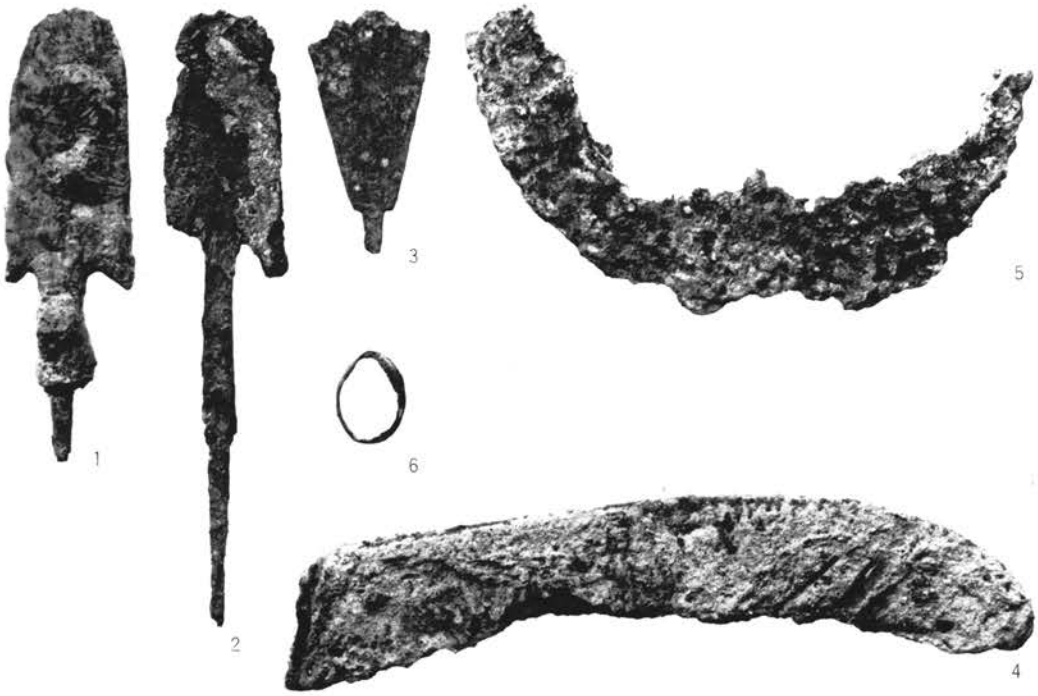
(2) 須恵器瓶・鉢・壺類その他

(1) 須恵器横瓶・甕・大形甕

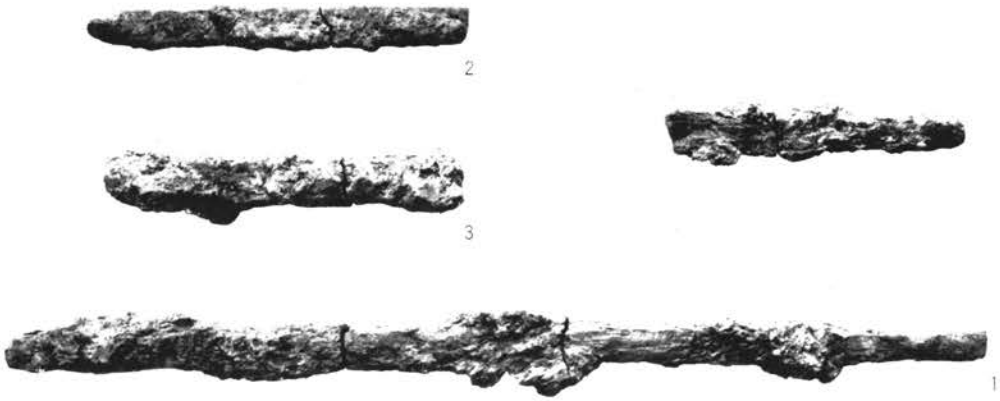
(2) 土師器各種

(1) 弥生土器各種

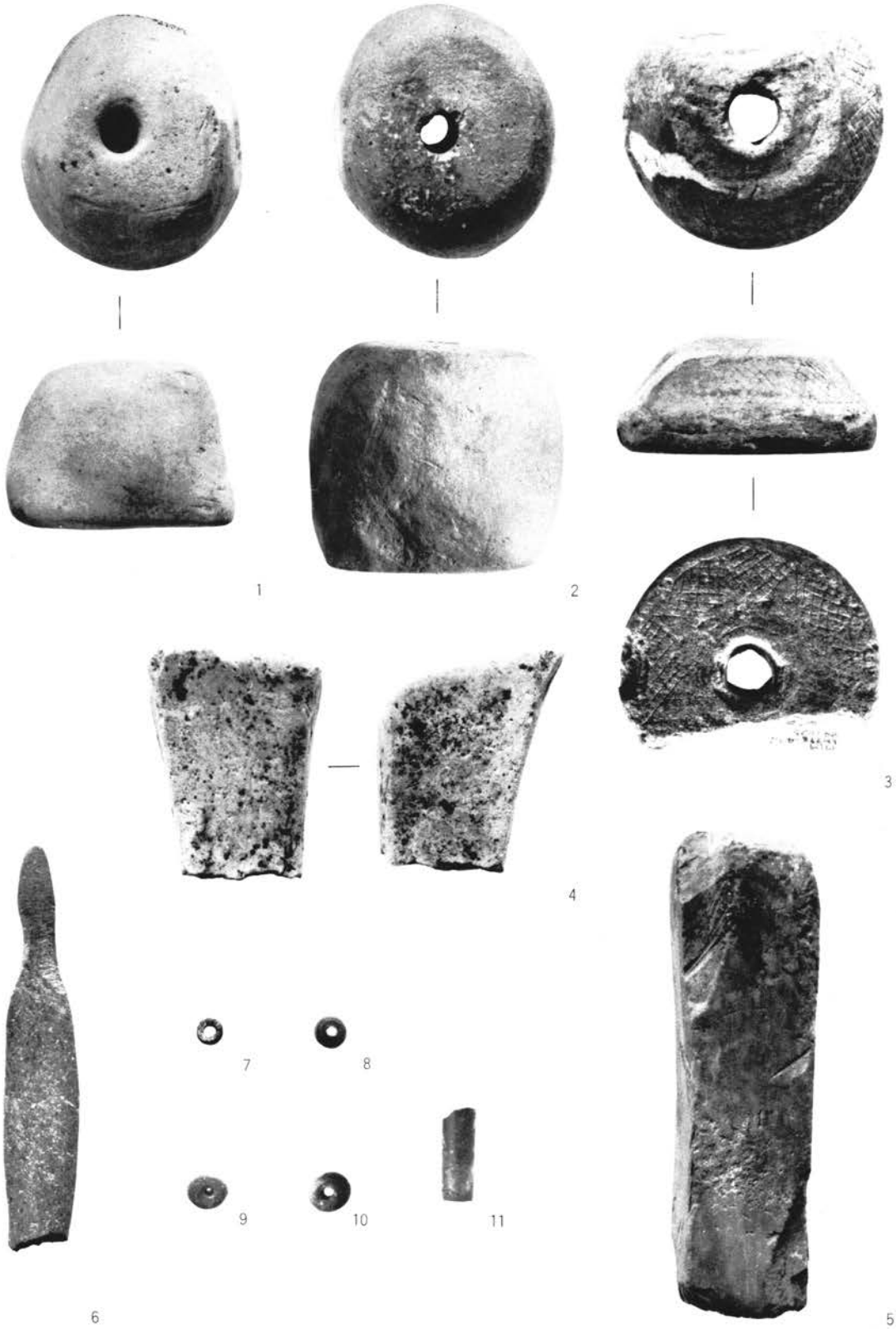
(2) 手づくね土器・土製品その他



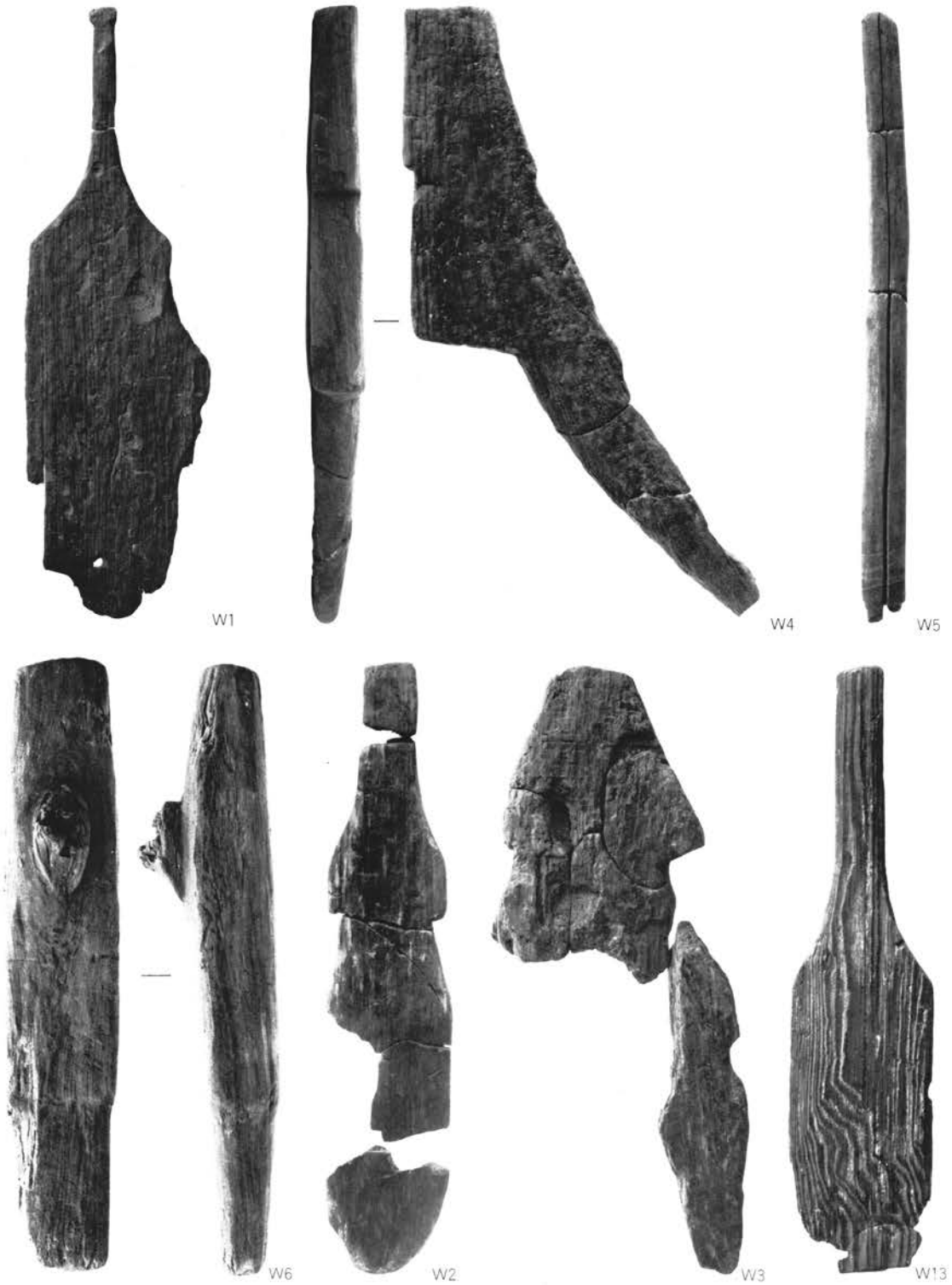
(1) 古墳時代の鉄器



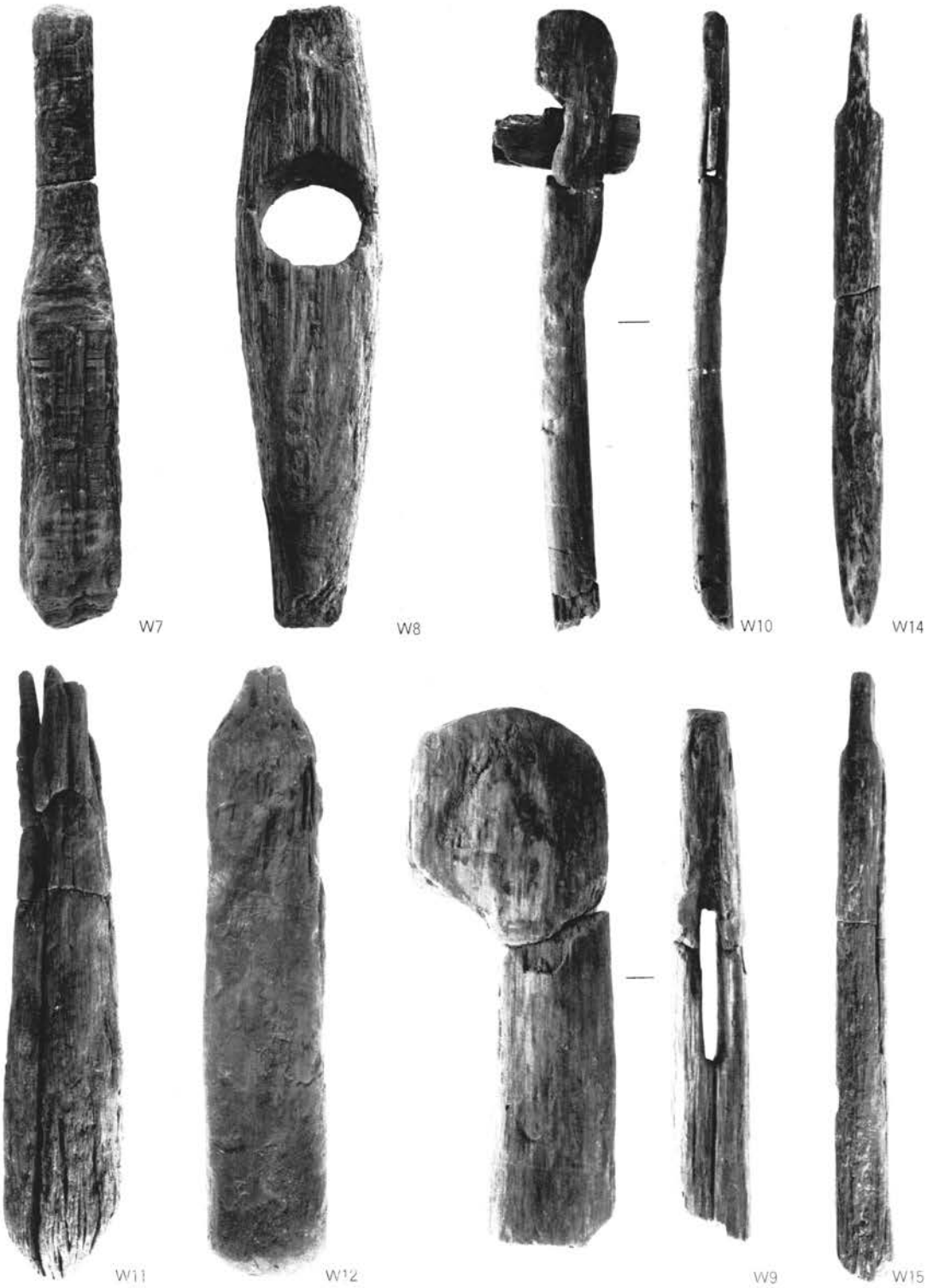
(2) 弥生時代の鉄器



紡錘車・石製品・玉類・砥石



木　器(1)



木　器 (2)

W18

W24

W23

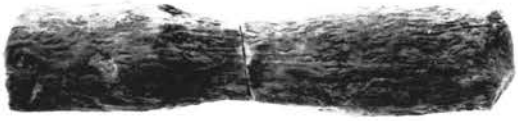
W22

W21

W17

W19

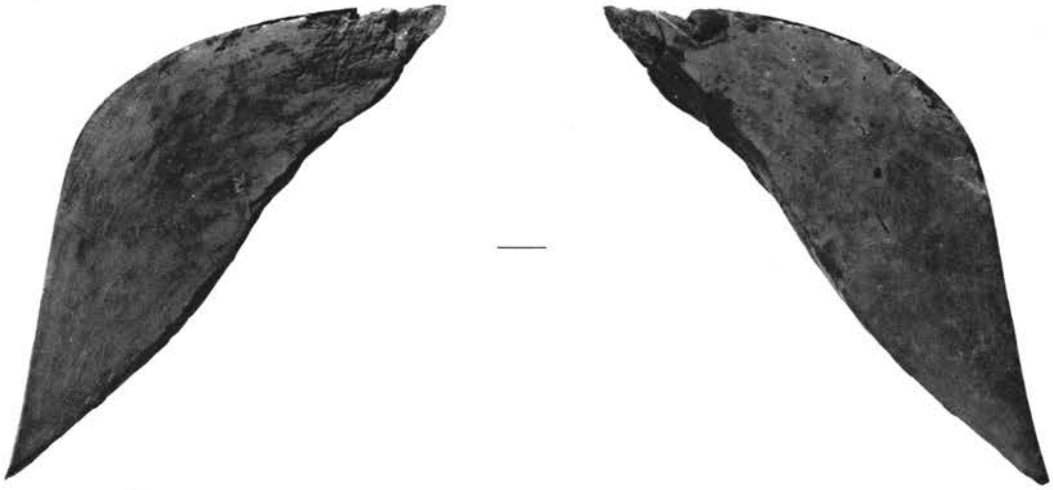
W16



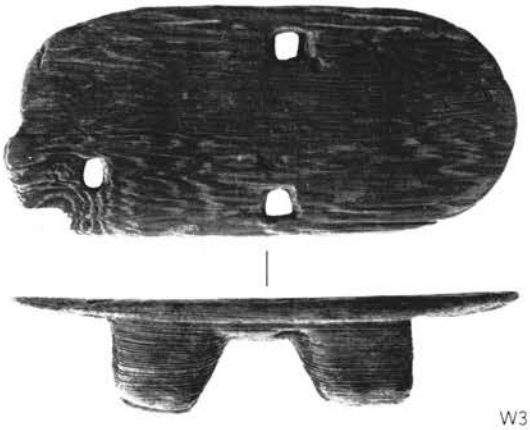
W25

W20

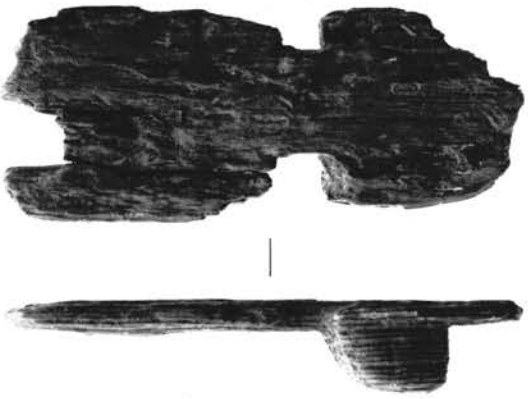
木　器 (3)



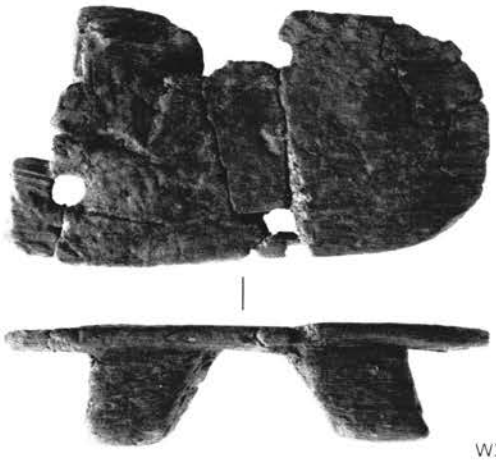
W30



W31



W32



W33

W34

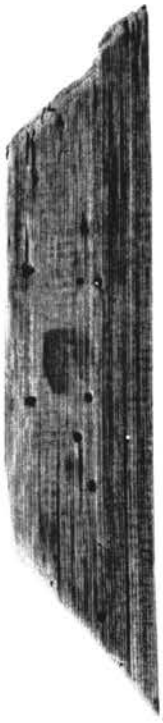
木　器 (4)

W35

W36

W40

W41



W42

W39

W38

木　器 (5)

W53

W43

W44

W46

W47

W49

W51

木　器 (6)

W54

W56

W57

W58

W55

W59

W60

W61

W62

W64

木　器 (7)

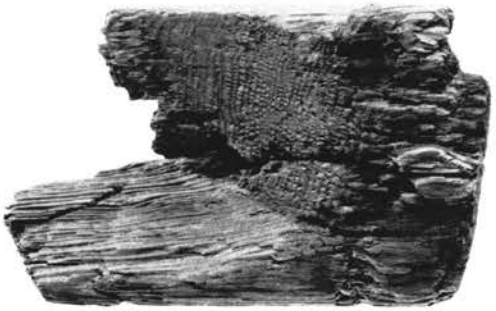
W63

W67

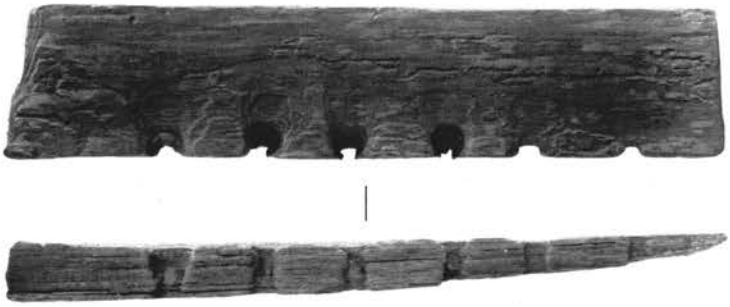
W68

W70

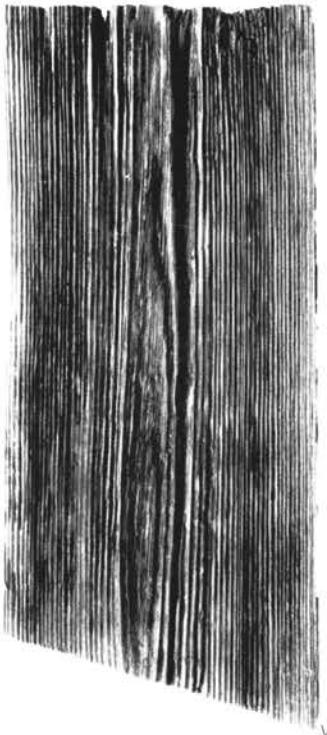
W71


W28

W29


W27

木　器 (8)


W72

W73

W77

W75

W78

W79

W80

W81

W82

W83

木　器 (9)

W84

W85

W86

W87

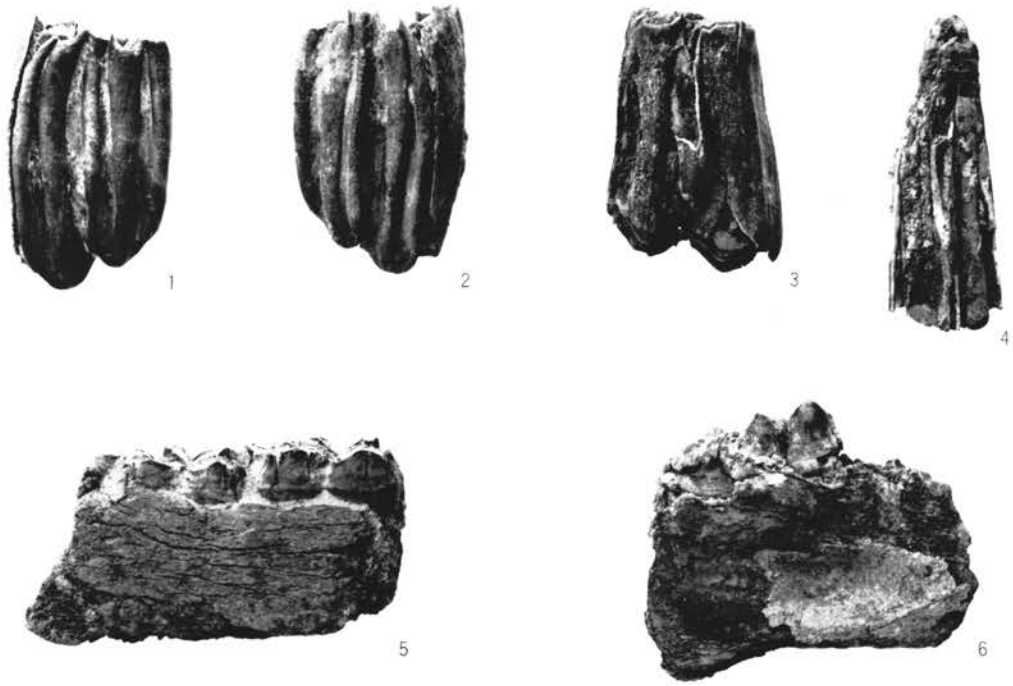
W88

W89

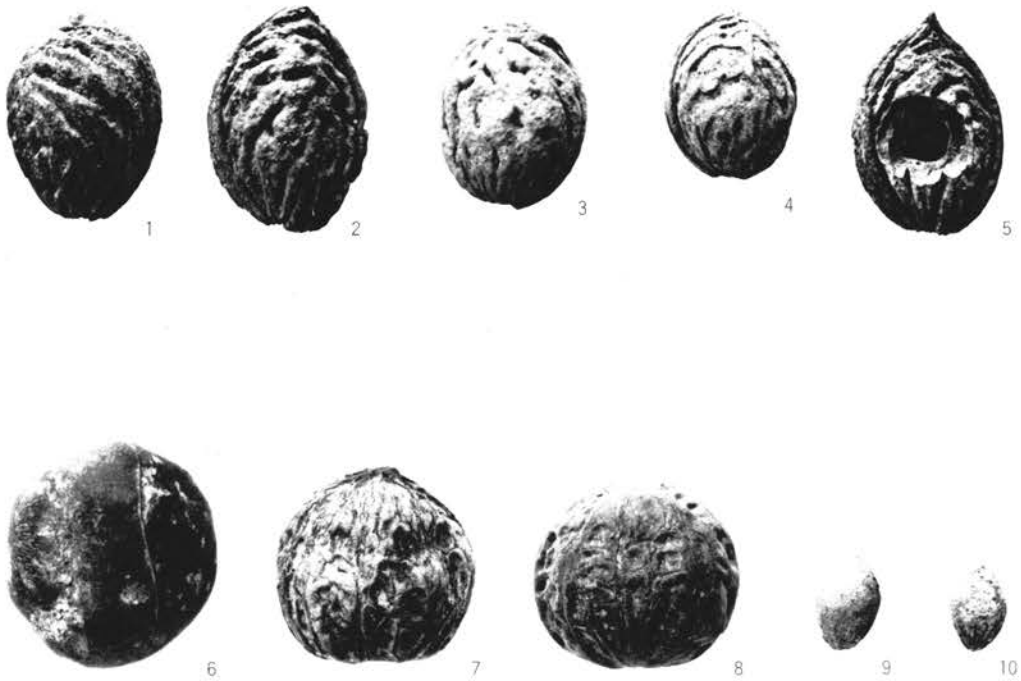
W90

木　器 (10)

鹿角・鹿角加工品



(1) 獣骨　1〜4 ウマ　5 シカ　6 イノシシ



(2) 植物種子　1〜5 モモ　6 トチ　7・8 オニグルミ　9・10 小形種子

京都府遺跡調査報告書 第8冊

昭和62年3月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）